

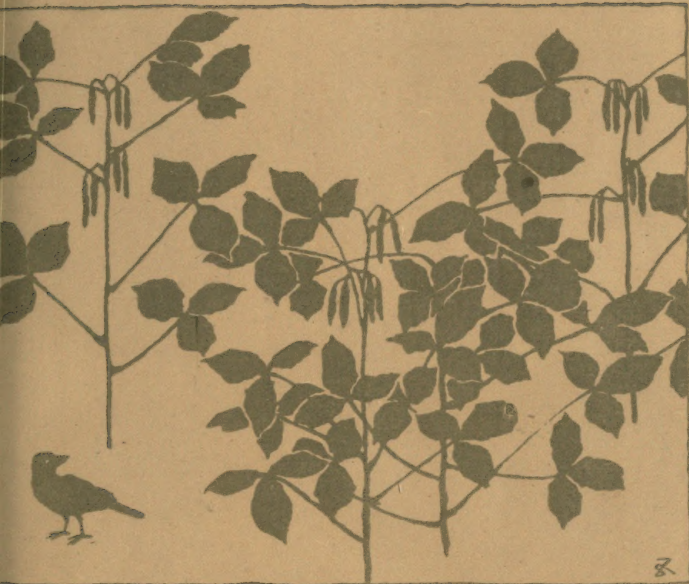
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03078 8582









不售書健

會計部 青照堂書局

取書者請到圖書部一室月十五號前

甲國報 函索即寄

取書者請到圖書部一室月十五號前

報海法 年 裝

取書者請到圖書部一室月十五號前

編譯書 三 冊

取書者請到圖書部一室月十五號前

大正三年五月二十日

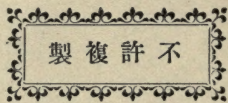
(朱寶書)

大正三年五月二十日

(朱寶書)

(岡山製本)

大正三年五月十七日印刷
大正三年五月二十日發行
有朋堂文庫
江戶名所圖會三
(非賣品)



編者
兼
發行
者
三
浦
理

編輯者
三浦理

印刷者
平
井
登

印刷者
平井登

印刷所
凸版印刷株式會社分工場

印刷所
凸版印刷株式會社分工場

發行所
有朋堂書店

發行所
有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

おふ二度にぎの月見つきみの至盛ぜんせいはいふもさらなり、悉こごとく其美そのびを舉あるにいとまあらず。しばらく此處こゝに
是これを畧りやくす。

に増し繁榮の地となりければ、是を傳へ聞き駿州元吉原の驛より、遊女屋を始めんとする輩

二十餘人、江戸に移り住す。其頃は、定れる花街もなく、こよかしこに遊女屋散在せしかば、

彼輩官に訴へて、京橋具足町の東、泥沼の地を築埋め、一方に口を設け、南の側を角町と

唱へ、今の京橋炭北の側を柳町といふ。今の京橋柳又中の通を仲の町と號け、此地に傾城町を

開發す。今京橋具足町と柳町との間、南北への通を中通といへるも、仲の町の其後庄司甚右衛門といへる者、相州

原の産にして、始め其内と云ふ。また一説に、勘右衛門ともいひけるよしいひ傳ふ。官の免を得て、元和三年、始めて花荵を定め、葺屋町の末

にて、二丁四方の地を賜ひ、是を吉原町と號く。今所謂和泉町、高砂町、住吉町、難波町等、其舊地なりといへ

きし故に、腹原ともいふべかりしを、賀して吉原に作るといへり。或は事跡合考もよび元翌年、普請落成す。然るに江戸

祿開板の江戸鹿子等の書には、其始め駿州元吉原よりうつす故に、この號ありと云々。益繁昌し、人家蔓りければ、明暦二年の冬、竟に今の所に替地を賜ふ。明暦二年丁酉八月依

て新吉原町と號くるといへり。此花柳は、まことに三都の魁たり。其賑は、特彌生の花

の頃をもて勝れたりとし、春宵一刻の價、千金を顧みず。初秋の燈籠は、萬字屋の玉菊が追

福にはじまり、八朔の白重は、巴屋の高橋に起る。今も此日をもて、更衣の節とす。名にし



新吉原
仲之町
八潮原



商の夜

吉原

くもり

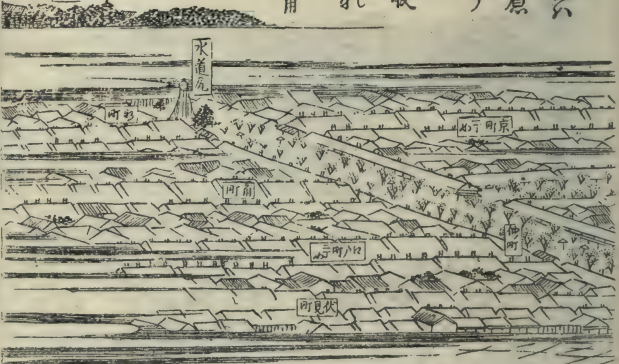
日

夜

あれ

其角

徳川



墨小八首
日本堤
大堤春水満
相袂送春衣
日暮逢公子
不知何處歸
南郭



新吉原町

上所

新吉原



し論ぜられたり。しかるときは、辨基法師の和歌も、まぎれて駿河國へ入りしならん歟。なほつまびらかに隅田川の條下に注す。菊岡沾涼云く、往古本所の邊海面なりし頃は、當山を沖より入津の船の目當にしけるとぞ。按ずるに、今もこのあたりを山の宿とあざなし、新鳥越の地を山谷といふも、皆山に因ある名なり(山谷今は三谷に作る)陵谷の變は、既に古人も論ずる所にして、山川の形勢も千載を経れば同じからぬよしへり。また或人の説に、今の日本堤を築立つる頃、この眞土山のあたりの土を穿ち取りて築立けるといひ傳へれば、この岡いにしへはなほ高かりしなるべし。

聖天宮 しやうてんぐう 眞土山まつちやまにあり。別當べつたうは、天台宗金龍山本龍院てんだいしやうきんりゆうざんほんりうゐんと號なづく。傳つたへ云ふ、大同年中だいどうの勸請くわんじやうに

して、江戸聖天宮えごしやうてんぐう第一の靈跡れいせきなりといへり。和漢三才圖會、江戸鹿子等の書に、齋藤別當實盛深く尊信の靈像なりといへり。辨財天祠べんざいてん 山の窟、池像なりといへり。

此所このところ、今は形かたばかりの丘陵をかなれど、東ひがしの方かたを眺望てうぼうすれば、墨田河すみだがはの流ながれは、長堤ちやうていに傍そとて溶々ようよくたり、近くは葛飾かつしかの村落そんらく、遠とほくは國府臺こふのだいの翠巒すゐらんまで、ともに一望いちぼうに入り、風色ふうしよくもつと尤いづしゆも幽趣ゆうしゆあり。

日本堤にほんづつみ 聖天しやうてんちやう町まちより籠輪みのわに至いたる、其間そのあひだ凡ただそ拾三丁程ほごの長堤ちやうていなり。俗ゆかりに八丁繩はちぢやうづな 手てと云いふ。元和六年げんわ庚申かのへさるの

歳とし、台命たいめいに依よりて、荒川あらかは水除みづよけの爲ために是これを築きづかせらる。里証りしやうに日本領國にほんりやうこくの大諸侯たいしよほ、台命たいめいを奉ほうじ是こゝを築きづきし故ゆゑに三

年の印本しんぼん、詞房語圖しぼうごどといへる草紙くさしに、日數ひかず六十余日ちゆうじつにして成就じゆうじゆしければ、日本堤にほんづつみとなづくるとあり。或人あるひといふ、小塚原こづかはらの裏うらより橋場總泉はしやうそうせん寺てらのあたりまで、水除みづよけの堤づつみ一條いちじやうあり、此堤こゝのづつみをあはせて二條ふたじやうなり、俗ゆかりに一本二本いっぽんにほんなどいへるところにて、二本堤にほんづつみと號なづけけるとぞ。

新吉原遊女町しんよしはらいゆうぢよまち 日本堤にほんづつみの下したにあり。俗ゆかりに五丁町ごぢやうまちと唱なへたり。其衛そのゑ五町ごぢやうあるゆ

慶長けいぢやうの頃ころ、江府日かうふひ

開陽之部 卷之六 五六九

秋風抄

まつち山夕越え行けば風寒みすみだ河原に千鳥なくなり

季 廣

回國雜記

道すがら名所ども多かりけるなかに、まつちやまといふ所

にて、

いかで我がたのめもおかぬ東路あづまぢのまつちの山にけふはきぬらん

道興准后

時雨しぐれてもつひにもみぢぬまつち山落葉を時とこがらしぞふく

同

戸田恭光入道茂睡聖天の宮のかたはらいしおみに碑たてを建たり、其その

碑面ひめんに、

あはれとは夕越えて行く人も見よまつちの山にのこすことのは

茂 睡

按ずるに、井蛙抄、八雲御抄等の書に、萬葉集に載せたる辨基法師が眞土山の詠を駿河國とす。備馬樂註秘抄、宗祇の名所方角抄等には、大和紀伊の國境とあり。漢抄草には武藏國に入れたり。或書に云く、大和に信土山、角田川ありて、庵崎なし、駿河に隅田川、庵崎ありて、眞土山なし、たゞこのむさしには、眞土山、角田川、庵崎、ともにありて、全くそなはれりとす、されどこの地に、眞土山、庵崎あるは、後人萬葉集に因みて名づけしものなりと云々。また按ずるに、西山公の釋萬葉集にも、此書は勅撰の體にあらざる上

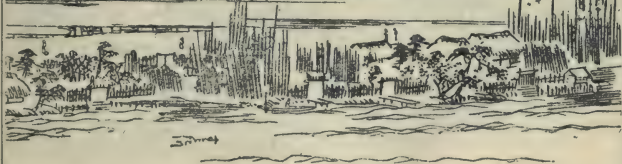
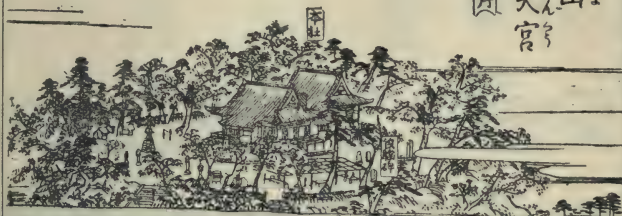
あられと
夕哉と
人も
かつら
山
藤
さとの
戸田
藤
藤



真土山

聖天宮

隅田川西岸





山谷

俗に山と云ふ

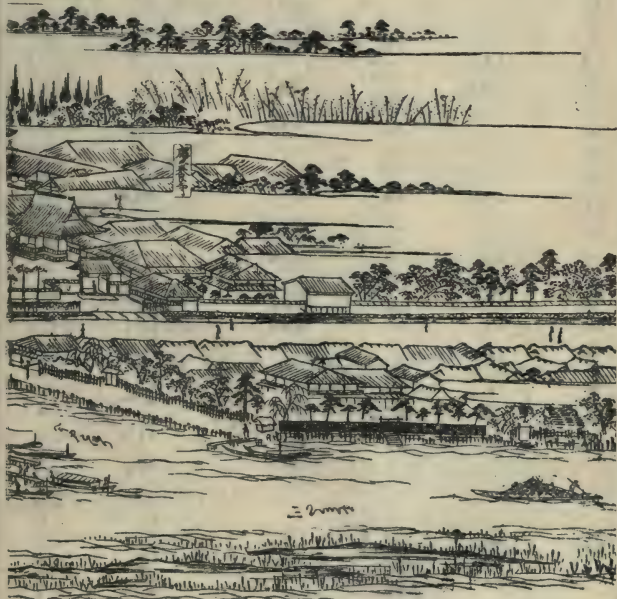
今戸橋

慶養寺

隅田川

待乳あつんと。橋のりこむ今戸橋。おまの相倉片。あまの夕時雨。君とのりへおる。しりの細布。

石英一増蔵作



の社境内やしろけいだいにあり。本尊ほんそんは、弘法大師こうぼうだいし唐からより携來けいらいの靈像れいざうなりといへり。

當寺元鳥越の地にありし時、伊丹左京、舟川采女といへる兩人の壯士、

故ありて討果うちがらしたることあり。すなはち當寺什物の藻屑物語そうせつものがたりといへる草紙くさしに詳なり。

眞土山まつちやま

今戸橋いまごほしの南みなみの詰つめにあり。また待乳まちちに作り、或は信土あろひまつちに作る。萬葉集まんえふしふに、亦打まつちとす。

沙門契沖さもんけいゆきいふ、亦打山と書きてまつち山とよむは、多字の反なればなりと云ふ。

萬葉集

亦打山まつちやま暮越行ゆきこえ而廬前いほさきの乃角すみだ太河原たがはら爾獨可にひひとりか毛將宿もねしゆ

辨基

建保名所百首

今宵こよひまた誰たが宿しゆくからん庵崎いほさきの隅田河原すみだがはらの秋の月かけ

順徳院

同

月影つきかげのさすや庵崎いほさきすみだ河越かがひえてまつちや山のかひより

家隆

新千載

誰たれにかもやどりはとはむまつち山夕越ゆふがしえ行けばあふ人もなし

定實

今戸焼

母乃舞者
陶器通ありと
是と産業
とをる森と
世今土焼
と梅と

元禄二年七月
音間田河
松り

おきこひを
けうりうと
ほりるれい

おのねま

露

しこむ

巾尾

秋風



今戸

八幡宮

隅田川西岸



社記に曰く、源頼義朝臣、義家公と共に、勅を奉じて、奥州安倍貞任宗任を誅戮し給ふ。仍て

康平六年癸卯八月、其祈願として、鎌倉由比郷および此今戸の地に至り、石清水八幡宮を勸

請あり。今戸社記に、今津に作る。小田原北條家の分限帳に、木内宮内少輔所領に、石濱今津と云ふ。其後、奥州武衡、宗

衡兄弟、叛逆の時も、義家朝臣、鎌倉鶴ヶ岡、および當社八幡宮等に祈願ありて、賊徒を亡

し、勝利ありし故、永保元年辛酉、兩社の修造を加へられ、行基彫造の彌陀を以て、こよの

本地佛とし、又同作の薬師、および慈覺の作の観音等の像をも安置ありしとなり。其後、文

治五年、右大將頼朝公、奥州の泰衡追討として進發の時も、此御神に祈誓ありて、勝利を得

給ひ、建久元年庚戌、下河邊庄司行平を奉行として、宮社を重建あり。然に、寛永十三年丙

子、台命を奉じ、舟越伊豫守、八木但馬守等、是を司り、當社御再興ありしより已降、神光

日々に新に、靈威月々に盛なり。

靈龜山慶養寺 同じく南の方、今戸橋の北の詰にあり。曹洞派の禪刹にして、開山を明山良察

和尚といふ。昔は元鳥越西福寺の隣にあり、後本所にうつり、また貞享以來この地にうつれり。總門の額、靈龜山の三字は、願齋の筆なり。辨財天



長閑寺 ちやうけんじ

宗論芝 そうろんのし

隅田川西岸





水鷄ハ橋場くひまの
 のくろこま及こまい佃場いんば
 と住境すまがきとせり
 源氏物げんじもの葉はの
 むつくしくのまのかの
 花はな紅べに紫むらさのいろうり
 あのうりのいろに
 むらさのうりとせり
 あのいろるあのいろも
 むらさのあのあの
 むらさのうりはなた
 だらにちうちと
 うりくとあのれよ
 ねのあのとら
 まのあのれ
 とのあのれ



日寂上人は、始め淺草寺の住職にて、上古は天台の法流を汲んで、寂海法印と號せしが、弘

安二年己卯、此所に於て、日蓮上人の弟子日常上人と宗義を討論す。日常は下總國中山妙法華經寺の開

弘安五年壬午なりとぞ。終に日蓮の宗風に歸し、身延山に登りて、宗祖上人に謁し、弟子の禮を執れり。名

を日寂と改め後淺草に歸り、金龍を辭して、庵をむすび、妙昌寺と號けて、こゝに隱る。從

ふ所の兩僧も又ともに受戒して、日増、日可と改む。同九年丙戌十一月一日、日寂上人歸寂

す。日寂上人の墳墓境内にあり、依て其後、日増、本覺房、日可、河内房、精舎を橋場の地に建てて、長

昌寺と號く。當寺新鑄の鐘の銘に、其地元隅田河に接す、偶水難に罹り、堂塔漂流、鐘亦

沈没す、其所を鐘淵といふ、終に元亨元年辛酉、寺を今の地に移すとあり。按ずるに、鐘ケ淵の

院の鐘の銘にもしかありて、いづれか是なる事をしらず。なほ七卷目鐘ケ淵の條下につまびらかなり、照し合はせて見るべし。

宗論芝 本堂のまへにあり、扇の形に作りたる芝生の中央に、松樹一株あり。またかたはらに一の標石を建てたり。むかし寂海法印富木(トキ)の日常師に就て宗教を叩き、竟に日蓮大士の弘法に歸せし證を永世に示さんために残すといふ。

今戸八幡宮 今戸橋より一丁ばかり北の方、道より左にあり。祭神山城國石清水に同じ。別

當は天台宗にして、松林院と號す。祭禮は毎年八月十五日にして、放生會を修行せり。

巳六月二十七日薨ず、六十八とあり。實藤卿は安貞より永仁の間の人にして、四辻家の祖なり。延暦とは時世大にたがへり。恐らくは従二位は正二位、有理は公理、延暦は延賢、八年は五年、乙巳は丁巳の誤なるべき歟。薨去の月日附合せり。されど文字稍缺して讀むべからず。なほ後の考をまつのみ。

齋藤別當實盛墓 さいとうべつたうさねもりのはか 同所にあり。石塔は僧形念珠を持したる像を雕み、裏に寢原院前左金吾從五位徳山覺道眞阿大居士壽永二癸卯年五月七日と刻し、また當寺七世の住侶法譽上人元泰和尚、元祿七年甲戌五月二十一日夜薨を感じ、孫兵庫

助信利是を建立するよしを記せり。法譽上人は實盛の氏族なるよし、南向亭茶話にみえたり。法名は其頃新に命じたることぞ。實盛は壽永二年五月加州寢原に戦死す。

鎌倉權大夫景道石塔 かまくらごんのたいふかほみちのせきたふ 同所にあり。碑面向阿彌陀佛滿樂延久二庚戌年十月二十二日とありて、五輪の石塔婆なり。法名および歿卒の年月いまだ考へず。是も恐らくは後世その一族の人などの造立せしなりん歟。景道は鎌守府將軍

良兼四代の孫、左衛門尉致經の二男、村岡小五郎忠通の子なり。其餘當寺歴代住侶の石塔、また仁壽、昌泰、正暦、壽永、康元、文永、弘安、正安、嘉元、正和、文應、正慶、文正等の年號を刻せし古塔、いづれも明塔の内に存せり。されどいかなる故にか、近年散失して多

ず。

當寺は、天台宗の古跡にして、保元年間、中興して保元寺と號けしが、遙の後、大に荒廢せ

り。明蓮社聰譽上人西仰和尚の時より、台宗を改めて、淨家に轉ず。其時より、文字も法源

にあらため、寺院再興ありしと云ふ。當寺に、中古用ひたりとて、古き木印を藏す、今猶傳へてあり、その文字保元寺に作る。又境内に彌陀勢至觀音一光三尊の像を刻し、下に妙具色林即の五字をち

りばめ、裏に康平二年武州保元寺とある古墳あり。證とすべし。

深榮山長昌寺 しんえいざんちやうしやうじ

法源寺の南に隣る。當寺は御府内日蓮宗の古跡にして、延山に屬せり。開山

采女塚 うねめづか 同所にあり、寛文の頃吉原町にうねめといへる遊女はべりしが、故ありて夜にまぎれてこゝに來り、池中に身をなげて
むなしくなりぬ。夜明けてのち、あたりの人こゝに來りけるに、かたはらの松に小袖をかけて、一首の歌をそへたり。

名をそれとしらずともしれ猿澤のあとをかどみが池にしづめば

かくありしにより、采女なる事をしりければ、人あはれみて塚をきづきけるといへり。

東野先生之墓 とうやせんせいのはか

同所橋場の通り、福壽院といへる禪林にあり。先生は下野の人、諱は煥圃、東野字は仁右衛門と稱す。安藤は養家の
姓にして、本姓は奈須氏なり。徂徠先生に就いて大に古文を誦し、共に復古の學を唱ふ。墓碑の銘は、南郭服夫子

述ぶる所なり。其
文こゝに略す。

歸命山法源寺 きみやうざんほふげんじ

無量壽院と號す。淨業の古刹にして、總泉寺の南に隣る。寶龜元年庚戌の春、

智海法印、始めて此地に大日堂を建立す。

其後延曆三年甲子の秋、村里の人民、力を合て一

字の梵刹とし、砂尾石濱の道場と號く。

開山大僧都、智海法印は、大同元年丙戌三月十四日化寂、二世權大僧都了海
法印は、天長七年庚戌四月十五日歸寂し、三世惠海法印は齊衡元年甲戌四月

十五日歸寂す。
各墳墓あり。

隆性院從二位藤原朝臣四辻有理卿墓碑 りゆうしやうあんじゆにのふぢはらのあそんよつつじありよしきやうび

當寺境内にあり。再校江戸砂子に、延曆八乙巳天六月二十七日としるせり。ま
た南向亭云く、青石の碑あり。漸くみるに四辻家の姓名、三人の官名實名あれ

ども、たしかにしれず、其來由もまたしれが
たしと云々。寺傳もともにつまびらかならず。

按ずるに、知譜拙記に、西園寺太政大臣公經卿の四男、四辻權大納言正二位實藤卿より十五世の孫、權大納言正二位公理、延寶五年丁

回國雜記

淺茅がはらといへる所にて

人めさへかれて淋しき夕まぐれ淺茅がはらの霜をわけつよ

道興准后

妙龜塚

同所にあり、梅若丸の母公妙龜尼の墳墓なりといひつた。
ふ、小高きところの草堂を建てて、妙龜大明神と稱せり。

古墳一基

妙龜堂の下にあり、青き一片の石にして、長二尺あまり、碑面蓮花の上圓相の中に、法阿と云ふ名をちりばめ、下に弘安十一年正月廿二日と彫付けてあり。(此年四月正廳と改元あり)圓光大師行狀靈贊卷第四十二に云く、嘉祿三年六月廿二日

(此年十二月安貞と改元あり)山門の衆徒奏聞を経て、大谷源空の墳墓を破却せんとす、其夜法蓮坊、覺阿坊、潛に上人の櫃を掘出し、蓮生坊宇津宮彌三郎(信生坊(鹽屋八道)法阿坊)千葉六郎大夫入道此人は東氏の祖從五位下道遍坊(澁谷七郎入道)西佛坊(頓宮兵衛入道)の輩、出家の身なりしといへども、法衣に兵仗を帶し、匙を供奉し、廣隆寺の來迎坊圓空が許にうつすよしを記せり。按ずるに、この法阿は、千葉六郎大夫胤頼が事なるべし。胤頼は常胤の子にして、國府六郎胤通の弟なり。この古墳恐らくはこの法阿の墓碑ならんか。

鏡ヶ池

同所西南の方にあり。傳へ云ふ、妙龜尼、梅若丸の跡をしたひ、京よりさまよひ來

りしが、梅若丸身まがりし事を聞きて、此池に身を投けてむなしくなりぬとぞ。

元祿開板の江戸鹿子といへる草

紙に、むかしは此池を泪の池(ナミダノイケ)と名づけしとあり。傍に鏡池庵と號くる小庵あり。辨財天を安ず。是も妙龜尼をまつる

所なりといへり。

袈裟懸松

池の傍にあり、一名を衣かけ松ともいへり。妙龜尼この松の枝に衣をかけ置きてむなしくなりしといへり。舊樹枯れて今は若木を栽ふたり。

妙龜山總泉寺 曹洞派の禪林にして、江戸三箇寺の一員たり。開山は聖叟宗俊和尚と號す。

當寺は千葉家の香花院なり。永祿二年小田原北條家の分限帳に、武州石濱の會下寺とあるは、當寺の事を云ふなるべし。

千葉氏墓 境内卯塔のうちにあり。長さ三尺ばかりの青石に、梵字のみを鑄めて、年號法名等を注せず。當寺に大檀那千葉介守胤の靈牌と稱するものあり。鶴泉寺殿長山昌煥大居士とあり。寺僧云く、守胤は弘治三年丁巳十一月八日卒去すと。されど

守胤卒去の時世すこぶるたがひあるに似たり。又江戸惣麿子に、千葉介常胤の墓碑には、春淨院殿貞心居士、同千葉介貞胤の墓碑には、良心自風流とあるよし記せども、今所在をしらず、なほ他日考ふべきのみ。

宇津宮彌三郎入道墓 同卯塔のうちにあり。青石の碑二枚、其一は正安元年十一月廿一日、其一は徳治二年丁未二月七日とあり。

按ずるに、當寺にいひつたふる所の宇津宮彌三郎は、頼綱入道實信坊が事なるべし。又の名を蓮生と唱ふ。源空上人の法を嗣いて後、善愿上人に就いて出家す。正元元年己未十一月京師に寂し、遺言により、墳を師の石塔の傍に設くるよし、西山上人の傳に見えたり。其地は則ち京師西山三鉢寺の東の坂なり。依て考ふるに、當寺にある所のものは、むかし其支族など此邊にありて、寫し建つる所の墓碑ならん歟。されど正安、徳治、いづれも正元以後るゝ事四十有餘年なり、最不審少なからず。

抑當寺は、正法眼藏の妙理をしめし、實相無相の心印をひらく、向上の一路には、著相實有の草を拂ひ、言下の一喝には、異學執解の塵を飛す、公案の床の前には、一千七百の則を重ねて、以心傳心を傳へ、坐禪の衾のもとには、朝三暮四の助を得て、文字言句の話を離れたり。

淺茅原 總泉寺大門のあたりをいふ。

かなと牙をかんで、本陣へ引歸さるとあり。以上太平記の意を採る。

砂尾不動院 橋場寺と號す。渡場の少し南の方、道より右にあり。天台宗にして、淺草寺に

屬せり。往古は法相宗なりしが、住持教圓師の代、長寛癸未歲より、宗風を轉ずといふ。寶龜四年癸丑、良辨僧都の上、足寂昇上人、當寺を開

基し、本尊に不動明王の像を安ず。

緣起に曰く、本尊不動明王は、良辨僧都、相州大山寺にありし頃、彫刻ありし三體の一にし

て、彼寺の本尊と同木同作なり。僧都一時、上足寂昇師に告げて云く、三體のうち、一體

は此山にとどめ、一體はみづから持念す、残る所の一體は汝に附屬すべし、何方にても有緣

の地に安ずべしとなり。依て僧都化寂の後、寶龜四年歲八十寂昇上人、上總の方へ赴く道の次

適此地に至り、靈告を得て、有緣の地たる事をしり、ここに安じ、則ち村老野人にかたら

ひて、草堂を營み、砂尾不動尊と號す、云々。砂尾藥師如來、寺内にあり。本尊は、惠心僧

都の作なり。南向亭茶話に云く、或説に、此處に往古砂尾修理大夫といふ人ありて、太田道灌と合戦す。これを石濱の戦といふ。則ち砂尾氏建立せし寺あり。天台宗にて、砂尾山不動院と云ふと云々。されど當寺傳記に、修理大夫の事を載せず、ま

た道灌と戦ふこと諸書に見あたらず。なほ考ふべし。

石濱古戰場

橋場の地、すべて石濱といへるに似たり。

新安手簡に、白石先生石濱の考あり。こゝに略す。太平記に云ふ、正

平七年壬辰閏二月、北朝の觀應三年にして、こゝにたよしたるなり。故新田義貞の次男左兵衛佐義興、三男少將義宗、從父兄

弟左衛門義治、義兵を起し、其勢十萬余騎にて、武藏國へ打越えたり。これに依て、將軍尊

氏も鎌倉を進發し、敵を道に待ちて、戦を決せんと、同十六日、僅に五百餘騎にて、武藏國

へ發向あり。追々に馳集る勢、すべて八萬餘騎なりしかば、同廿日、武藏野の小手指ヶ原へ打

て出で、新田、足利の兩勢二十萬騎、入亂れて大に戦ひけるに、足利方の先陣、急に敗れて

引退きければ、後陣進む事能はず、大に敗走す。義宗自ら諸軍を率ゐて、大に呼つて云く、

天下の爲には朝敵なり、我が爲には父の讐なり、此戦にあたつて尊氏の首を見ずんば、何

の時をか期すべきとて、只二引兩の大旗の引に付きて、小手指ヶ原より石濱迄、坂東道既に

四十六里を、片時が間に追付きたり。此時將軍は石濱を打渡り、虎口を遁る。田川とあり。猶將

軍の兵士残り止つて、先途を支へたる間に、日も既に酉の下りになりて、河の淵瀬も見えわ

かざれば、義宗は續てわたすにもあらず、又後よりつどく味方もなければ、やすからぬもの

し守に、是は何鳥ぞと問ひければ、是なむ都鳥といひける
をきよてよめる。

名にしおはばいざ事とはむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと

吾妻の道の記

角田河ちかしときよて見にゆく。今も船にのれといふは、

このわたし守のくせにやあらん。

これぞこのあづまぢ遠く思ひこしすみだ河原の渡なりける 長 嘯

とはでただそれとたのまむすみだ川むれるる鳥はあらぬ名もこそ 同

かへりくる道に、あさくさの観音とて、國ゆすりてもてな

す佛おはす、云々。

夫木抄

夕霧に須田のわたりは見えねども舟人よばふ聲聞ゆなり 經 兼

かくて隅田川のほとりにいたると、云々。

隅田川渡 すみだがはのわたし

橋場より、須田堤のもとへの古き渡なり。今は橋場の渡と唱ふ。元録開板の江戸麴子といへる草紙にむかし

の渡は今のところよりすこし川上なりと、所のふるき人は物語するなりとあり。むかしは須田の渡ともいひけるにや。夫木抄に、經兼の詠あり。次にしるす。

古今集

むさしの國と下總の國とのなかにあるすみだ川のほとりに
いたりて、京のいと戀しうおほえければ、しばし川のほと
りにおりて、思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるか
など、おもひわびてながめをるに、わたし守、はや舟にの
れ、日も暮ぬといひければ、舟にのりてわたらむとするに、
みな人物わびしくて、京に思ふ人なくしもあらず。さるを
りに、白き鳥の、はしと足とあかき、川のほとりにあそび
けり。京には見えぬ鳥なりければ、みな人見しらず、わた

此社前は、名にしあふ隅田河の流、溶々として晝夜を捨てず。食店、酒肆の軒端は、河面に臨んで、四時の風光を貯ふ。殊更夏の日は、杯を流に洗つて炎暑を酒ぎ、秋の夜は中流に掉さして月を掬す。春の夕、妖艶たる須田堤の花盛より、皚々たる白髭、木母寺の雪の朝の眺望も、共に奇々として、實に遊宴の勝地なり。

思川 稻荷の前より、橋場の渡場へ行く道を横ぎれる汐入の小溝をいふ。治承四年庚子、鎌倉將軍頼朝卿、此地を過り給ひ、河水にて駒を洗はしむ。故に駒洗川とも號くる由、里民云傳ふ。

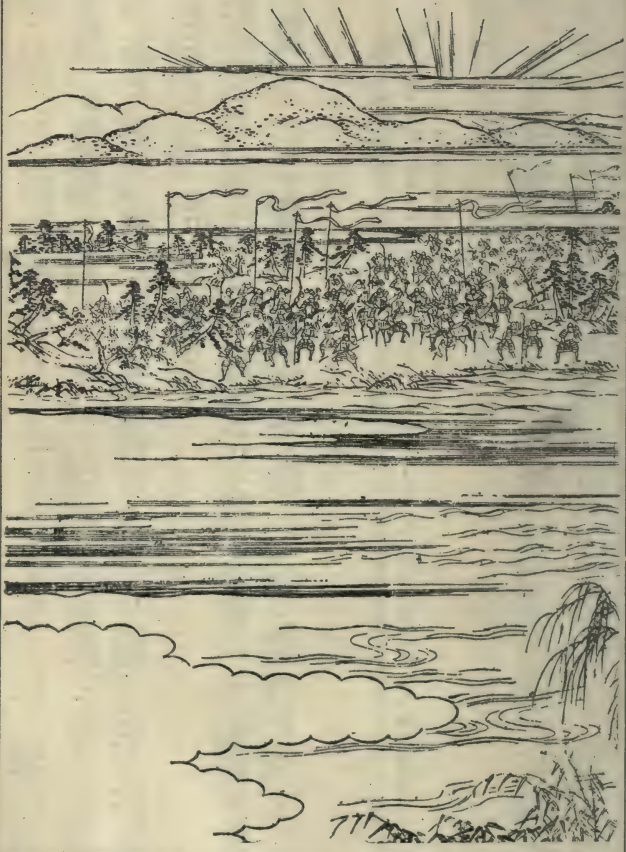
按ずるに、東鑑に、治承四年庚子十月廿七日、佐竹冠者秀義追討の爲に、頼朝みづから進發ありて、同年十一月四日、常陸の國府に著き給ふよし見えたり。其頃の事ならんか。又北條九代記に、文治五年七月十九日、奥州泰衡追討の首途に、頼朝隅田河をわたらるゝ事を載せたり。このあたり往古の奥州海道なれば、さもありませんかし。

回國雜記

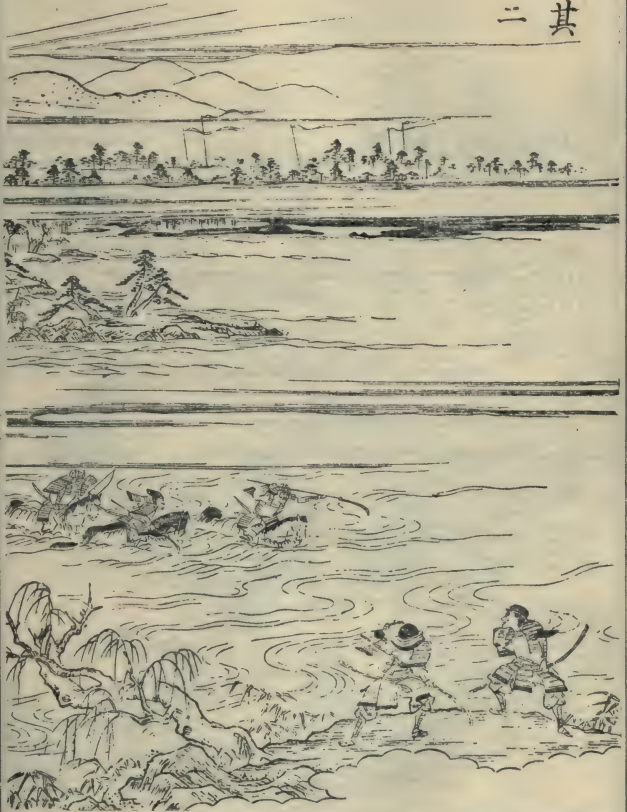
おもひ川にいたりてよめる

うき旅の道にながるる思ひ川涙の袖や水のみなかみ

道興准后



其二



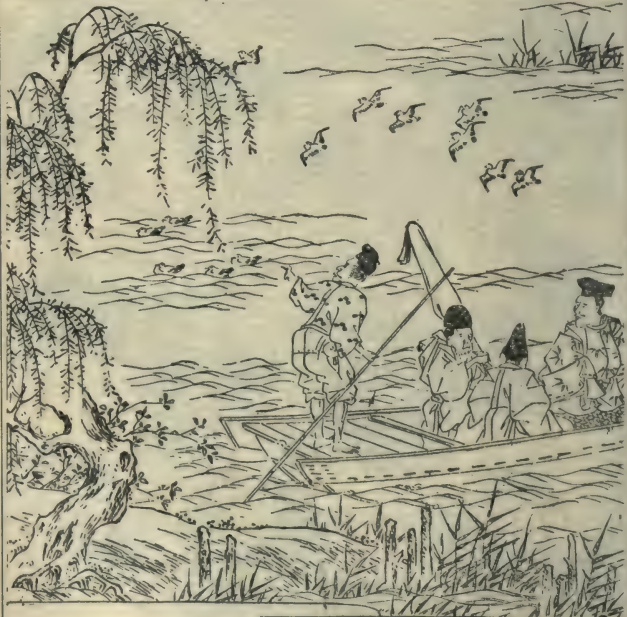
正平七年
隅田川合戦之景





五
の
の
の
の
の

任原葉舟



角田河渡

名子

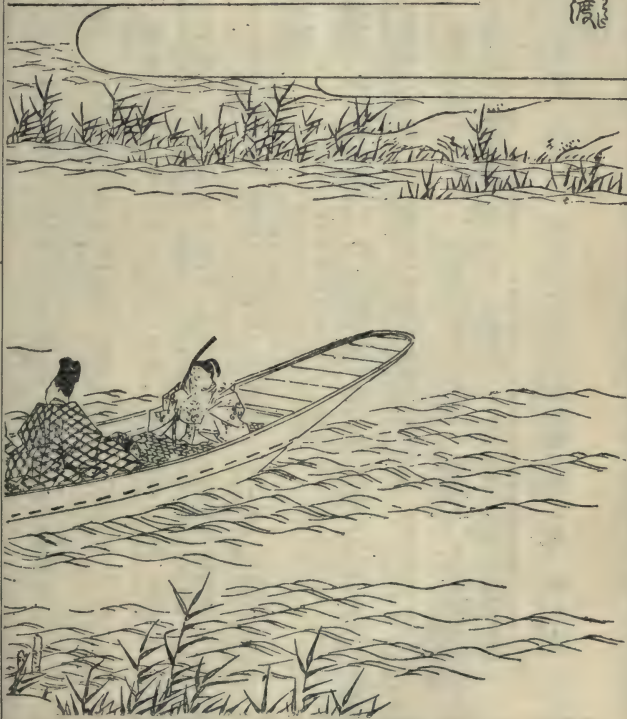
おろ

い

と

穴ん

都鳥



天満宮 てんまんぐう 本社ほんしやの右みぎの方にあり。神像しんざうは菅神すげのかみの眞作ましかくにして、明和四年丁亥六月五日、高辻前大納言家長御勸請たかつかぜのちかごのちかごのちかごのちかごありしとなり。額かみかぎは天満宮てんまんぐうとありて、高辻式部大輔世長朝臣の筆也、其餘末社多けれど、こゝに省略す。當社たうしやは、建久けんきう、

正治せいぢの頃ころ、繁昌はんじやうの地ちなりしとぞ。其頃そのころは大社たいしやにて、關東くわんとうの諸民しよみん、伊勢いせに參宮さんぐうせん事ことなりがた

き輩せまがらは、當社たうしやに詣まうで、祓ぬきを受けたりといへり。殊ことに千葉ちば、宇都宮うつのみや等の輩せまがら尊信そんしんし、神田しんでん等を

寄附きふす。此地このちびかし昔あうしうは奥州街道おくしうかいだうにして、文治ぶんぢの頃ころは、鎌倉かまくら右大將家うだいしやうけも當社たうしやに參詣さんげいありしとなり。

境内けいだい樹木じゆもく多く、鬱蒼うつさうとして上久かみきびたり。每歲ごととせ六月晦日むつき、名越祓なごしのはらひを修行しゆぎやうす。祭禮さいらいは九月十六日くわがつじふにちな

り。此日このひ、社地しやぢにおいて生姜なまごを齋いぐ。故ゆゑに俗間しよかん是こゝを生姜なまご祭まつりと唱なへたり。

眞先まつきさ稻荷いなかり明神みやうじん社しや 同所どうしよ隅田河すみだがはの流ながれに臨のぞむ。祭神まつるかみ倉稻魂くらいたま一座いざなり。社傳しやでんに云いふ、久代くわい千葉ちば介すけ兼胤かねたね

の家に靈珠れいじゆを傳つたふ。此靈珠このれいじゆの加護かごにや、數度すどの戰場せんぢやうに先登さきがけの譽ほまれあり。同守胤もりたねの代よに至いたり、此石このいし

濱はまの城主じやうしゆたりしかば、城内じやうないの鎮守ちんしゆとして、彼寶珠かのほうじゆをもて稻荷いなかりに勸請くわんじやうし、眞先まつきさ稻荷いなかり明神みやうじんと號なづす

と、云々いふいふ。往むかし年とし本社ほんしや活營くわつえいの頃ころ、社しやの軒端のき神木しんぼくの榎えんに交まへられて、心の儘ままならざりしかば、後のちの方かたの地ちを穿うちけるとき、件くだんの靈珠れいじゆを得えたりといへり。依よて今は神殿しんでんに收いめ、有信いうしんの輩せまがらには、毎月ごとく午日うまひ此神寶このしんぼの靈珠れいじゆを拜をさしむ。

本社ほんしやの額かみかぎに、眞先まつきさ稻荷いなかり大明神だいまみやうじんとあるは、神祇じんぎ伯はく卜ら部べ朝臣あそん兼雄かねをさやう卿きやうの筆ふでなり。神木しんぼく榎えん 本社ほんしやの前にありて軒のきを覆おほふ

中間ちゆうかんの盃さかより、盃さか景かげ涌出ゆでいす。病やまあるもの服飲ふくいんしてしるしを得えるといへり。

其言葉がきにいはいはく、此歌は康元元年鹿島の社にまうてけるに、角田川の渡をみれば、彼のわたり、今は浮橋をわたしたりければ、とあり。又

梅花無盡藏詩注云

隅田在武藏下總兩國之間。路傍小塚有柳。道灌公爲攻下總千葉。構

長橋三條云々。

按ずるに、源平盛衰記、および光俊鹿嶋紀行等の書に載するものは、假初にまうくる所の橋なるべし。源平盛衰記、および太平記等、其餘の書にも、橋場の名みえず。橋場の名をさくは道灌下總の千葉家を攻むる頃より發るならん。南向亭云く、隅田川の渡場より一丁ばかり川上に、むかしの橋の古杣水底にのこりて、舟筏のゆきくにさはり侍るよし、されど其橋いづれの頃のものにやと云々。依て考ふれば、今のわたし場より一丁ばかり川上、神明宮の大門の通り、其舊跡なるべき歟。また里老傳へいふ、此地法源寺大門の通り、および今のわたし場より南の方、鑿船所(フナパンシヨ)のあたり、共にむかしの橋場の舊跡なりといへり。然る時は、三所共に橋をかくるに似たり。これによつて考ふれば、梅花無盡藏に所謂長橋三條を構ふとある意に協へるならん。

朝日神明宮

橋場にあり。

石濱神明とも、

或人の説に、此地に神明宮ある故に、上古伊勢濱と唱へしと云々。

或は俗に

橋場神明とも號

く。祭神伊勢に同じく、内外兩皇太神宮を齋きまつる。社傳に云ふ、人皇四十五代聖武天皇の

御宇、神龜元年甲子九月十一日鎮座と、云々。

牛頭天王社

本社の方左にあり、橋場の鑑守にして、祭禮は毎歲六月十五日なり。世に汐入の押合祭とて、神與今戸橋をわたらせらる。氏子の輩ことごとく神與昇きに出づるに、其神與に手を附くることなく、各肩ばかりにて押合ひ行く事なり

此故に押合祭といふよし、事蹟合考に見えたり。當社に古き神與一基あり、屋根の裡に、天正十五年丁亥四月山城住人高須美作拵之、又同棟札に、同年鈴木三郎冠者家平とあり。是は則ち當社神主の名にして、代々鈴木氏なり。

すべて質風より惟風まで 相つゞいて此城に居住し、文明に至りて、再び戦争におよびしならん。永祿二年小田原北條家の古文書に、江戸赤坂大筒村、おなじく新倉小机の上九子、葛西の上平井、下足立の淵江、伊興寺信、内野郷大多窪、沼田、保木曾、三俣、大窪、以上千葉殿所領と云々。又按ずるに、此石濱の城は、天正に至り、千葉の一跡絶えたりしより後廢せしなるべし。

橋場

今神明宮の邊より南の方今戸を限り、橋場と稱す。舊名は石濱なり。事跡合考にいはく、石濱の地今は汐入と唱ふる

云。義經記に、治承四年庚子九月十一日、東鑑に、同年十月二日頼朝太井隅田の雨河を渡らるる。頼朝公、隅田

河を越えて、下總國より武藏國へ赴き給ふ時、二三日の雨に、洪水岸を浸し、軍勢を渡し兼

たりければ、武衛江戶太郎重長に仰せて、浮橋を係しめんとす。重長あへて諾はず。依て千

葉介、胤葛西兵衛重兩人、江戶太郎を助けんとて、知行所今井、栗川、かめなし、うしまど

といふより、栗川、かめなし、ろし 海人の釣舟を數多登せ、江戶太郎が知行所なりける石濱に、折

節西國船の著きたるを、數千艘集め、三日の中に浮橋を組み立てければ、佐殿神妙なるよし仰

せられ、太井、隅田を打越えて、板橋に著き給ふとあり。隅田河、古へ海につらぎ、海村なりし

夫木抄

隅田河むかしはきかず今こそは身を浮橋のある世なりけれ 光 俊

法源寺
鏡ヶ池

其五



海茅の
 屋
 わ
 焼
 の
 其角

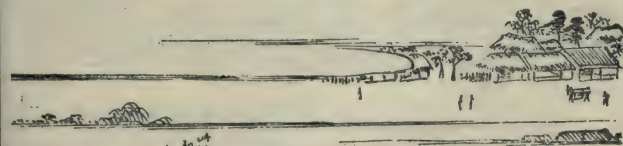


新玉川
御電内神社
法芳の原
玉娘稲荷

其四



人のま
あれ
淋し
夕暮れ
法芳の
原の
霜と
雪
道真唯后



山田
初夜
玉白

其三



總泉寺
破尾不動
同藥師



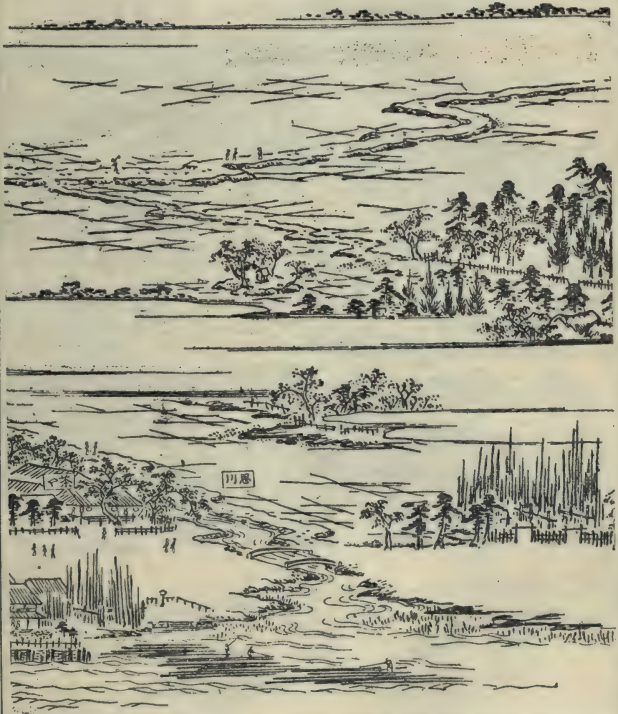
うき旅の
こころ
流るる
あはれ
川の
結や
水の
うみ
道真渡后



思河
橋場渡



其二



竹の
葉の
さよも
一本
葉系
芭蕉



石ノ濱

神明宮

隅田川西岸



眞崎の福徳園



同書 便面題詩註云。

八景或雪讚獻千葉。蓋上總下總千葉所管也。今寓武州者。與上下總之千葉矛盾。一門分爲二。灌公救在武者。

雪月碧湖煙雨後

漁歌鐘色送飛鴻

片帆千里賣花市

上下總飯君握中

蓋祝寓武之千葉惟種也。云々

又關東古戰錄、小田原實記等の書に、千葉大助満胤の庶子北總馬加の城主陸奥守康胤、異母弟惟胤と家督をあらそひ、康胤打勝て總領を保てり。依て宿老の圓城寺左馬介次郎惟胤をいざなひ、江戸城にいたり、太田道灌に庇蔭を頼みければ、道灌かれが高家にて微力なるをあらはれみ、石濱の砦をさづけて是を守らしむ。其後惟胤身まかり、其子次郎胤利しばらく上杉朝興に仕へけるが、また南方の爲に追れて江戸の城を退去し、後北條氏康の旗下に屬して、石濱近邊の所領を安堵し、跡を胤宗に譲れり。されど天正元年癸酉十一月、古河の御所義氏、下總關宿の城を攻むる頃、胤宗討死す。依て其後は、石濱の千葉家に女子のみにて男子なかりしにより、氏政の下知として、北條常陸介氏繁の三男を養子として、彼女子に妻合せ、次郎胤村と名乗らせ、千葉の遺跡相續なましむ。しかれども、いまだ幼少なればとて、木内上野といへる者に預けらる。上野討死の後は、其子宮内少輔支配ありて、其頃は石濱領四千貫文なりしなり。然るに、千葉成人の後、石濱を返したまはるべきむね度々まろさるゝといへども、木内が家老宇月内藏介といへる者、主人上野ならびに宮内少輔、ともにしは、高名勲功あげて敷ふべからず、依て石濱改易は有り難き事なるべしと云ひて、延引しける間、千葉次郎の内、須藤何某とかやいひし者主の所望むなしき事を無念に思ひ、彼字月をねらひ、石濱の總泉寺といふ會下寺にて、刺違へて死しけるが、この由小田原へ聞えければ、さだめて千葉次郎のわざなるべしとて、石濱領をば終に返されずとあり。

按ずるに、馬加陸奥守を、鎌倉大草紙に常輝とし、關東古戰錄に康胤とす。千葉系譜を考ふるに、康胤入道して常輝と號す。大介満胤の二男なり。又梅花無盡藏の注に、惟種とあるも、胤を書き誤れり。南方紀傳を證とすべし。惟胤は實胤の孫にして、守胤の子なり。

守かなはずして千葉へ引退く。常縁は千葉介胤の六男、東六郎大夫胤頼十世の孫なり。時にかうしやう
美濃國郡上の城主たり。京都將軍の命を受けて下總に下向す。 康正二年の正月、

成氏、市川の城を圍む。同く十九日、落城して、實胤は武州石濱へ落行き、自胤は同赤塚へ

移りける。其後上杉家より、胤直の一跡として、實胤を千葉介に任せしむ。されど成氏、陸

奥守の子孝胤を最員ありて、千葉に居置かれける間、孝胤は其父陸奥守入道常禪と共に、故胤直兄弟を亡し、成
氏へ奉公の人にして、故成氏より千葉の跡を賜りしなり。

實胤は城へ入る事かなはずして、武州石濱、葛西邊を知行し、時を待ちて居たりしが、世の

中を述懐し、濃州に閑居す。依て上杉家より、實胤の跡を兄の自胤に賜り、千葉介に任す。

是を武州の千葉と號す。以上鎌倉大草
紙の意を採る。

南朝紀傳に云く、丙子康正二年三月、千葉の家も、成氏と上杉と相論するによつて二にわか

れ、惟胤と園城寺の某武州に赴く。云々。

梅花無盡藏。 文明丙午隅田河詩註云。

隅田在武藏下總兩國之間。路傍小塚有柳。道灌公爲攻下總之千葉

構長橋三條云々。

行所なりと云々。按ずるに、同書に、江戸太郎重長は八箇國の大福長者とあり。則ち重長は畠山庄司（そのちち）の所領なりと見えたり。其後千葉家の所

領となり、代々是を知行せしなり。永祿二年小田原北條家の古文書に、太田新六郎、同大膳亮所領の中に、千葉石濱の名

を領せし事は、石濱城址の許につまびらかなり。

石濱城址 其地今さだかならず。事跡合考に、神明宮の北の方なりとあり。按ずるに、龜戸普門院

淵の事を擧げたる文中に、普門院古へは隅田河三股の城中にありと云々。普門院は則ち千葉自胤創立の梵刹にして、三股の地も又千葉家の

所領たりし事は、小田原北條家の古文書に詳なり。三股と唱ふる地は、荒川綾瀬川の下流、隅田川に落合ふ川股の所故にかく名づくとい

へり。然る時は、事跡合考に記せし如く、鎌倉大草紙に云く、千葉介胤直、上杉憲忠に談はれ、父子兄弟

共に一味して成氏に背く。成氏は將軍左馬頭なり。こゝにまた故千葉大助胤満が二男、陸奥守入道常輝父子、

其子を孝しもふきのくにまはりし。胤と云ふ。下總國馬加の城より打て出で、成氏の味方となりて合戦す。竟に亨徳四年三月廿日、

胤直敗北し、其子胤宣および千葉入道常瑞、舍弟中務入道了心等、悉く切腹す。よつて陸奥

守は千葉へ移り、千葉の跡を継ぎける。然るに上杉よりは、中務入道了心の子息、實胤、自

胤二人を取立て、下總國市川の城に楯籠る。こゝにおいて、千葉家二流となり、總州大に亂

鷲大明神祭

毎年土月間の日は
修飾す世々此の
地々の農民は
秋を祭終るの後
悉く浅草寺観音
の堂へ移り
舊例とす





鷺嶋大明神社



天満宮祠 てんまんぐう 不動堂の後の方、小しき丘の上なる古松の下にあり。來由は寺記の中につまびぢかなり。

正一位鷲大明神社 しやういちぢうだいみやうじん 花亦村にあり。此地の産土神とす。祭神 詳ならず。本地は釋迦如來 しやうかによらい

にして、鷲に乗ずる體相なり。別當は眞言宗にして、正覺院と號す。每歲十一月酉日を以て さりのひ

祭日とせり。緣起に曰く、本地釋迦牟尼如來は、新羅三郎義光崇敬の靈像にして、天喜の昔、 てんぎ ひかし

奥州安倍貞任叛逆を企つるの時、本尊の示現によりて、其軍勝利ありし由を記せども、其説 そのせつ

つまびぢかならず。

按ずるに、當社鷲大明神は、土師大明神なるべし。ハとワの假字の轉ぜしより、謬り來れる歟。當社を世俗淺草觀音の奥院と稱す。是に因てこれを考ふるに、淺草寺緣起のうちに、土師臣、ハシノオミ中知、および檜前、ヒノクマ、濱成武成といへる漁者主従三人の名を擧げたり。日本紀に、垂仁天皇三十二年、野見宿禰にはじめて土師臣の姓を賜ふとあれば、この中知も其遠裔なるべし。野見宿禰は天穗日命十四世の孫なり。古事記に、天穗日命は出雲臣武藏國造土師の連等が遠祖なりとあり。又續日本紀に曰く、檜前舍人直由加麻呂といへるは、むさしの國加美郡の人にして、土師姓と祖を同じうすとあれば、此濱成武成も武藏國の人にして、主従三人ともに姓は土師なるべし。古事記に、天菩比命の子に、建比良鳥命といへる神あり。此神は土師姓の祖なれば、彼三人の漁者の輩など、是等の神をあがめまつりしものならん歟。當社に毎年十一月酉の日祭あり、世に酉のまちと云ふ。まちは祭の略語なり。此日近郷の農民家鶏を奉納す。翌日、納むる所の家鶏を、ことごとく淺草寺觀音の堂前に放つを舊例とす。これ又より處ある歟。なほ後人の考を待つのみ。

石濱 いしはま 今橋場といふ。義經記に、治承四年九月十一日、東鑑に頼朝隔田川を越えて武藏國に入るを、十月二日とす。九月十一日と記せしはあやまりなるべし。右

大將頼朝卿、下總國より武藏國へ打越え給ふとある條下に、石濱と申す處は江戸太郎が知

寺記に云く當院開基志太三郎先生義廣は、八幡太郎義家の孫、六條判官爲義の三男なり。

始め常陸國伊田に住し、後同國志太村にありける故に、志太を以て家號とす。八坂本平家物語志田に作る。初め武州榎戸に一院を創基し、祈願所とす。當院是なり。昔は同所榎戸

にありし。是より先、治承の頃、頼朝初めて義兵を起すの時、義廣自立の志ある故に、頼朝に

隨はず、却て小山小四郎朝政が爲に敗らる。其後同左馬介義純、義廣三代の、蟄居して此梅田村

に住す。今寺の惣門の外右の方を廳(クルワ)とあざな。其裔常陸介久廣、義純より三、當院の傍に、始めて天

滿宮を勸請し、鎮守とせり。又神告に仍て、姓を梅田と改め、小太郎と號す。又遙に後、

永正年間、關東大に亂る。同太郎左衛門久義、小太郎久廣より十六代の孫、同帶刀、是を厭ひ、丹州

島村城に移り住し、又同國峯山城に移るといへども、遂に敵の爲に生害す。長子久頼もよび久友、續いて峯山に住せり。

其後國民當院に亂入し、遂に破壊におよびしを、慶長の頃、頼專坊、舍弟、今の地に遷して、

寺院を再興し、眞知法印を以て中興開山とす。又寛永二十年の春、大樹御放鷹のみぎり、立

よらせ給ひ、辱くも當院の來山を聞き召れ、寺領等を附せらる。

不動堂、本堂右の方にあり。本尊不動明王は、弘法大師の作にして、覺摩上人、根來傳法院草創ありし頃、護摩堂の本尊に安置ありしを、天正三年、故ありて花浴歌の中山清閑寺に移し奉り、又寛保元年、不思議の靈感あるに仍て、終に當寺に安置せしとなり。



橋田天神祠
不動堂
別當明王院





西新井 にしにい
大師堂 おおいでどう
毎月廿一日
冠祭あり



八幡宮はちまんぐう 六月村ろくごむつらにあり。別當べつたうを炎天寺えんでんじと號す。傳つたへ云ふ、八幡太郎義家朝臣はちまんたらうよしいへあそん、奥州征伐あうしうせいはいの時、

此國このくにの野武士のぶしども、道みちを遮さへぎる。其時そのとき六月炎天えんでんなりければ、味方みかたの勢せい、勞つかれて戦たたかはんとする氣け

色しきもなかりしにより、義家朝臣よしいへあそん、心中しんちゆうに鎌倉八幡宮かまくらはちまんぐうを祈念きねんありしかば、不思議ふしぎに太陽たいやうのひ繞めぐるが

如ごとく光ひかりを背せに受けければ、敵てきの野武士等のぶしら、日ひにむかふ故ゆゑに、眼まなこくらみ、大おほいに敗北はいぼくしぬ。依よつて

此地このちに八幡宮はちまんぐうを勸請くわんじやうありしとぞ。此故このゆゑに村むらを六月ろくごむつといひ、寺てらを炎天えんでんと稱なづし、又幡正山はんしやうざんと號

すとなり。

白旗塚しらはたづか 伊興村いこうむら、田たの中なかにあり。傳つたへ云ふ、往古そのかみ八幡太郎義家朝臣はちまんたらうよしいへあそん、奥州征伐あうしうせいはいの時とき、此地このちに

白旗しらはたを建たて凱歌がいがを唱となへしより、此名このなありとぞ。近頃迄ちかごろまで、此塚このちやうじやう上に小祠こほらあり。其傍そのかたはらへ立寄たちよ

るものあれば、崇たよりありし故ゆゑ、社やしろ荒廢くわうはいにおよびけれども、其儘そのまゝに再建さいこんもせざりしとて、今塚いまづか

ばかりを存ぞんせり。今いまも此塚このちやうじやうの上うへにこのあたり登のぼる事ことを禁かず。此邊このあたりの田面たのもを、白旗耕地しらはたかうちといふ。又兜塚かぶさづかと稱なづするもの、五箇所ごかしよ

あり。兜首かぶさづか檢けんありし後のち、其首そのくびを埋うめたる所ところとぞ。

萬徳山明王院まんとくざんみやうわうゐん 梅林寺ばいりんじと號す。梅田村うめだむらにあり、新義しんぎの眞言宗しんごんしゆうにして、本尊ほんぞんに地藏菩薩ぢざうぼさつを安やすす。

て莊司しやうじ悲歎ひたんに絶えず、又村人そんじん彼女子等かのによしらの行跡ぎやうせきのたゞならぬを稱し、其日そのひ六月朔日の事なれば

とて、其靈そのれいを富士淺間ふじせんけんと稱して、一社いつしやに奉ずほうといふと。しかれども其説そのせつ未詳まだつまびらかならず。

淺間淵せんけんのふち 同所の河淵かはふちをさしてしかいへり。足立姫あだちひめ溺死ひめできしの所ところなりといふ。

十二天森じふにてんのもり 足立姫あだちひめの侍女じぢよの死骸なきがらを收めて、十二天じふにてんと稱す。船方村ふなかたむらの鎮守ちんじゆなり。

餘木阿彌陀如來よきあまりのあみだにょらい 宮城村みやぎむら、龍燈山りゆうとうざん性翁寺しやうおうじに安ず。往古そのかみ行基ぎやうき大士だいたし六體ろくたいの阿彌陀如來あみだにょらいの像ざうを彫刻てうこく

ありしその餘材よぎいを以て是これを造りたまひ、草堂くさうだうの中うちに安置あんちありしを、遙はるかに後のち、明應めいおうの頃ころ、正譽しやうよ

龍吞和尚りやうどんしやう、改めて一字いちじうの梵利ぼんざつとなして、此地このちに住せうし給へり。則ちすなは此寺このてらの開祖かいそたり。當寺たうじに足

立姫ちひめの墳墓ふんぼと稱するものあれども詳つまびらならず。

五智山總持寺ごちざんそうぢじ 西新井村にしあらむむらにあり、眞言宗しんごんしうにして、遍照院へんぜうゐんと號す。弘法大師こうぼうだいしの草創さうさうにして、本

尊そん弘法大師こうぼうだいしの靈像れいざうも同作おなじさくなり。靈驗れいけん著いく、毎月廿一日まいげつにじちつには開帳かいちやうありて、參詣さんげい頗すこぶるおほし。

或人あるひと云ふ、當寺たうじ弘法大師こうぼうだいしの靈像れいざうは、そのかみ北總眞間山きたそうまゐんざん弘法寺こうぼうじに安置あんちありしが、日蓮宗にっれんしうに轉まじたりし頃ころ、此像このざうをば當寺たうじに還かへすとなり。

阿伽井あがゐ 本堂ほんだうの左ひだりの傍かたわらにあり。則ち弘法大師こうぼうだいしの加持水かぢみづなり。洗目服藥せんめくふやくに用ふるに、其應驗そのおんげんあり。此井このゐに依て、地名ちめいを西新井にしあらむと稱すといへり。



春秋二度の被屋
 まゝ六町孫陀廻と
 田わけの薨あゝよ
 催され都下の貴様
 老る若き打群は
 朝とく宅居と物と
 ひとも行程まぢれり
 遠くらの妻の目も
 長やしくと秋いとまら
 暮せと
 せりつる





光茶銚

千住の野

道の左側

大入の薺老茶

屋とも呼ぶ

むろの茶

銚の光澤の珠

と孫ちりび

重んずる賞

あつちり

茶銚

名物とあり

其名

世

光

ありぬ



按ずるに、熊野権現、飛鳥明神、何れも紀州に鎮坐あり、又此地に兩社あるも、いはれあるべきことなれども、今傳記とりくりにして詳なることを得ず。余説を設けんとするといへども、しげきをいとひてこゝに略す。

千住大橋 せんじゆのおほはし 荒川の流に架す。奥州海道の咽喉なり。橋上の人馬は、絡繹として間斷なし。

橋の北一二丁を経て驛舎あり。此橋は、其始め文祿三年甲午九月、伊奈備前守奉行として普

請ありしより、今に連綿たり。

甘露山延命寺 かんろざんえんめいじ 應味院と號す。下沼田にあり、眞言宗の古刹にして、行基大士の草創なり。

本尊阿彌陀如來は、同作にして、六阿彌陀第二番目とす。春秋二度の彼岸には參詣多し。

富士淺間祠 ふじせんけん 同所川下の方、森林の中にあり。土民傳へ云ふ、昔此地に、足立莊司にて、宮

城宰相といへる者あり。一女子をもてり。名附て足立姫といふ。六阿彌陀第一番第四番兩縁起には、豐島

には沼田莊司の女とも、三番目五番目および六番目縁起には、足立從二位宰相藤原正成の女ともあり。父母隣縣の豐島左衛門尉なりける者のもとへ嫁せしめん

とす。六阿彌陀第一番縁起に、足立少輔のもとへ送ると、又四番目五番目六番目縁起には、沼

を敬するの外他なし。故に是に隨はず。父母強て婚姻を整ふといへども、猶此事をふかく患

へとし、竟に荒川に入りて死す。又沼田川とも云ふ。千住川の侍女も又ともに身を投けて死せり。仍

もひたまふは、いやしきまよひなるべし。夢ゆめの世よにおなじまよひにほだされたる人々に名をしられて
 何かばせん、永ながき世よにさとりをききはめて、佛ほとけの御前おんまへにて名なをあげさせたまへかし。佛ぶつ法ほふをしらざる賢けん
 人じんさへ、首陽山しゆやうざんにとりこもりて、王命わうめいをばいなびまうせしとかや。いはんや剃髮染衣ていはつぜんいの御身おんみにて、捨しゃ
 身しんの行ぎやうにおもむきたまひし山やまごもりのひじりの、何條なんどうさのみ敕諭ちよくぢやうにかゝづらひ、男女なんにょ雜居じやくきよの所ところへは
 出いでさせたまふべきぞ。またたまはり候御衣ごえはいかにしたる御おんはからひぞや。すでに如法如説によほふによせつのひじり
 さへ、布施ふせにうたれては、地獄ぢごくに焦こがさるゝところ申まをすに、稱讚淨土經講讀しやうざんじやうどかうどくの御布施おんふせの御衣ごえ、此尼あまとり
 て何なにとすべく候ごうや。後世ごせたすくるまでこそなくとも、かへりて三途さんづに引落ひきおしたまふべきこと、あさま
 しきとも申まをすべきやうなくと、耳みみにもふれじと思おもへば、この法師ほふしにかへし候ごう、云々。以上取意略文

熊野權現社くまの こんけん同北きたの方かた、千住川せんじゆがはの端はたにあり。祭神伊弉册尊まつるかみいざなみのみこと一坐。社傳しゃでんに云く、永承年中えいしやう、義よし家朝臣いへあ そん、奥州征伐あうしやうせいはつの時とき、此地このちに至り、河かはを渡わたらんとするに、奇異さいいの靈端れいずみあり。故ゆゑに鎧櫃よろひびつに安あんぜし紀州熊野權現きしゅうくまの こんけんの神幣かみへを此地このちにとどめて、熊野權現くまの こんけんと齋いっきたてまつるといへり。



千住川

荒川の支流
千住川
隅田川の上

隅田川上流



千住大橋

の教をしへ、いまだ東國とうこくに弘ひろまらず、汝なんぢ行ゆきて弘ひろ法ほふすべしとなり。仍なほて慶祐けいゆう法師ほふし、命めいを受け、東國とうこくに遊あそ化けし、此地このちに來きたり、當たうじ寺じを建こん立りす。宇治うぢの惠心ゑしん院いんに比ひして、當たうじ寺じをも惠心ゑしん院いんと號なづす。中ちゆう古こ類たい破はいせしを、増上そうじやう寺じ十八じふはつ世せ了れう

蓮社れんしや定譽ぢやうよ上人じやうにん、隋ずい波は太たい和わ尚しやう中ちゆう興きやうせり。

慶元といへる書に、惠心僧都の母公より、僧都のもとへ贈られし戒の文をいだせり。學佛の徒の教にもなれかしと思ひ、得るまゝこゝに記す。其文に云く、

惠心僧都勅に依て參内し、稱讚淨土經を侍講申されければ、歡感のあまり、本尊および御衣を賜はりしかば、古郷なる母公の方へ御衣を贈られし返事に、是を榮とし悦とする心なく、なか／＼に恨みられし其文に、

山やまへ登のぼせたてまつりて後のちは、あけてもくれてもゆかしさは心をくだきけれども、たふどき道人だうにんとなし

たてまつるうれしやとこそおもひしに、大裡おほうちのまじほりをし、官位くわんにんにすくみ、青甲しやうか紫甲ふしかに衣かぶのいろを

かへ、君きみにむかひたてまつり、御經おんきやう講かう讀じやくし、御布施おんふせのものとりたまひ俟程まちばらの名聞みやうもん利養りやうのひじりとなり

それれたまふ口惜くちをしさよ。只命ただいのちを限かぎりに、樹下じゆか石上せきじやうのすまひ、草くさとり木食もくじきに身みをやつしはて、木きをこり

落葉おちばをひろひ、偏ひなへに後世ごせたすからんとしたまへとこそこしらへたてしに、ふたたびさかえ行きて、王わう

宮きやうのまじほりをし、官位階くわんゐかいの品しなさままの袈裟けさころもにいでたちをかざり、名聞みやうもんの爲ために説法せつほふし、利養りやう

の爲ための御布施おんふせ、さらに出離しゆつりの御おんはたらきにあらす、たゞ輪回わんゑのおん身みとなりたまふぞや。あひがたき

うどんげの佛教ぶつてうにあひぬればと思ひいりて、後世ごせたすかりたまふべきに、かなしくも一旦いつたんの名利みやうりにほだ

されたまふ事こと、おろかなる中の愚おろかなること、殊ことごとに口くちをしき次第しだい、あさましくこそ候へ。之これを面目めんもくとお

聖護院宮の末にして、荆石山神翁寺と號す。祭神大己貴命、日本紀古語拾遺等に、大己貴命は素盞鳴命の御子なりとあり。事代主

命、古事記に、事代主命は大國の命、主命の御子なりと云ふ。一坐なり。社傳に曰く、往古延曆年中、比叡の黑珍師、東國化度の砌、

此地に至るに、小篠の茂りたる一堆の小塚あり、比塚によりて、此地を小塚原と號せり。其塚より夜なく瑞光を現

じ、白衣を著したる二人の翁、荆棘生ひたる石の上に降臨ありて、黑珍師に示して曰く、我

は素盞鳴命の和魂大己貴命なりと。當社牛頭天王と稱す。又一人の翁曰く、我は事代主命なりと。

是を飛鳥明神と號す。云々。仍て恐敬渴仰し、清淨の地を選んで、此神を一社に奉ずと。牛頭天王は、毎歲六月三日より同九日まで、

千住大橋の南詰に假に宮居を設け旅所とし、かしこに神幸あり。この祭禮の權輿は、天文十年辛丑六月三日、此荒川へ神輿一基流れよる

名事舊例なりとぞ。飛鳥明神の祭禮は、毎歲九月十五日に執行す。瑞光石 本社右の方小塚の上にあり、又荆石ともいへり。往古二神考翁に化し、この

豐徳山誓願寺 惠心院と號す。飛鳥明神の北にあり。淨土宗にして、本尊に阿彌陀如來を安

ず。開基は惠心僧都なり。

寺傳に曰く僧都顯密の二教を究め、なほ諸宗を渡り、遂に彌陀の本願に歸入し、往生要集等

を著して、大に自他を化せり。今の世念佛弘法その頃、僧都上足の慶祐法師に語りて曰く、念佛



のとり
飛鳥社
こゝろ
小塚
扇天王宮



ずるきす 瑞九、初め花洛の萬年寺に入り、大圭和尚に従うて其法を受く。禪機文材ありて、名譽四方に揚る。應仁の亂を避て、江左濃尾の間に寓す。後浮屠の業を廢て、自ら漆桶居士と號し、又一に梅花無盡藏と稱す。文明の末、東武に遊ぶ。太田道灌、眷遇甚た渥し。灌歿して後、濃に歸り、老を投す。曾て天下白二十五卷を著す。文明中東遊の詩文集あり。梅花無盡藏と號く。

あつた みやうじん 熱田明神社 新鳥越にあり。祭る所日本武尊一坐なり。當社は、往古元鳥越の地にありしが、正保年中、今の所に移れり。例祭は、隔年六月十五日執行す。

しゆんめつつか 駿馬塚 岡所南側、何某が別莊の中にあり。傳へ云ふ、康平中、源義家、東征の時、愛する所の青海原といへる駿足、偶病して、こよに斃す。公大に是を傷みて、朽骨を驛路の傍

に埋め給ふとぞ。其後里民小祠を營み建つといへり。又近き頃、其地のあるじ、公の明德を千歳の下に顯さんことを欲して、塚の側に石碑を建て、祠は其塚の東の方に遷せり。

あすかみやうじん 飛鳥明神社 小塚原にあり。此地の産土神とす。世人混じて簀輪の天王と稱せり。別當は、

駿馬源せんばのり



山えり谷や
熱田明神社





庭中楓樹寂
 暮秋の紅錦
 海晏寺の園林
 實は一時の
 奇観
 乃



寺正燈寺丹楓



回國雜記

霜の後

あつらひ

りり

あつらひ

あつらひ

岡の

ねも

す

道真准后



時雨岡
不動堂





名所の根有の里の
 上野の山屋の
 出越の故や
 都の遊人多く
 小隠棲を花よ
 り雪水すをじ
 ばもとりの声
 産すりの其声
 ひとりのありく
 世々賞受
 せしむる



寓武野之佳境隅田之上流。往還無虛月。豈非天之至幸乎。昨賜詠歌三篇。可謂暗投也。聊奉攀末篇之韵脚云。二十六日 文明十七年乙丑十月二十六日也

雪月寧非老年伴 一吟聊答數篇韵

隅田春色浪如花 鳥若知都我細問

按ずるに、孝範家の集に、武藏國豐嶋といふ郡に、入江かけたる所に住みはべりける、前はよし菅など茂りてと云々。又梅花無盡藏の詩の序に、木戸公を罷釣翁と號し、共に武野の佳境隅田の上流に寓すといへり。合せ考ふれば、三河嶋の地勢その舊跡に似たり。

木戸孝範は、從五位下に叙し、前三河守と云ふ。又罷釣翁と號す。今川了俊の一族にして、

太田道灌、東常縁、及び正徹、宗祇、心敬、萬里杯と同時世の人なり。鎌倉大草紙に、孝範

は、冷泉中納言持爲卿の門弟にして、無双の歌人なりとあり。同書に、長祿元年、關東の亂

に就て、京都將軍家の舍弟左馬頭政智、關東將軍の宣旨を蒙り下向あるといふ條下に、供

奉の人の中に、此孝範の名あり。家集に、曾祖父貞範、建武二年藏人になり、左近將監になりて、陸奥の夷を鎮む、其賞

爲發向とある條下に、先手の大將の中に、木戸將監範季と云ふ名を擧ぐ。同書建永二十三年靈基の旗下にありて、伊豆國

國清寺にて討死の人の中に、木戸將監滿範といへる名を註せり。何れも其氏族の人なるべけれど、いまだ系圖を考へず。

萬里居士寓居地

前に記せしごとく、萬里居士、木戸孝範と共に、隅田河の上流に寓すとあれば、萬里居士の住せしも、また三河嶋のあたりならん歟。されど今其地さだかならず。

萬里居士、諱は

むさしの國としまといふ郡に、入江かけたる所に住みはべりける。まへはよしあしなど茂りて、鹿の常にたよずみける。山遠き所なれば、めづらしく聞きをるまゝに、近きあたりには都人の下りて住みけり。夜ふけばめさまして聞きたまへとまうしつかはしたるに、夜なく枕をそばだてたれども聞きはべらず、人の聲などのほきを聞きなして申すにやと、かこちおこすとて、みやこびとの歌、

曉のふなもよひするあまの子のかひよといふをしかと聞くらん
返し

軒近くしか立ちならす宿とひて待ちし夜頃よころのかひよとも聞け

梅花無盡藏云

木戸公號罷釣翁。保和歌之正脉。余在洛而聞厥聲譽久之矣。今也共

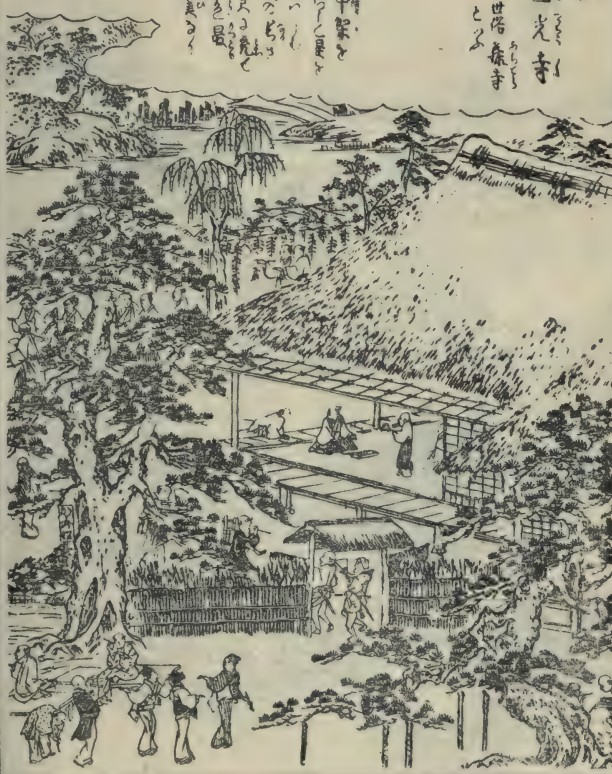


根岸

圓光寺

世俗森寺
とふ

庭中架を
樹らく夏
雲のどろ
二匹の虎と
花を最
然美さく





多摩川
金松
安樂寺



は大圓寶鑑國師と詮號す。天性明敏にして、大いに禪海たうじの浩漚を鼓起す。寶鑑國師の語録につまびちかなり。當寺たうじの後園、楓樹多し。其先山城高雄山の楓樹ほうじゆおほの苗を栽うると云ふ。晩秋ばんしゆの頃は、

眞覺山西光寺しんかくざんさいくわうじ 叢輪新町みのわしんまちにあり。淨土宗じやうどしゆにして、長和元年ちやうわの草創さうさうなり。本尊阿彌陀如來ほんぞんあみだにょらいは惠

心僧都しんそうづの作、開山かいざんは聖蓮社賢譽上人しやうれんしやけんよたり。

千束郷せんそくのかう 龍泉寺町りうせんじまちの邊、今僅いまわづかの地をいへり。一に篠堤さくづつみと字あざなす。菊岡沾涼きくなかせんりやうの説せつに、此地このちを佐々

津見づみの里さざとも號なづくとあるは誤あやまりなり。この境ちに叢祠そうしあり、千束稻荷せんそくいなりと稱なづす。

或人云ふ、往古は上下とわかれて、淺草天王町の邊より千住の橋際迄を、すべて千束郷といひけると云ふ。仍て按ずるに、淺草寺至徳四年の鐘の銘に、武州豊島郡千束の郷金龍山淺草寺とあり。又同じ境内に西宮稻荷と稱するあり、里老傳へて是を上千束稻荷となづくると云ふ。小田原北條家の古文書に、千束の内にて、阿佐谷分、三戸分、石濱等の地を太田新六郎、同じく石濱惣領分の地を太田大膳亮、同じく金杉分の地を飯倉彈正忠、同近藤分の地を島津彌七郎、同じく朝倉分の地を江戸番匠等領する事見えたり。こゝに於いて其地の廣大なる事をしるべし。

木戸三河守源孝範第宅舊跡きへみかほのかみなるもとのたかりていたくのきうせき 傳つたへ云ふ、今三河嶋いまみかほしまと稱しやうする地は、三河守居住の舊跡きうせきなる故

に、しか號なづくるとぞ。或云ふ、此地は細谷三河守といふ人の領地なる故にかくなづくるとも。

孝範家集云

本尊は寶冠の阿彌陀如來なり。洛陽一心院の末にして、捨世一派の淨域たり。晝夜不退念佛

三昧にして、殊勝なり。

寶鏡山圓光寺 根岸の里にあり。濟家の禪林にして、釋迦如來を本尊とす。當寺、庭中に紫

藤ありて、花の頃は一奇觀たり。故に俗間これを藤寺と稱せり。また堂前に鏡の松と唱ふる

名樹あり。鎮守の辨財天は、弘法大師の作なりといへり。

時雨岡 同所庚申塚といへるより、三四丁良の方、小川に傍うてあり。一株の古松のもと

に、不動尊の草堂あり。土人此松を御行の松と號く。來由は姑くこよに省畧す。一に時雨の松

回國雜記

忍ぶの岡といへる所にて松原のありけるかけにやすみて

霜の後あらはれにけり時雨をば忍びの岡の松もかひなし 道興准后

按ずるに、忍の岡といへるは、東叡山の舊名なり。此地も東叡山より連綿たれば、回國雜記に出づるところの和歌の意を取りて、後

東陽山正燈寺 龍泉寺町にあり。妙心寺派の禪刹にして、承應三年に、愚堂和尚草創す。 尚和

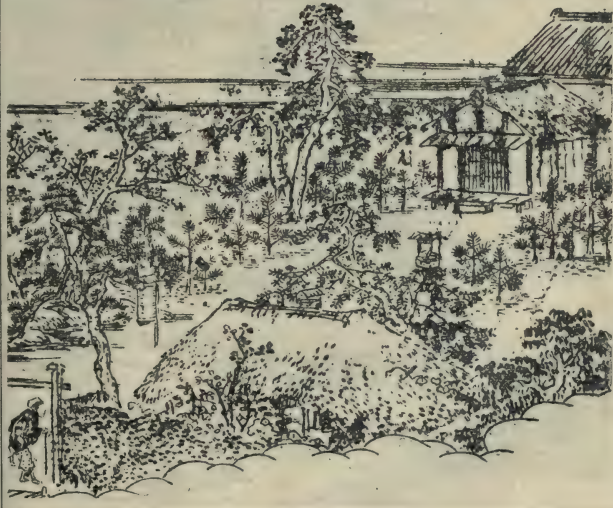
小野照濟雨神社



入谷

庚申堂

春堂洗み香を
撰のに天まの
青面金剛と
岡伝の堂像
なりと



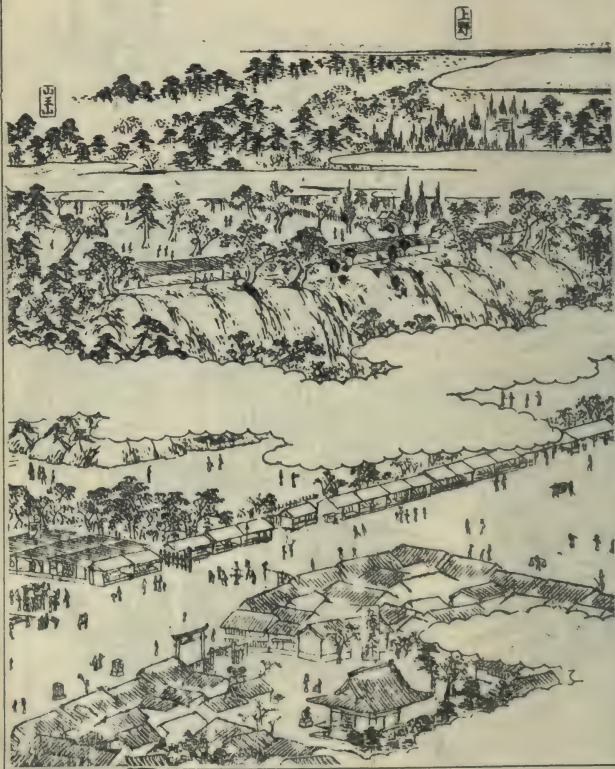
東嶽山坂市



常樂院

六門施陀五書目
さうまの二な
の積茶中極ハ





其二



白米
 の夜
 節
 毎
 年
 五
 日
 神
 天
 祭
 五ノ日



下野山



燈大僧正天海書としるせり。毎年二月十五日是を拜さしむ。

薬王山善養寺 延壽院と號す。同所坂本一丁目の左側にあり。天台宗にして、本尊は藥師如来を安ず。寺僧云ふ、此本尊は小野照崎明神の本地佛なり。このゆゑに、小野照崎明神の社は遙に此地を離るゝといへども、當寺藥師堂に相對せりとなり。當寺は、天長年中、慈覺大師の草創、本尊も同大師の作なりといへり。額に圓滿の二字を刻す。黄檗木庵老人の筆。また境内に閻魔堂あり。閻魔の像は、運慶の作なり。正月七月十六日、參詣群集す。閻魔の像は、野

州足利學校にありし聖像なりしを、故ありて後世ここに移つしたりと。

小野照崎明神社 同所三丁目の右側にあり。祭神參議小野篁の靈なりといへり。社傳あれども詳ならず。故に姑くこゝに略す。當社は坂本の鎮守にして、八月十九日を以て祭日とす。別當は天台宗にして、小野山嶺松院と號す。

或人云ふ、當社は、其先忍が岡に聖堂ありし頃、その傍にありて小野明神と稱す。小野篁ふかく儒教を崇敬し、野州足利に學校を闢く故に其後彼地にて、聖堂の傍に篁の像を安じ、祭祀を執行す。こゝにもまた、かしこの例に準じて、忍が岡聖堂の傍に置きけるを、聖堂湯島へ遷るの後、今の地へ鎮座なしける。又云ふ、當社の地主稻荷明神の使者なりける白狐、夜毎に尾の末照りかゞやきて、台嶺の松樹に映じければ、尾の先照るといふ意にて、彼此混じ交へ、小野照崎とはなづけけるなりと云々。

佛迎山安樂寺 金杉にあり。正保年中、正蓮社意的和尚、當寺を創立す。當寺は智恩院官尊朝法親王御閑居の舊地なりといへり

開陽之部 卷之六

四七五

天満宮を相殿とす。天神の像は寛永十八年慈眼大師開眼ありて、當社の相殿に鎮坐せしむ。當社、はじめは東叡山のうちにありしが、寛永

寺草創の砌、御連歌師瀬川昌億が宅地に遷させらる。菊岡沾凉云ふ、其舊地は上野御本坊の邊なりしと。每歳節分の夜、白朮

神事を修行す。

北國紀行云

正月の末武藏野のさかひ忍の岡に優遊しはべり。鎮坐の社

五條天神と申しはべり。折ふし枯れたる茅原を焼きはべり。

契りおきてたれかは春の初草に忍びの岡の露の下萌 堯 惠

寶王山常樂院 長福壽寺と號す。天台宗五條天神の南、忍川の向にあり。本尊阿彌陀如來は、

行基大士の作にして、六阿彌陀第五番目なり。二月八月の彼岸中、甚だ賑はへり。

金光山羴玉院 下谷坂本一丁目の南にあり。天台宗にして、往昔は今の御城内大手の邊にあ

りしと。慶長の頃、今の地に遷させらる。往古は、三貌院と號しけるを、寶永年間、今の名

に改むるといへり。當寺に釋迦の涅槃像の畫軸一幅を藏す。上に慈眼大師の讚あり。三國傳



下谷稲荷明神社



年、江戸に遷され、神田にて地を賜ふ。事跡合考に、昌平橋の内、其ころいまだ足入れの沼地なりしを、とやかくして纒かなる堂一字を建てたりと。其頃迄は、當寺昌平橋の内におりしなり。
其後寛永の末、今の地に遷る。開山を希叟宗芋禪師といへり。

當寺の總門は、名匠の差圖にして、是迄風火の難度々におよぶといへども恙なし。最も番匠の規矩とする所なり。詳に梅臘主人あちはせる新齋夜話といへる草紙に出でたり。

下谷稻荷社 廣徳寺の向ふ側にあり。故に俗呼びて廣徳寺の稻荷と稱す。是大なる誤なり。

り。別當を正法院といふ。祭神は倉稻魂命にして、本地十一面觀世音は、行基大士彫刻の

靈像なりとぞ。中の鳥井に、正一位稻荷大明神と書ける額あり。崇保院公寛法親王の眞蹟な

り。拜殿に掲けたる同神號の額は、蓮花光院道恕の筆なり。當社祭禮は、隔年三月十一日に

執行す。下谷の鎮守と稱す。

下谷岡 すべて上野のあたりを指していふ。 小田原北條家の古文書に、大谷十郎左衛門

武藏國風土記殘篇曰

豊嶋郡下谷岡。貢鹿狐兔狸山鶴雉雀等。又貢薯蕷松脂云々。

五條天神宮 東叡山の巽の麓、瀬川氏の地にあり。祭神少彦名命一坐、本朝醫道の祖神に記きたの北野

ふ。師し大おほいに喜よろこび、傳でん燈とうの法ほつ主しゆたるべしとて、委こまく傳でん法ぽふあり。且かつ諸しよ弟ていに教けう誡がいし、遂つひに貌けい床しやうに坐ざし、筆ふでを求もとめ、辭じ世せいの偈げを書しよして云いはく、白はく道だう運うん歩ほ數す十じふ年ねん、以ひ火を消もつて火を難せう思す術なん、と書かき畢をつて筆ふでを擲なげ、端たん坐ざ合が掌わうして高かう聲じやうに彌み陀だの尊そん號がうを唱さなへ、眠ねむるが如ごとくにして化けす。時ときに元げん和わ元年ねん乙えい卯まう正月しづ月げつ十五じふご日にち、歲さい算さん七しち十じゆ四し。以上いじやう行ぎやう化け傳でんの要ようを攝しやくむ。

信州善光寺燈明 寺町、赤城山燈明寺といへる台宗の寺にあり。有心の輩是をうく。寺内

に赤城明神を鎮れり。

朝日山永昌寺 願成院と號す。下谷大通にあり。淨土宗にして、鎮蓮社尊譽上人を開祖と

す。本尊阿彌陀如來は運慶の作、千手觀音は慈惠大師の作とぞ。世に厄除の寺傳に云ふ、當寺

は、天正年間、下谷長者某、其名今しる。草創す。もと同所長者町といへるにありしを、元和の

頃、今の地に引きたりとぞ。明曆二年丙申、松浦家の母儀永昌院再興ありしとなり。則ち境

内に長者の墳墓あり。

圓満山廣德寺 同所にあり。大德寺派の禪宗にして、始め相州小田原にありしを、天正十九

夷の凶賊九州に發り、邪法を弘め、幻術を以て人を惑し、頗る國を傾けんとするの兆あり。されども是を平治するに干戈を動す時は、國中の人民を鑿にするに至れり、高僧に命じ、正法に導かしめんにかじ、こよにおいて衆義一決し、幡隨意其器なりとて、直に召れ、大樹自ら命ぜられて云く、吾聞く、國に患ある時は、必ず佛法の護持によるといへり、師は既に天下の法將にして、邪徒を退治すべきの英雄なり、又邪徒に對するは、軍將の干戈を揮ひ敵陣に向ふに等しければとて、蜀江の陣羽織、及び金の軍配團扇とを賜ひ、急ぎ彼地に赴き、凶徒を教化せしめ、國家の患を除くべきの旨鈞命ありしかば、師も辭するに語なく、命に應じ、終に九州に至り、邪徒と宗義の對論ありしに、各道理に歸して、凶徒直に志をひるがへし、邪法を出でて、淨土門に入りける。實に師の徳のしからしむる故なるべし。軍配團扇は幡隨意院に藏す

陳羽織は法珠そのち是を傳持せり。其後又命令により、かしこに梵字を創立し、觀音寺と號す。有馬氏越前國丸岡に移す。その今の二河山自護寺是なり。其後崎陽に至り、大音寺を闢き、竟に晩年におよび、紀州和歌山に於て萬松寺を建立してこよに住せられしに、一日微疾を示す。上足意天和尙、深川靈巖寺 第二世なり。かしこに至り、師の病床を訪

の作なり。妙龍水 本堂の左にあり、傍に碑碣を建つる。其文中に、開山繪隨意上人。天正十年の秋、越後國高田の善導寺に脱し、成佛せりとぞ。依て其後法恩の爲に捧ぐるところの清泉なりといへり。妙龍は則ち龍女の法號にして、上人授與ありしなり。

開山演蓮社智譽上人、始の號 は典譽、幡隨意白導と號す。相州藤澤郷善行寺村の産、俗姓は川島氏なり。

り。天文十一年壬寅十月十五日に生る。兒たる時、常に佛像を禮し、沙門を敬す。九歳に及ぶの頃、出家せん事をのぞむといへども、父母是を許さず。既にして十一歳、竟に同國玉繩

邑二傳寺の範譽上人に投じて落髮授戒し、幡隨意と號す。爾來所々を経歴し、數回の年序を

經、宗要の玄微を究む、天正年中、上州館林の判吏藤原康政の請によりて、彼地に一字を創立し、終南山善導寺と號す。十八檀林の一なり。又下總國關宿に大龍寺を草創し、又越後の國高田にても善導寺を開基せり。慶

長七年壬寅、十一、洛陽智恩院に住職す。此時紫服を賜はり、鳳闕に登り、淨家の祕牘を講ず。

主上大に歡感あり。同九年甲辰、東武の招により、再び此地に下向し 神田の臺に臺也。地

を賜ひ、一字の梵刹を闕いて、神田山新知恩寺と號す。明曆の頃迄池の端にあり 同十三年庚申、十七、武州熊

谷邑に至り、蓮生法師の遺跡に、小き草庵ありしを轉じて精舎とし、熊谷寺と號く。

の袈裟をたまひ、寺 同十六年辛亥、十、勢州山田に入門寺を開基す。然るに同十八年癸巳、十二、蠶

領等を附せらる。

同十六年辛亥、十、勢州山田に入門寺を開基す。然るに同十八年癸巳、十二、蠶

の袈裟をたまひ、寺 同十六年辛亥、十、勢州山田に入門寺を開基す。然るに同十八年癸巳、十二、蠶



廣德寺



こに安置せしむといへり。

萬年山祝言寺

同所南の方、通を隔てて西南の方にあり。曹洞派の禪宗にして、良山存久和

尚開山たり。往古は江戸城の邊祝言村といへるにありて、天文二十年の頃、太田道灌草創す。

天正の頃、山號を賜ひ、又此地に遷さる。

日蓮大菩薩

同所新寺町より半丁ばかり西南の方にあり。安立山長遠寺に安置す。傳へ云ふ、

往古花洛南禪寺の普門禪師、多年日天子を信敬し、一朝日輪の中に二菩薩の尊影を拜す。依

て自ら筆をとつて親是を摸し奉り、靈告によつて弘長元年辛酉六月、遙に關東に下り、豆

州伊東に至り、同六日、日蓮上人に謁し、彼二尊の點眼を乞求む。則ち上人開眼供養あつて、

花押を添へらる。又禪師深く上人の德澤を慕ふ故に、大士自ら肖像を造りて、禪師のもとに

贈らる。當寺日蓮大士禪師歸寂の後、京師要法寺にうつし、又妙榮寺に安置せしが、故あつて

文祿三年の頃、當寺に遷せり。

神田山幡隨意院

新知恩寺と號す。淨家十八檀林の一室にして、本尊阿彌陀如來は、安阿彌

其昔は佛閣藁をならべ巍々たりしに、年去り年來り、星霜を歴るまゝに、堂塔大いに破壊せしを、文祿年間、慶圓法印といへる沙門、靈告を得て、叡山正覺坊の探題豪盛僧正と相謀つて、堂宇を修營し、昔に復せしむ。

上宮太子堂

同所一丁ばかり坤の方にあり。寺を用明山聖德寺と號す。淨土宗にして、本尊

聖德太子像は、御自作なりといふ。

世に孝養の御影と稱す。傳へ云ふ、往古御父用天皇御惱の時、太子神明佛院に祈

に自ら作らせ給ふ、御年十六歳の御影像なりとぞ。

往古聖實上人、念佛弘通の爲、此靈像を守り奉りて關東に下り、坪根澤に

一字の精舎を建立す。

又は局澤に作る。御城内吹、其後亨德二年、忠蓮社加譽上人良祐和尚中興し、

台宗を改めて淨家とす。慶長の頃、馬喰町馬場の邊に移され、明暦の後、今の地に引れたり。

當寺門の内に、地藏尊の石像あり。

相州一澤木食報上人の作にして、當山十七世の住侶靈告によつて、土中を穿ち、此地藏尊の御首を得たり、依て石工に命じて全體を補造せしか、其背面に件の旨趣

を銘す。

除厄太子堂

同所北の方、淨土宗天然山慈眼院に安す。聖德太子四十二歳の御時、除厄の爲、

自ら彫刻し給ひし靈像なりといへり。

當寺昔は神田橋本町の邊にあり。明暦回祿の時本尊を失ふ。依て住僧德譽上人深

もに弘りて、台宗一百八箇寺の總本寺たり。中古太田道灌、此靈像を崇敬し、江城の鬼門に置き、又其後慶長年中、日光御門主一品尊敬法親王、山門無動寺の松林坊賢海法印に仰て再興せしむ。神祖其時院主に命ありて、江城長久の御祈禱として、正、五、九月に、大般若經轉讀せしめらる。此例今に至つてしかり。慶長の頃迄は、常盤番の北にありしが、其後小傳馬町へうつさる。其地をさして、今もなほ藥師堂前といへり。淺草の地へ寺を移せしは、明曆回祿の後なり。

大雄山海禪寺

同所新堀の小川を隔てて、西の方にあり。妙心寺派の禪宗にして、江戸四箇

寺の一なり。往古平親王將門、總州相馬郡にあつて草創する所の佛刹なり。されど將門亡ぶ

るの後、年を歴て荒廢におよび、さながら狐兔の栖となりしを、慶長の頃、覺印和尚再興し

て、寺を江府湯島の地に移せり。其頃、神祖和尚の道德を聞しめし、尊敬あらせられしより

後は、寺院も輪奐として、宗流殊に盛なり。明曆回祿の後、今の地に遷させられたり。

清水寺觀世音菩薩

海禪寺の向ふ、新堀端にあり。昔は淺草橋の内にありしが、明曆火後、

今の地にうつさる。寺を江北山清水寺と號す。天長年中、慈覺大師、ひとつの勝地を求め、

天台法流の一院を建立ありて、みづから一刀三禮にして、千手大悲の像を作り、本尊とす。

人草創す。開山は圓蓮社滿譽上人と號せり。本尊手島觀世音菩薩は唐佛にして、順德帝建保

年中、相州鎌倉鶴ヶ岡の社僧良眞僧都入宋の時、育王山能仁寺より將來せる尊像なりしを、

其後豐太閣の幕下津田勝重といへる者、此像を感得す。息元重、伊賀國手島と云ふ所に至る

頃、此靈像の告によりて、群賊の蜂起を治め、武威を國中に振ひぬ。依て人民伏して、手島

殿と稱す。其後元重當國に赴きし頃、故ありて當寺に收む。則ち寺内に、手島元重の墳墓あ

り。當寺舊は淺草橋のうちにありしが、明曆回祿の後、此地に移る。

一心山稱往院 同西に隣る。捨世寺と號す。淨土宗にして、本尊阿彌陀如來は、丈六の坐像

にして恵心僧都の作なり。脇に觀音、勢至の二菩薩を安置す。開山は幡蓮社白譽稱往上人、

姓は飯田氏、下の野州宇都宮の人なり。當寺昔は小田原にありしが、慶長年中、當國へ移され、湯島に地を賜ふ。後

復今の地に引れたり。捨世一派常行念佛の道場にして、殊勝なり。當寺に圓光大師月影の御影といふあり。

藥王山東光院 同く西に隣る。鑿王寺と號す。天台にして、東叡山に屬す。本尊瑠璃光如來

の像は、佛工春日の作なり。傳へ云ふ、慈覺大師當寺を草創ありしとぞ。往古は顯密二教と

當寺たうじ往昔そのかみさうしう相州小田原をにありしを、天正十八年、台命たいめいに依よつて當國たうこくにうつされ、文祿元年ぶんろく、本銀ほんしろかね町一丁目ちやうにおいて、始めて寺地てらちを賜たまふ。又慶長けいちやうのころ、神田須田町かんだすだへ移うつされ、明曆めいれきの火後くわご、淺草あさくさにて替地かへちを賜たまふ。元祿中げんろく、用譽ようよ龍岳上人りゆうがく、國寵こくちやうを蒙かうり、常紫衣じやうしゆいを賜たまはる。爾來しかありしより已降このかた、檀林だんりんの中ちゆうより住職ぢゆうしやくす。則すなはち當寺たうじの規模きぼとせり。

神田山日輪寺かんださんにちりんじ 芝崎道場しはさきぢやうぢやうと號なづす。誓願寺せいぐわんじの北きたの方にあり。本尊ほんそん阿彌陀如來あみだにょらいは、安阿彌あんあみの作ななり。

當寺たうじは時宗じしゆにして、當國たうこく弘法こうぼう最初の道場ぢやうぢやうとぞ。相州さうしゆ藤澤ふじさわ淨光寺じやうくわうじに屬まゐせり。開山かいさん眞教坊しんけうぼうは、一いつ遍べん上人じやうじん第二だいじ

世よにして、往古むかし諸國しよこく遊化いうけの頃ころ、當國たうこく豐島郡とよしまごほり芝崎村しはさきむらに至いたるに、かしこにひとつの叢祠そうしあり。神田かんだ

是こゝなり。今の神田橋御門かんだはしごゑもんの邊へ、舊名ふるなを芝崎村しはさきむらといへり。其その傍かたはらに一字いちじゆうの草庵さうあんを結むすび、芝崎道場しはさきぢやうぢやうと號なづす。當寺たうじの權ごん與よなり。其その後のちあまたの星霜せいさう

を經へて、慶長年中けいちやう、神田明神かんだるやうじんは駿河臺するがたいへ遷うつされ、當寺たうじは柳原やなぎはらのもとに地ちを賜たまふ。又明曆めいれきの頃ころ、

今の地ちにうつる。寺僧てらにゆう云いく、往古むかしよりの由緒よしによりて、今いまも隔年かふねん九月十五日くわがつにじふごにち、神田明神祭かんだあきみじんまつり禮執行れぎやうぎんの時ときは、當寺たうじより上人じやうじん以下いげ衆僧しゆじやう等ら社頭しゃだうに至いたりて、誦經じゆきやう念佛ねんぶつ等ら種々しゆしゆの修法しゆぽうありて後のち、神與かみよを渡わたしてまつるを恒例こゑいとする事こと、今いまに至いたりてしかり

とぞ。當寺たうじ任職にんしやく其阿上人あじやうじんは、柳營りゆうゑい御連歌ごれんかの御連衆ごれんしゆたり。

光明山天嶽院くわうみやまてんがくゑん 遍照寺へんじやうじと號なづす。日輪寺にちりんじの西にしに隣となる。淨社じやうしやの法窟ほふくつにして、天正年中てんしやう、善空上ぜんくうじやう

松風茶碓 まつかぜのちやうす 上は石にして 下は樟なり。茶入 ちやいり 唐桑のザン切なり。袋は二重蔓の唐織。笈 おひ 網代にて製す。性信坊の作る所なりといへり。其餘、團扇、帷ウチワキ

三十餘品あり。

田島山誓願寺 たましまさんせいがんじ 快樂院と號す。東本願寺の北にあり。淨土宗江戸四ヶ寺の一室にして、開

山は見蓮社東譽上人なり。本尊彌陀如來は、安阿彌の作にして、世に齒吹如來と稱せり。傳

へ云ふ、往古建仁三年十二月廿八日、元祖圓光大師、室に在して、集會念佛の時、金像の彌

陀尊、佛堂の屏障に映現し、須臾にして没す。大師感嘆して、乃ち佛工安阿彌に命じて、彼

尊容を寫し、御長三尺に彫刻せしむ。自ら開眼ありて、常に持念し給ふ。同三年十月十五日

彼尊像忽然として口を開き、音を發し、親しく大師に十念を授け給ふ。爾來面門遂に啓け、

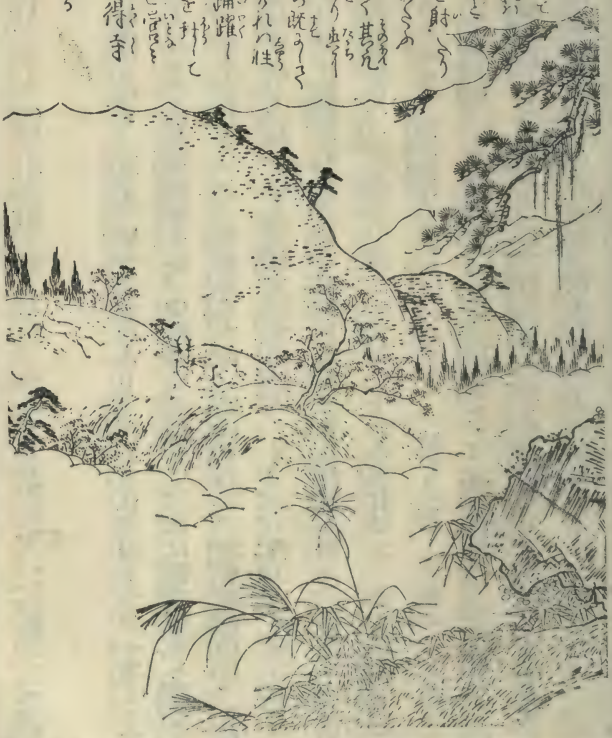
齒微しく露れ、息を吹き、語を發するの狀に髣髴たり。時の人稱して齒吹の尊像と云ふ。

大師の滅後、勢觀坊源智上人、縁起に、小松内府重盛卿の子備中守平朝臣師

智上人は洛陽智恩寺第二世なりとあり。貞應のはじめ、高野山に常行念佛の道場を創起し、蓮華三昧院と號し、彼

尊像を傳持して本尊とす。竟に安永の末、故ありてこゝに移したてまつるとぞ。

持ところの
 管の筋をさうて
 石上へ投すれ
 其筋をのれと
 發し一鹿と射し
 師則是とあさか
 獵人終るひく其れ
 めることを惜り
 木下を穿ら既うま
 枯骨と得りれ性
 信方敵喜踊躍し
 竟く其地を封じて
 一の稽全也と
 号けく法得寺
 とらひん



建長二年の秋

性信は羨想を

生なまの枯骨ここつねの不在ふざいと

るる、奥州おくしゅう信夫郡のぶのほり

大湯山おほゆまに在ありて

猿さるあり師し云いく

此こゝ松まつ下もとに我われ過か去さ生なまの

枯骨ここつねありあり、汝なんぢ

是こゝをこゝ捨すて

得えささへへと

獨ひとり人ひと云いく

我われ葉はと

みみさされれの

明日あしたのあした禮れい

明あくく

とと依よるる性せい

信しんのの獨ひとり者もの



手洗の鯉魚を報恩寺に贈るべしと、云々。依て鯉魚二喉を捕りて師に贈る。師も又是を謝せん

が爲、神前に鏡餅二枚を供す。此贈答の例今に至つて怠慢なし。每歲正月十一日、飯沼天神の御手洗の鯉二喉を報恩寺に

満宮の神前に供し、同廿五日初連歌を興行し、後鏡餅を開き祝ふを舊例とす。建長二年の頃、性信夢見る事あつて、奥州山中に自ら過去生の枯

骨を得たり。其地に改め、光徳寺と號す。なほ畫上に詳なり。竟に建治元年七月十七日、下總において寂を示

す。化壽八十九。以上開山傳の要

寺寶 親鸞上人壽像 右に拂子を持し、左に珠數を持つ。嘉貞乙未年、性信坊洛陽に至るのとき、高祖に調して、東國漸く宗風

五色佛舍利 本尊名號 十字の名號なり。宗祖上人の眞蹟。同九字名號の眞蹟なり。珠數一連 親鸞上人より性

生椽の實の 性信坊過去生骨 妻想に依て奥州土湯山中 得るところの枯骨也。教行信證一部六卷 親鸞上人の眞蹟なり。貞永元年、上

念珠なり。とぞ。今なほ當 蛇反刃 長六寸七分、波平の作とも、又は了戒の作ともいへり。性信坊横曾根の古院に住する頃、其沼に惡龍す

寺に傳へてあり。とき斗敷の僧一人來り、山門の傍に熟睡す。時に池中より惡龍出て彼僧を呑まんとす。しかるに懷中より寸鏡飛出て、彼惡龍を妨ぐ。又

山門の金剛力士出て、足をもつて惡龍を池中に踏込む。淺草寺の山門に安置せしが、そのかみ回祿に亡せたりといへり。性信此體を見て、

僧を請じ、具に件の趣を語る。往きて見るに、金剛力士の足泥土に漫せる跡あり。則ち性信寸鏡を乞得て惡龍を退けんとす。終に惡龍雲

に乗じて常州三俣の水の中に入る。後この劍を證智比丘尼に與ふ。(この尼は性信のむすめなり)尼あるとき鹿島へ詣て、舟に乗りて三俣に至

るに、風烈しく、須臾にして波浪起り、既に船を覆さんとす。時に其寸鏡自ら飛出て水中に入りければ、風浪たちまちにをさまれり。下

りしが、後八丁堀に遷り、明曆火後今の地に至る。舊地横會根にとゞむる所の寺を、開光寺と號して、今猶存せり。開山性信房、俗姓

は大中臣、常州鹿島郡の産なり。幼名を與四郎といふ。天性多力勇悍、心狼戾にして禮法を

しらず。只漁獵殺生を事とするのみ。故に惡五郎といふ。十八歳の春、元久三年なり。紀の熊野山へ詣で、歸る

洛陽に至り、適東山吉水において、法然上人他力本願の旨を説き給ふを聞き、頓に鬢髮

を薙ぎて、佛門にいらん事を願ふ。依て性信と名を授く。夫より鸞師に隨て、晝夜側をさら

ず。師左遷の時も、陪從して凡そ二十五年を経たり。建保二年、師下總に往きて、大いに群

生を化す。同國横會根の郷に、朽敗の古刹あり。性信をして住ましむ。其後貞永元年、竟に

師の命に應じ、彼地に逗つて、大いに東關を化度せんとし、念佛門を弘通するに、道俗充滿

して場に溢る。爰において古刹再興の志願を企て、其地を求む。かしこに沼あり、飯沼とい

へり。則ち是を湮埋して佛閣を營み、報恩寺と號す。則ち當寺の權輿なり。その沼の側に天滿神の祠あ

り。同年十一月七日、此神老翁と化し、きたつて聞法隨喜し、師弟の約懇懃なり。此時紫の戸堀

料にた又天福元年正月十日、此神何某が夢に告げて曰く、是より後永く師資の禮讓として、御

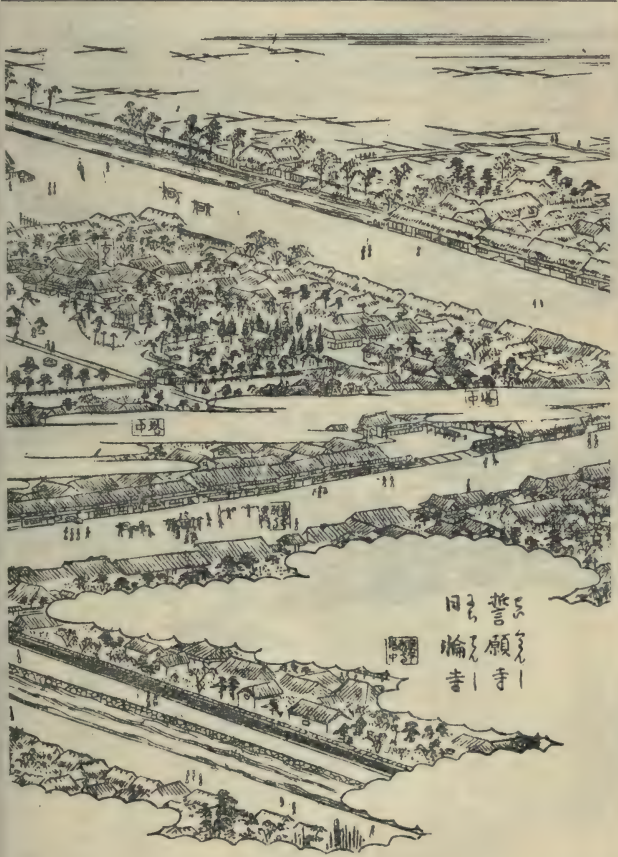
海元禪寺



天藏院
 禪院
 東光院
 清水寺
 慈眼院
 聖德寺
 祝言寺







長見寺
 誓願寺
 日輪寺
 日輪寺





町原田

寺

報恩寺

右衛門が墓さへあり。されば金龍寺のあたりを手向野と、紫の一本にもいひしなるべし。されど新寺町東陽寺の境内なるよし諸書に載せ、東陽寺にも今は此茂睡が歌さへ石碑にゑりたり。或人云ふ。此邊往古は奥州海道にして、刑罪場なり。其頃往來の人香花など手向けけられどもしるべからず。

風の音苔のしづくもあめつちの絶えぬ御法の手向にはして 茂 睡

東本願寺 ひがしほんぐわんじ 新堀端大通にあり。開山教如上人、其先本山の住職たりしを、豊臣家のはからひ

として、順如上人 じゆんじよ 教如上人の舎弟也。を本寺の門跡に定められ、教如上人をば故なく退隱せしめ、裏屋

舗に置かれしを、此故に東門跡を 裏方といへり、神祖竟に召出され、開祖上人の眞影を御寄附ありて、六條室町

の末にて、新に御堂屋舗を下し賜る。夫より後東西とわかる。其後江戸に末寺建立あり度き由認へ、則ち

よりの輪番所となり、江戸中の門徒を勤化する。其地今昌平橋のたうじ。當寺は朝鮮人來聘の砌旅館となる。

外、加賀屋敷と唱ふる所なり、明暦の後、今の地に移されたり。立花會 りふくわゑ 毎年七月七日興行す。參 開山忌 かいさん忌 毎年十一月廿二日より同廿八日まで、讀經說法あり。俗に是を

高龍山報恩寺 かうりゆうざんほうおんじ 謝徳院と號す。東本願寺の東に隣る一向派にして、宗祖上人の遺跡二十四

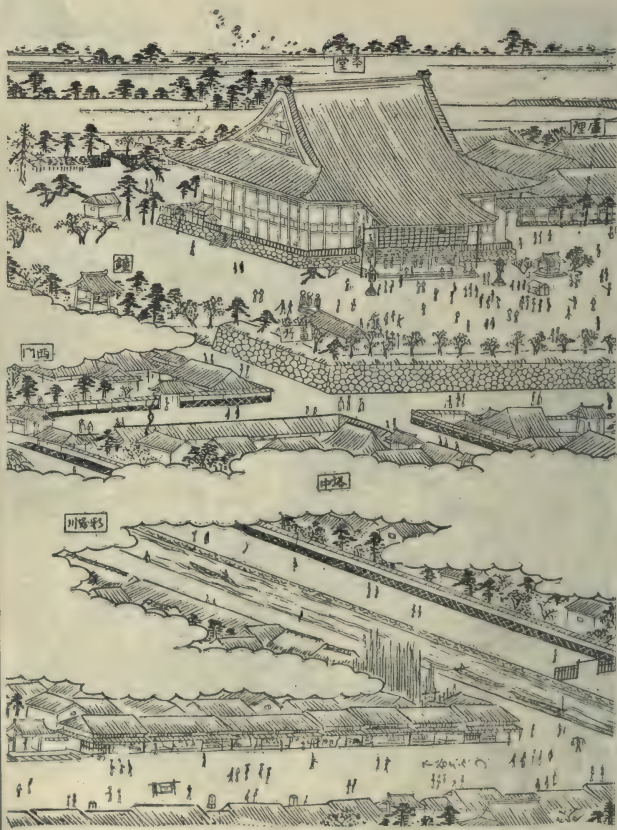
輩所の隨一なり。當寺は下總國豊田の庄横會根に有る事數十世、後結城の城主七郎左衛門晴

朝の臣多賀谷何某といへる者の爲に、寺領田園等を押領せられ、終に武州に移り、櫻田にあ



ほうおん
報恩講
俗子御講と
し





其二



東本願寺

土丹廿二日より

因てて七日迄

軍山忘れ

徒の道俗

群衆を



ふ。往古三州にありしを、慶長の頃、台命に依て當國駿河臺に移され、又寛永十五年、今の

所にて地を賜ふ。一夏の中法幢を立て、檀林に准す。

東照大権現宮 神影 神祖竝に台徳公、及び良弼尼公の御書影をも寄附せられ、共に三軸あり。毎歳四月十七日御祭禮のとき、諸人に拜せしむ。

江島辨財天祠 當寺の龜守たり。本尊は畫像にして、弘法大師の筆なりと云へり。當寺第二世稱譽上人感徳ありて、ここに安置せらる。

化用山常照院淨念寺 同所西福寺の北の通にあり。淨土宗、開山は性譽上人露体和尙にし

て、永祿年中の草創とぞ。本尊阿彌陀如來は、慈覺大師の作。等を入收む。其長二尺三寸なり。寛永十

二年、駿河臺より今の地に移る。境内に慈覺大師の作の聖觀音、および土中出現の渡唐の天神等を安置す。

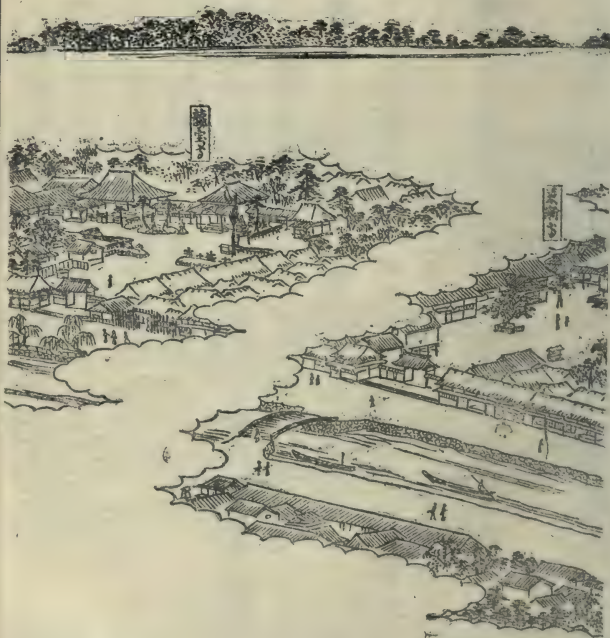
正保山東漸寺 醫王院と號す。天台宗にして、東叡山に屬す。淨念寺の北にあり。本尊藥師

如來は、行基大師の作なり。書寫の性空上人常に護持の體像にして、脇士に十二神將の像を置く。世俗かはらけ藥師と稱す。寄願ある者必ずかはらけを供するの故なり。開山は慈覺大

師にして、太田道灌再興す。始め御城内にありしを、後に神田芝崎村に移し、又正保年中、

今の地へうつせり。

手向野 寛文の頃、戸田茂睡といへる歌人、此所に草庵をむすび、しばらく住めり。一子伊右衛門なるもの、天和二年十八歳にして卒せり。故に此手向野に葬り、傍に碑を立て、手向野と彫て和歌を記す。其地は同所金龍寺の境内にして、茂睡夫婦、竝に一子伊



新堀場
浄念寺
東漸寺
龍寶寺





西福寺
まぐし



をさまれる波をかけてや筑波根のやまとしまねに春の立つらん 堯 惠

回國雜記

鳥越とりこえの里さとといふ所ところに行きくれて

暮くれにけりやどりいづくといそぐ日になれも寝に行く鳥越の里 道輿准后

鳥越明神社とりこえみやうじん 元鳥越町もとどりこえまちにあり、此邊このへんの産土神うぶすなとす。祭神さいじん日本武尊やまとだけのみこと、相殿あひでん天兒屋根命あまのこやねのみことなり。昔むかしは第

熱田明神を合せて、鳥越三所明神となづけしが、正保二年、此地公用の爲に召上げられ、三谷にて營地を給ひ、わづかに社の地ばかりを残さる。その頃より、熱田は三谷の地へうつし、第六天は森田町へうつせしといへり。當社たうしやは最も古跡もつこ

なれども、舊記等散失して、勸請の年曆來由等詳ならずといへり。祭禮さいらいは隔年六月九日なり。

東光山西福寺とうくわうざんさいふくじ 良雲院りやううんゐんと號す。良雲院殿御算數を當寺に奉し奉る。故に院號とす。當寺に御墓所あり。鳥越明神より三丁ばかり東の方にあり。

江戸淨宗四ヶ寺えごじやうしうの隨一ずゐいちにして、本尊阿彌陀如來ほんぞんあみだにょらいは、安阿彌あんあみの作さくなり。三州さうしゆよりうつ開山かいざんを

眞蓮社しんれんしや貞譽ていよ了傳れうでん上人じやうじんと號す。元和八年五月二えんわはちねんごごごにじ遠州犀えんしゆしがいヶ淵ふちせんし戰死せんじの迷魂得脫めいこんとくだつの師しなり。迷魂得脫めいこんとくだつの功

は、武夫ぶふの戰功せんこうに等ひびしければ、其功そのこうを永世えいせに傳つたへよと、神祖松平しんそまつだひらの御稱號おんしやうごう、竝ならに山號等さんごうとうを賜

開陽之部 卷之六 四三九

第六天
篠塚稻荷







きんえのさしんて
 紙を會給條園子
 毎家六月八日の晩
 是と辨めせ氏子の
 不潔くよやくまふと
 裂く悪く條の行
 小はけく是と室前
 了借と時よ諸人
 争ひられをとるはと
 茶内よ扱め
 疫文と除く
 の守護
 とせ

牛頭天王御祭禮 氏子中

牛頭而王御祭禮



大倉前

圖

牛頭天王

十王堂



とぞ。其昔は八幡塚と唱へけりとなん。神木の銀杏樹は、延享二年の秋、暴風に吹折られて、今わづかに其枯株を存せり。

第六天神社 浅草橋の外にあり。昔は大倉前森田町にありしを、享保四年、火災の後、今の

地に移る。祭神は面足尊、惶根尊なり。天神六代祭禮は毎歳六月五日なり。

篠塚稻荷社 當地の舊社なり。往古此所を孝原の里と云。昔新田の家臣篠塚伊賀守、當社を信仰し、

晩に入道して、社の側に庵室を結びて住す。別當玉藏院は、其裔孫なりと云へり。

鳥越里 鳥越明神の邊より、大倉前の邊までをいへり。北條家分限帳に、富永善左衛門、江

戸鳥越村の内を領するよし記せり。

堯惠 北國紀行に

文明十八年十二月廿三日、隅田河の邊鳥越といへる海村に、

善鏡といへる翁あり。彼宅に笠やどりして、閑林にあがめ

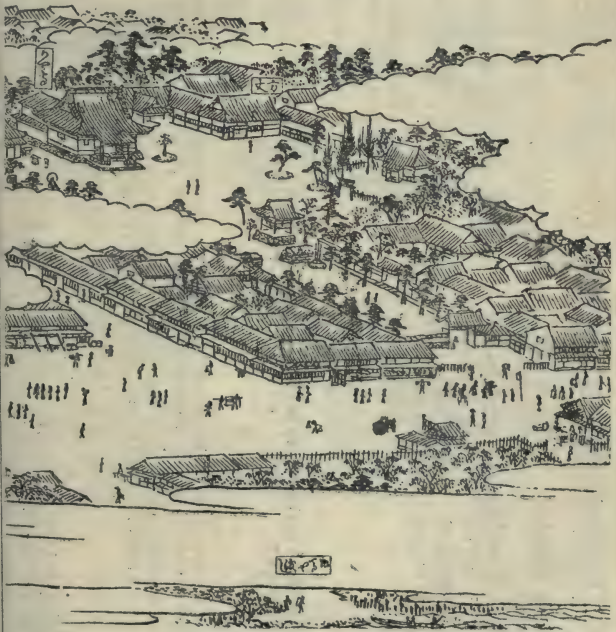
置きたる金光寺に在宿しはべり。同十九年元日に、

いしまるりのり
御厩河岸渡





正覺寺
（一）
八幡宮



師草創ありて、しきやうさう 疇昔は下野國にありしを、むかし 文永年中、此地へ遷すとぞ。ぶんえいねんちゆう
或説に、昔は隈ヶ關にありしを、國初の頃、馬喰町へうつ

され、後復いまの地へひかることいへり。まゐさい 毎歳正月七月十六日、參詣群集す。さんけいぐんしゆ

奪衣婆像 だつえ はのぼう 運慶の作にして、本尊聞 まゝ 王と同木なりといへり。せいとく 化馬地藏尊 けばぢざうそん 聖徳太子の作、昔は紀の郡習山にありしとぞ。昔佛法を誹謗せし女あり、くわ
是を化度せんが爲に、馬に化して彼女を佛道に歸入せしめ給ひしとなん。 花

山觀世音 ざんくわんぜおん 花山院深く觀音薩埵を尊信し給ひ、眞蹟の普門品、大慈の大陀羅尼等の經卷をもつて、大慈の像を作らせたまひ、佛眼上人
をして點眼供養せしめ、法皇みづから觀音の懸區三十三所觀音願禮のはじめなり。願禮あらしめられけるとき、負はせ給ひし

尊像なり。故あつて東叡山よりここに移し奉る。是則ち笈佛
〔オヒブツ〕の權輿なり、當寺境内に、文永十一年の古墳あり。

祇園社 ぎげんのやしろ 同所閻魔堂の南に隣る。えんまだう 當社牛頭天王は、天曆年中の鎮座なりとぞ。大倉前の總鎮 おほくらまへ
おほくらまへ

守にして、別當を大圓寺と號す。べつたう だいえんじ

十王堂 じふわうだう 境内にあり、慶長十八年(又寛文ともいへり)御建立ありしと。
ぞ、中尊は地藏菩薩にして、左右に冥府十王の像を安置せり。

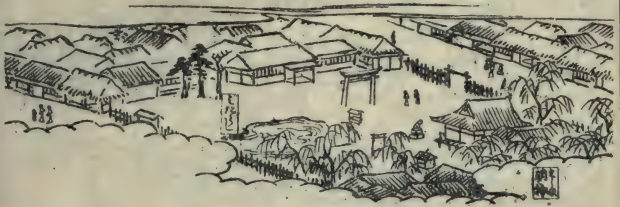
銀杏八幡宮 いでふはちまんぐう 同所福井町にあり。傳へ云ふ、當社は永承六年、源頼義朝臣、同義家朝臣、奥
ふくひら

州下向の時、ことに至りたまふに、河上より銀杏木の流れ來るあり。則ち義家公手づから地
しうげかう いた かはかみ いてふのき なが きた すなは よむいへ こうて

にさし、誓て曰く、朝敵退治勝利あらば、此樹すみやかに枝葉を榮ゆべしとなり。遂に其軍
ちかつ いは てうてきたいぢ しやうり このき し えふ さか つひ そのいくさ

勝利ありて凱陣の時、ふたよびこよに至り給ふに、枝葉榮えければ、八幡宮を勸請し給ひし
しやうり がいじん とき ふたよびこよ いた し えふさか はちまんぐう くわんじやう

三島明神社
識訪明神社



法大師東國柱石の
 とくく武蔵のふり
 りびりひららのい
 びりひららのい
 のまき氷を運ぶあり
 大師深く足をもつれ
 のひたらうし其の死を加持
 八雲の念茲といま
 清泉涌き出するよう
 松名不記
 あり今東嶺
 寒松院の境内
 再の松あり
 と云らん欽



く是を汲む由まうしければ、大師憐み、獨鈷を以て加持したまひければ、其所に清泉涌出す。其傍に當社を勸請し給ひけるといふ。

諏訪明神社 同所諏訪町にあり。祭神は信州の諏訪に同じく、健御名方命なり。當社の權輿

は至つて久遠にして、來由等詳ならず。

榎寺 同所黒船町にあり。淨土宗にして、増上寺に屬す。池中山正覺寺と號す。本尊阿彌陀

如來は、惠心僧都の作にして、開山は觀智國師なり。往古當寺に名ある大木の榎ありし故に

號とせりといへり。

石清水正八幡宮 大倉前にあり。元祿五年、台命に仍て石清水正八幡宮を勸請せり。昔は文

八幡と稱し、高野山行人派の僧住職ありしが、故あべつたう別當を大護院と號し、雄徳山と云ふ。開山幸沼法印なり。

護摩堂の本尊は五大明王にして、運慶の作なり。

閻魔堂 八幡宮より南の方二三丁を隔つ。稱光山長延寺と號す。本尊閻羅王は運慶の作にし

て、其丈一丈六尺あり。額に閻王殿とあるは、延享年中、來聘韓人の筆なり。當寺は慈覺大

武州豊島郡金龍山淺草寺權僧正宣存誌

三島明神社

駒形町の西二丁ばかりにあり。祭神大山祇命一座伊豫の國風土記には、大山積につくれり。土人傳へ云

ふ、往古河野何某、本國豫州の地より、此武藏國へ赴くの海上にして、風波の難に逢ふ。仍

て本國一宮の御神に祈り奉りしに、恙なく著岸せしかば、神恩を報い奉らんが爲、第宅の地

に勸請ありし由、昔は下谷坂本にありしを、元祿年中、今の地へ遷さる。其舊地、東叡山の東、齋禮の齋根岸村にあり。祭禮

は毎歲五月十五日なり。

清水稻荷社 駒形町にあり。往古嘉承年中、弘法大師東國遊化のみぎり、此國へ入り給ひし頃、

靈告によつて如意寶珠を神體とし、稻荷に勸請したまふとぞ。其地より清泉涌き出づる故に清水の名あり。其後谷中感應寺の持となり、法華の勸請と

なりしが、彼寺改宗の後、東叡山末となり、別當を妙行院といふ。舊地は東叡山の西のかたにありて、寒松院講のうちとなる。今清水門となづくるも、其舊號をうしなはざるの證なり。元祿の頃、三島明神と共にこの地にうつされたり。按ずるに、元祿二年開板の江戸惣鹿

子といへる草紙に、谷中稻荷の清水今に絶えせずとあれば、元祿の頃までは、其清水現然としてありしな。又江戸名所記の説

らんに、今池のはたより護國院へ行く道、御花畑と稱する地の谷合より流れいづる清水あり、これなちん歟。又江戸名所記の説

に、弘法大師、東國遊化の砌、武藏國にて、ひとつの小坂に東叡山西の齋清水門の坂是なりといへり。かより給ふ頃、老女の水桶を戴きて行くあり。大師彼の水を乞ひたまふ時、老女の云く、此邊に水なく、遠

勝哀愍。腥臭之穢。固可厭惡。伏惟靈刹數々回祿。蓋以大悲爲此。有所
 不安也。幸遇今時。丕承洪運。仁慧四海。深重物命。禮崇三寶。旁興寺宇。
 於是去歲。闔寺堂舍。修治補葺。猶如新成。因立制令。嚴戒殺生。乃以南
 自諷訪町。北至聖天岸十町餘計爲界。嗚呼盛哉。好生之大德。種福之
 勝業。一在于斯。人生之天恩。意足仰而望。菩薩之觀心。可從而知。區々
 愚衷感仰有餘。乃爲銘曰。

維斯一心 卽具三千 以我則乖 以觀則圓

鱗介異類 好惡同然 詎忍殘殺 不知哀憐

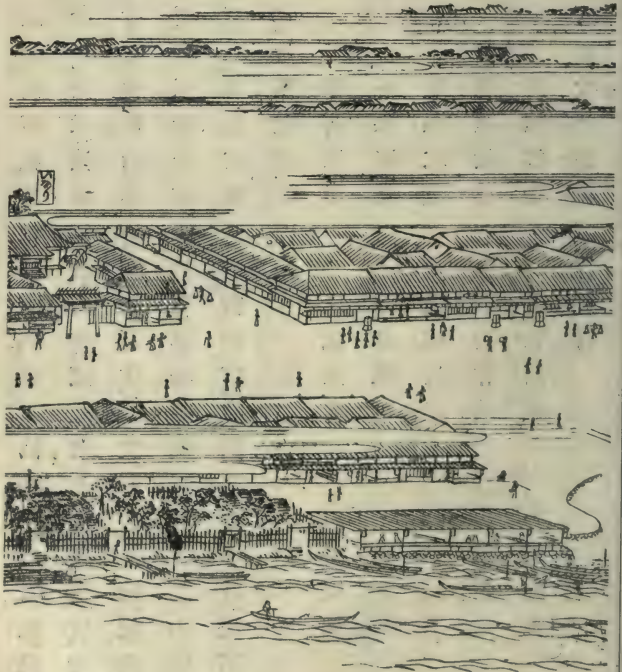
營生嗜味 速禍取愆 畏報於後 思戒於菴

文明遇時 慈悲如天 網罟作禁 魚鼈無虔

豈但物命 因慈得全 教化所及 弊習能悛

元祿第六歲次昭陽作噩春三月

此碑
石
成
あり
子
之
其角



駒秋堂
清水稲荷



河の名産とす。美味にして是を賞せり。鰻、蛎も又佳品とす。

按ずるに、本尊縁起の中に、宮戸川の沖に網を下すといへる事あり。源平盛衰記、治承四年九月、頼朝下總より武藏へ打越えらるる條下に、石濱とまうす所は、江戸太郎が知行所なり。をりふし西國船の着きたるを千艘あつめ、三日の中に浮橋をくみけるとあり。しかるときは、往古は石濱の邊、入津の邊にて、西國の船も入來りしとみえたり。又氏康武藏野記行に、隅田河に著きぬ。(中略)むかひは安房上總まのあたり見渡さるゝとあり。今あはせて考ふれば、往古は、石濱のあたりより東南此淺草のあたり迄も、打開きたる海面にてありしなるべし。土俗の口碑に、其むかし、本所、深川のあたり海面なりし頃は、今の眞土山は沖より入津の船の目的にてありしとぞ。仍てまた考ふるに、木下(キケ)川より須田村のあたりを限りとし、南のかたは、寺島、柳島、牛島、大島、猿江、永代島など稱して、むかし海面なりしといへる事、よりどころとするにたれり。

駒形堂 駒形町の河岸にあり。往古は此所に淺草寺の惣門ありしといふ。其頃は、左右竝木にして、櫻

殊更ながめも深かりしにや、寛永二十年の印本、あづまめぐりといへる書に、駒形堂の近邊、竝木の櫻花爛漫たるよしをしるせり。本尊は馬頭觀音なり。淺草寺縁起に、天慶五

年、安房守平公雅、淺草寺觀音堂造營の時、此堂宇も建立ありしよしを記せり。祈願ある者、賽(カヘリマ

ウシ)にはかならず駒の形を作り物にして堂内へ奉納す。故に駒形堂と唱へ、地名もまたこれに因ておこる。此堂の傍に淺草寺領内殺生禁斷の碑あり。

禁殺碑

武藏之州。淺草之川。遠出乎源。近注于海。大悲薩埵。現像垂跡。洋洋如在。昭々而著。其爲靈境。亦已尙矣。然恣事釣漁。天傷水族。冤苦之慘。不

祭禮さいれい 隔年三月十八日なり。この祭禮は、往古正和元年の神託に依てこれをはじむ。十七日に三社の神輿を本堂へうつし、拍板ピンザサラびんざさら獅子舞あり。當日は神輿を淺草の大通りを渡し、淺草橋に至る。それより船に乗じ、歸輿は駒形より上らせらる。此日舊例として、武州六郷大森等の海村より獵船を出し、かしこより漁人來りて、これを供奉す。往古此地の獵師を大森村の邊へ移しけるより、今も祭禮に此儀有りといへり。 義市みのいち 同日近在の農夫、糞を持ち出て、雷神門の前、および馬道等の邊にて是を鬻ぐ。 拍板びんざさら

毎年六月十五日執行す。此日も三月十七日の如く、本堂の前に舞臺をしつらひ、是を勤む。神樂其せんがく 七月十日前後より參詣外神事を執行す。此祭禮は、鎌倉右府將軍再興ありしといへり。其拍子木、甚古雅にして殊勝なり。 千日參せんじちにまゐり 群集せり。俗にこの日をもつて、四萬よんまん 年の市いち 毎歲十二月十七日十八日兩日のあひだ、衢に假屋を備け、注連飾蓬米飾物等、すべて歳首の賀に用ふべき種六千日詣と稱す。 節分會せつぶんゑ 此日節分の守札をいだす。是を受け得んとする輩、堂中に充ちて、其器なり。實に此日の繁昌江戸第一にして、遠近に轟とどろき事言葉に述べがたし。猶其余の行事は繁きをいとみてこゝに略せり。

抑當寺おさどくたうじ は一千百七十有餘年を経るの古刹にして、實に日域無雙繁昌の靈區なり。其靈驗そのれいけんの著いちじふき事は、普あまねく世よに知る所ところなり。常に金鈴かねれい王おう磬ぎやうの響ひび絶たえず、燒香散華せうかうさんくわの勤行つとめ怠おこる事ことなし。

朝あしたより夕ゆふべに至る迄いた、參詣さんけいの貴賤きせん袖そでを連つらねて場ばに充み満みてり。殊こと更さら月つき毎ごとの十七日には、通夜つやの緇し素堂そだう中に參籠さんろうして、終夜よもすがら誦經じゆきやう念咒ねんじゆたい怠慢たいまんなし。又境內賣物けいだいりものの數多かずおほきが中なかにも、錦袋圓きんたいゑん、淺草あさくさ

餅もち、楊枝やうじ、珠數じゆす、五倍子ふたのこ、茶釜ちやせん、酒中花しゆちゆうくわ、香煎かうせん、浮人形うきにんぎやうの類るゑ、殊ことに淺草海苔あさくさのりは、其名世かんなはに芳かし。

手遊てあそび、錦繪等にしきゑらうを商あなふ店みせ、軒のきをならべたり。他邦たはうの人ひとこゝに至りて、其繁昌はんじやうをしるべし。

淺草川あさくさがは 隅田河すみだがはの下流かりうにして、舊名きうめいを宮戸川みやとがはと號なづす。古鹿子ふるかこ（フルカノコ）しらうを、むらさきこひにひんこの

白魚しらうを、紫鯉むらさきこひの二品にひんを、此

三屋戸に三屋戸に作る。

此

此

月十八日修營落成す。其後建武年中、將軍尊氏、鎮西發向の折から、夢想に依て當寺觀音へ

願書をこめられ、同觀應三年壬辰今年文和と改元あり、南朝の正平七年なり。閏二月廿日、武藏野合戦にも、

兼て勝利あらん事を祈願ありて、合戦の後、美田を寄せらる。永和四年戊午十二月十三日、伽藍回祿する

回祿九度におよべり。其後嘉慶元年丁卯、修行の聖定濟。夫より後、天文四年乙未八月十八日、炎上す。其頃相

州小田原の城主北條氏綱、當國を領しければ、破壊の諸堂再興ありて大伽藍とし、天文八年己亥五月十八日當

寺奉加帳に、島津長徳軒、大道寺盛富、松田盛秀等の名を注し加ふ。是本文の意に合せり。又知忠善上人を以て別當職と

足軒友山翁の職に、元和年中迄の棟札に、武州河越城主大道寺駿河守是を奉行すとありと云々。忠善上人は北條幕下遠山丹波守の末子なり。又其師忠海上人といへるは、攝州細川律師定禪の末葉、武州金澤の城主伊丹三河守の

然るに元祿年中、故ありて或人云、貞享二別當知樂院權僧正宣存、鎌倉へ退居し、夫より東叡

山に屬す。當寺本尊は、殊に大神君御信仰最も厚きに依て、寺領若干を附せられ、寛永十九

年二月十九日、回祿の後も、慶安三年庚寅六月三日、手鉞はじめありて、堂塔御建立ありし

よりこのかた、公より修理を加へられ、誠に無雙の靈場となれり。

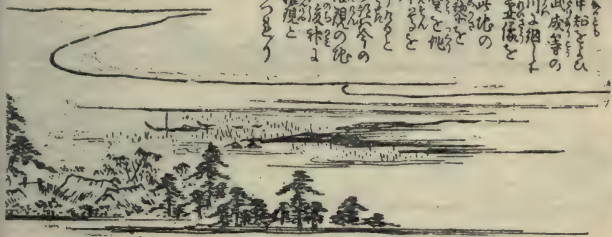
修正會除夜より正月六日に至る一七日の間、毎夕追儺あり。牛王加持同五日巳の刻執行す。同日三社權多羅尼會同十二日より十八日に至り一七日の間、晝夜溫座にて修行す。

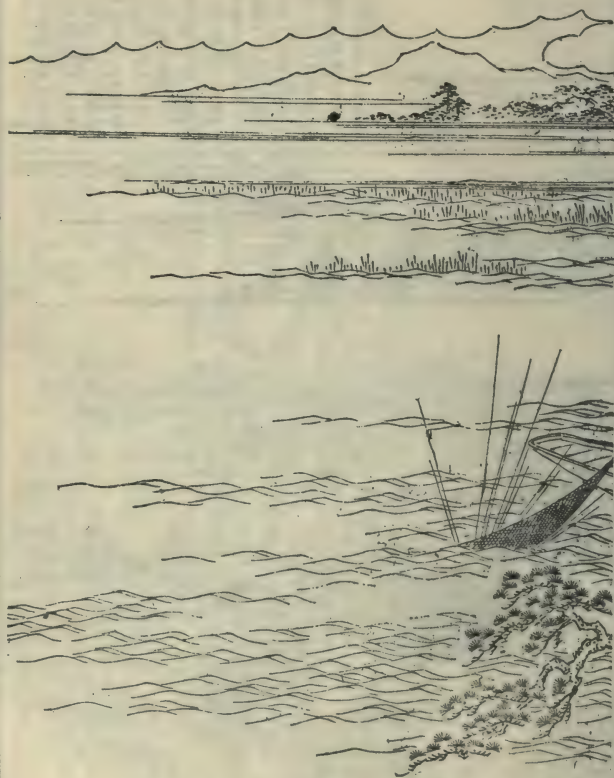
塔たふくわいらく回祿くわいらくす。其時そのとき本尊ほんぞん火中くわちゆうを出いでて、坤ひつじの榎えのきの梢こずゑにうつり給たまふ。承徳しやうとく二年戊寅ごういん四月、藤原成實ふぢはらしげみつ、四箇年あひだの間、當國たうこくを拜任はいにんし、猶重任なほちゆうにんの望のぞみありて祈願きぐわんし、靈驗れいげんあり。依よつて代々だいご罕籠かんろうの田畑たはたを尋たづねて、元もとの如ごとく皆施入みなせにし奉まる。按あずるに、大系圖だいけいずに、源成實げんせいじつと云いひし人、武藏介むさしのかいになりたる事あり。こゝに藤原とあるは誤なるべし。其後そのち、左馬頭さまのかみ源義朝げんぎぢゆう、當寺たうじへ參詣さんけいありて、堂塔だうたふを修營しゆえいし、彼かの坤ひつじの榎えのきを以もつて、新あらたに觀音くわんおんの像ざうを彫刻てうこくして納なめらる。其像そのざう今内陣いまのちんに安やすず。臺座たいざに奉行錄べいぎやく田兵衛政清でんべゑせいせいと書かき付けてあり。坂東順禮記ばんとうじゆんれいきに、康治年中かうぢちゆう、義朝當寺觀音ぎぢゆうたうじくわんおんへ詣まつるとあり。又花川戸六地藏けんげんの石燈籠いしとうろうの銘めいに、久安二年丙寅きゆうあんにんいんとありて、鎌田兵衛かまのべゑの建立けんたつなりといへり。依よて按あずるに、康治より久安まで、わづかに五年の間なればいづれも政清命せいせいめいをうけて普請ふしんの事ことをつかさどりしころの事なるべし。又仁安三年戊子にんあんさんごうし、用舜法印ようじゆんほふいん、大衆だいうしゆに同心どうしんして、佛閣ぶつかくを修營しゆえいす。治承四年庚子十月十七日ちじやうしやうごうしちじゆ、縁起えんぎに、八月十七日とあるは誤なり。十七日は、北條を初め宗徒の人々、八牧判官兼隆はつぼくはんくわんけんりゆうが館たねにむかふよへも渡わたらざる先なれば、賴朝當寺らいぢゆうたうじへ參詣さんけいあるべきにあらず。又盛衰記せいさいきに、治承四年九月十一日、武衛武藏下總ぶゑいむさししもづねの境なる松戸の庄市川まつのぢゆうしちがはに著あき給たまふと、東鑑とうかんには、治承四年十月二日、武衛太井ぶゑいたゐ〔フト井〕隅田の兩河ふたがはを渡わたらるゝとあれば、八月十七日とするは大なる誤なり。右うひやうひやうのすけのすけみなもこのよりさもさんけい

兵衛べゑ佐源さげん賴朝參詣らいぢゆうさんけいありて、田園でんえん若干そくはくを寄附きふせらる。是平家追討これへいけつゐはつの祈願きぐわんに依よつてなり。承久三年辛巳しやうきゆうしんには、禪尼政子二品ぜんにまさこにほん、及び相州さうしゆう、武州兩刺史ぶしゆうりやうし敬信けいしんし、願書ぐわんじよを捧たげ、白檀びやくだんの大悲だいひの像ざう一軀いつくと、白色しろいろの綾羅りやうらの帳とばり一ながれ、信濃布千端しなののせんたんを寄附きふあり。また伏見院御宇ふしみのゐんのぎやう、正應二年己丑しやうおつねいしゆ十月廿一日、大輔聖おほいさけといへる沙門しゃもん、其頃堂宇そのころだうの破壊はぶを歎なげき、十方じつぱうに勸進くわんじんして、正安二年庚子三



性古土師臣中知とよみ
 神前儀成武成等の
 主従儀草川と細川と
 親立音大士の重臣と
 感得可^レ以^レ此^レ地^ノ
 草川葉と花巻と
 りと飯の御堂と他
 を肉と徹奉^レると
 委座し^レて^レり^レと
 りは^レ今^レも^レ田^ノ今^ノ
 梨谷一の権親の先
 り草川へ^レ林^ノ
 ありと十社権度と
 ありと十社権度と





見草寺觀音大士
 の出現あり一ハ
 推古天皇三十六年
 戊子三月十八日あり
 七師匠中知とてんみ
 檜前廣成武成等
 の主従三人の宮
 戸に船をたいて
 は奉子を偈まう
 一よ一縁記
 の中よ詳あり



驚き、是を奉持して歸り、機縁の淺からざるを思ひて、其家に安ずといへども、只臭魚の穢

に難る事を恐るよのみ。世に草刈の童集つて、聚をもつて假の御堂を送るといへる事、縁起に所見なし。こよにおいて、終に魚舎をあらためて、

一字の香堂を經營り、彼尊像を安置し奉る。今の一權現の地其舊跡なり。其後舒明天皇の御宇、十年戊戌正月

十八日、靈告ありて回祿す。其後又三ヶ月を経て炎上し、夫より回祿七度に及ぶといへども、本尊は自ら火焔を免れ出て給りしとぞ、依て炎上の後靈驗いよくいじるし。後久しく堂宇破壊におよびしを、孝徳天皇、大化元年乙

巳、勝海上人、東行の次、適こよに來て再營す。則ち當寺の開山と稱す。このとき勝海上人本尊の花容を拜して、奇異の靈告をかうむり、夫より已降祕佛として拜する事なし。

天慶五年壬寅、安房守平公雅大系圖に、從五位上平公雅武藏守に任ずるよし記せり。前太平記第六卷に、藤原秀郷平親王將門を誅する功によつて、天慶三年三月廿九日、武藏下野兩國の守に任ぜらるゝとあり。

り。又同書に、同四年七月十六日將門記に二月十四日誅すとあり。將門純友誅戮の時も、兩度の戦ひに軍功あるを以て、武藏守に任ぜられしが、同五年の夏、任限滿たずして重病にかゝつて卒す。依て公雅を此國の守に任ぜらるゝとあり。公雅は常陸大掾國香の弟上總介良

兼の長男にして、平將門を諫めて切腹ありし六郎公連が兄なり。當寺に詣で、當國の大守たらん事を祈求す。いくばくならずして遷任

し、此國の守となりければ、靈驗の空からざるをあふぎ奉り、本堂および寶塔、鐘樓、樓門、

經藏、法華、常行六所の社壇六所の社壇いまだ考へず。を造立し、田園數百町を附して、長く龍華の曉を

期せしむ。又長久二年辛巳十二月廿二日、大地震動して佛開顛倒せり。寂圖阿闍梨、永承六年に造營す。遙に後、白河院承曆三年己未十二月四日、堂

坊舎三十餘宇 當寺は淺草第一の精舎にして、境内靈神靈佛甚多く、枚舉にいとまあるが故に悉く拾遺にゆづりて、こゝに略せり。

專堂坊 齋堂坊 常音坊 此三坊は、漁者三人の遠裔にして、妻帯なれば、今に至り子孫連綿として相續す。即ち同年三月十七日祭禮の時も、三人の輩三基の神輿を供奉す。又三坊のうちより、觀音略縁記、牛玉寶印等

を出せり。

雷神門 當寺南の惣門なり。左右に風雷の二神を安置す。明和の回祿に罹りて烏有となりしが、寛政の今再建ありて、昔に復せり。

額 金龍山 曼珠院二品良尙親王の眞蹟 まんじゅほんにほんりやうしやうしんわう しんせき

本尊緣起に曰く、人皇三十四代推古天皇の御宇、土師臣中知といへる人、故ありて此地に流浪 ほんそんえんぎ いは

ふ。 日本紀に曰く、垂仁天皇三十一年、野見宿禰に、始めて土師臣の姓を賜ふとあり。野見宿禰は天穗日命十四世の孫なり。こゝにいへる中知も此遠裔なるべし。山岡明阿彌陀佛云ふ。中知は奈加登茂、又登茂奈利とも訓ずといへり。家臣檜熊

濱成、武成と云ふ二人の兄弟附添ひて、主従三人、恒に漁獵を産業とし、こゝに年月を送け はまなり たけなり い ふたり さやうだいつきえ

り。 檜熊或は檜前(ヒノクマ)に作る、新撰姓氏錄に、檜前舍人連と云々。然る時は、檜前に作りて可ならん歟。續日本後紀に、檜前舍人直由加麻呂、武藏國加美郡の人にして、土師氏と祖を同じうすとあり。又延喜式、兵部省諸國馬牛の牧の中にも、武藏國檜

前の馬牧とあり。是等によるとき、同三十六年戊子三月十八日の朝、碧落に雲消えて、蒼溟に風靜な は、濱成武成も此國の人ならん歟。 あした へきらく くもき さうめい かぜしづか

りければ、小舟に乘し、此所の沖に出でて、網を下すに、遊魚はさらにな こぶね じやう せき い ある おろ 浅草川わかし海にちかし。 遊魚はさらにな

く、幾度も同じ觀音大士の尊像のみかより給ふ。異浦に至りてもいよくしかり。依て主従 いくたひ おな くわんおんだいし せんざう たま こころら いた よつ しやうじう



馬市

板の内と
いつま

あまあり
毎
十一月

うらめ
ころ

南部
えん
えん
えん

二部
えん
えん

うらめ
ころ

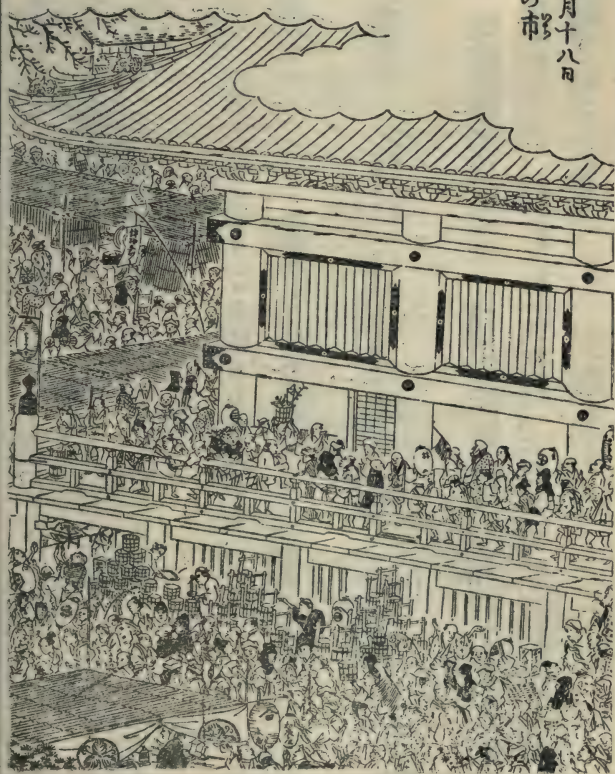
と
あ
と



観音堂の
 西面
 念佛堂の
 西面
 西面
 西面



十二月十八日
年の市



たる衣きぬをあけて見れば、人獨ひとりなり。あやしく思おもひてよくくみれば我娘わがむすめなり。心こころもくれまどひて、あさましとも云いふばかりなし。夫それより彼父母かのふぼすみやかに發心はつしんして、度々たびたびの惡業あくごふをも慙愧ざんげ懺悔ざんげして、今の娘むすめの菩提ぼだいをも深くとぶらひはべりけると語傳かたりつたへけるよし、古老こらくの人申しければ、

つみとがのくつる世つくろいもなき石枕いしまくらさこそはおもき思おもひなるらめ

當所たうしょの寺號じ淺草寺せんそうじといへる十一面觀音いちじゅういちめんくわんおんにてはべり。たぐひなき靈佛れいぶつにてましくけるとな

む。下略

一權現社いちけんげん 同所願松院の境内にあり。土俗あかむ堂と云ふ。往古當寺本尊觀世音出現のとき、草刈の輩、繫アカザカをもつて柱とし、ひとつの草堂を建て、彼靈像を安置し奉りし舊跡なり。故にあかさ堂と唱ふべきを、後世誤つて阿加牟堂といへり、傍に觀

音影向の
槐あり。

六地藏石燈籠ろくぢざうのいしとうろう 雷神門の外、花川戸町の入口角にあり。故に土人此所の河岸をさして、六地藏河岸といへり。この地は、往古より奥州海道の馬次まりしとぞ。其頃はくわんおんの門前旅館屋ハタゴヤ町にして、此六地藏石燈籠のあたり、馬駕

籠の立場にてありしといへり。此故に、今も毎年十二月十八日の市には、此邊淺草海苔を買ふ家々にて、近在より參詣する旅人をして止宿せしむるとぞ。傳へ云ふ、久安二年丙寅、左馬頭義朝、當寺觀音へ參詣あつて、講堂造營の時、鎌田兵衛正清奉納ありしといへり。竿

石に銘あれども、文字剝落して鮮明ならず。唯久安六月十一日(一書に十月廿二日とあり)、兵衛の九字のみ今猶現然たり。高さ六尺あまり、火袋の六面に、六跡の地藏尊を彫刻せり。

いちのこんりん
一権門祠
うすい
姥ヶ尻



石枕いしのまくら 坊中東中谷明王院にあり。庭中に小き池あり、是を姥が池と號す。また當寺の什寶に、此石の枕あり。傳説は、文明年中、道興いしのまくら 准后回國雜記に出たる文章をこゝに記す。頗る俗傳と異なり、舊記たるをもつて、左に擧げて其傳へ來る事の久しきをしらしむ

回國雜記云

此里のほとりに、石枕いしのまくらといへるふしぎなる石あり。其故そのゆゑを尋ねければ、中頃なかごろの事にやありけむ、なまさぶらひ侍り、娘むすめを一人持ちはべりき。容色ようしよくおほかたよのつねなりけり。かの父母ちちはは、娘むすめを遊女あそびにしたて、道みちゆきびとに出いでむかひ、かの石いしのほとりにいざなひて、交會かうくわいのふぜいを事こととしはべりけり。兼かねてよりあひづの事ことなれば、折をりをはからひて、彼父母かのちちはは、枕まくらのほとりに立寄たちよりて、ともねしたりける男をとこのかうべをうちくだきて、衣裳いしやう以下の物ものを取りて、一生いつしやうを送り侍りき。さるほどに、彼娘かのむすめつやく思おもひけるやう、あなあさましや、幾程いくほどもなき世よの中に、かゝるふしぎの業わざをして、父母ちちははもろともに惡趣あくしゆに墮たして、永劫えうがう沈淪ちんりんせむ事ことのかなしさ、先非せんびにおきては悔くいても益えきなし、是これより後の事のち、さまざま工夫くふうして、所詮しよせん我父母われちちははを出だしぬきて見みむと思おもひ、ある時道行ときみちゆく人ひとありと告つげて、男をとこの如ごとく出立いでたちて、彼石かのいしに臥ふしけり。いつもの如ごとく心得こころえて、頭かしらを打うちくだきけり。急いそぎ物ものども取とらむとて、引ひきかづき

野成貞喜捨黃金二百兩。爲常報十二時之資糧。鐘旣成。作銘竝序刻之。銘曰。

鎔銅鑄鐘

冶功已成

撞之擊之

殷々雷轟

鐘本無音

觸物能鳴

觸物是何

一切衆生

衆生一切

種々有聲

音聲種々

唯一銅鯨

鯨吼忽發

迷夢頓驚

況斯薩捶

威德崢嶸

誠念彼力

恭稱其名

諸若解脫

悲願維明

元祿五年次壬申八月日

武州豐島郡金龍山淺草寺

別當 權僧正宣存拜撰

鑄師武州深川

大田近江大掾藤原正次

かまぼこ、ちりめん、
鎌田政清造
六ヶ蔵石燈籠



兵衛
二王座
禪像



勢至の銅像のみありて、堂社なし。案の一本に、山門の東の方に大佛を安置し奉らんと築きたる山ありといへるは、今の辨財天の社ある所の小山をいへり。故にむかしは大佛山といひけるよし。按ずるに、淡島明神の地に、錢塚辨天といへる小祠あり。是も當社と一體の神ならんか。小田原記、および北條五代記等の書に、大永二年九月のはじめ、北條氏綱よりの使として、富永三郎左衛門、古河の御所へ参りける歸るさ。當寺の觀音へ参詣せしに、折ふし十八日なれば、常よりも殊に参詣の人群集す。此とき辨天堂の邊より錢湧き出づる事ありて参詣の人此錢をとる。寺僧制しけれどもきかず。富永奇異の思ひをなし、歸りて此事を氏綱へ申しけるよしを記せり。

ひいしよ、
 蘇鐘 同所にあり二六
 時はを撞けり。

鐘銘曰

寛永丙子歲。大猷院家光公。詣當山觀音堂。見伽藍破壞。卽命改作之。凡二十餘所。又於堂後林中。創建東照宮。後僅數歲。民屋火起。神宮佛閣悉煨燼。公復命老臣某等。營造如初。自爾旨還。日往年來。超四十。風雨所侵。寢至敗毀。今大樹幕下。承先公之事。起土木之功。命山城守戶田忠昌。使十郎左衛門尉建部昌孝。五郎左衛門尉三浦義成。八郎右衛門尉國領重清。董匠事。嗚呼結構之崇。彩飾之美。仰而可望。俯而可欽。功德之大。豈可量哉。其樓上所掛之鐘。亦破裂。因改鑄之。備後守牧

護摩壇之址 ごまだんのあじ 同所熊野權現の後の方、垣の中にあり。淳和帝天長年間、慈覺大師東國遊化の路次、適々當寺にやどり、寶前に持念する座の護摩を修し、伽藍人法の繁榮を祈り給ひしよし、坂東順禮記に出てたり。護國殿 ごこくでん 同所にあり、五大明王の像、ならびに自然木の多聞天等を安置す。此堂は、往古淡島

座の護摩を修し、伽藍人法の繁榮を祈り給ひしよし、坂東順禮記に出てたり。護國殿 ごこくでん 同所にあり、五大明王の像、ならびに自然木の多聞天等を安置す。此堂は、往古淡島

座の護摩を修し、伽藍人法の繁榮を祈り給ひしよし、坂東順禮記に出てたり。護國殿 ごこくでん 同所にあり、五大明王の像、ならびに自然木の多聞天等を安置す。此堂は、往古淡島

座の護摩を修し、伽藍人法の繁榮を祈り給ひしよし、坂東順禮記に出てたり。護國殿 ごこくでん 同所にあり、五大明王の像、ならびに自然木の多聞天等を安置す。此堂は、往古淡島

座の護摩を修し、伽藍人法の繁榮を祈り給ひしよし、坂東順禮記に出てたり。護國殿 ごこくでん 同所にあり、五大明王の像、ならびに自然木の多聞天等を安置す。此堂は、往古淡島

座の護摩を修し、伽藍人法の繁榮を祈り給ひしよし、坂東順禮記に出てたり。護國殿 ごこくでん 同所にあり、五大明王の像、ならびに自然木の多聞天等を安置す。此堂は、往古淡島

座の護摩を修し、伽藍人法の繁榮を祈り給ひしよし、坂東順禮記に出てたり。護國殿 ごこくでん 同所にあり、五大明王の像、ならびに自然木の多聞天等を安置す。此堂は、往古淡島

座の護摩を修し、伽藍人法の繁榮を祈り給ひしよし、坂東順禮記に出てたり。護國殿 ごこくでん 同所にあり、五大明王の像、ならびに自然木の多聞天等を安置す。此堂は、往古淡島

座の護摩を修し、伽藍人法の繁榮を祈り給ひしよし、坂東順禮記に出てたり。護國殿 ごこくでん 同所にあり、五大明王の像、ならびに自然木の多聞天等を安置す。此堂は、往古淡島

座の護摩を修し、伽藍人法の繁榮を祈り給ひしよし、坂東順禮記に出てたり。護國殿 ごこくでん 同所にあり、五大明王の像、ならびに自然木の多聞天等を安置す。此堂は、往古淡島

座の護摩を修し、伽藍人法の繁榮を祈り給ひしよし、坂東順禮記に出てたり。護國殿 ごこくでん 同所にあり、五大明王の像、ならびに自然木の多聞天等を安置す。此堂は、往古淡島

座の護摩を修し、伽藍人法の繁榮を祈り給ひしよし、坂東順禮記に出てたり。護國殿 ごこくでん 同所にあり、五大明王の像、ならびに自然木の多聞天等を安置す。此堂は、往古淡島

淡島明神社

本堂の左の方にあり。昔此地に、東照大權現の御宮ありしが、寛永十九年二月十九日、門前より出火す。其時にあたつて、御宮焼亡ありしに依て、御城内紅葉山へ御遷坐ありて、其跡へ此神を勧請す。其御宮ありし地は、この淡島明神の後の方なり。人の踏まん事を恐れて、垣を結廻してあり。傍の六角堂に、地藏尊を安ず。是も御宮ありし頃の御供水にして、則ち堂の下は井なり。又社前の石橋も其儘に存せり。傍の小祠なる石の蛭子大黒の兩像は、ともに弘法大師の作なりといへり。

錢塚辨財天祠

同所にあり、來由錢瓶 ぜにびん 辨財の條下に詳なり。例幣使松 れいへい 同所御手洗池のかたはらにありて、垣をめぐらせり。毎歲四月十七日、日光御祭禮に依て、例幣使參向のとき、昔よりのならはせにて、歸洛の日はかな

西宮稻荷祠

山門の前、右の方にあり。當山地主の神にして、淺草の鑓守なり。かたはらに經子祠ある故に、此なあり。是を上千東稻荷と稱す。下谷龍泉寺村にあるところの稻荷を、下千東稻荷といへりとぞ。紫銅の華表の額に、稻荷大明神とあるは、大明院公辦法親王の眞蹟なりといへり。傍の祠に、頓阿法師の作の人丸の神像を安ず。又同じ、平内兵衛像 へいないびやう 二王門の前、左の方に石地藏あり。祈願あるもの因果をもつて念ず。故に因果地藏の稱あり。靈驗尤いぢりし。

平内兵衛は兵藤氏なり。耳底記といへる書に、むかし青山主膳といへる人の家士にして、強勇の人なりと云々。後年石平道人正三（鈴木九大夫）の門人となりて、大に禪學を修す。則ち此石像も二王座禪の體相にして、平内兵衛生前にみづから造立せりとぞ。世に兼平内と稱するは、大なるあやまりなり。駒込海藏寺墳墓夫婦同會の碑面に、兵藤氏無關一室居士、後氏松室登壽 ぜにがめびん 錢瓶辨財天社 ぜにがめびん 山門の

大姉とあれば、平内兵衛は兵藤氏なる事あきらけし。恐らくは妻女の氏をもつて、混雜せしものなり。錢瓶辨財天社 ぜにがめびん 山門の右の方、池の中島小山の上にあり。世に老女辨財天と唱ふ。神體は慈覺大師の作といへり。江戸雀および紫の一本ならびに寛文中の江戸繪圖にも、當社は二王門の左、今西宮稻荷明神の社地より奥にあるよしを記せり。延寶年中の江戸繪圖には、今の社地は空地にて、觀音

鑄工和泉守經廣

三社大權現社

本堂より段の方にあり。土師臣中知(ナカドモ)、ならびに家人楡前(ヒノクマ)・清成、武成等の靈をあはせ崇祠(マツル)也。則ち當寺の護法社とす。世に三處の護法ともいへり。神體は慈覺大師の作とぞ。當社は淺草の惣鎮守にして、祭禮は三月十八日、隔年に執行あり。三社の來由は、本尊緣起の中に詳なごりるが、

月十八日、隔年に執行あり。三社の來由は、本尊緣起の中に詳なごりるが、
れは、こゝに略す。傍の堂に、荒澤不動尊、歡喜天等を安置す。華表額 三社大權現 隨喜樂院一品公遵法親王眞蹟 熊

谷稻荷祠

本堂の後の方にあり。熊谷安左衛門といへる人勸請す。來由は繁(じつ)つしやごんけん
がやいなりにをいとひてこゝに略す。内陣に狩野周信筆の橋辨慶の掛繪あり。十社權現祠 同所左の方にあり。十人の草刈をまつる

念佛堂

同所にあり、阿彌陀如來を本尊とす。晝夜二六時中に念佛を唱ふ。閻魔堂 本堂の乾の方にあり。閻魔堂像は運長の作なり。毎年正月七月十六日

脱衣婆像

同堂中にあり。慈覺大師の作にして、靈驗あり。地藏古碑 同所井の傍にあり、世に長石地藏と云ふ。又俗誤つて小野小町が石塔とも稱し、

二寸ばかりあり。寛保二年八月の暴風に吹折れて、今三段となれり。上の方は傳法院構の中、稻荷の糞祠の傍にあり。其形狀、上に地藏
薩埵の種字を銷り、中段に立像の地藏尊を刻す。側に沙門是を敬禮する體相あり。又下の方に、花瓶に蓮花を挿さみ、其左右に文字三十

有九字を銷す。其文に云く、

右志者四殊由三昧沙彌西佛先妻女竝男女二子爲一殊四彌西佛
現當二世諸願圓滿西佛敬白

按ずるに、西佛と稱する者三人ありて、是非をしらず。其一は、法然上人の弟子に、頓宮内藤五郎兵衛盛政入道西佛。又其二は、海野
幸親の男藏人通廣、世に大夫坊覺明と云ふ是なり。後親鸞上人の弟子となりて、西佛と號す。又其三に、東鑑、建長五年八月廿日、下
總園下河邊庄の堤を築き固むべき由沙汰あつて、奉行人を定めらるゝといへる條下に、鎌田三郎入道西佛といへる名を擧げたり。かく
の如く同名三人まであれば、いづれを是とすべきや。碑面年號を記せざれば、詳に定めがたし。猶後人の訂正を缺つといふ。



第拾分會



六月十五日
祭禮之圖





按ずるに、本尊縁起の中に、永和四年戊午十二月十三日伽藍回祿あり、嘉慶元年より三歳の居語を送るといへども、未だ一字の再興も致さず、大衆愁吟絶えざる所に、修行の聖定濟なるもの、十方に勸進し、應永に至り、建立成就すとあり。然れば、名所記等の書に、天慶中安房守平公雅觀音堂再興のとき、一編の鳧鐘を鑄て、たかく一樓にかくるとあるは、永和の回祿に亡びたる鐘の事に於て、至徳四年に至り、再び今ある所の洪鐘を鑄治せしとしるべし。至徳四年は嘉慶と改元の年なり。

日本國武州豐島郡千束郷金龍山淺草寺洪鐘銘竝序

夫鐘者震梵苑之枯禪。發騷壇之深省者矣。南閻浮提。各以音聲長爲佛事。西郡勝地。特開榛莽。勸此道場。於是傳法。聊持短疏。勸發善緣。新鑄鳧乳之鐘。永扣龍澤之月。耳根契證者。速趨解脫之門庭。眼裏聞聲者。則護圓通之妙果。當時若不記者。後代誰得識哉。銘曰。

未鑄成前

響隔九天

新鑄成後

福應大千

規模脫出

當空高懸

輕輕撞著

墮佛事邊

至徳二年卯五月初三日

大勸進 僧都 海譽

小勸進 大和國道高

いかなれや野邊にかり飼ふ淺草のくはむおむまのはみのこしつる 長嘯子

按ずるに、擧白集などにも、其事となけれど、かばかり趣の似たる事を詠せり。また丙辰記行にも、馬を大士の化身なりなど、旁此窟馬に鹽ありて振り出たる事なしとも云ふべからず。此繪馬昔も人のもてはやしけるにや、寛永年中、觀音堂回廊のとき、木村市兵衛といへる者來り、名畫の筆跡焼けうせん事を歎き、助け出したりとて、別當智樂院僧正、其志を感じて、繪馬の縁に左の如く記し置かれたり。

寛求十九壬午二月十九日炎焼之時、武州江戸之住木村市兵衛出レ之。

紅葉狩繪馬 同じ所に掲げたり。曾我蛇足 九代の孫曾我紹叔の筆なり。

靜長刀 本堂の後の方、家督ナゲシにかけてあり。世に義經の妾靜御前納むる所なりと云ひ傳へたり。これ恐らくは靜流の長刀ならん歟、あるひは云ふ、長刀鍛冶志津三郎兼氏の作なるべしと。

山門 樓上に文殊菩薩の像を安置す。樓下の左右には金剛力士の像を置く。來由は此卷報恩寺什寶蛇反鏡の條下に詳なり。されど住古の鹽像は回廊に亡びたりとぞ。今ある所の像は後人の作なり。毎年春秋二度の彼岸の中日ならびに正月七月十六日は諸人の登る事せず。

額



曼珠院二品良尚法親王の眞蹟

五層塔 山門の内右の方にあり、内五智如來を安置す。轉輪藏 同所にあり、一切經を收む。前に傳大士ならびに普賢普成の像を置く。此ふたつの堂は、

隨身門 同所東の方にあり、豐寧間戸命繪器間戸命の像を置けり。鐘樓 同所にあり。

元亨釋書に云く、昔天王寺の道公、紀の熊野山に安居す。夏
 終て歸るさの道、暮れに遶んで、大樹の下に宿せり。其夜半
 騎馬の あまた樹下にいたつて、翁ありやとよふ。一老翁答
 へてありといへり。彼者云く、何ぞ前に進まざるや。また翁
 こたへて云く、馬の足損じて乗るに任へず、齢もまた衰へた
 れば、かちより行く事あたはずと答へければ、いざとて皆々
 通り過ぎけり。明旦公帷みて樹下を見るに、小神祠あり、そ
 の像朽ち損ず。前に一片の古き繪馬あり。前足のところ、そ
 の板破裂す。公すなはち糸をもつて繋補し、前の神言をこゝ
 るみんとして、次の夜も猶樹下に宿す。中夜また騎馬の人來
 つて翁を問ふ。翁馬に乗じてさきに進んで出たり。曉に至つ
 て歸りきたり、公に向ひ謝して云く、師馬の脚を治し給ふこ
 と幸ひに堪へたり。公問ふ、騎馬の人は何ぞ。翁曰く、役疫
 神管内を巡れるなり、我も其前驅たり、もし出でざればかな
 らず罵を受く、今師の恵を蒙り、喜慶甚だ深しと云々。
 丙辰記行に、昔此所に牛鬼の出で走りありきし事を、心に不
 圖思ひ出で、馬こそ大士の化現なれ、なにとて牛は出でける
 ぞ、をかしかりき。とあり。また、
 舉白集、あづまの道の記に云く、

あまくさ　くわんおん
 浅草の観音とて、國ゆすりてもて
 ほごけ
 なす佛おはす。口にまかせて

一
 提筆



額がく 施無畏

外陣の家盤ナゲふかみけんたいの筆ふで 天井の龍ならびに内陣天井の鳳凰、後壁の二十八部衆等は、狩野永眞の筆、拜殿の天井に畫ける天人は、狩野洞春の筆なり。

聯れん

内陣の左右に掲ぐる印に元壽の二字を注す。筆者孟寛の傳あれども、しげきをいとひてこゝに略せり。

山月影雲光香々世能寂然

松外松傳亦伝輝々考入園過

古繪馬こゑま

脇壇けふだんひだり左の方、不動尊ふどうそんの前まへにかけたなり。世俗古法眼元信せきこほふけんもとのぶの筆なりといふは誤あやまりなり。

寛政の始め、本堂修營ありし頃、狩野何某親しく是を影寫す。實に六七百年を経たる古物うたがふべからず。傍に畫家の名及印章等あれども、埋滅して讀むべからず。既にして木の性をうしなへり。傳つたへいふ。往古そのかみこのうまよ此馬每夜こゝ

に額がくを抜ぬけ出いでて、境内けいだいの草くさを喰はみ、あたり近ちかき田畑たはたをもあらしければ、其頃そのころひだりちん左甚五郎ひだりちんといへ

る名譽めいよの彫工てうこうを頼たのみて、曳繩ひきはなを書添かきそへしむ。仍まづて其後そのちは此事このこと止やみけりとぞ。是大は大なるなる附會の附會の説の説ならん。曳繩ひきはなも同時の同時の物の物に

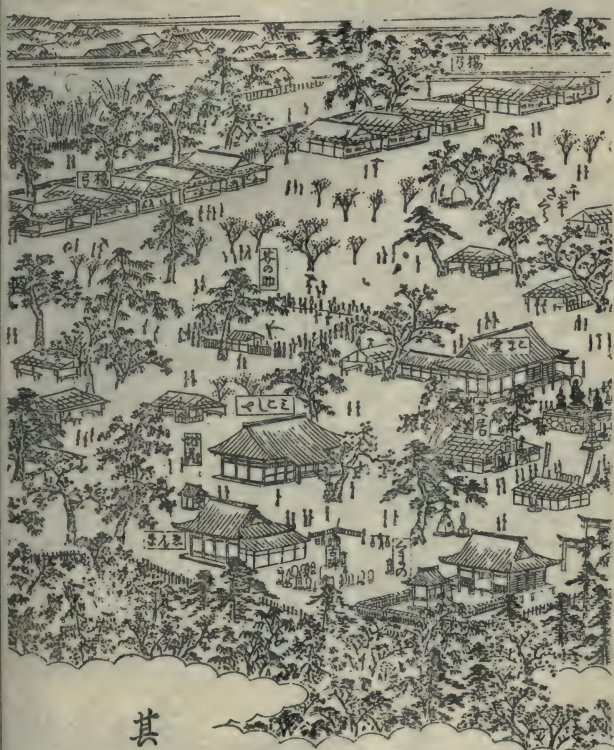
して、後世書加へたるにはあらず。圖に依て辨じ明むべし。されど畫する所の馬に鑑ありて振ふるけ出いでたるといへる事、頗る妄誕あやふしに似たりといへども、其證そのしるしとするあり。

歴代名畫記卷第八に云く、唐の世祖の時、楊子華といへる人あり、嘗て壁上に馬を畫く。其馬夜嘶よるにうないて水草を索もとむるが如し。仍まづて天下なづけて畫聖えいせいと稱なづすと、云々。又

揮塵後錄に曰く、聖宮門の兩廡の下に畫く所の人馬、みな流汗の迹あり。慶曆中に、一夕人馬の聲あり。明くるに至つてこれを觀るに、汗の流るゝあり。今にいたつて滅えずと、云々。



法城能故象生曼
 小白華山被岸舟
 若把馬席令渡水
 應同海底有涯牛
 羅山子



其
五



其
四





其三



立元集

名の

松

館

乃

今

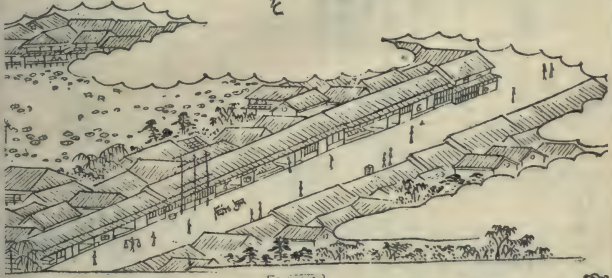
茶

其角



其二

二十軒茶屋ハ
 宇仙茶屋と
 かつり昔ハみ所の
 茶店より御梅の
 茶子のれとて茶
 坊の人とひひることを
 いまもあつて
 今の其茶の負
 二十余軒あるが
 倍是とよしき
 二十軒茶屋と
 いひまゝ
 せう





田園雜記

依草とわつるわよ

とまりりき

庭小狭れるま毛と

とと

冬れ色ハ

ふくみあまの

うらみ

塙の家をさし

のしと

庭うれ

東園記行

南田川もええにさし

木更のやうなる梢ありとハ

雲東順禮親まは儀まよと云

布とうん立よくと拵縁

まへーなとわハ

道典准后

秋うらぬ木未れ是も

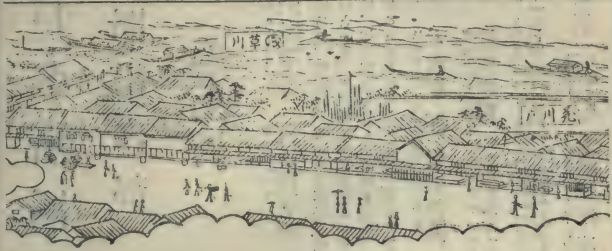
あはらさの

露ううれとハ

南田川うれ

宗牧

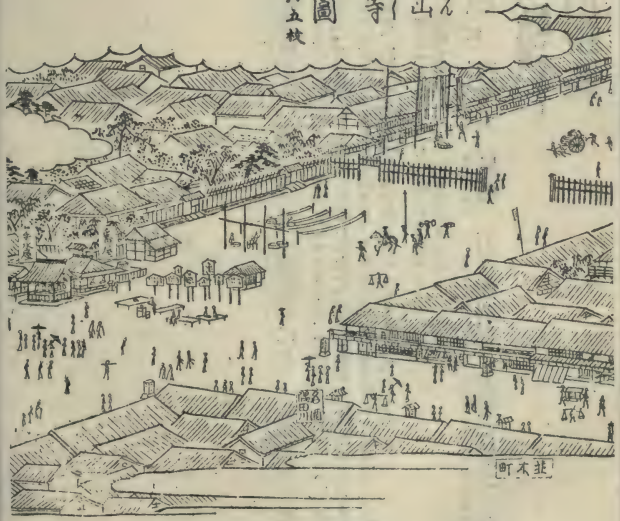




川草

川

金龍山
浅草寺
全圖
共五枚



町本

江戸名所圖會

開陽之部

卷之六

金龍山淺草寺

傳法院と號す。

坂東順禮所第十三番目なり。

天台宗にして、東叡山に屬せり。

按ずるに、東鑑に、建久の三年壬子五月八日、法皇四十九日の御佛事に、百僧供を修せらるると、其條下に、僧衆の中、淺草寺よりも三口とあり。又同書に、建長三年辛亥三月六日、淺草寺へ牛の如きもの忽然と出現し奔走す。時に寺僧五十口ばかり、食堂に集會する所に、件の怪異を見て、廿四人立所に病痾を受く、七人即座に死するよしを記せり。寺僧五十口ばかりとあるときは、往古も猶大伽藍なることをしるべし。永祿二年小田原北條家の分限帳に、淺草寺家分四十貫九百文を附せらるるとよし出でたり。

本堂

本尊聖觀世音菩薩

世に傳へいふ、御長一寸八分と。しかれども、古より祕佛にして、輒く寶帳を褰げざれば、其實を知りがたし。

脇士

梵天帝釋 二尊は行基大士の作なりとあり。此

四天王

脇壇

右不動明王

左愛染明王

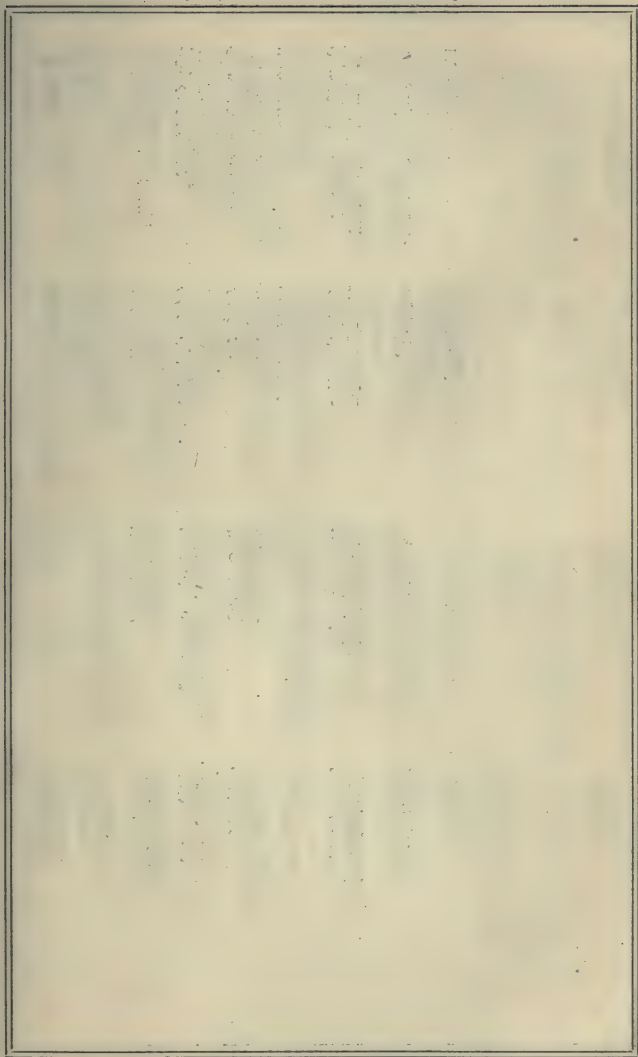
後左右

三十三身像

其餘堂内に諸の佛天を安置す。中には寶頭櫃（ピンヅル）尊者は慈覺大師の作にして、靈驗いちじるし。

額 觀音堂

御拜の上 大明福州漳郡龍邑徐紹勳の筆



不動堂 ふどうだう

橋場 はしは

眞崎稻荷社 まつさきいなり 神木榎

正平合戦之圖 しやうへいかつせんのみづ

妙龜塚 めうきづか 妙龜明神社 古墳

玉姫稻荷祠 たまひめいなり

長昌寺 ちやうしやうじ 宗論の芝 鐘ヶ淵來由

山谷堀今戸橋の圖 さんやぼりいまご はし

日本堤 にほんづつみ

鷲大明神社 わしだいまやうじん 同祭の圖

朝日神明宮 あさひしんめいぐう

思ひ川 おもがは

砂尾不動堂 すなをふどうだう

鏡ヶ池 かやみいけ

東野先生墓 とうやせんせいのはか

今戸八幡宮 いまごはちまんぐう

慶養寺 けいやうじ

新吉原町 しんよしはらまち

石濱 いしはま

牛頭天王祠 ごづてんわう

隅田川渡 すみだがはわたし

總泉寺 そうせんじ 千葉介墳墓 宇都宮入道墳墓

袈裟掛松 けさかけまつ

法源寺 ほふげんじ 從二位有理御墓 權大夫景道石塔

聽水鶏の圖 くひなさい づ

眞土山 まつちやま

石濱城跡 いしはましろ

天満宮 てんまんぐう

石濱古戰場 いしはまこせんぢやう

淺茅ヶ原 あさぢ はら

采女塚 うねめがつか

齋藤別當實盛墓 さいとうべつだうじつもり

今戸陶器師 いまごすきものし

聖天宮 しやうてんぐう

清水寺觀世音 せいすゐじくわんぜおん

土宮太子堂 じやうぐうたいしだう

除厄太子堂 やくよけたいしだう

祝言寺 しゅうげんじ

長遠寺日蓮大士 ちやうえんじにちれんだいし

幡隨意院 ばんずいゐん 妙龍水 めうりゆうみづ

信州善光寺燈明 しんしゅうぜんくわうじどうみやう 燈明寺 とうめいじ

永昌寺 えいしやうじ

廣徳寺 くわうとくじ

下谷稻荷社 したやいなり

下谷岡 したやのおか

東叡山山下の圖 とうゑいざんやました

五條天神社 ごでうてんじん

常樂院 じやうらくゐん 六阿彌陀五番目 むつあみだごばんめ

上野坂本口圖 うへのさかもくち

養玉院 やうぎよくゐん

善養寺閻魔堂 ぜんやうじえんまだう

入谷庚申堂 いりやかうしんだう

小野照崎明神社 おのてるさきみやうじん

金杉安樂寺 かなすぎあんらくじ

根岸圓光寺 ねぎしゑんくわうじ 庭中藤棚 ていぢゆうとうだ

時雨岡 しぐれのみか

不動堂御行の松 ふどうだうおぎやうまつ

正燈寺 しやうとうじ 圖中楓樹 ていぢゆうもみぢ

箕輪西光寺 みのわきいしくわうじ

千束郷 せんそくがう 千束稻荷社 せんそくいなり

木戸孝範第宅舊跡 きへたかのりていたくのきやうせき

三河崎 さんかわさき

萬里小路寓居之地 まてのこうぢぐうきよのち

山谷熱田明神社 さんやあつたまやうじん

駿馬の塚 しゆんまのみつか

小塚原天王社 こづかはらてんわう

飛鳥明神社 あすかみやうじん 瑞光石 みづひかりいし

誓願寺 せいがんじ

熊野權現社 くまのごんげん

千住大橋 せんじゆおほはし 千住川 せんじゆがわ

光茶鋤 ひかりちやがま

沼田延命寺 ぬまたえんめいじ 六阿彌陀二番目 むつあみだごばんめ 彼岸諸の圖 ひがんしよのずのゑ

富士淺間宮 ふじせんげん

淺間の淵 せんげんのふち

十二天森 じふにてんのもり

餘木彌陀如來 あまきみやだにょらい

西新井弘法大師堂 にしあらゐこうぼうだいしだう

大師加持水 おほしあぢずみ

六月村八幡宮 ろくげつむつしちはらまんぐう

白簇塚 しらばたづか 白簇耕地 しらばたけち 兜塚 かぶつづか

梅田明王院 うめだみやうわうゐん

天滿宮 てんまんぐう

江戸名所圖會 卷之六

開陽之部目錄

〔原本十六より
十七まで二冊〕

金龍山淺草寺

觀音堂 古繪馬 山門 五層塔 輪藏 隨身門 三社權現堂 能谷稻荷社 十社權現社 念佛堂 閻魔堂 地藏菩薩古碑 慈覺大師護摩壇の跡 眞王殿 淡嶋祠 錢塚辨天祠 例幣使松 西宮稻荷社 平内兵衛石像 石の枕來由

一權現社 姥が池 楊枝店 六地藏石燈籠 坊舎 雷神門 觀世音出現の圖 黎堂來由の圖 六月十五日祭の圖 節分會の圖 十二月十八日の市圖 數内馬圖

淺草川

駒形觀音堂

三嶋明神社

清水稻荷社

諏訪明神社

榎寺 御厩河岸渡しの圖

大藏前八幡宮

閻魔堂 奪衣婆 地藏觀音

祇園社 同祭の圖 十王堂

銀杏八幡宮

第六天神社

鳥越里

鳥越明神社

西福寺 御宮辨天祠

淨念寺

東漸寺

手向野舊址

東本願寺 報恩講參詣圖

報恩寺 開山古事 寺寶

誓願寺

日輪寺

天嶽院

稱往院

東光院

海禪寺

亦能分^{マタ}布^{ヨクマキホ}木^{ゴス}種^コ。即^ズ奉^{マツ}渡^シ於^テ紀^{ワタシ}伊^{マツル}國^ニ也。云々。

社傳^{しやでん}に云^{いは}く、往古^{むかし}豐島^{としま}氏^{うぢ}某^{ごんけん}、王子^{わうじ}權現^{くわんげん}を勸請^{くわんじやう}せし頃^{ころ}、彼地^{かのち}の末社^{まつしや}に鎮座^{ちんざ}なしけるに、故^{ゆゑ}あつ

て天文^{てんぶん}年中^{なちゆう}、今^{いま}の地^ちに宮居^{みやゐ}を移^{うつ}せしとぞ。當社^{たうしや}は昔^{むかし}より豐島^{としま}村^{むら}の産土^{うすづ}神^{かみ}にして、祭例^{さいれい}は毎歲^{まいさい}

九月^{くわいげつ}十八^{じゅうはち}日^{にち}執行^{しりおこな}ふ。社司^{しやしう}鈴木^{すずき}氏は、元亨^{げんかう}年中^{なちゆう}紀州^{きしゅう}より來^くわんおん^{だう}同所^{どうじよ}にあり、本尊^{ほんそん}は毘首^{びしゆ}羯摩^{かま}天^{てん}の作^{さく}なりといへり。此地^{このち}も

地藏^{ぢざう}堂^{だう} 豐島^{としま}川^{がは}の端^{はた}にあり。龜島^{きじま}山^{さん}專^{せん}稱^{しやう}院^{いん}と號^{なづ}す。本尊^{ほんそん}地藏^{ぢざう}菩薩^{ぼさつ}は、行基^{ぎやうき}大士^{だいし}彫刻^{てうこく}の靈像^{れいざう}に

して、豐島^{としま}左衛門^{さゑもん}尉^{ゑい}清光^{じやうこう}建立^{けんりつ}ありし七佛^{しちぶつ}の一^{いつ}なり。寶永^{ほうえい}二年^{にんねん}乙酉^{いつしゆう}、祐天^{いうてん}大僧正^{だいそうじやう}、此地^{このち}の住人^{ぢゆうじん}

白倉^{うすくら}四郎^{しりやう}左衛門^{さゑもん}といへるもの助^{たすけ}に依^よりて再建^{さいけん}し給^{たま}ひ、同四年^{どうしやん}正月^{しげつ}廿七日^{にじちちにち}、入佛^{にふぶつ}供養^{くやう}あり。

僧正^{そうじやう}其頃^{そのころ}群參^{ぐんさん}の男女^{なんによ}へ十念^{じふねん}授與^{じゆゑ}ありし舊跡^{きゆうせき}なり。又^{また}堂内^{だうない}に祐天^{いうてん}僧正^{そうじやう}自^{みづか}ら開眼^{かいげん}ありし六十九^{むそくじゅう}

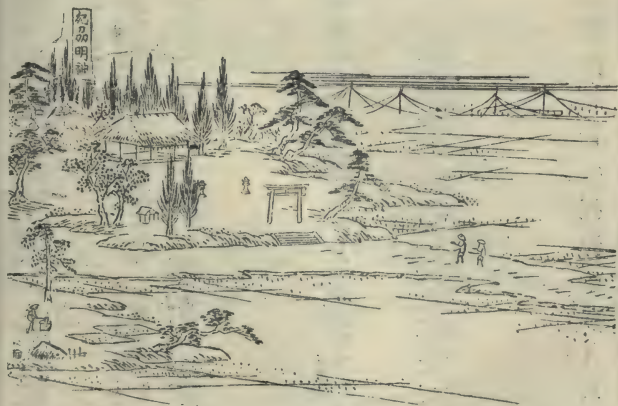
歲^{さい}の壽像^{じゆざう}を置^おき、名號^{みやうがう}を添^そへらる。俗是^{しやくぜ}を稱^{せう}して證據^{てうぎ}の名號^{なごう}とあざなす。訶羅^{から}多山^{たせん}地藏^{ぢざう}尊^{そん}、是^{これ}も僧正^{そうじやう}の本地^{ほんぢ}佛^{ぶつ}にし

て、自^{みづか}ら開眼^{かいげん}ありしとなり。

若宮^{わかみや}八幡宮^{はちまんぐう} 同所^{どうじよ}豐島^{としま}川^{がは}の端^{はた}にあり。當社^{たうしや}は豐島^{としま}權頭^{くわんがう}清光^{じやうこう}の靈^{れい}を鎮^{ちん}るところなり。



紀乃明神社
清光寺
若宮八幡宮
豊島川
地藏堂



み存せり。永祿二年北條家分限帳に、太田新六郎知行の内、榎原堀内にて澁江分の地を加へたり。又平塚明神の北、飛鳥山の麓に、今梶原屋鋪跡と

いへる所あり。按ずるに、是も政景が第宅の地ならん。

醫王山清光寺 豊島村にあり。眞言宗にして、豊島權頭清光の開基なり。本尊不動明王は、

清光建立ありし七佛の隨一なり。清光は頼朝の家臣にして、當寺は則ち清先舊館の地なりと

ぞ。今も當寺構の外に、御殿跡と稱して、わづかばかりの芝生あり。

釋迦堂 境内にあり。是も七佛の中なり。

豊島太郎康家同權頭清光墳墓 同所に古松一株あり。土民是を稱して豊島の大松といへ

り。康家は清光の父なり。

紀州明神社 清光寺より三丁ばかりを隔ててあり。祭神は五十猛命、大屋津姫命、抓津姫

命三坐なり。

日本紀神代卷 一書曰

素戔鳴尊之子號曰五十猛命。妹大屋津姫命。次抓津姫命。凡此三神

梶原塚
かきばらづか



六

阿珠陀

かけて

あく

らむ

石とく

きん

其角



西福寺

河津池

茅壺番

帆原塚



とあるは、黄檗木庵の筆なり。

豊島驛 今豊島村と號する地、其舊跡にして、往古は此郡の府なりしと見ゆ。續日本紀に、武

藏國乘漕、訓も又詳ならず。豊島の二驛の事を擧げたり。又和名抄に、武藏國豊島郡とある中、

驛家と記せるは、恐らくは此地ならん歟。或人云ふ、豊島系譜に、堀河院の御宇、豊島太郎義近と云ひし人、此地に

五日の條下に、大官三郎盛員、豊島又太郎時光と、武藏國豊島庄大食名を相論ずるは、大官の有忠が四一半を打つより事起るとあれば、豊

嶋氏代々ここに住せしと見えたり。又鎌倉大草紙に、文明九年豊島勤解由左衛門尉泰經、舍弟平右衛門泰明、平塚の城にありて、道灌と

條分限帳に、太田新六郎知行の中に、江戸豊島の地名を加ふ。按ずるに、永祿の頃は、太田新六郎知行せしと見えたり。

三縁山西福寺 豊島にあり。禪宗にして、行基菩薩の開基なり。本尊阿彌陀如來も同作なり。

豊島權頭精光建立ありし七佛の隨一なり。當寺は六阿彌陀第一番目にして、是を元木の如來と云ふ。縁起あれども、未

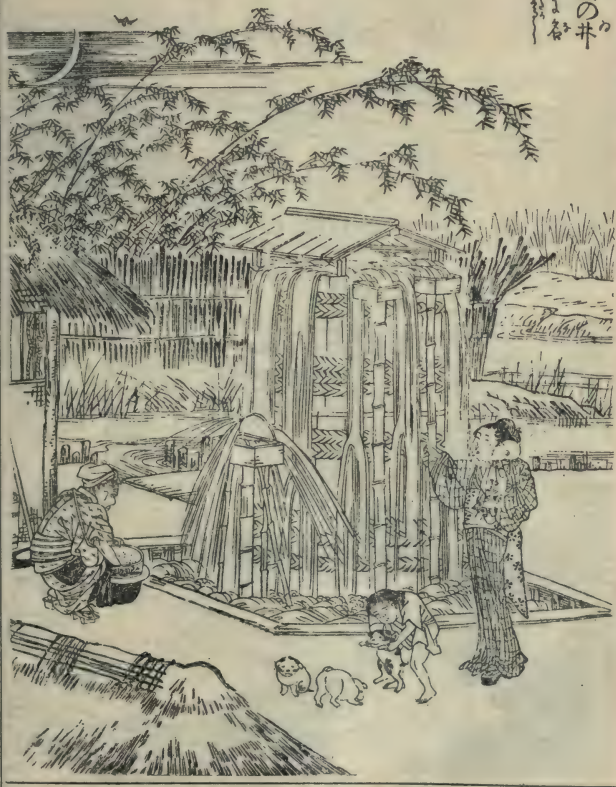
だ詳ならず。四卷目小石川光圓寺の條下と照し合せて見るべし。二王門にかくる三縁山の額

梶原塚 梶原堀内、豊島川の河曲堤の本にあり。昔は寺院もありしかど、そのかみ洪 此塚は太田美濃守

入道資正 法名道譽、又の次男、梶原源太政景の憤墓なり。梶原上總介が後家養子とす、始め 享保の頃迄

は、石碑石壇ありしが、洪水の時、豊島川へ崩れ込みけるとて、今は小笹の中に一株の松の

鍋屋の井
こい各
か



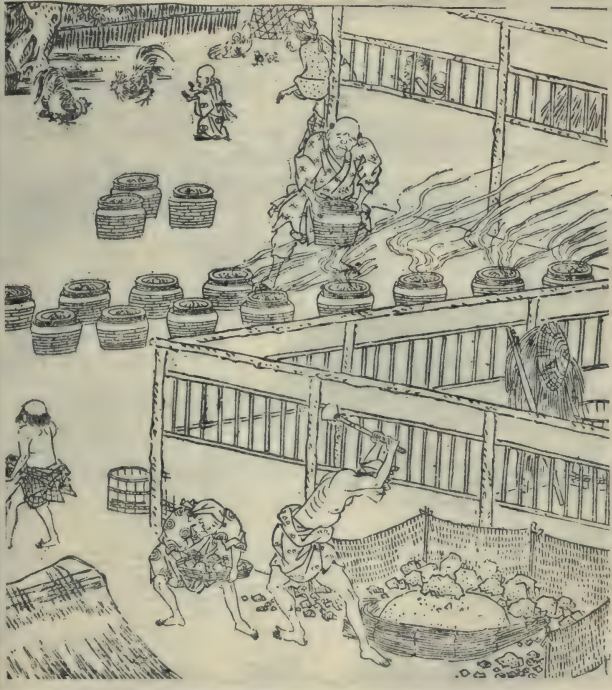


阿口 あぐち

鍋匠 なべぢやう

其家に傳へて云
天下國教う後地
あぐち

人皇九十七代光明
院の御宇曆應
元年河内丹南郡
あぐち此所に移り
住す其
浮海今猶こに
夢みて
連作 れんさく
せう





川口
善光寺



島をよそに見て、武藏國足立郡こかはぐちに著きたまふ。御曹子の御勢八十五騎にぞなりにける。板橋にはせつきて、兵衛佐殿はと問ひたまへば、おとよひこゝを立たせ給ひて候と申す。武藏の國府の六所町につきて、佐殿はと仰ければ、おとよひ通らせたまひて候、相摸の平塚にとこそ申しけると、云々。

按ずるに、渡場より一丁程南の方の左に、府中道と記せる石標「ミチシルベ」あり。是往古の奥州海道なり。是より板橋にかゝり、府中の六所町より玉川を渡りて、相摸の平塚へは出てしなり、

川口善光寺 川口村渡場の北にあり。天台宗にして、平等山阿彌陀院と號す。本堂には阿彌

陀如來、觀音、勢至、一光、三尊を安ず。寺傳に曰く、往古定尊といへる沙門あり。法華經

を誦するの外他なし。建久五年の夏、一時睡眠の中に、信州善光寺如來の靈告を得る事あつ

て、直にかしこにまうで、正しく如來の聖容を拜す。示現に依て十方に勸進し、財施を集め、

金銅を以て中尊阿彌陀佛を鑄奉る。時に建久六年己卯五月十五日なり。佛の御胸中には、三寸五分の水晶の寶塔をこめ、うちに佛

舍利四十八顆を收めたまつる 同六月二十八日、二十九日に脇土觀音勢至の二尊を鑄奉る。終に堂宇を建立して、

善光寺と號す。御告に依て、四十八日の間、四十八度の開眼供養を修行しけるに、本師如來、一玉門の額に、平等山

降臨あつて、當佛の頂を摩でて、ともに開眼し給ふよし、當寺縁起に詳なり。

赤羽山八幡宮
あきばやまやしろ



富士の

根

新瑞

そ

と

持資



本田持資
會雪亭より
士峯と全を
和哥と詠す

灰庵

松原

つゝ

海

ち

く



露置かぬ方もありけり夕立の空よりひろきむさし野の原
又平生の眺望をとほしむ。

我庵は松原つゞき海近く富士の高根を軒端にぞみる
此時叡感のあまり御製をたまふ。

むさし野は高萱のみと思ひしにかよる言葉の花や咲くらむ
又ある時、勅して角田河の都鳥をとほしめたまふに、

年ふれど我まだしらぬ都鳥角田河原に宿はあれども
其餘の和歌は家の集に出づるを以て、こゝに略す。

赤羽山八幡宮 あかばねむらにあり。社傳に云く、當社鎮座の年歴は、久遠にして詳ならず
とぞ。中古大に荒廢におよびしを、文明の頃、太田道灌再興ありしより、祭禮怠る事なし。
神寶に獅子の頭一箇、古き面二枚あり。

川口渡 往古はこかは 義經記に、九郎御曹子、奥州より鎌倉に至り給ふといへる條下に、室の八

五葉松 南の方知の中に有り、 龜ヶ池 寺の後の方にあり。むかし此池上り鹽龜出てけるより名とすと云ふ。

抑 太田左衛門大夫資長は、
或は持資と號す。初めの名は源六郎、世に左金吾と稱す。源三三位頼政十世の孫、

備中守資清入道道眞の子なり。扇谷上杉修理大夫定政に屬し、江戸城に住す、父と共に武

毅勇烈關東に覆ふ故に、人唱んで眞灌と稱す。また城を築くに巧なり。東國の城、多くは道

灌の指圖にして築く所なり。長祿元年、武州江戸城を草創し、城中に燕處の室をいとなみ、

靜勝と名づく。西を含雪といひ、東を泊船と稱す。和漢の書を集むる事、幾千卷といふをし

らず。常にこよに在つて詩歌をたしむ。仍て城北に營神を勸請し、祠を建つる。今の御城西平

此時兩上杉 山内上杉兵部少輔房顯 權をあらそひ、互にこばみ、終に間計を以て、定正に道灌を

うたがはしむるによつて、定正人をして灌を浴室に刺殺さしむ。時に文明十八年丙午七月廿

六日、年五十五歳、相州糟屋洞昌寺に葬る 死にのぞんで云く、余を害するは定正亡家の兆なりと。はたし

て定正威衰へ、再び振はず。道灌是より先、寛正年中上洛す。勅してむさし野の勝景を問は

しむ。和歌を以て答へ奉る。

懸雲燈
 圓通閣
 灌公祠
 梵鯨樓
 古城砦
 樓鶴塚
 靈龜池
 蟠松岡

右當寺の八勝
 あり從彼石正
 侍の詩あり是
 と畧ん



静勝寺
亀ヶ池
五葉松



梨看印なるもの、曩祖開基の靈地をして他の宗風に轉ぜし事を歎き、其頃北條氏康に訟へて、再び眞言の靈區に復せしむとぞ。

瀧不動尊 金剛寺の東二丁あまりにあり。此境後は石神井川に臨めり。寺を正受院と號く。

傳へ云ふ、弘治年中、和州龍門の奥に、學仙坊といへる僧住んで、不動尊の法を修する事年あり。或時靈夢を得て、東國に來り、此所に瀧のありけるを觀て、是を幸とし、其傍に庵を結びて、不動の法を修せり。しかるに其年の秋、洪水にて此河影しく水嵩まさりしに、水中に光あり。水落つるの後、彼光のさしけるあたりを求むるに、不動の靈像を得たり。不測に感得せしをよろこび、即ちこよに安置し奉るとぞ。

自得山靜勝寺 曹洞派の禪宗にして、稻付にあり。此地は太田道灌間諱の居跡なり。道灌

亡ぶるの後は、狐兔のふしどとなりけるを、中頃萍水浮雲の僧あつて、此所に草庵を結び、

道灌寺と號す。是當寺の草創なり。其後太田家より、當寺を建立ありて、靜勝寺と改む。

觀音堂 本尊十一面觀音は、越の秦澄の作。影堂 道灌入道の木像を置く。

東一派の棟梁たらしむ。關東古義の五ヶ寺は、所謂豆州走湯山般若院、相州箱根金剛院、同國大山八大坊、鎌倉鶴岡坊中莊殿院、ならびに當寺等なり。

五香湯 王子權現緣起に曰く、ある時詔宣して、五香の藥を授けられしより、其藥を服するもの、諸病悉く除く。神の恩德甚だ厚し。もろこし眞人が龍宮の祕法を傳へしも、いかでか是に増るべき。藥師如來のちなしくまします宮なれば、瑠璃の壺の露の漉（メ

グミ）の人を助くるしるしにて、佛を醫王と號する事は、一切衆生の病をいやす故なりとあるも、げにもともほえ待ると云々。此くすりは別當金輪寺より出す。一切の病によく、殊に小兒に用ふるに驗あり。

音無河 おごなしがは 王子權現の籠を流る。故に紀伊國音無河を摸し、ほんみやう 本名を石神井川といふ。武州石神井村三寶寺の池か 下

流は荒川にりう いる。世俗瀧野河と云ふは誤なり。瀧野河村と號して河のなにはあらず。

松橋辨財天社 まつはしべんざいてん 王子現權の西の方、三四丁ばかりにあり。本尊は弘法大師の作にして、即ち

大師の勸請なり。だいし 此地は石神井河の流に臨み、自然の山水あり。兩岸高く、櫻楓の二樹枝を

交へ、春秋ともにながめあるの一勝地なり。まじ 源平盛衰記に、治承四年十月、頼朝卿、隅田河

をうち渡り、武藏國豊島の上瀧野河松橋といふ處に陣をとる、とあるは、此地の事なり。をうちわた 頼朝奉納の太

刀一振當社
寶物たり。

瀧河山金剛寺 りうかさんこんがうじ 松橋院と號す。松橋辨天境 弘法大師の開基にして、本尊不動尊は、即ち大師

の作なり。そののち 其後あまたの星霜を経て荒廢におよび、他の宗風に化せり。天文の頃、中興阿闍

とて
一目と
さへ

青苔露

あはら

ふ

人跡

棉

を



不動龍

泉流龍とも云

正受院の本堂の

後塔

極十歩

飛泉

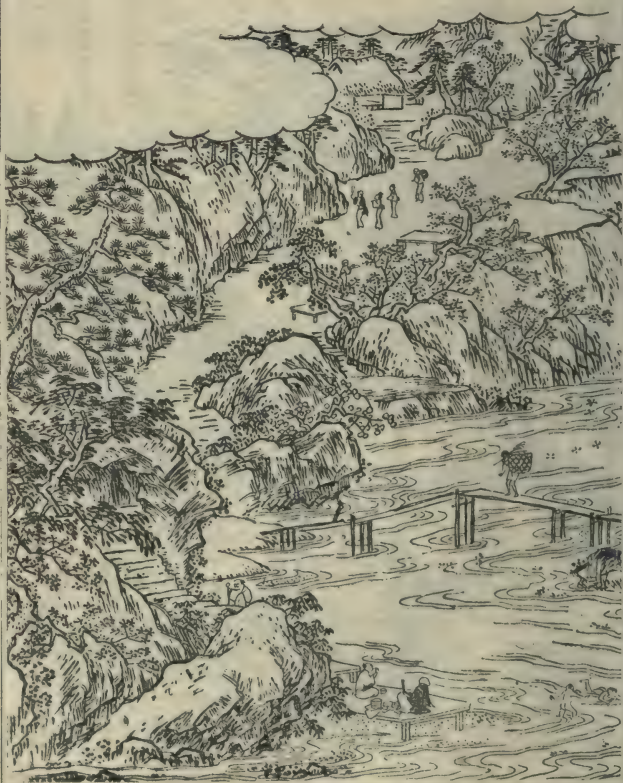
俗くと

峭壁

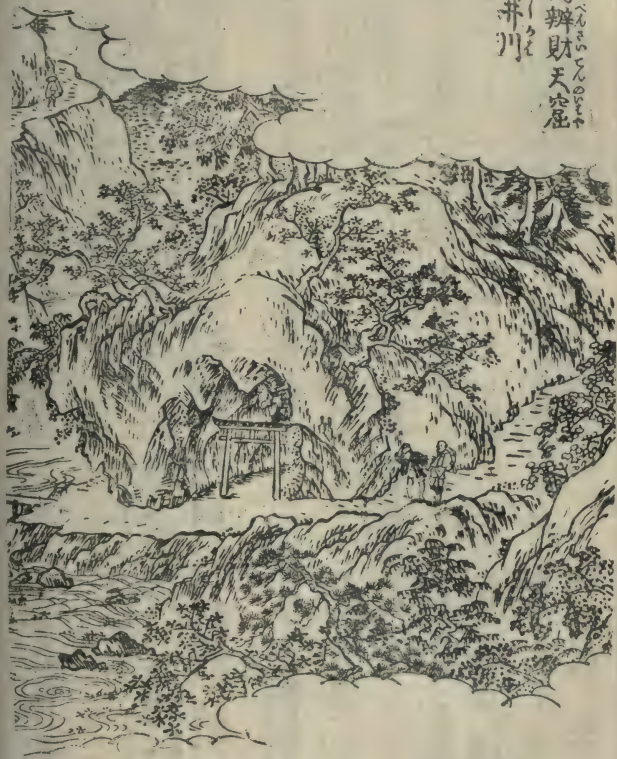
此境

蒼樹





松橋辨財天宮
石神井川



へる不同を見て、明年の豊凶を知ると聞ゆ。命婦の色の白きと、九の尾あるは、奇瑞のものなりと、古き書にありとなん。下畧

因に云ふ、今の世三狐神(ミケツノシン)の名に附會して、伊奈利(イナリ)を白狐とするものは、大なる誤りなり。又狐を伊奈利の使者とし、又こゝに命婦といへるは、或書に云く、後小松帝の明徳年中、一人の老命婦あり、深く稻荷を信じ、毎日詣りてけるに、命婦が飼ひける野狐あり、必ず参詣の時は先へ社壇に來り待ちし故に、社人も狐の來るを見て、命婦のやがて詣づるを知り、命婦も年老ひ世を退りて後は、狐を養ふ者もなく、終に伊奈利山へ至り住みけり。社參の人、命婦狐(ミヤウブギツネ)と名づけ、呼出して菓物などあたへけるが、年經て死しけるを、人憐みて、本社のかたはらに埋め、社を建てて祀りしよし記せり。是狐を伊奈利の使者とせしよりどこなるべし。

當社は遙に都下をはなるといへども、常に詣人絶えず。月毎の午の日には殊更詣人群參す。二月の初午には、其賑ひ言ふもさらなり。飛鳥山のあたりより、旗亭、貨食舗、或は丘に對し、或は水に臨んで、軒端をつらねたり。實に此地の繁華は都下にゆづらず。

禪夷山金輪寺 王子權現、同稻荷兩社の別當寺なり。康平年中、源義家、東征凱陣の頃、

新に當寺を營みしとぞ。其頃奉納の鎧兜等、今猶傳へてこよにあり。

の腹巻および薙刀等は、元亨以後、權現の寶庫に併せ納むるよしにて、今當寺にあり。當寺昔は新義の眞言宗なりしが、台命によりて、天正年中、

相州小田原早川眞福寺の宥養上人を、權現の別當に補せられ、此時より古義に改められ、關

樓門額



仁和寺覺深法親王眞蹟

當社はすべて紀州熊野山の地勢を寫し、前に音無川の流をうけて、風色眞妙なり。花の時は花をもて祀るといへる神慮に因にや、社頭に多く櫻樹を植ゑて、春の頃は、境内殊に觀賞あり。亦冬月雪の眺望も他に勝れたり。

王子稻荷社 同北の方にあり。往古は岸稻荷と號けしにや、今當社より出すところの牛黄寶

印にしか記せり。

本殿 倉稻魂命 聖觀世音 藥師如來 本宮 十一面觀世音

王子權現緣起に曰く、いづれの世にかありけん、此社の傍に稻荷明神をうつしいはひければ、

毎年臘晦の夜、諸方の命婦、此社へ集り來る。其ともせる火の連りつどける事、そくばく

の松明を並ぶるが如く、數斛の螢を放ち飛ばしむるに似たり。其道野山を通ひ、河邊をかよ



十八講

毎歲正月十七日
 王子村農家
 是と行ふ當日
 権現の別當金輪
 刺の住持と
 謝酒飯の
 資後半小して
 當番の百姓村
 板釜魚籃の
 三品と推へて
 のとよいやさの
 聲とあして
 食ともむ
 是此の舊
 例として
 十八講といふ
 神領十箇
 村ありト頃の
 同村と
 三二〇





季をくたけ
袂束自

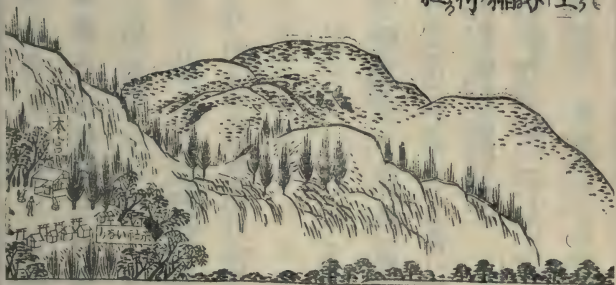
衣裳櫃

毎歳十二月晦日の
 夜諸方の狐果しく
 こみ集り来るもの
 恒例として今も
 飾り共燈せり火
 影不依て土民明
 軒の豊凶をと
 とそ此事露よ
 ありわく睡り
 何して時刻定る
 事なり





王子稲荷神社



如斯。夫神統千世。確乎不遷。嗟乎神之國其疇不欽哉。鳳卿日代撰飛鳥山碑。遂閱舊史。謹叙三神事。如此。

元文丁巳之冬

東都中祕書少監源鳳卿子陽謹識

大般若經卷第三百四十九。

今一卷を傳ふるのみ。餘は寶曆六年上州脇屋村正法寺觀音へ奉納せしといへり。其卷未だ、

奉施入武州豐島郡熊野權現御寶前文保二年戊午初秋

大施主右衛門尉平行泰敬白

とあり。

古證文二通

北條氏政氏直神領寄附の證文なり。

千鳥屏風一雙

狩野古法眼元信の筆なり。

蘆屋釜一口

共北條氏直の奉納なり。

祭禮

例年七月十三日にして、

十一番の拍板あり。

此日王子村の童子手毎に竹の鉾を持ちて警固す。祭終りて後參詣の貴賤彼鉾を携へて飯り、火災盜難を除くの守護とす。

是も古よりの習俗とぞ聞えし。其外一季七十餘度の祭祀連綿として、國家安寧五穀豐饒の禱意慢なし。

本地堂

本社ほんぢの左にあり、彌陀藥師あすかり大手大悲を安置せり。

若一王子宮

本社ほんぢの右にあり、新宮天照大日靈貴尊を鎮る。

飛鳥祠

同じ所に竝ぶ。祭神は事代主の命なり。元享年中豐島左衛門なるもの勸請す。始めは

飛鳥山あすかりにありしが、寛永の頃、台命に依て、當社の境内に遷坐す。

康家清光社

同本社ほんぢの左にあり。是豐島太郎康家、同權頭清光父子の靈を鎮る。其餘未社多しといへどもこゝに略す。

土草木。終生軻遇突。是爲火神。冊尊旣因生火之神所灼而去矣。乃葬紀之阿哩馬邑。邑有華窟。卽葬神之地。以故土俗祀之以花。結繩爲旛。鼓樂舞蹈。今尙然也。蓋古之遺也。有產田祠。又祀二神之地。其跡業已在。本宮先云。又曰。開闢之始。冥々中有物象。帝之先號國常立尊。神之代七焉。傳至二神。始生日神。是稱天照大神。又曰弱宮。或號弱一王子。共配熊野祠。至新宮那智亦類。依其例。凡我語神之道。形於人物於惠。其速玉事解二王子者。特分稱二神之惠。是已。是其大略也。若夫飛鳥三狐。徐福。八咫鳥。自外諸祠。則自上世所副。各有其傳存焉。鳳卿聞之。紀人熊野之山負海而昇峙。天工之所造。神而秀不可體矣。厥石磊砢而麗。厥水澄徹而甘。厥草木區萌而達。厥土壤赤埴而肥。神之止焉。固其所乎。聖者之出。寧知不在斯乎。豈啻興雲雨降福釐不測之謂神。其不然邪。蓋二神之跡。在彼盤古之紀邪。其必在結繩先。而神德不可揜。

大臣從一位源大君。治世理國之暇。敬神整民之餘。造替當社。然以其未_レ有緣起_レ故。忽降鈞命。令愚拙撰其詞。於是能書揮行草之勢。畫工盡丹青之美。其功已成。裝爲三軸。以納社內。誠是神寶之最也。須遺芳於萬世。而耀神威。鎮邦家者也。奉命者。復使愚拙記其事於軸末。於是乎書。

寬永十八年七月十七日

民部卿法印道春敬書

熊野三神傳記壹卷

くまのさんじんでんさ 金輪寺に傳ふ、元文三年成島氏信暹、台命を奉じて是を謄さる。飛鳥山碑文の中に所謂別錄を藏すとあるは此傳記の事なり。

熊野三神傳記曰

熊野之神蓋三祀。皆屬牟婁郡。隸紀府治。一曰本宮。祀伊弉冊尊。及速玉雄命。事解男命也。二曰新宮。距本宮六十有里。三曰那智。距本宮五十里。傳曰。崇神帝六十五年。始建本宮。景行帝五十八年。又建新宮。唯那智不詳起何時也。神史所載。伊弉諾尊。伊弉冊尊。所過而化。乃生國

しければ、紀州熊野きしゅうくまのの有馬村ありまむらにをさめまつる。熊野大神くまののおほんかみ是なり。此神を祭るには、春は花をもて祭り、鼓つづみうち、笛ふえふ吹き旗立はたたてて、諷うたひ舞まうて祭る。白河院しらかはのみんぎよせいの御製ぎよせいに、

咲さき匂にほふ花はなのけしきを見るからに神の心こころぞ空そらにしらるる

とよみ給へるは花はなしづめの事ことなるべし。此神このかみの御子おんこを、熊野早玉男くまのはやたまのをとまうす。其第二そのだいにを泉津よもつ事解男ことさかのをと申まうす。延喜えんぎの帝みかさの御時おんとき、諸國しよこくの神社じんじやを記しるされしに、紀伊國きいのかくに牟婁郡むろのこほりくまの熊野早玉神社はやたまのじんじやとあるは是なり。此故このゆゑに伊弉册尊いざなみのみこと、早玉男事解男はやたまのをことさかのを是を熊野三所くまのさんじよの権現ごんげんといひならはせる事になりぬ、云々。

按ずるに、當社縁起に、元亨年中豊島氏新に祠宇を建て崇めけるよし記せり。當社別當金輪寺に收むる所の大般若經の奥に、文保二年とあれば、勸請は文保より以前にして、元亨に初めて社を營みしならん。小田原北條家分限帳に、王子領江戸上平川下平川牛込の内にて、以上廿八貫八百六十文の地を附すとあり。

當社縁起三卷たうしやえんぎ 文章ぶんぢやうは民部卿法印道春、畫ゑは狩野尚信、筆者しやうしんは鈴木氏とぞ。

跋日

武州豊島郡若一王子社者。所勸請熊野権現也。頃年征夷大將軍左

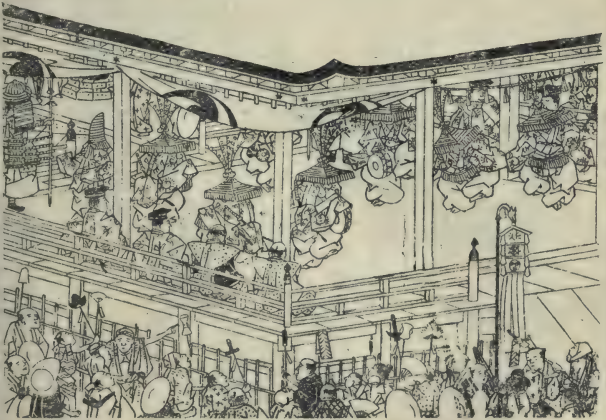
- 第一番 中門口
- 第二番 道行腰作
- 第三番 行違腰作
- 第四番 脊摺腰作
- 第五番 甲居腰作
- 第六番 三拍子腰作
- 第七番 點禮腰作
- 第八番 捻三度
- 第九番 中立腰作
- 第十番 搗竿腰作
- 第十一番 竿流
- 第十二番 子魔歸



祭禮まつり

毎歳七月十三日神前かみまへの
祭まつり臺たいよとひて十二番の
拍板ちうばんお真行まことあり此日同
一 毎臺へ赤得水の
うけり番者と掲かげ

たのぬ





花慎はなしんの

祭祀まつりの

今いま後ご

たり

夜よゆるるを

夜よせんん

おしめ

古こふふを

摸も写りて

こふ

かふ



暎又何の

それの

々々々

ワッワッ

神の

んて

ととと

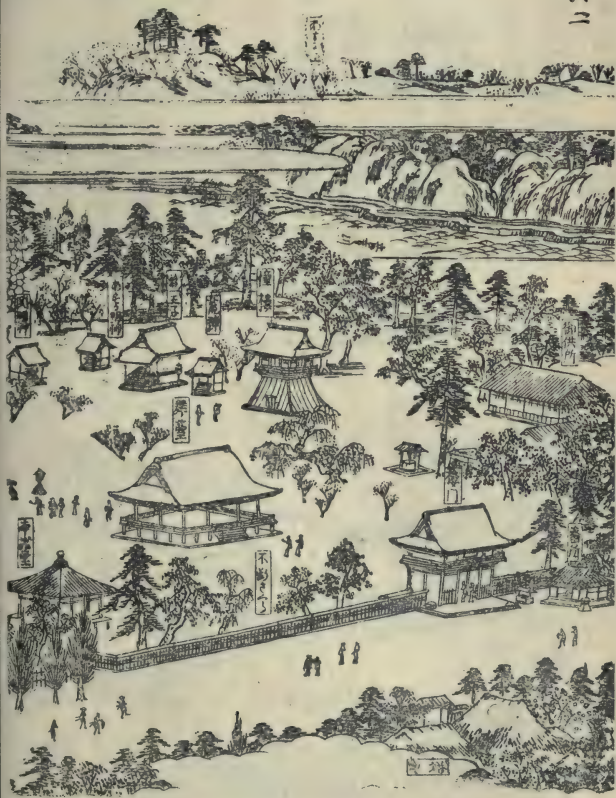
あう

く

白河院御製

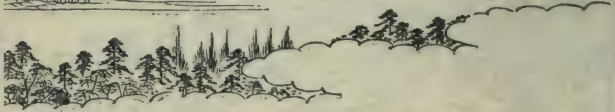


其二



王子権限社

山子石町



千載誌範 之石是勒

元文丁巳之秋

奉祠金輪寺住持權大僧都宥衛立
東都圖書府主事鳴鳳郷代撰拜書

碑陰 飛鳥山四至勝示

自良至坤七十三步
自巽至乾二百二步

加藤忠郁刻

短冊翁舊跡

今より六十年あまりのむかし、此山の麓に住める翁あり、名を勝行といふ。いづれの所の産なる事をしらず。短冊を賣るを以て世の業とす。因て人は是を呼んで短冊の翁と云ふ。毎春の花の盛にはかならずこゝに於て短冊を賣る。又人は詠歌の短冊を乞ひ是を集むるを己が業とす。元文の頃、大樹御放鷹のみぎり、此翁の事を聞こしめされ、くだんの短冊を見をなはし、白銀等を下し賜ひぬとぞ。翁常に集る所の人々の詠歌をうち誦して志を養ふ。されど後其跡をかくして、終る所をしらず。

王子權現社

飛鳥山の北の方、音無河を隔ててあり。

本殿 祭神 伊弉册尊 右 速玉男命 三神鎮座

社記に曰く、若一王子の社は、紀伊國熊野權現を勸請す。後醍醐天皇の御宇、元亨年中、豊島

何がしの主とかや、新に祠宇を建てて崇めけるが、風霜ふり、歲月深うして、朝の霧は香を

焚くかとあやしみ、夜の月は燈を挑るに似たり。靈神は人の敬ふによりて其威をまし、境致

は靈神の德によりて其名を顯す。つらく此神の本を尋ねれば、伊弉諾、伊弉册の尊と申す

二柱のみこと、國土をうみ、萬の物をうめり。其廣大の功德既に成りて後、伊弉册尊神退ま

事。乃因故兆新之。遂遷飛鳥祠於本祠。飛鳥之山有名無祠者由焉。三狐祠僻在北叢。云今茲丁巳春三月己亥。我后省畊之次。規土封飛鳥之山。獨給祠無所與。永屬奉祠者。衛等恭奉祠。乃蹈舞捧手稽首敬。凡之曰。於穆我后。事神以誠。治人以明。措則正。施則行。以謔樂郊爲神之鄉。神其不諫。明惠惟馨。初飛鳥之山。蓬顆蔬壤。雉兔徑焉。車駕之肇從。紀蕃來也。有司行邑吏。睿谿谷道。泉瀑礮磬。確澗而旋。乃植花木數千株。內成游觀。外便芻蕘。雇役數千人。二紀之久。猥大爲美土。花木亦爲林。每春豈爛漫焉。豈惟種善種乎。祀典所謂春以花祀者。冥契會之奇非邪。抑亦國家之符也。遂鑿于石。以爲表經。銘曰

緜邈洪荒

有神開國

垂跡峯紀

東土是祀

明明我后

來封其域

神之眷祐

豐穰薦至

本支繁衍

其麗豈億

八埏懷仁

神祇饗惠

其二



殊更漂々たる河
 川は炎暑と
 避て岸路は
 おりじうんと
 好いのかきも
 又少々す



飛鳥橋の

あつりハ

賃食ハ

舖の

亭造

壯麗

うして

後亭の

まよハ

皎潔たる

音響川の

下流とらけく

生洲とかやめ

この地をろうよ

都下と難くといふも

常は王ふの

和衣を着る人こに

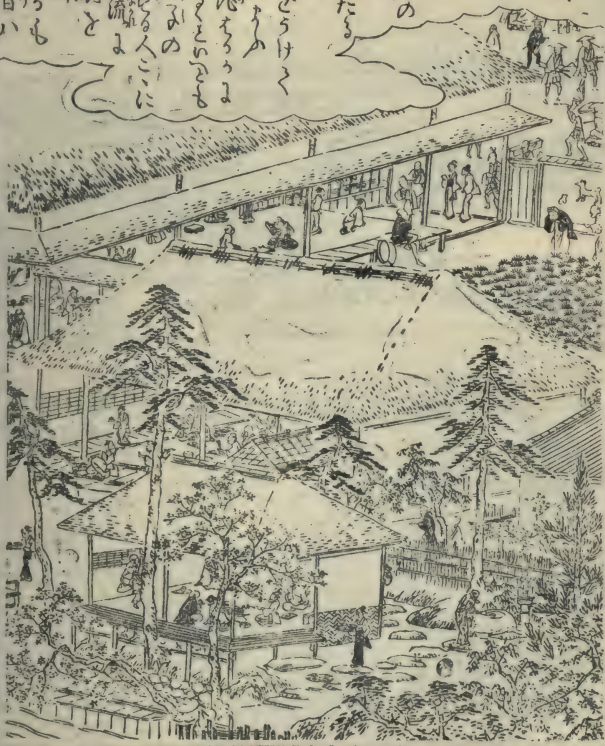
憩ひ換日流よ

臨むに寝と

催し沈醉

すも

多し買日ハ





其二



花と

いと

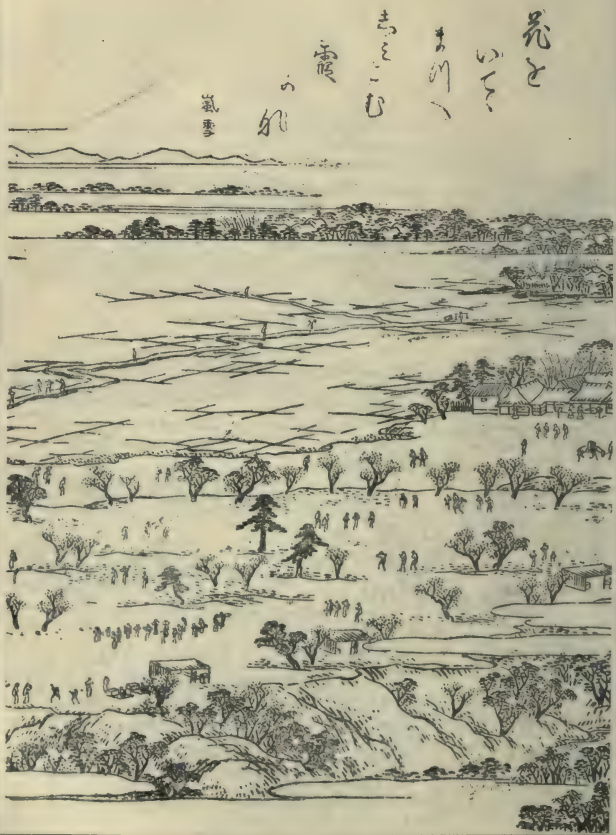
まの

志と

霞

の

嵐



飛鳥山 あすか

全圖 ぜんず

飛鳥栴 あすか



奇無川
とくちがわ

關亭高惟嶺
飛鳥山前張碧溪
春來芳樹自成蹊
一不似楓原使客深



折る枝の色香をみずば飛鳥山花の所の春もしられじ 爲久

明る年再び細下向の時、御出立に、今年は飛鳥山の花も御見せなきよしにて、

咲きぬともつけぬ飛鳥の山櫻こぞの言葉の色やわすれし 同

とありしかば、いそぎ金輪寺へ仰ありて、一枝の花を手折らせ、これをもたせて、品川の宿にて御覽にいれける。

飛鳥山碑銘竝序

惟峯國之鎮曰熊埜之山有神曰熊埜之神實伊弉册尊也配祀伊弉
諾尊事解王子或稱之三神事解別爲飛鳥之祠三狐神副焉語在神
史中別錄藏焉誌曰在昔元亨中武之豐島郡豐島氏勅兆豐島郡爲
熊埜神坐地之曰王子山之曰飛鳥蓋自此始也熊埜之川曰音無川
流象焉爾來四百有祀土人以峇祀之如一口矣祀典曰熊埜之神春
以花祀鼓之吹之旗之歌之舞之今之王子祀日鼓吹旗歌舞者其來
也尙矣而世之邈祠宇荒壤風日不蔽越暨寬永中有司奉命祇飾祠

飛鳥山 數萬歩に越えたる芝生の丘山にして、春花秋草夏涼冬雪眺めるの勝地なり。始め元

亨年中、豊島左衛門飛鳥祠を移す。祭神事代。因て飛鳥山の號あり。寛永年中、王子権現御造

營の時、此山上にある飛鳥祠を遷して、権現の社頭に鎮座なしけり。其後元文の頃、台命に

よつて櫻樹數千株を植させらる。内には遊觀の便とし、外には芻蕘の爲にす。年を越えて花

木林となる。爾しより騷人墨客は、句を摘み章を尋ぬ、牧童樵夫は、秣を刈り、薪をとる。

殊にきさらぎ、やよひの頃は、櫻花爛漫として尋常の觀にあらず。熊野の古式に、春は花を

以て祀るといへるに相合するもの歟。

元文四年の春、冷泉別大納言爲久卿、關東下向の折から、鳴鳥信通に命じて、此山のさくちを爲久卿へ送られけるに、

飛鳥山といふ所の花とて、人の見せける、若木の枝の殊に

うるはしき色香も世に似ずぞおほえし。江戸よりはかけふ

むばかりの近さなれど、行きて見ぬ思ひを霞の關にとどむ

るばかりになむ。

白鬚明神社



鎌倉大草紙下
 文明十年正月
 此五日道灌豊島
 勘解由の海軍
 平塚の要害へ
 押寄せんとすれハ
 其境設養して
 敵ハ程九洞珠
 小机の株を総と
 ありハ此平塚の
 事あり

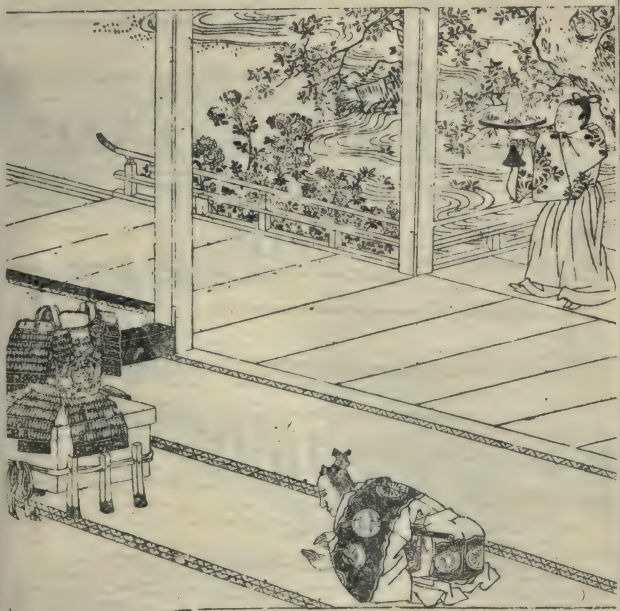


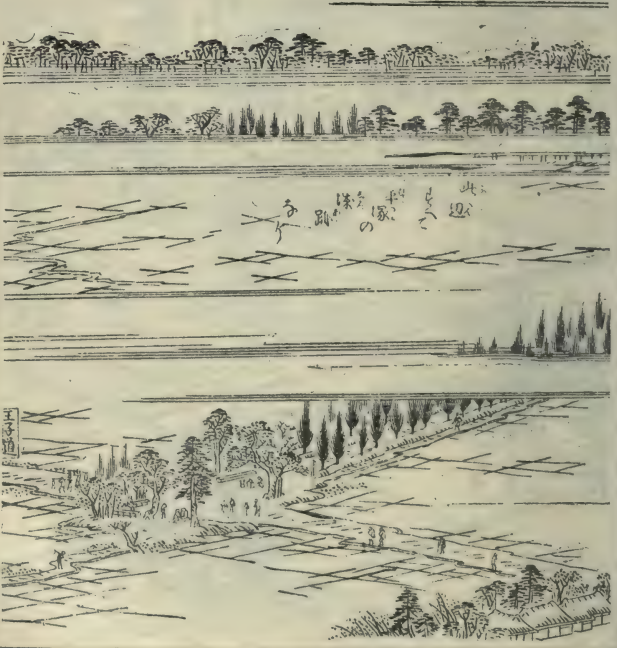
平塚味戟 ひらつかのしらいき





八幡を尊^{たか}義家^{よしか}の兄弟^{あに}
 無^む加^か征^{せい}伐^{ばつ}凱^{がい}陣^{じん}の
 ころ武^ぶ藏^{ざう}國^{くに}入^{いり}
 たまひ豊^{とよ}島^{しま}某^{なつか}ら
 任^{まか}し平^{へい}塚^{づか}の味^{あじ}よ
 逗留^{とゆう}ありてあ^あら^らみ
 償^{たがひ}一^{ひと}領^{りやう}を賜^{たま}へり
 けりと後^{のち}塚^{づか}は築^{つく}
 昭^{あき}光^{みつ}の味^{あじ}守^{まも}り
 一^{ひと}平^{へい}塚^{づか}に明^{あき}林^{りん}と
 いふ事^{こと}ありしも
 實^{まこと}に武^ぶ功^{こう}のま^ま
 一^{ひと}殿^{どの}あり





平塚明神社

鎧塚
別當株宿寺



赤檀佛、毘首羯摩天の
作 瑤璠の玉座なり。

昔筑紫安樂寺の僧、回國修行の砌、此像をこゝに安置せしとぞ。

白鬚明神社

同所畑の中にあり。祭神は猿田彦命にして、豊島氏の勸請なり。往古は平塚の

城中にありしとぞ。

平塚城跡

平塚明神のあたりより、飛鳥山の邊迄をいふ。鎌倉大草紙に云く、文明九年四月十

三日、道灌江戸より打て出で豊島平右衛門尉が平塚の城を取巻き、城外を放火して歸りける

處に、豊島兄の勘解由左衛門を頼ける間、石神井の城、練馬の兩城より出でて攻め來りければ、

太田道灌、上杉刑部少輔、千葉自胤以下、江古田、沼袋と云ふ所に馳向ひ合戦して、敵は豊

島平右衛門尉を始として、板橋、赤塚以下百五拾人討死す。中略 同十年正月二十五日、豊島

勘解由左衛門が平塚の要害へ押寄せ攻めければ、其曉没落して、敵は猶九間城、小机の城

に籠ると、云々。

犬追物上覽地

同所道より右の方、畑の地を指て云ふ、詳に林春齋先生の作せる犬追物記

に出でたり。江戸名所圖會拾遺に詳に記す。因てこゝに略せり。

補陀山昌林寺 同所西の方にあり。曹洞の禪宗にして、本尊末木觀世音菩薩は、開山行基菩薩の作なり。往古六阿彌陀彫刻の折から、末木を以て作りたまひしとぞ。むかしは補陀洛壽院と號く。其後久しく荒廢におよぶ。然るに應永年中、祥林といへる僧、中興せしより、

後又宗最和尚ここに、昌林寺と昌に作る。號す。同十八年、鎌倉持氏公の母堂、深く是を信じ、堂宇を修營あり。又文明の頃、太田道灌、二十餘丁の齋田を寄附す。其後大永年間の兵火に罹りて、堂塔悉く炎燒す。今はいにしへの佛のみを存せり。

平塚明神社 平塚村にあり。當社縁起に云く、往古八幡太郎義家兄弟、奥州前後十二年の戰終り、凱陣のみぎり、此地に逗留ありて、城主豊島氏某、近とも云へり。に鎧一領、竝に守本尊十一面觀音也。長七寸、行基菩薩の作を賜ふ。其後元永年中、豊島氏城内清淨の地を擇んで、彼鎧を塚に築收め、塚の形高からざるを以て平塚と。城の鎮守とす。且社を營んで、三連枝の像を安じ、

平塚三所明神と號す。八幡太郎義家、加茂次。是義家兄弟の武功を欽崇、且武運を祈らん爲なりと、云々。別當を平塚山城官寺といひ、安樂院と號す。城官寺の來由は、本地阿彌陀如來を安ず。

平塚三所明神と號す。八幡太郎義家、加茂次。是義家兄弟の武功を欽崇、且武運を祈らん爲なりと、云々。別當を平塚山城官寺といひ、安樂院と號す。城官寺の來由は、本地阿彌陀如來を安ず。

平塚三所明神と號す。八幡太郎義家、加茂次。是義家兄弟の武功を欽崇、且武運を祈らん爲なりと、云々。別當を平塚山城官寺といひ、安樂院と號す。城官寺の來由は、本地阿彌陀如來を安ず。

平塚三所明神と號す。八幡太郎義家、加茂次。是義家兄弟の武功を欽崇、且武運を祈らん爲なりと、云々。別當を平塚山城官寺といひ、安樂院と號す。城官寺の來由は、本地阿彌陀如來を安ず。

平塚三所明神と號す。八幡太郎義家、加茂次。是義家兄弟の武功を欽崇、且武運を祈らん爲なりと、云々。別當を平塚山城官寺といひ、安樂院と號す。城官寺の來由は、本地阿彌陀如來を安ず。

平塚三所明神と號す。八幡太郎義家、加茂次。是義家兄弟の武功を欽崇、且武運を祈らん爲なりと、云々。別當を平塚山城官寺といひ、安樂院と號す。城官寺の來由は、本地阿彌陀如來を安ず。

平塚三所明神と號す。八幡太郎義家、加茂次。是義家兄弟の武功を欽崇、且武運を祈らん爲なりと、云々。別當を平塚山城官寺といひ、安樂院と號す。城官寺の來由は、本地阿彌陀如來を安ず。

平塚三所明神と號す。八幡太郎義家、加茂次。是義家兄弟の武功を欽崇、且武運を祈らん爲なりと、云々。別當を平塚山城官寺といひ、安樂院と號す。城官寺の來由は、本地阿彌陀如來を安ず。

平塚三所明神と號す。八幡太郎義家、加茂次。是義家兄弟の武功を欽崇、且武運を祈らん爲なりと、云々。別當を平塚山城官寺といひ、安樂院と號す。城官寺の來由は、本地阿彌陀如來を安ず。



無量寺
六門法陀
三番目
その上
七社



ち駒込神明宮こまごころしんめいぐうと同時の鎮座ちんざなりと云ふ。別當べつたうは眞言宗東覺寺しんごんしゅうさつかくじと號して、弘法大師こうぼうだいしの作さくの不動尊ふどうそんを本尊ほんそんとす。開山かいざんは行基菩薩ぎやうきぼつなり。

光明山圓勝寺くわうみやうぜんえんしょうじ 中里なかざとにあり。淨土宗じやうつうしうにして、本尊ほんそん阿彌陀如來あみだにょらいは、慈覺大師じかくだいしの作さく、脇士けふじ二菩薩にぼさつ

は、惠心僧都ゑしんそうづの作さくなり。開山かいざんは深蓮社聖法上人しんねんじやしやうまふ。當寺たうじ始めは御城ごじやう内龍ないりゆうの口くちにありしとぞ。

勢至堂せいしだう 本堂ほんだうの右みぎの方かた、少しの丘山かみの上うへにあり。三尊さんそんの彌陀佛あみだぶつを安やすず。俱ともに佛工ぶつこう春日かすかひの作さくなり。今故いまこゝろありて勢至堂せいしだうと唱なづへり。

藤林山西福寺とうりんざんさいふくじ 染井村そめいむらにあり。眞言宗しんごんしゅうにして、本尊ほんそんには阿彌陀如來あみだにょらいを安やすず。德一大師とくいちだいしの作さくなり。

當寺たうじは狹少けいせうの地ちなりといへども、尤もつとも殊勝しゆせうの梵刹ぼんさつなり。

染井稻荷社そめいいなり 本堂ほんだうの左ひだりにあり。往古むかうよりの鎮座ちんざにして、染井一村そめいいつむらの鎮守ちんしゆ也。昔此所むかしこのところに染井そめいとなづ。くろる泉いづみありしが今は水涸みづかわれて、其跡そのあとを失うしなふ。村むらを染井そめいと云ふも、この泉いづみに上あるとぞ。

佛寶山無量寺ぶつほうざんむりやうじ 西光院さいくわういんと號す。同所どうじよ北きたの方かた、西にしヶ原はらにあり。眞言宗しんごんしゅうにして、弘法大師こうぼうだいしの作さくの

不動尊ふどうそんを本尊ほんそんとす。開山かいざんは行基菩薩ぎやうきぼつなり。本堂ほんだうにかくる南無阿彌陀佛なむあみだぶつの額がくは、幡隨意院ばんずいいん了碩りやうせき

和尚わしやうの筆ふでなり。

阿彌陀堂あみだだう 本堂ほんだうの右みぎにあり。本尊ほんそんは行基菩薩ぎやうきぼつ。薩さつの作さく、六阿彌陀むつあみだ第三番目だいさんばんめなり。



回國大徳寺宮





六月朔日

富士詣

暇夜より詣人多く
甚だ賑わひ此日
藤細子の蛇をひき
を病ふみの酒を
と齋く



伐の時、靈夢の事ありける。其朝此あたりに社地を求め索りしに、一松株の枝に大麻のかよれるあり。公是を拜し給ひ。是靈夢の應なりとて、直に其地に神明宮を勸請すと、云々。其後多くの星霜を経て破壊におよびしを、慶安の頃、堀丹波守利直再興あり。例祭は九月十六日なり。

富士淺間社

同所にある。祭神木花開耶媛一座なり。往古靈瑞あるに仍て、是を鎮坐といへ

り。當社昔は本郷加州侯の後園にありしが、寛永年中、今の地に遷さる。毎歳の六月朔日祭禮にて、前夜より詣人多く道路に充てり。此地の産物として、麥藁細工の蛇、ならびに團扇、五色の網などを鬻ぐ。

寶珠山與樂寺

田畑村にあり。眞言宗にして、本尊地藏菩薩は、佛工春日の作、開山は行基

大士なり。

阿彌陀堂

本堂の左の方にあり。本尊は行基菩薩の作、六阿彌陀第四番目なり。

田畑八幡宮

同所西の方にあり。田畑村の鎮守とす。相傳ふ、文治五年、頼朝公勸請す。即

富士浅名間社





駒込神宮明神





吉祥寺

表門の内左右
杉木の櫓ハ
其昔
云より柱マシ
七も去時
鐘
知り



目赤不動堂 駒込浅香町にあり。伊州赤目山の住職萬行和尚回國の時供奉せし不動の尊像、屢靈驗あるに仍て、其威靈を恐れ、別に今の像を彫刻して、彼像を腹籠とす。則ち赤口

不動と號し、此所に一字を建立せり。始め千駄木に草堂をむすびて安置ありしを、寛永の頃、大樹御放鷹の御、今の所に地を賜ふ。千駄木に動坂の号あるは、不動坂の畧語にて、草堂のありし舊地なり。後年終に目黒、目白に對して、目赤と改むるとぞ。

諏訪山吉祥寺 同所一丁ばかり北の方にあり。曹洞の禪宗にして、江戸檀林の一なり。因て

旂檀林と號す。山と號す。今猶境内に鑑坐す。本尊は釋迦如來、開山は青巖周陽禪師なり。當寺は長

祿年中、太田持資、江戸城を營みし頃、かしこに井を掘りしに、土中より吉祥増上の文字

ある銅印を得たり。依て吉瑞なりとて、一字を建て、直に吉祥庵と號く。今御城の中和田倉、そののち

北條幕下、遠山丹波守中興す。天正年中、御城御造營の時、五代目用山和尚、現住の頃なり。神田の臺に地を賜ひ、

寺領等を附せられ、遂に明暦三年、今の地にうつさる。水道橋は、當寺神田の臺にありし頃の、表門の曲なり

と記せり。故に寛文年中江戸繪圖にも、水道橋を吉祥寺橋

駒込神明宮 同所二丁ばかり北の方にあり。社傳に云く、文治五年、右大將賴朝公、奥州征

討に

玉衡之部 卷之五

丸山まるやま
浄心寺じやうしん



駒込
大観音



智所照。如々法界絕封疆。絕方所。而不礙塵刹者。我覺王之土也。觀彼久遠。猶如今日。亡古今。亡遠近。而不分劫頃者。我覺王之時也。由此觀之。府內之舊址。城外之新基。內外雖殊。均是我土也。昔日之開基。今日之再興。今昔雖異。均是我時也。且以今日之地。易昔日之處。今昔不二。內外一相。古之所云。草創守文。二難相竝。二師之功。不亦茂乎。有斯人焉。有斯處焉。而又欲推鐘告四方。以弘大法矣。鐘成乞銘於余。雖以固陋。不克峻拒焉。銘曰。

淨心爲真因

大覺爲真位

名是實之賓

以名山與寺

已離火宅塵

新開石川地

如々常寂光

始無東西異

莊嚴淨佛國

斯備晚成器

便擊甘露鼓

共醒無明睡

善哉東漸土

音聲作佛事

代記に、永祿七年、北條氏康と、里見義弘と、國府臺にて合戦の時、資高おのれが妻の親なりし太田下野守おほたしもつけのかみ小田泉方先手也。と渡り合ひ、終に資高一味す。棒を以て舅下野守を打殺せり。軍散じて後、妻此事を聞き大に歎き、葬禮ねんごろにいとなみ、後髻をきり、父の菩提の爲に、武州神田に淨心寺を建立すと、云々。初め建立の地は御城内平川也。當寺始めは神田にありしを、小石川にうつされ、後復今の地にうつさる。

按ずるに、寺傳に、太田資高の室は、北條氏綱の女にして、康資の母なり。依て康資母儀のため、天文十九年當寺を江戸平川に草創すといへり。鐘の銘にも天文十九年とあれば、寺説を以て是とすべき歟。追て考訂すべし。當寺の鐃鐘今はじびたり。銘は深草元政なり。草山集に出づる故に、こゝに擧ぐ。

淨心寺鐘銘竝序

古者論草創守文二者之難矣。蓋無草創莫成守文。無守文莫遂草創。然者皆難矣哉。武江淨心寺山號大覺。開基祖曰日成。乃以天文十九年創之。而九世祖曰日眞。方此之時。江府大火。因移地於小石川。大揚再興之力。蓋淨因所感。未幾佛殿方丈。及厨庫書院煥乎新成矣。夫極

根津権現舊地

根津の権現の舊地
 多岐木坂のうへに
 そりのの地とありし
 といひ此邊に蘇我の宮
 多く庭中四時草木
 の花散す

足利木坂

旧名

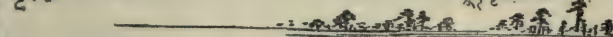
潮見坂ともいひ

又七面の

宮あり坂小

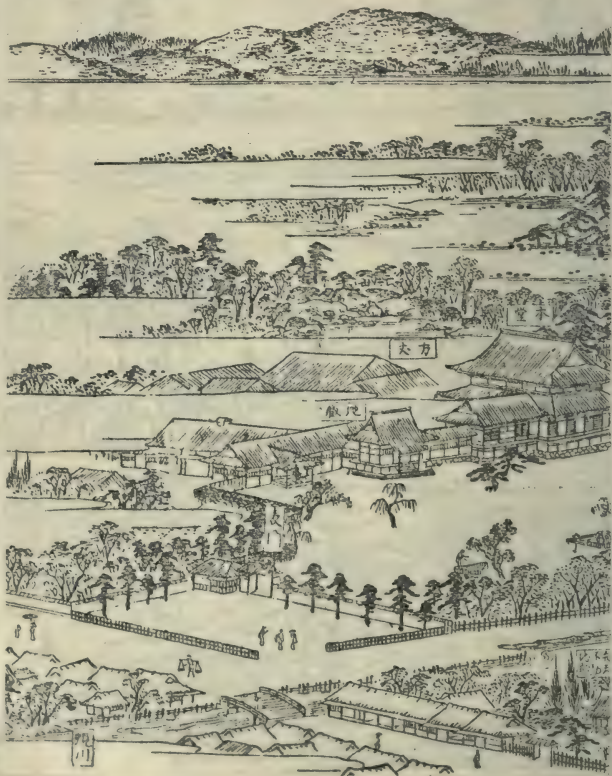
七面坂とも

ありと



根津木坂







日登山妙林寺 につごうざんめうりんじ

法住寺の西 ほふぢゆうじ

小川を隔てあり をがはへだ

日蓮宗にして にちれんしゆう

天文年中の草創なり てんぶん

開山 かいはん

は日秀上人とぞ につしゆう

正徳年中 しやうてく

故あつて ゆゑ

天台宗に改められ てんだいしゆう

俊海法印を中興開山とす しゆんかいまふいん

田中辨財天社 たなかべんざいてん

昔は田の暇道の草堂に安置ありしを、弘安六年に、内海何某始めて此社を建立せしよし、縁起に詳なり。

願地藏尊 がへりぢざうそん

弘法大師の作、光入法師感得の靈像なり。

靈驗不動尊 れいけんふどうそん

延享三年七月八日、淺草川より出現せし像なり。御長一寸七分、背の面に銘あり。

讀日

金利石堅

神惠佛教

授福與徳

靈驗不動

大同二丁亥四月

空

海

大觀音 おほくわんおん

千駄木七軒寺町光源寺といへる せんだぎ

淨宗の寺内にあり じやうしゆう

和州長谷寺の摸にして わしゅうはせでら

十一面 うつつし

觀音の立像六尺長一丈なり りふだう

又同堂内に千體の觀音を安ず せんたい

貞享年中、江府の商人丸吉兵衛なるも えんぎ

の是を建立す このりふ

大覺山淨心寺 だいがくざんじやうしんじ

丸山片町にあり まるやまかたまち

日蓮宗にして にちれんしゆう

太田資高の妻 おほたすけたか

法名を淨心院日海禪尼と號せり つま

草創す さうさう

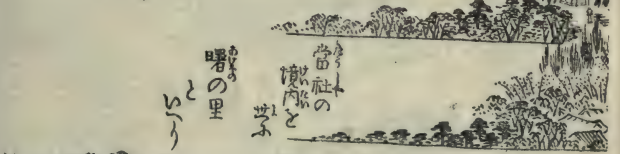
北條五 ほうてうご



清水



當社の
境内と
芋
曙の里
といふ





根集之權見社



當社境内、始めは甲府公御館の地なりしが、根津權現は、大樹 文昭公 の御産土神にして、御宮參迄ありける故、後に右の御館の地を賜り、寶永年中、新に當社を御造營ありて、結構る。隨身門に掛くる根津大權現の額は、大明院 宮公辦法親王の眞蹟なり。舊地は千駄木坂の上、元根津といへるところにあり。祭禮は隔年九月廿一日なり。

觀音堂 本社の左、岡山のうへにあり。洛陽清水寺の模にして本尊千手大悲の像は、慈覺大師の作といへり。

當社境内は、假山泉水等をかまへ、草木の花、四季を逐うて絶えず、實に遊觀の地なり。殊に門前には、貨食店簷をならべて詣人を憩はしめ、酣歌の聲間斷なし。

普賢山法住寺 谷中三崎にあり。淨土宗にして、本尊に阿彌陀如來を安置す。開山は幡隨意

院了碩和尚なり。其頃一派の高徳にして、貴賤の信仰少からず。寶曆年中、當寺を草創す。其砌、貴賤男女を擇ばず、土砂を運ぶ輩へ、一簣毎に十念を授く。こゝにおいて、老若を厭はず日々に群集し、不日に成就せり。此地は清淨無塵の佛界にして、六時禮讚の聲は、松風と共に寂々たり。

白布はくふを引くひが如く、筑波つくは、黒髪くろかみの山々やまは畫ゑがくに似にたり。豊島とよしまの村落そんらくは眼がん下にありて、耕たがし畑はたうつ賤しづが業わざまでも一望いちぼうに入り、利根川とねがはの遠帆縁樹えんぼりよくじのかけに見みえかくれして、さながら白鷺しらさぎの飛とぶが如く、此地このちの風色畫中ふうしよくぐわちゆうにあるが如し。

或人云く、往昔此麓は豊島川に續つきし入江にて、道灌の砦城とりでありし頃は、米穀其外すべて運送の船よりこの松を目常にせしものにて、つなぐといふもあながち繋つぎととむるの義にはあらず。是は舟人の詞にして、つなぐといふは、目的にするなどいへるに同じ心とぞ。よつて其後道灌山の船つなぎ松と稱して、はるかに此所の松を目常にせしを、誤りて道灌船繋ぎの松と唱ふるもとぞ。

道灌山だうくわんやま 一名を城山しろやまともいへり。南は新堀にっほりを限り、北は平塚ひらつかに接せつす。往古むかし太田道灌おほただうくわん、江戸城えどじやう

にありし頃ころ、出張ではりの砦城とりでとせし跡あとなりとも、又關道觀坊せきのだうくわんぼうといへる者の第宅ものやしきの地ちなりとも云

傳つたふ。道觀坊ははじめは小次郎長輝おつじらうちかひといふ、後雜髪して道觀坊となづくるとぞ。谷や此地藥草このちやくさう多く、採藥さいやくの輩とも常にこ

こに來きたれり。殊ことに秋あきの頃ころは、松蟲鈴蟲露まつむしすずむしつゆにふりいでて、清音せいおんをあらはす。依よつて雅客幽人がかくいじんこよ

に來きたり、風かぜに詠えいじ、月つきに歌うたうて、其音そのこゑを愛あいせり。

根津權現社ねづこんげん 上野うへより五町ごちゆうばかりを隔へだてて、乾いねるの方にあり。

祭神さいじん 素盞鳴尊すさのをのみこと 御産土神みうぶつちかみ 相殿あひでん 左山王權現さやまおうごんげん 御城の鎮守神みじやうのちんしゆうかみ
右八幡宮みぎやわたみや 源家の祖神みなもとのすけのすけ

西のりく小

す

む

さ

う

沙芽

くれ

其角



道灌山徳虫

文月の末とせ中
 小してとらひし
 名よ一あ虫塚
 の辺と奇地とす
 畑人吟客もい
 まきて終夜その
 音音と疎重す
 中もも徳免のま
 の勝てたてりく
 徳免は徳免の
 あつとひくか
 金毘羅の振持
 つかひの
 育明の身と
 杉如いもち
 一真とや
 いまん



らずと云ふ事なし。中にも雪のながめ勝れたれば、世に稱して雪見寺とも號くとかや。

人麻呂祠 當院庭中に安ず。頼阿法師の作にして、杉の白木をもつて作れり。是則ち攝州住吉社へ奉納ありし三百體の其一なりといへり。

地藏堂 同じく門のかたはらにあり。本尊は紫銅(カチカネ)にて、立像八尺の地藏尊なり。慈濟庵空無上人建立ありて、元祿四年に開眼供養す。六地藏の一なり。

淨居山青雲禪寺 同所にあり。妙心寺派の禪宗にして、堀田家代々布金の道場たり。昔堀田

相州刺史紀正亮侯、羽州山形在城の頃、白瑛和尚の道光を慕ひ、師に就て法を需む。侯台命

を奉じて、封を下總の佐倉に移すの頃、彼地に小庵を結び、師をして燕座せしむ。其後當國

入間郡より、藤井山淨居寺といへる頽廢の寺院を引いて、此地に當寺を草創す。白瑛和尚、寶曆

建長寺にして坐化す。依て侯驥驥頑海和尚と謀つて當寺を建立す。故に白瑛和尚を開祖とし、頑海和尚を中興とす。青雲の二字は、正亮侯の法號なり。其後嗣君正順侯、香花料として北總の佐

倉にて百石の地を寄附せらる。境内富士淺間宮、秋葉金比羅、辨財天、護國稻荷等、何れも

往古太田道灌の勸請なりといへり。

船繫松 青雲寺の境内、涯に臨み、鬱蒼として聳えたり。往古は二株ありしが、一株は往

吉安永元年の秋、大風に吹折れて、今は一本のみ残り。此樹陰より眺望れば、荒川の流は

十一面觀音 弘法大師の作にして、坂東札所第一番相州鎌倉杉本のうつしなり。 正觀音 慈覺大師の作にして、秩父札所第一番四萬部寺の摸なり。

抑此百觀世音は、義高上人の建立なり。上人初め高野山の高臺院に住職たりしが、後彼寺

を退去し、當地に赴き、百番の札所を摸さん事を企つ。是本土に至りがたき兒女等の結縁の

爲となり。依て此地に小庵のありけるを、闢きて寺とし、往古太田道灌勸請ありし下諏訪明神の社地なり。 數千歩の地を寄

附せられしとぞ。本尊おほくは野山より遷し奉る靈像なりといへども、百體に充たざるを歎

き、これを修補し、一體毎に佛舍利一顆を御首に籠め、竟に百體の尊像全からしむとなん。

二王門の額に補陀山とあるは、油小路隆貞卿の眞蹟なり。

十 諏訪明神社 同所北の方、諏訪の臺にあり。信州諏訪の祭神におなじ。上諏訪は健甕名方命、下諏訪は八坂刀賣命なり。古事記に

云く、健甕名方命は大己貴命の子なりとあり。 當社は元亨の頃、豊島左衛門佐建立す。其後太田道灌、此地を江戸城の出

張の砦とせしみぎり、修營して、郭内の鎮守となせしとぞ。社頭今も杉の木立生茂りて上久

たり。例祭は七月廿七日なり。當社別當は眞言宗にして、法輪山淨光寺と號す。當寺の書

院は、高崖に架して、眼下に千歩の田園を見下せり。風色尤も幽雅にして、四時の眺望た

監於斯乎。然後知里人丘其址焉。寺主碑其丘焉。皆有曰也夫。

三十番神堂 きんじふばんじんどう 本堂のまへにあり。昔道灌城中平川に安置せし鑿像にして、開眼は日蓮上人なりとぞ。

日暮里 ひつほり 新堀に作るを正字とす。永祿二年北條分限帳に、遠山彌九郎江戸知行の中に、屋中新堀の名を加ふ。今、日暮里と作るは、寛延の頃上りの事なりといへり。

感應寺裏門のあたりより道灌山を界とす。此邊寺院の庭中奇石を疊で假山を設け、四時草木

の花絶えず、常に遊觀に供ふ。就中二月の半よりは、酒亭茶店の檯几所せく、貴賤袖をつど

へて春の日の永きを覺えぬも、此里の名にしおへるものならん。

七面大明神社 しちめんたいみやうじん 同所延命院といへる日蓮宗の寺に安置す。開山日長上人、萬治三年庚子正月

十六日、夢中に靈告を得て後勸請すといへり。

或人云ふ、慶安元年三澤の局、甲斐の七面山へ千日の間參籠し、夢中に隣一枚を感得す。依て當社を建立し、嚴命に因て延命院となづく

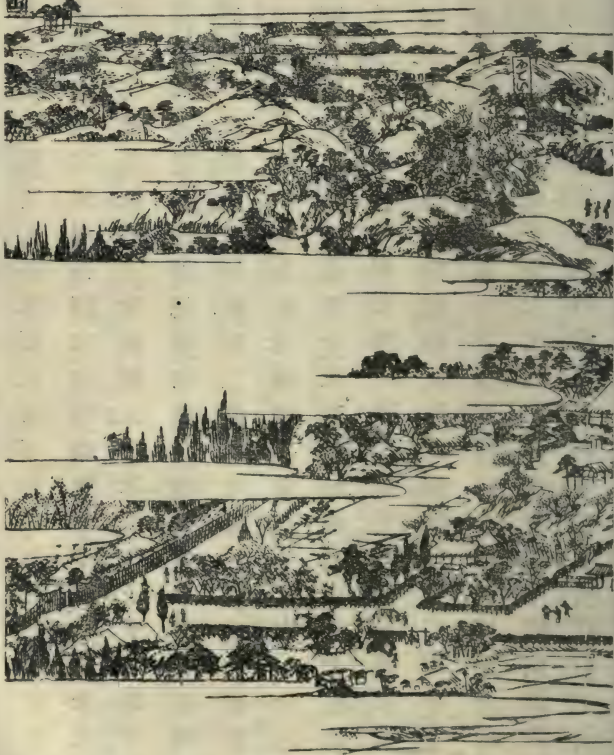
補陀山養福寺 ふだんさんやうふくじ 觀王院と號す。同所北の方にあり。本尊は三尊の彌陀佛、開山は木食義高上

人なり。 傳は前の圓満寺の條 下口つまびちかなり。

觀音堂 くわんおんどう 西國坂東秩父百番 ほんせんによいりんくわんおん 佛工番日の作にして、西國札所の札所をうつせり。本尊如意輪觀音 第一番紀州那智山のうつしなり。

揚之。迨于今世所傳稱其人英武而文者可知也。寬延三年庚午。寺主僧日忠與懸河大夫古屋孝長。四宮成煥。圖樹石于丘上。俾余屬厥事。石子曰。昔灌公之德。及武州人。豈猶荆人之思羊叔子乎。不然何至斯里之人。亦無忘其惠。丘其址焉。以貽諸後世也。吾聞之。羊叔子死無子。襄陽百姓於其平生游憩之所。建廟立碑。歲時享祀。望其碑者靡不墮淚。唯灌公者異於此。國初時。其五世孫資宗。始稟茅土之封。食邑五萬石。寔爲道顯公。繇顯公又四世于今。瓜瓞繇繇。奕葉昌阜。其斯爲盛矣。方今縣河君大夫。以歲時朝東。則春秋齊肅有事。群屏攝遂登斯丘。望之。必有若觀當其時。褊裨分隊。整勒戎馬。旌旗繽紛。白羽若月。赤羽如日。壁司徒銳司徒。各慎其守。猛士發揚踊躍用兵。乃皆延頸企踵。以待斥候之舉。燧者焉爾。於是乎君大夫慨然。無念爾祖。聿修厥德。將慎其四竟。完其守備。訓有司以義。施小民以惠。而光昭令名。以示子孫。無亦

其四







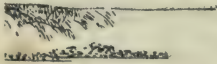
其三





其二

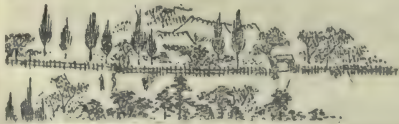




其一

惣圖

回善里



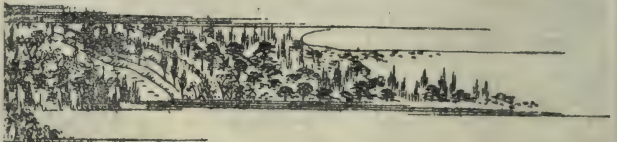
其址焉。故丘與山皆用其號名矣。寺舊在谷中里。太田氏群屏攝之所。而道灌之曾孫今懸河侯。世々相承以守其祀也。寺與群屏攝遷於斯里者。絲寶永中也。遷則得斯丘。蓋不幾得矣。可不謂奇也。穆諸譜牒。太田氏名持資。官左衛門大夫。道灌其號。源光祿賴政十世孫。父道真。名資清。以永享四年壬子。生道灌於相州扇谷。少恢廓有大志。博涉經史。善兵法。明畫策。是時天下戰爭。諸國瓜裂。各據其黨。迭爲唇齒。道真道灌二世屬管領上杉氏。府中推道灌瞻智豪邁。有文武之材。專委兵機之要。長祿二年戊寅。城武州江戶焉。而鎮之。正其封壇。險其走集。每與鄰國戰。利在以寡勝衆。兩毛二總諸城。聞風震懼。降者不絕。大半爲上杉氏之有者。皆其力也。既而州界寧肅。百姓悅服。道灌增修德。信以懷初附。至敵國諸將。皆謂彼專爲德。我專爲暴。是不戰而自服也。寬正中。道灌入京。王人采道灌所詠國風。奏御。天子乃賜御製歌一章。以褒

中 飯 八 日 三
 學 時 間 未 始 知
 十 分 以 上 之 意
 可 謂 國 家 之 道
 無 多 矣 其 意 也
 經 術 二 書 也 有
 與 善 其 善 則 善
 於 資 術 則 善 矣
 大 則 凡 在 其 中
 其 理 亦 不 可 不
 其 理 亦 不 可 不
 其 理 亦 不 可 不





谷中
感應寺



の宮みやの御願ごぐわんによりて、叡山えいざん横川がはにありし傳教でんけう大師だいしの作さくの毘沙門びしゃもん天てんの像ざうをこゝに移うつし、本尊ほんそんとせらる。京師けいし鞍馬くらま山やまの毘沙門びしゃもん堂だうは、比叡ひえの乾いぬゐに當あたりて、佛法ぶつぽふ守護しゆごの道場だうぢやうなれば、當寺たうじも東叡とうえい山ざんの乾あに當あたるを以て、鞍馬くらま寺でらに比ひせらるゝといへり。境内けいだい櫻桃いおうたうの二花じくわありて、春時しゆんじ爛漫らんまんたり。

五層塔ごそうのたふ 始め當寺たうじ中興ちゆうけい日長にちぢやう上人じやうじん建立たうぢやうありしが、明和九年めいわくねんの火災かさいに焦土せうどとなれり、仍なほて寛政かんせいの今再建いまさいけんして、むかしに復かへせり。

長久山ちやうきうざん本行ほんぎやう寺じ 同所どうじよ北きたの通とほにあり。日蓮宗にちれんしゆにして、開山かいざんは日立上人にちぢけん、大永六年たいえいねんに草創さうさうす。往むか

古しは太田おほただ道灌だうくわんの建立たうぢやうなりといへり。常寺たうじ庭中ていちゆうに道灌だうくわん斥候しやくかう塚づかと稱しょうするものあり。

道灌だうくわん丘かみ碑い文ぶん 筑波つくは 石正いしせい 猗い 撰せん

里さと曰い日暮にちぐ寺じ曰い本行ほんぎやう。在あ東都とうと郭かく北きた。寺じ有あ丘かみ。曰い道灌だうくわん丘かみ。奚いか名な道灌だうくわん太田たうた氏し之の號ごう乎や。里さと人ひと思おも太田たうた氏し也なり。里さと人ひと奚いか思おも太田たうた氏し無な忘わす其その惠めぐみ也なり。寺じ西北しよくぱ有あ山やま。亦また曰い道灌だうくわん。蓋たしか山やま則すなは太田たうた氏し保郭ほかく之の遺い。而しか丘かみ乃すなは其その斥候しやくかう臺たい之の址ぢ也なり。故ゆゑ無な丘かみ唯ただ址ぢ耳のみ有あ之の。躬みづか自みづか里さと人ひと之の思おも太田たうた氏し也なり。自みづか有あ丘かみ二百にひゃく有あ餘あま年ねん于こゝ今いま矣なり。相傳さうでん昔むかし太田たうた氏し既すで亡な。里さと人ひと過あ其その墟こゝろ。盡たしか爲な禾黍こも。閔あは壘るい壞こ臺たい圯こ。彷徨たうぼう不な忍しの去さ。而しか丘かみ

螢澤

谷中宗林寺の境内
あり又宗林寺の
池とも螢沢と唱へ
ずて此辺雲の光り
化又勝れそり

草此紫と

落る

花

下る

哉

芭蕉



抑當山は江戸第一の櫻花の名勝にして、一山花にあらずと云ふ所なし。いにしへ台命によりて、和州吉野山の地勢を摸し植ゑさせらるゝが故に、花に速あり遅ありて、山上山下盛をわかてり。彌生の花盛には、都鄙の老若貴となく賤となく、日毎に袖を連ねてこゝに群遊し、花のために尺寸の地を争ふて、帷幕を張り、筵席を設く。詩歌管絃は鶯聲に和し、錦衣繡裳は花影に映じ、愛玩賞咏日の暮るゝをしらず。

慈雲山瑞林寺 上野清水門の外、二三丁北の方にあり。日蓮宗にして、甲州身延山の觸頭、

江戸三箇寺の一なり。開山は本山十七世慈雲院日新上人、天正十九年の草創なり。本尊丈六の釋迦如來は、延寶五年の回祿にほろびて、今御首ばかりを存せり。當寺に安置せる日蓮大士の像は、

彼寺改宗のときよりこゝに移すといへり。

長耀山感應寺 上野谷中門の外にあり。天台宗にして、本尊は傳教大師の作の毘沙門天を安置す。當時始は日蓮宗にして、宗祖上人を開山とし、日長上人中興ありて、ゆよしき一宗の寺院たりしが、元祿年中、故ありて台宗に改められ、爾より後、東叡山に屬す。其時大明院

院たりしが、元祿年中、故ありて台宗に改められ、爾より後、東叡山に屬す。其時大明院

慈惠大師の尊像を、毎月兩度摺りたてまつることは、上は

玉體よりはじめ、其外わたくしさまの妻子從類のため、ま

た兩道の門弟をいのこと多年になりはべりぬ。今老病

こよろほそくはべる。今日も摺りたてまつるとて、おもひ

つゞけける。

我が身世になからん後の末までもいのである心はとほれとぞ思ふ

榮 雅

慈眼大師眞影 狩野探幽の筆

慈眼大師の眞影は、慈惠大師の影像と共に、當山院々願番にて、一箇月づつ執事す。年ごとの十月は、御本坊に遷坐あり。

大悲籤 慈眼大師夢中の告げによりて、信州戸隠山に在りしを、當山にうつしたまひしといへり。今も兩大師の籠のまへに安置す。諸人吉凶禍福を卜ふに、掌を指すがごとし。

佛祖統紀曰

大士籤。天竺百籤。越圓通百三十籤。以決吉凶。其應如響。相傳是大士化身所記述。云々。

たまひ、夫より堅田の浦へいて、船にて湖東へいたり、額田井の庄にしはらく鎮めたてまつり、後山門再興ありて、天正年中彼阿闍梨の公のうつしたまふ尊影は、横川(ヨガハ)に還坐なしたてまつる。今四季講堂に安置したてまつる是なり。民部法眼のうつしたてまつりし尊影は、勢州安濃津の西來寺といへるにすゑたてまつり。其後度々山門より乞ひたれども、更にうけひかず。寛永十七年、大樹大猷公御令嗣御誕生の御祈のため、慈眼大師かの影像をまうし下し、丹精をこらしければ、やすらかに御出生あらせらる。そののも慈眼大師遺言してのたまはく、本山の例にまかせ、この眞影を當山院々三十日づつ執事したてまつるべし、又大権の聖像に竝ばんは恐れあれども、我が頑像もそのあとにしたがひ、ともに大樹の御武運を守りたてまつり、國土豊饒を恵まんとぞ。夫より當山院々に一箇月づつ執事したてまつる事とはなりぬ。しかありしより、貴賤のへだてなく、歩を運び祈願するに、成就せずといふことなし。月毎の三日十八日、參詣群をなせり。

同除魔影

まよけの九い、 或時疫鬼來りて慈恵大師を憐れまさんとす。時に圓融三誦を觀じて強指したまふに、かの疫鬼たちまちに去る。よつて衆生を被仰政所之間。有_レ其沙汰。同二十八日辛巳爲_レ將軍御祈。不動尊竝慈慧大師像一萬體被_レ摺_レ寫_レ之。今日有_レ供養之儀。導師松殿法眼也。信濃民部大夫入道行然奉_レ行之。

かならず邪魅の來る事なく、疫災をはらはんと。夫よりして後は、三台槐門の柱、萬民茅屋の扉に至るまで、今にこの影像を貼したてまつらずといふことなし。

東鑑曰

寛元五年丁未三月二日乙卯今日可_レ摺_レ寫_レ不動竝慈慧大師像之由。被_レ仰政所之間。有_レ其沙汰。同二十八日辛巳爲_レ將軍御祈。不動尊竝慈慧大師像一萬體被_レ摺_レ寫_レ之。今日有_レ供養之儀。導師松殿法眼也。信濃民部大夫入道行然奉_レ行之。

權大納言飛鳥井聚雅卿は近世の歌仙にて、世にきこえある人なりしが、大師を信敬し、影像摺寫常にたえずとりおこなひたまふ。彼の家の集にいはく、

正月三日
大黒詣



師、諱は良源、江州淺井郡の人、父は木津氏、母は物部氏なり。延喜十二年壬申九月三日に生る。父母子なきを憂へ、觀音に祈りて設く。十二歳にして叡山の理仙を師とし、同六年に薙染す。理仙入寂の後、三條右大臣定方公、恩訓律師をして大師に受戒せしむ。亦尊意僧正を拜し登壇し、早く博學の名を得たり。應和三年八月、清涼殿に南北雄才の僧を召て、御八講行はせたまふ時に、即身成佛の相を顯す。康保三年、天台の座主に補せられ、山務を領する事すべて二十年、又天祿二年四月十五日、梵網戒品を誦す。纔か數句を唱ふるに至つて、口より光明を放つといへり。天元四年七月、大僧正に轉じ、輦車の宣旨を下し給ふ。永觀三年正月三日、彌陀の尊號を唱へて入寂したまふ。化壽七十四。一條院、永延元年、其德の高を仰ぎて諡を賜ふ。以上兩大師緣起、元亨釋書等の要をつむ。

慈惠大師影像

民部法眼の筆

慈惠大師の影像是、阿闍梨の君の寫させたまふ眞影と共に比叡山にありしに、元龜の頃尾州織田氏山門を襲れし時、その折の執事福成坊の阿闍梨、みづから兩像を眞ひたてまつり、香芳の谷を経て仰木村をさし落ち行きけるに、敎道をさへて、衆徒一人も適さじと矢をはなちければ、こゝに供奉するは元三大師の尊像なり、すみやかに通すべしといひければ、此手の大將關白秀吉公、いまだ木下藤吉郎といへる時なりしが、是を聞き、いそぎ馬上より飛びおり、兜をぬぎ道を開きて、通したてまつりぬ。こゝに於いて兵燹の難を免れ

去きよののち、其その遺命ゆめいを奉ほうじて葬さうを久能山くのうざんに營いさなみ、元和三年げんわ、尊靈そんれいを日光山にづくわうざんに遷坐せんざなし奉たてまつる。是往これむか
 古しの大職冠たいしよくわんの例れいに倣ならふ。則すなはち山王習合さんわうしふがふの神しんに鎮まつりたてまつり、勅ちよくを奉ほうじて、東照大権現とうせうだいこんけんと
 號たてまつし奉たてまつる。大樹たいじゆ 台徳公たいとくこう 亦また神君しんくんにおとらせたまはず優寵いうちゆうしたまひける。其先元和二年大僧正そのさきげんわ だいそうじやう
 任にんぜられ、先帝せんてい 正親町院せいしんぢいん 二十五の御遠忌ごえんきにも、御導師おんだうしに請しやうじたまふ。其後寛永二年、大樹そのちくわんえい たいじゆ
 大猷公命めいじて東叡山とうえいざんを闢ひらかしめ、師しをして開山かいざんとす。又上皇の二宮じやうわう にのみやを 守靈親王しゆれいしんわう 日光山にづくわうざんの御門主ごもんしゆ
 に請しやうぜさせ給たまひ、師おんでしの御弟子ごでしに沙汰さたしたまふ。其後上野國新田庄世良田山長樂寺そのちかづけのくにつたのしやうせらた さんちやうらくじを賜たまひ、
 東照大権現とうせうだいこんけんの神祠しんし以下の諸堂しよだうを造立ぞうりつあり。亦また同じく二十年の秋あき、僧正そうじやう微疾ゐしつを示しめす。時に大樹たいじゆ
 大猷公たいけいこうおよび紀州亞相きしうあさう 賴宣公らいせんこう 駕がを屈くつし疾しつを問とひたまふ。僧正そうじやう遂すいに遺語ゐご五則ごそくを書しよす。大樹畫工たいじゆがわこう探たん
 幽にふに命めいじたまひて、其頂相そのちやうさうを寫うつさしむ。一日唯識論あるひ ゆゑしきろんを閱けみす。忽たちまちに文殊菩薩もんじゆぼさつの來現らいげんを見る。則すなは
 ち其時そのとき至いたるをしり、端座合掌たんざがっしやうして遷化せんけす。時に寛永二十年十月二日東國高僧傳に、寛永十九年 壬午十月二日化寂とありなり。
 其壽そのすゑは凡ただそ百有餘歲しやうてんけとし紫雲天華うんでんけの瑞ずゐあり。影堂えいだうを當山たうざん、ならびに日光にづくわう、天台てんだいの三山さんざんに建たつる。當山たうざん
 慈眼堂じげんだう其一そのいちなり。慶安元年けいあん、慈眼大師じげんだいと謚號おくりなの詔勅せうちよくを下くだしたまふ。以上兩大師じよん縁起えんぎおよび東とう 慈惠じゑ大だい

上野
清水堂

浅うけ

志うも

さうまの

梯

うれ

宝井
其角



清水堂
見圖



座遺師大両





月島の海日へ大師の
御影を奉りて坐
かゝりて是を待迎
奉らんとては府まじ道の
者人群衆して道
はるまに此地熱鬧
の中最も
前か

て教外別傳の旨を發明し、善恕和尚に碧巖集を聴く、一百則の話を會得す。其頃甲斐の信立、台教を敬ひ、ある時諸師を請じて論義せしめ、天台を講主とす。衆皆辭理の奇なるを感稱すといふ。是よりして名を朝野にしらる。後常州江戸崎不動院に住す。時に文祿二年夏、大に旱す。民うれへて、師をして請雨の法を修せしむ。其時神女あつて五鈷杵を授く。師高田浦の深淵に臨んで法を修し給ふに、膏雨忽ち注いで、百穀大に登る。彼五鈷杵、今猶傳へて豊堂にありといへり。又慶長四年、武州仙波の喜多院に住す。同八年、下野國長沼の宗光寺に移る。同十二年、神君命じて叡岳の南光坊に住持せしめ、再び命じて喜多院に歸り居らしむ。同十四年、山門に登り、法華大會を行はると時に、重職の勅許を蒙り、新題者の精義嚴重につとめ給へり。上皇 懿陽成院 度々召ありて法要を詔問したまひ、奏對詳明なるに依て、叡感淺からず、權僧正に擢られ、御手づから御衣燕尾等を賜ひ、山科の毘沙門堂の門室に附せらる。又宸翰を下したまひ、權を轉じて正に任す。同十七年、神君河越に狩したまふ折から、仙波に立寄せたまひて、殿堂を修營せしめ、莊園を寄させたまふ。同十八年、復命を承りて日光山に居る。神君薨

しのぶの岡をかといへる所ところにて、松原まつはらのありけるかけにやすみ

て、

霜しもの後のちあらはれにけり時雨しぐれをばしのびの岡をかの松まつもかひなし

道興准后

二王門にわうもん 明和九年の回祿に焦土となり

額がく 東叡山 大明院宮公辨法親王眞筆

開山堂かいさんだう

屏風坂の上かみにあり。開山慈眼大師の影堂なり。世俗慈眼堂といへり。毎年十月二日、座主法親王、御導師として御本坊より鞆輿たづみこにてこここゝにわたらせらる。一山の僧徒出仕、法華八講執行あり。

抑開山慈眼大師おさしかいさんじんがいし

諱いみなは天海てんかい、南光坊なんくわうぼうと號す。

奥州會津郡高田郷の人、姓せいは三浦氏みづらうぢなり。

足利法住院義

澄あやの子とも、或は蘆名修理大夫盛高の一族ともいへり。されど師しいまずがうち、人あつて其俗姓を問へば、ひとたび空門くうもんに入りぬれば、知りてよしなしとて、答へたまはずとぞ。故に其實じつをしる事を得ず。父母ふぼ嗣こなく、月天子ぐわつてんし

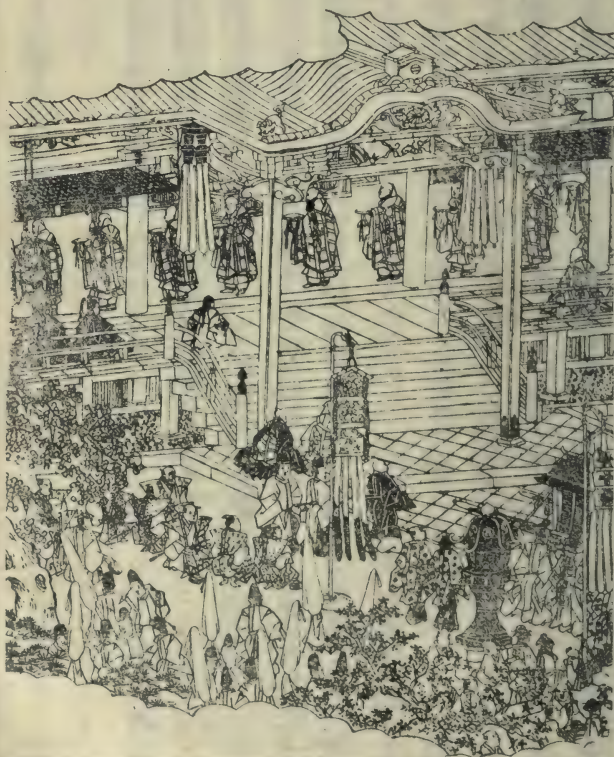
に禱いのり、其母奇花そのはなを吞くむと夢見ゆめみて娠はらむ。まさこゝに九月こゝのつきにして降誕かうたんす。幼いより葷肉くんにくを食しせず、心しん

氣清朗きせいろうにして、聰敏そうびんた他に越こえたり。十一歳じゅういちさいにして辨譽べんよ師しに投なじて祝髮しゆくはつし、天文年中てんぶんねんちゆう、始はじめて叡えい

山さんに登のぼり、神藏しんざうの實全じつぜんにまみえて台教たいけうの深旨しんしを傳つたへ、俱舍性相ぐしゃしやうさうを園城えんじやうの尊實そんじつに學まなび、復南都またなんぞ

に往ゆいて法相三論ほつさうさんろん等の教法けうほふを學まなび、成重なりしげといへるに逢あうて神道しんだうの奥儀おくぎを究きはめ、足利あしかがの學校がくかうに

遊あそびて孔老こうらうの書しょを讀よみ、道器だうきといへるに首楞嚴しゆりやうこんを學まなぶ。後郷のちさやうに歸かへり、會津あひづの大寧禪師たいねいぜんじにあひ



常念佛堂 じやうねんぶつだう 護國院にあり。本堂には、釋迦、文殊、普賢をたが。何れも佛工春日の作なり。寛永の初、慈眼大師公へ白して、開基生願に命じ、常念佛興行し給ふ。御祈願所に常念佛を置き給ふこと、深き所以有る由、殊勝の地也。

宗廟 そうべう 御當家御代々の御靈屋なり。當山の院中より御別當を務む。

坊舎凡三十五字 はうしやおよそ 各領國の大諸侯是を營建し、食邑を附す。拾遺名所圖會に詳なり。

忍の岡 しのぶをか 古き名所にして、當山の惣名なり。八雲御抄もよび歌枕名寄等にも、武藏の國にいたり。

按ずるに、當山の惣名を上野と號す。或人云ふ、むかし藤堂侯の第宅ありし頃、本國伊賀の上野に地勢相似たるを以つて名とすとせん。是大なる誤なり。永祿二年小田原北條家分限帳に、島津孫四郎もよび圓城寺左馬助等江戸知行の中に、上野の地名を加ふ、よつて古くより唱へ來る事のおきらかなるをしるべし。

北國紀行

むさし野のさかひ、忍ぶの岡に優遊しはべり。鎮坐の社五條の天神とまうしはべり。をりふし枯れたる茅原を燒きはべり。

契りおきてたれかは春のはつくさにしのびの岡の露のしたもえ

堯 惠

回國雜記

老病交侵。予常勤其少加受用以保道躬。僧都終不諾。予嘆曰。垂老而頭陀不息。非佛世之迦葉波乎。予與僧都法契已久。然未及至其講院。今春因詣東都謝恩。遂到院相訪。觀其措意之妙。立法之嚴。世所罕有。僧都需爲記。因述其大心大行以勸後賢云。時

元祿壬申五年四月穀旦

黃檗山萬福禪寺第五代住持高泉敦敬撰

勤學坊了翁僧都、其俗性は鈴木氏、羽州尾勝郡八幡村の産なり。寛永七年庚午三月十八日に生る。宿業にやありけん、二歳にして悉く親族をうしなひ、おなじく十八年辛巳(十二歳)同國龍泉禪寺に入て奴僮となり、つひに齊藤自得居士のすゝめによりて雜染し、僧となりぬ。こゝにおいて因縁の不可思議なる事を發明せり。おなじく廿年(十四歳)みづから思惟すらく、それ一切藏經は如來の肝膽にして、人天の眼目なり、我心肝を碎き、誓ひて一代藏經を建立せんといつて、正保元年甲申(十五歳)鑄守八幡宮に詣し、至心に志願の成就を祈りたてまつり、夫より諸國を經歷し、あまねく高德の師に謁して、こゝかしこに掛錫す。承應四年肥前州興福禪利の開山如定禪師の示現によりて錦袋園の鹽方を製し、市店をひらきてこれを鬻ぎ、六年を経て、其價の餘許黄金三千兩を得たり。こゝにおいて、寛文十年庚戌(四十一歳)忍ばずの池の中島にして地を賜ひ、あらたに一島を築き、一字を建てはじめて藏經全部安置することを得たり。よつて其頃報恩のため、錦袋園を四十二萬人に施す。天和二年(五十三歳)又東叡山の中にして、四方五十餘間の地を賜ひ、勤學寮を建立す。院宇三甍四方二百戸の寮舎を設く。又二字の文庫を建て、儒老二教および倭漢の群籍を收藏する事、すべて三萬餘卷なり。すなはち忍ばずの中嶋より藏經をうつして經藏を建て、これを收む。こゝにいたりて志願圓滿す。日光御門主其功の大なるを御感ありて、學頭凌雲院をして、般若心經を講説開白せしめたもふ。又貞享二年、高野山光臺院に一藏庫を置く。仁和御門主御感賞ありて勤學坊權大僧都法印に住せらる。(以上了翁傳の要をつんでこゝに擧ぐ)

東叡山

勸学寮圖



三聖設教雖少異。而利人善世則一矣。其前有方丈院之。四周有寮舍凡二百間。以栖諸方學子。其餘庖湑之屬悉備焉。僧都年老慮後堂宇朽壞。預備白金一千二百兩。爲遞年修葺之需。是則院旣不壞。而衆可安身學道。無風雨之逼。無饑凍之憂。身安學成。則足以爲世福田也。於乎今之爲僧也。則田我已脫。塵出俗。圓頂方袍。作三界大師之子。一餅一盞。飄然自在。天子莫得而臣。王侯莫得而友。高則高矣。是則未是。豈不聞佛事門中。不捨一法乎。若捨一法。則不成。滿足菩提。若僧都者可謂知本矣。以敬王公大人。與夫四衆。莫不知其名。重其德。嘗於二三十載間。以苦行所積淨貲。盡贖大藏之經。散施諸名山大刹。凡二十一藏矣。年來又爲虎關國師。重建濟北院。今年春。因予奉旨住黃檗。又願遞年施貲爲修飭伽藍。以及合山子院。但有所益之事。靡不勤行之。然奉己至薄。每坐臥一小樓。未嘗嫌棄。食則藜羹粟飯。行則竹策蒲鞋。以致

自古法中大沙門。播名布德於天下者。豈苟然哉。莫不皆是菩薩乘。夙願輪而生於世。故示行菩薩六度萬行。以利天下。使天下人咸躋於無上無等至真至聖之域。此之妙行實未易以言諭也。若今東都勸學講院了翁僧都者。豈其人歟。自其脫白爲沙門。便發大乘心。行菩薩行。精持戒律。不失威儀。到處參方。嘗親近黃檗開山隱老人。及吾唐諸知識。滄風宿露。不以己憂。唯憂佛法。不大興於世。而世之僧俗而不能盡諳佛祖之大法。乃乞武陵東叡山。勸學講院。正中築經藏。以貯三藏聖教。其外裹以銅葉。以防火患。內奉三聖像。乃明僧知定公。得自雙徑蓋古銅像也。藏後之左右。立其戒師祝髮師。及二親養父自得居士之塔塚。其孝忱如此。藏前之西偏。有僧都石像。乃本院僧衆九百八十人。竝都料輩。感其功績浩大。以示不朽云。東西有文庫。藏儒老二教。及本邦書籍。又別設一講堂。中奉釋迦如來像。日講三教之書。俾國人聽者。知。

額

吉祥閣

大明院宮公辨法親王眞筆

忍岡稻荷祠

文殊樓の左にあり。石階の上に祠ある故に、世俗稻荷となづく。當山草創の時、開山慈眼大師これを勸請ありしといへり。又江戸雀に、當社を淨雲稻荷と記せり。淨雲とは木食淨雲の事なるべし。按ずるに、慈眼大師勸請の後、此沙門

再興にてもありしにや、こゝを以て淨雲の號ある歟。又或説に、當社は太田道運勸請なりともいへり。靈驗他にこえたる故に、常に詣人絶えず。

清水觀音堂

京師清水寺に比して、経蓋張りなり。此邊殊更に樓多し。本尊千手大悲の像は、恵心僧都の作にして、主馬盛久が守本尊なりとぞ。長門本平家物語に、盛久斬首の罪に處せらるゝ時、清水觀音の加護によりて、刀杖段々に折て命を助けらるる事載せたり。されど東鑑もよび其餘の書にも此事を見ず。

山王大權現社

清水堂の南にあり、内陣・拜殿、階下に至る迄、悉く彫物ありて、輪奐玲瓏人の眼を射る。此地を櫻が峯と云ふ。湯島聖堂の舊地にして、昔は殊に樓多かりしといへり。

勸學寮

俗に百軒長屋といふ。池の端錦袋園の元祖了翁僧都、天和二年に建立す。四方に列るところの寮舎も、其數あはせて二百戸とす。勸學の僧徒常にこゝに居る、則ち當山の檀所なり。講堂、勸學講院と號す。眞草

元年に修營す。

釋迦如來の像を安じて、日々に三教の書を講ずる事怠慢なし。今は觀音を本尊とす。經藏、天和四年に建立す。中に一代藏經を收め、崎陽興福禪刹の開山知定禪師、

に至るまで、悉く銅葉をもつて包裹す。其四方は石を疊んでこれを築き繞らす。又經藏の後、左の方に、其戒師慈光不昧禪師、授號師前

能泉禪寺法石大和尚、および二親養父母、ならびに自得居士の石塔婆を造立す。傍に僧都の石像あり。同所石壁の外に、道行の碑を建て

たり。文は黃壁高泉和尙これを撰す。

武州東叡山勸學講院了翁

僧都道行碑記

武州東叡山勸學講院了翁 僧都道行碑記

寛永中。東叡山寶刹始成之日。我先侯利勝。造立鐘樓一字。新鑄華鐘。以勸焉。年代久遠。鐘破聲嘎。於是謹仍舊貫。更鑄以懸焉。刻以先侯銘文。因記其由云。于時

寛政二年庚戌五月。下總國古河城主。大炊頭從五位下源朝臣利

和

治 工 太田 駿 河 守

東照大權現宮 まうせうだいこんけんぐう 文殊樓の後左 おほいしごろう 大石燈籠 おほいしごろう 同所構の外にあり、高サ二丈あまり、笠石の徑り一丈二尺、棹石三國、京師南禪寺、尾州熱田社と、當山とをあはせて、日本に三つの大石燈籠なり。いづれもまなじ人の

造立する所にして、比類なし。銘に寛永八年孟冬十七日佐久間大膳亮勝之とあり。

大佛殿 だいがつでん 同所にあり、紫銅をもつて二丈二尺餘に作れる釋迦如來の坐像を本尊とす。萬治年間、木食淨雲といへる沙門、是を造立ありしといへり。堂内に地藏尊を安ず。慈濟庵空無上人の建立にして、江府六地藏の一なり。又彌勒佛の像を安ず。すべてこの三尊をもつて、現世、過去、未來の三世を表せり。往昔大明院宮この銅像をみそなはし、其頃堂宇もなかりしかば、雨露の侵さん事を愁へ給ひ、佛殿を營建ありしとぞ。今は公より修理をくはへらる。鯨鐘 けいしやう 同所にあり、二六寸づ

てんわうのやしら 天王社 てんわうのやしら 同所にあり、當山地主の神にして、寛永八年辛未、堀丹後守直持これを崇教有て、社を造らるるといへり。神影は唐筆にして、青龍院第二世無相院亮其護持ありしとぞ。寶光堂 ほうくわうだう 同所にあり、本尊に

の頃堂宇を建立す。痘瘡の祈願にしるしありといへり。文殊樓 もんじゆらう 樓上に文殊菩薩を安置す。此靈像は、奥州會津の法藏寺より移させらるるとぞ。

玉衡之部 卷之五

空似涌自地。然今爲奉祝大相國公之寶算。新鑄鳧鐘。高架一樓。伏願
因此丹忱。保其黃耇。惟夫範圍之體。外圓而中虛。是心之譬乎。感應之
理。聲來而耳往。亦妙之謂也。長鯨吼月。早開一天之曙色。唳鶴應霜。永
延千年之遐齡。庶幾乎神風威風。叩之大鳴。君道臣道。唱而後和。懇禱
之趣不在茲乎。銘曰。

東州寶池

上方銀界

茲移臺嶠

迺唱梵唄

神德同塵

常不語恠

靈庇闕宮

人天俱拜

陶鎔鑛銅

脫出鑪鞴

疊石構樓

拘籠高掛

聲教遠聞

朝警暮誠

仰祝

國家

壽久福介

寬永八年龍集辛未秋九月日

從四位佐倉侍從源朝臣利勝

法華堂 中堂の前方の方にあり、善賢菩薩を安ず。毎年四月八日佛生會修行あり。この堂は紀州公の御建立なり。 常行堂 おなじく左の方にあり、阿彌陀如來を安置す。此ふたつ

の堂の中間に、渡殿を設くる故に、世に荷持堂（ニナヒダウ）と云ひならせり。毎歲二月十五日涅槃會修行あり。此日狩野常信の筆の涅槃の畫像をかくる。此堂は尾州公の御建立なり。

摩多羅神、常行堂の中に勧請す。依てこの堂の脇の方に華表を建てたり。傳へいふ、往古景澄入唐の折から、金毘羅神船中に現はれて曰く、我汝を護ると云ふ。仍て風帆つづがなく、歸朝の後、この神を祭る。一名は摩多羅神、是大巳貴命の一體なり。山王はもと此神を配せり。

鐘樓 同じく左の方にあり、土井大炊侯の建立なり。銘は沐羅山先生是を作らる。高欄にまとへる彫物の韻は、世に傳へて彫工左其五郎なる者の作といへり。

武州東叡山鐘銘竝序

江城良維有一佳境。誠是靈區也。叡山大僧正天海告官相攸。以欲奉營東照大神君之原廟。由是伊賀羽林次將高虎。雇梓匠之力。成土木之功。屹焉巍然。昭々如在。益廣祖廟大孝之本。舉世皆崇。闔國悉敬。此時貴戚之群卿。共繼其志。或列立高堂。或造設輪藏。加之士林之濟々。各同其心。亦建院宇。不日而成輪奐信美。旣而寶池朝清。紺園夕霽。可謂盛事矣。於是利勝建五層塔。謹奉神意。風霜有日。瓦甍猶新。如峙于

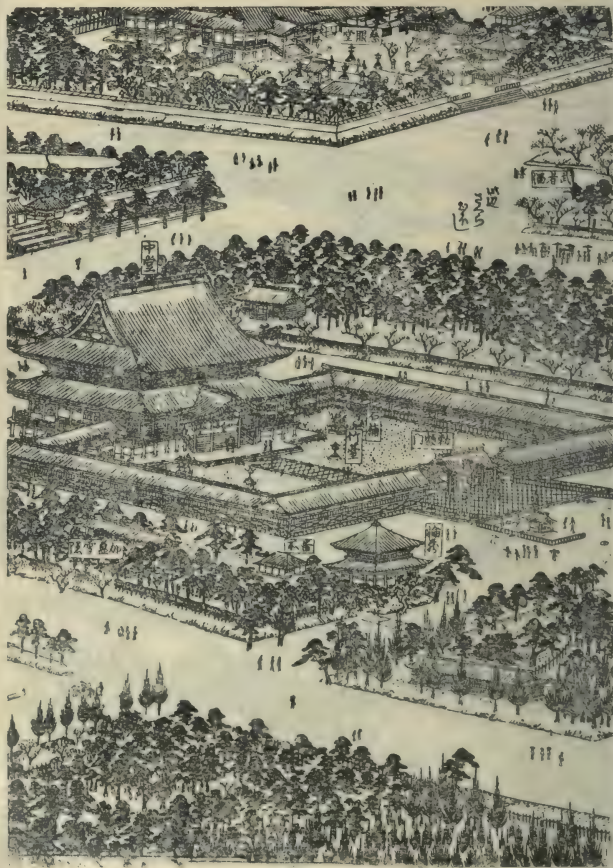
五反田の縮子神社



其五











其二



木のつと

小

けも

終も

さくし

りる

芭蕉



其二

清水觀音堂

秋色揚

今さらさらきよみ清水堂の
秋又揚ハ清水堂の
仲依所揚のうら
井の物さくらよりの
花ハ一輪よして長尾
と揚すりの是なり
中波江府の南戸
竹某の女秋及と
とさりの花のころ
らよふり井の
の揚のよみし河の
碑といふ秀が
のり

ふり
名つくと
せん



東廠山上陽春衣
東廠山下有花歸
回香終日豔歌處
風起晚來爲雲龍

南報



東嶽山寛永寺

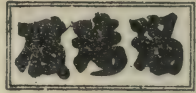
楊ヶ峯

山王社

山内楊樹をきき中
おもひ辺を掃り聲
とあしをむじ隆山
先生裁るあからし
吾身や入念ふあり



額



琉璃殿

靈元法皇宸筆

竹臺

たけのうてな 廊門のうち左右にあり。昔慈覺大師入唐の時、五臺山の竹を根こじに携へて歸朝ありし後、叡山根本中堂にうゑらる。よつて東叡山にも其根をわけ移し植ゑて、法流の絶えざるしるしとするよし、鹽尻といへる書に見えたり。世にこの竹を山王權現及び八百萬神の影向所なりともいり。又同じ左右に小き塚あり、石種(シヤクナゲ)を植ゑたり。諸夜又夜又女の影向所なりとぞ。

廊門

らうもん 天井に迦陵頻迦を畫けるは、狩野探信探雪の兩筆なり。

額



後水尾帝宸筆

雲水塔

うんすゐたふ 中堂の前右の方にあり、多寶塔と相ふ。此塔は初め慈眼大師の建立にて、今は公の御修理所なり。二十番神社 雲水塔のうしろに有り、常山の護法神にして、開山慈眼大師建立ありしといへり。轉輪藏

中堂の前左の方にあり。一切經を收む。前に傳大士および普賢菩薩の像を置く。この堂は水府公の御建立なり。

聖天宮 本社の北の方、小島に勧請す。此島は、其始辨天の祠ありし舊地なり。其頃もこの聖天の宮ありしにや、今も地主の神と稱せり。

紫銅華表 額 天照山 細井廣澤の筆

昔は離島にして、船にて往來せしを、寛文の末、陸より道を築きて、參詣の人に便あらしむ。

己巳 日は前夜より參詣群集す。

東叡山寛永寺 圓頓院と號す。人皇百九代後水尾帝の御宇、寛永年中、比叡山延曆寺に比せ

られ、江城の鬼門を護るの靈區として、慈眼大師草創あり、爾ありしより已降、代々一品法

親王座主として、今天下第一の梵刹たり。

中堂 本尊藥師如來 傳教大師の作にして、江洲矢道村石津寺「セキシンジ」より移させらるるといへり。正五九月十二日には、

圖せる所の十六羅漢等の像は、ともに狩野永叔の筆なり。又同じ天井の左右に圖せる天人は、狩野探信探雪の兩筆なり。

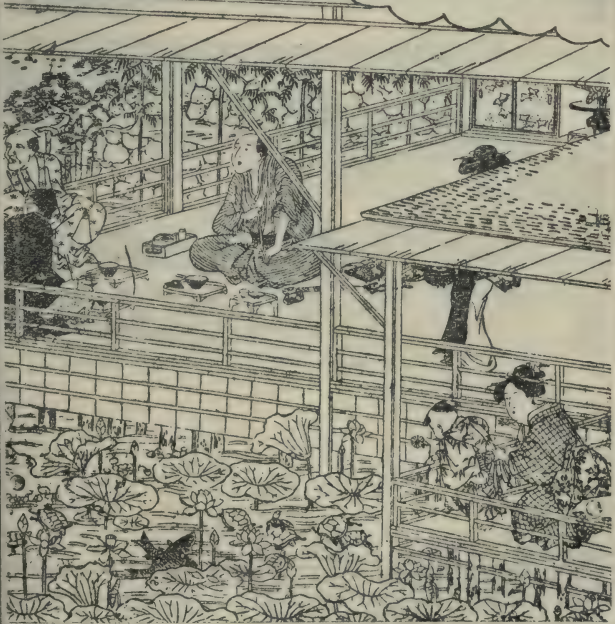
脇士 日月二大士十二神將 慈覺大師の作にして、羽州立石寺よりうつさるといへり。

脇壇 不動明王 智證大師の作。多聞天 定朝の作。



不忍池
蓮見

春のついでとて、不忍池には府費一の蓮比多う夏月に於ては、舟乗り、水の上へ菖蒲、花の紅白、色とりどり、かき入ると、昔小蓮とて、その華を、展とて、その清観とす







東叡山黒門前
三橋川



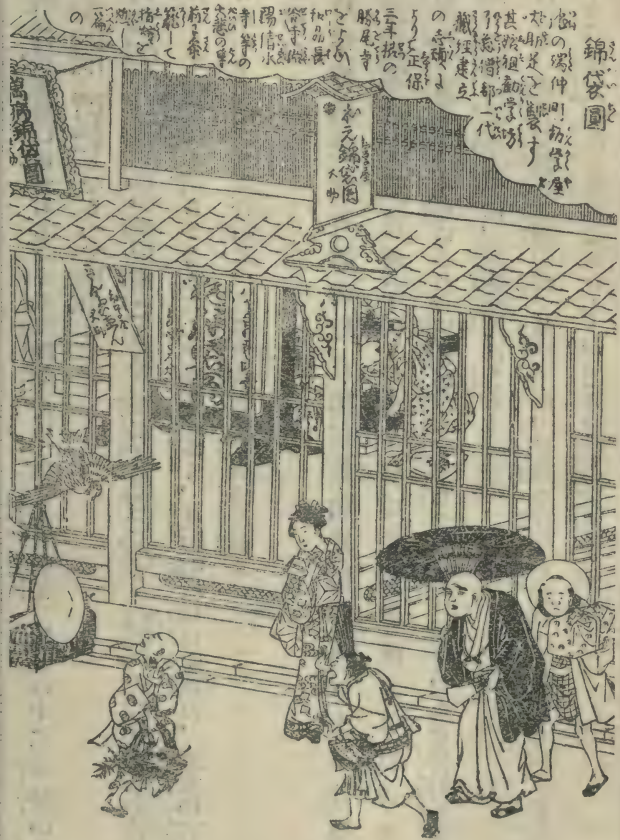


書と
 こゝろ
 其
 指大腫て
 若痛感
 時夏中肥
 の興福
 の元山如定
 錦袋の中より
 一靈薬と取
 て授らるゝと又
 及さるゝ後速
 彼薬と製して
 服せし其病の
 其後衆人の患
 二百人出而愈
 ういふは於て
 疾さる病癒袋
 靈薬と製し
 の余計と似
 一城野建立
 志願の全き
 得たりと
 くり

錦袋園

此の園仲間初代
お成足と云ふす
其の祖御堂が
御経建立
の寺願の
よりと正保
三年振の
勝尾寺
と云ふ
和品長
守作
陽信水
刺拵の
大徳の
前と奉
祝と奉
拵と
の

錦袋園
大由



永の始、御祈願所に命ぜらる。本尊薬師如来は、佛工春日の作、脇壇に十二神將の像を置く。榮譽法印春日局の猶子なり。をもつて開山とす。

不忍池又篠輪津シノ東叡山の西の麓にあり。江州琵琶湖に比す。不忍とは、忍の岡に對しての名なり。廣さ方十丁計、

池水深うして旱魃にも涸るゝことなし。殊に蓮多く、花の頃は紅白咲亂れ、天女の宮居はさ

ながら蓮の上に湧出するが如く、其芬芳遠近の人の袂を襲ふ。

風土記曰

豊島郡篠輪津池。貢鯉鮒鰻魚鴻雁鸕鷀鴨等。周行十里許程。旱日

水不涸。霖雨不爲害。祈旱雨一人詣于茲。所祭瀬織津比咩也。云々。

中島辨財天不忍池の中島にあり。當社は江州竹生島のうつしにして、本尊辨財天および脇

士多聞、大黒の二天ともに、慈覺大師の作なり。

社傳に曰く、往古東叡山草創の時、慈眼大師、此池を江州の琵琶湖になぞらへ、新に中島を

築立てて、辨天の祠を建立せられしと。云々。江戸名所記には、水谷伊勢守建立せらるゝとあり。

日ひを經へず常つねにならせたまふ。仍ようて身みを終おるまで、針灸藥餌しんきうやくじを用もちひすとぞ。同六年、洛みやこのほに上のぼり
 參さん内だいす。西三條大納言實條卿にしさんでうだいな さんさねえだきやう けいてい、兄弟けいていに準じゆんぜられ、春日局かすがのつばねの號なを賜たまふ。遂つひに天顏てんがん 後水尾帝後水尾帝 を拜はい
 し、天盃てんはいを頂戴ちやうだいす。此時このとき良尙親王やうしやうしんわう、ならびに實條卿さねえだきやう、光廣卿みつひろきやうより和歌わかを贈おくらる。

春日山かすが やまその な其名なをよもにあらはして萬代よろづよよばふ松の風かぜかも 良尙親王やうしやうしんわう

かすが野のの名なだかき名なより紫むらさきの色いろのゆかりも世よにやしられん 實條卿さねえだきやう

いやたかき君きみがまもりの春日かすがやま四方よもに朝日あさひの光ひかりそへつつつ 光廣卿みつひろきやう

其外そのほか舉白集きよはくしゆに、丈山長嘯子さかやまのちやうぜんより贈たまはるる所の東都下向餞別とうげかむかひの和歌詞書わがことば等らあれども、こゝに畧りやくす

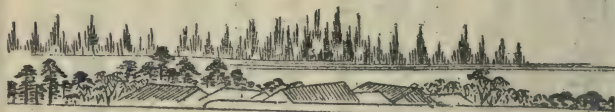
同九年、台命たいめいに依よつて再び洛みやこのほに上のぼり、女帝によてい 明正帝めいせいを拜はいし奉たまる。後勤勞歸休のちきんらうききうのため、代官町だいくわんちやうに

宅地たくちを賜たまひ、從二位じゆゐに叙じゆせらる。

影堂えいどう 本堂ほんどうの左ひだりにあり、二位局にじゆりゆうの親影おんかげを置く。此像このしやうは、台命たいめいによつて、狩野探幽しゆのたんしゆ、局りゆうの生前裝束せんぜんさうそくを著あせし姿すがたを目めのあたりに寫かしし像しやうな
 り。表裝ひょうさうも大將軍命たいしやうじんめいせらるる所に於おいて、唐草たうそうの純子じゆんしに卍壽まんじゆの字じを繪え入いたり。毎年まいねん九月十四日きゅうがつじゆじゆにち、忌日いみじちたるに因よつて、法筵ほふいを開ひらき奏そう詣ぎ

を許ゆるす。

金剛寶山根生密院こんがうほうざんこんしやうみつゐん 延壽寺えんじゆじと號なづす。同おなく東ひがしの方にあり、眞言新義しんごんしんぎ江戸四箇寺えどししかじの一いっにして、寛くわん



根生院



心屋

多丸

まみり

めくろ

かあろ山

よま

朝日

光

光

鳥丸光塵御



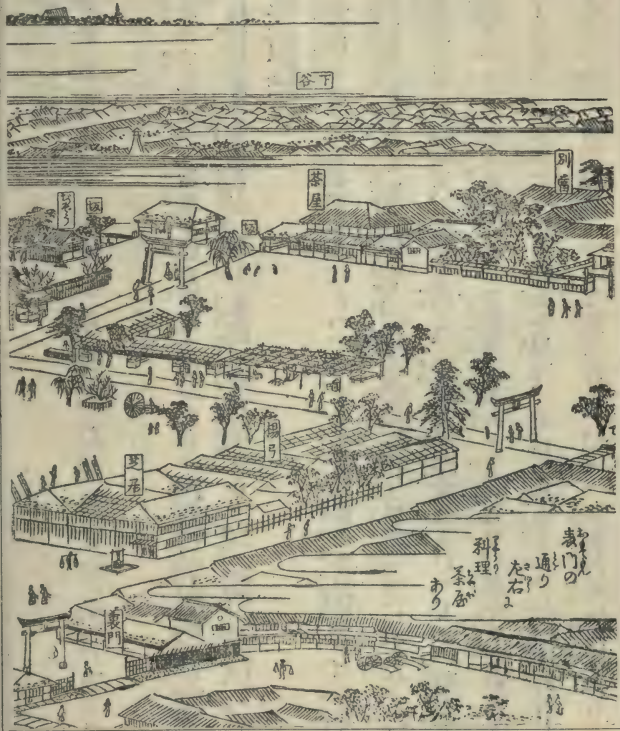
麟祥院
りんしょういん





湯島天満宮

月毎の
 北五日おひ
 植木市
 更
 あん
 一時の
 壮観
 あり



風土記曰

豊島郡湯島神社。雄略天皇御宇二年癸巳八月。自官所祭天手力雄神也。云々。

天澤山麟祥院

同所北の方にあり。

臨濟宗江戸四箇寺の一なり。

舊報恩山天澤寺と稱せしが、春日局の法號を取て麟祥院とあらたむ。本

尊は釋迦如來、開山は滑川劉和尚。

京師花園妙心寺より招かせらる。本願は春日局なり。

三代大將軍の御乳母人「オチノヒト」齋藤利三の女にして、稻葉侯

正成の室なり。寛永十八年九月十四日、六十五歳にして歿す。麟祥院殿從二位了義大姉と號す。

寺傳に曰く、寛永元年甲子、二代大將軍の命によつて、

當寺を春日局の菩提所とし、且其殿

閣をこよに移す。

天和二年回祿す。其以前の襖今十八枚を存す。梅之間、柳之間、寒山拾得等、皆雲谷の筆なり。

同く五年、三代大將軍不豫にあらせられし

とき、局自ら東照大權現の神前に詣で、禱りて曰く、妾が身不淨なりといへども、苟も乳味

を奉りて乳母の稱を汚し、歲月祠き奉れり、且將軍は萬民の父母なり、若今大故あるとき

は、國家の安危にかよれり、因て願はくは妾が身を以て、是に替り奉らん、若快復あらしめ

ば、忽に身に病苦を受け、誓て醫藥を用ひずして死せんと、云々。其衷誠正に感應ありて、

ふ。萬治年中回祿ありしのは、假に今稻荷の社に鑪座なし奉るといへり。

湯島天満宮

妻戀明神の北の方にあり。太田道灌、江戸の靜勝軒にありし頃、文明十年六月五日也。夢

中に菅神に謁見す。翌朝外より菅丞相親筆の畫像を携へ來る者あり。乃ち夢中拜する所

の尊容に彷彿たるを以て、直に城外の北に祠堂を營み、彼神影を安置し、且梅樹數百株を栽

る、美田等を附す。即ち當社はなり。以上諸社一覽、江戸名所記等の書に出づるといへども、恐らくは誤ならん。麹町

なし。其論あれども爰に畧す。

北國紀行

忍ぶの岡のならびに、湯島といふ所あり。古松はるかにめ

ぐり、注連のうちに武藏野の遠望を懸けたるに、寒村の道

すがら、野梅盛に薫す。これは北野の御神と聞えければ、

忘れずば東風吹きむすべ都まで遠くしめのの袖の梅が香

堯 惠

湯島神社

土人戸隠明神と稱す。本社の方に行ふ、則ち地主の神なり。例祭は毎歲九月十日に行ふ。

孝
意
明
神
社



る者一萬五千人、其餘の法化は擧げて數ふべからず。往哲のいまだ發せざるを發し、先賢の明かならざるをあきらかにす。徳化洋々として天下に彌布し。王公より下愚夫蠢婦に至る迄、敬仰せずといふことなし。今古いまだ曾てあらざる所、實に總持復古の師なり。
以上當寺開山傳の要を摘んでここに記す。

妻戀大明神社 妻戀坂の上うへにあり。萬治年中、回祿ありて後、今の妻戀臺に遷させらる。

祭神 第一殿 倉稻魂神 第二殿、日本武尊 第三殿 弟橘媛命

社傳に曰く、當社は往昔日本武尊東征の頃の行宮の地なりと云々。

按ずるに、日本紀に日本武尊東夷征伐の時、妃弟橘媛海水に入て(日本紀の本文は第七卷吾妻權現の條下に山出)むなしくなり給ふ。依て尋此事を深くなげきたまひ、歸路に速んで、上野國碓日嶺に登り、東南の方を望みたまひ、吾婦者耶(アガツマハヤ)と宣ふよし見えたり。因て考ふるに、此地も東征の時の行宮の地たるによつて、彼尊を領り奉り、妻を戀ひ慕ひたまふの意を取て、直に妻戀明神となづけしなるべし。今稻荷明神をもつて社の號に稱するといへども、あそらくは後世合祭せるならん歟。

往昔は社地も妻戀臺の下もとにありて、境内はなはだ廣かりしに、數度の兵火に罹り、大に荒廢におよび、纔に社の形ばかりを残せり。時に天正年中、神君當社に御祈願の事ありて、新に二丁四方の社地を賜ふ。又寛永五年、台命によつて、神君の御像を別社に鎮座なさしめ給

大悲心院

花松

見たり

灌頂池

園あり

草

さくら

哉

其角



靈雲寺



ふ。是往年の瑞に依てなり。遂に密壇を建て秘法を行し、講筵を鋪き、大に密教を喟ふるにおよんで、諸名匠衣を搗て來り至る。同く五年壬申六月、大元帥の大法を修し、國家昇平を祈る。これより以後、毎歲三神通月七日、修法することを永規とす。翌年多摩郡の戸若干を割きて香積に充て、關東眞言律の僧統となしたまふ。又乙亥の夏、大將軍常盛公みづから齋戒し給ひ、大元帥金剛の像を畫き、本尊に下し賜ふ。今大元堂に安置し奉る。同く十年丁丑、僧俗の請に依て曼陀羅を開く。壇場に入る者九萬人に幾し。隔年灌頂を行ふ。と今に至てたえず。既に元祿十五年壬午六月廿七日、諸徒を召し、遺誠懇懃なり。我今法界三昧に入るといひて、恬然として順化す。世壽六十四、僧臘二十七、時に顏四十計、色相怡悅として平生に勝れたり。師常に弘通を以て己が任とし、受る所の財帛すこしも貯へず、又みだりに費さず。佛像を造り、聖教を索め、堂塔を構へ、貧窮を濟ふ。前後經論を講説すること一百三十六會、殆ど三千席、秘軌を授くること五回、著述する所の書三百卷余、度する處の僧尼四百三十六人、具足戒を受くる者十有三、阿闍梨を得る者一百六十八人、受明灌頂に浴する者一千六百三十一人、菩薩戒を受く

開山諱は淨嚴、字は覺彦、妙極と號す。河州錦部郡小西見村の産なり。父は上田氏、母は寛永十六
 年己卯十一月二十三日に生る。四歳にして普門品尊勝大陀羅尼を誦す。奇標穎悟夙因の發
 する所なり。凡そ耳目の歴る所終に遺忘する事なし。衆人は是を神童と稱す。慶安元年戊子、
 高野山檢校法雲雪を禮して薙染す。時に年十歳、朝參暮詣倦む事なし。紀州亞相公頼宣御一
 度見たまひて深く是を器なりとし、眞にこれ方外千里の駒なりとのたまふ。遂に眞言の諸
 流の祕奥を究む。又餘暇あるときは、孔老をよび諸子百家歴史等涉ざるところなし、常に法
 戰の場に臨むに、向ふ所敵なし。貞享甲子冬、錫を關左に飛す。其曉瑞雲ありて東を指す、
 其色赤黃にして長きこと數十丈、之和尙の法化將に東方に振はんとするの兆なり。一度東都
 に來りてより、法鼓江城の下に震ふ。仍て和尙の道香を慕ひ、弟子の禮を設け、厚くこれに遇
 する輩すくなからず。元祿四年、大將軍常憲公召見し給ひ、普門品を講せしむ。雄辯泉の流
 るよがごとく、聽く者欣然として善と稱す。遂に城北にして地を賜ひ、梵刹を經始す。こよ
 において佛殿、僧房、香厨、門郭、藁を連ね、巍然として一精藍となる。號けて靈雲寺とい

工匠締造其樓。今月初四樓鐘偕就。以惟斯寺之興起也者。本是大將軍之賜。而二公醇信之所致也。予欲使後生有感于茲。欽遵佛制力荷教法。上以禱臺運無疆。下以增士民壽福也。乃爲銘曰。

城北福庭 山號寶林 元帥賚地 實比布金

作夫四集 役工日臨 彌歷七旬 棟宇成森

牧野備公 爲時股肱 命工作器 修弁合程

架樓突兀 效響鏗鉤 賢聖畢萃 龍鬼熱醒

聲雖本有 乍起乍滅 迷夫天真 妄作分別

圓性融相 誰縛誰泄 法音遍益 何有垠埒

元祿四辛未年孟冬

地藏堂 本堂の左の方 良の隅にあり。 本尊地藏菩薩 弘法大師の作なり。 左右の脇壇に弘法大師、ならびに覺彦比丘の兩像

を安置す。

年、奏聞を経て小栗栖の法珠寺にして始めて是を修す。後勅許ありて毎年正月治部省に於て是を執り行はせ給ふよし元亨釋書もよび公事根元等の書に見えたり。又延喜式玄蕃寮式曰、凡大元師法毎年正月起八日至十四日一七箇日於省修之云々。
しゆろう 本堂の右にあり、開山 覺彦和尚自ら銘を作る。

寶林山靈雲寺鑄鐘銘竝序

武都北郊有一勝地。四野廓落。四方之衆易來而投。一丘崛起。一天之星可坐而算。菅祠良聳。神鬼常作擁衛。士峯坤峙。靈祇遙爲鎮護。東叡天澤後聯。鐘梵互和。都城聖堂前屹。旭曛相映。實武野之甲區者也。從四位下柳羽州源保明者。幕府之侍臣也。天性篤懿。忠孝是務。在公之暇。嚮志眞乘。常歎世季俗漓。奉佛之徒不拘戒檢。以故象教徒設無益。因啓幕府。堅請伽藍之地。以囑貧道。遂使今茲仲秋之二十二。大將軍下旨賜許斯攸。予乃夷榛莽。卒剏營構。遐邇競趨。緇白佐助。自閏八初二始斧。以至孟冬之半。土木之績條示告成。從四位下牧野備後刺史源成貞者。時之股肱也。覽而有感。喜捨家貲。命于臯氏。鎔成鉅鐘。復令

圓満寺

俗々本食寺
とらう



年、御室宮へ参るに、行法の嚴重なるを御感あつて、高野山光臺院の住持職に任せらる。又

天和二年七月十三日、参内す。頭中將隆眞卿の傳奏にして、光臺院住持職勅に應じ、國

家安全、寶祚延長を祈り奉るべき旨、綸旨を賜ふ。祖先の忠義に仍て、名乗の文字を以て義高となし下さる。又元祿四年、志願に

よつて光臺院を辭して江戸に赴き、本郷三組町に住せらる。其頃大樹、常憲公 および淨光院

殿、須山女を以て御祈禱を仰附けらる。寶永六年上京す。此時昇殿を許さる。同七年江戸湯

島の地に梵刹を建て、萬昌山圓滿寺と號す。大樹 文照公 の御志願に仍て、本多 彈正少弼

忠晴奉行たり。則ち上人を以て當寺の開山とす。享保三年六月七日、化縁の薪盡きて、終に

春秋九十五歳にして遷化す。以上開山傳の畧を擧ぐ。

寶林山靈雲寺 大悲心院と號す。圓滿寺の北の方にあり。關東眞言律の惣本寺にして、覺彦

比丘の開基なり。

灌頂堂 兩界の大日如來を安置す。

大元堂 灌頂堂のうしろ方丈の中にあリ。本尊大元明王の像は、元祿大樹の御筆也。大元明王の法は、往古承和元年山城國小栗栖(オ



其四



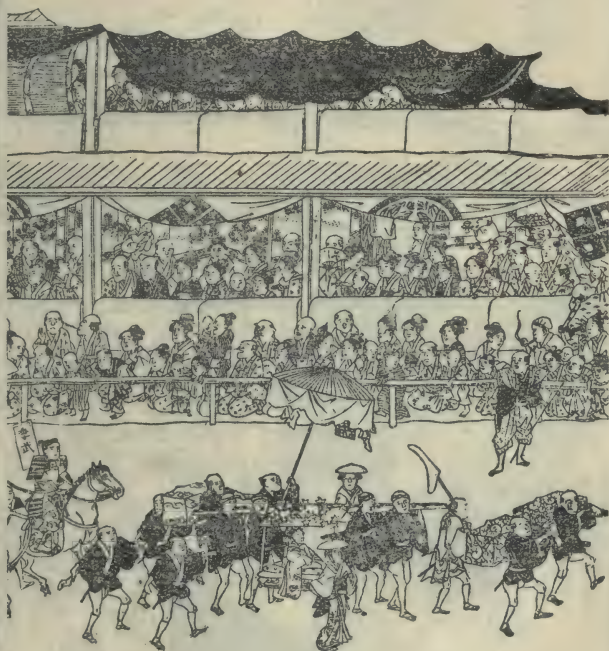
其三







其二





神田明神

祭禮

隔年九月十五日に

執行の氏子の

町々より俵物車樂

出陣中

大江山凱陣

半右九郎以下

朝鮮人末朝の

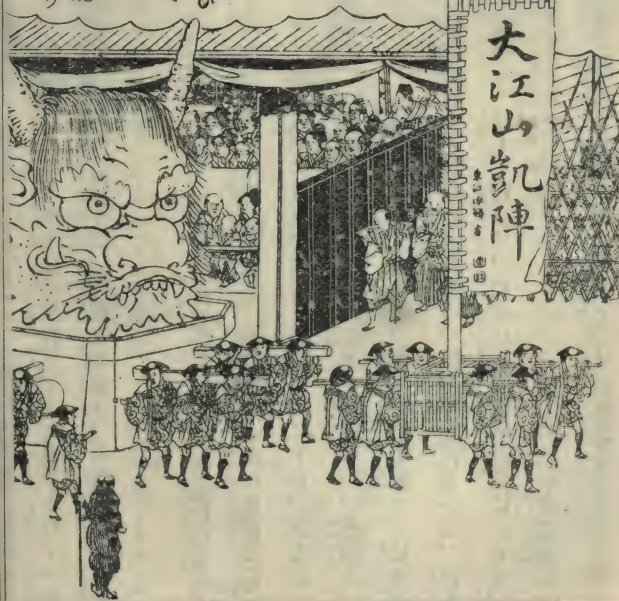
あつと孫の遠近に因て

其名高く

最

美観

たる



萬昌山圓滿寺

湯島六丁目にあり。眞言宗にして、開山は木食義高上人なり。本尊十一面觀

世音、如意法尼の御作なり。法尼は昭和帝の妃にして、弘法大師の御弟子なり。左右に六觀音を安置す。當寺を世に木食寺

と稱す。

寺傳に曰く、開山木食義高上人は、覺海と號す。足利十三代將軍義輝公の孫義辰の息なり。

義輝に子孫あること未だ考へず。日向國に産る。幼より瑞相あるに仍て出家し、肥後國佐土原の福禪寺に入り

て、覺深師に隨從し、木食となれり。寛文八年、衆生化益のために東奥に下り、あまねく靈

地を拜し、こゝかしこに堂宇を建立す。仁和寺宮道永法親王、此事を聞召され、感稱あつて

傳燈大阿闍梨權大僧都法印に任せらる。其後西國に赴くの頃も、大に奇特を顯す。延寶三年

十月、都に上り堀河姊小路多門寺に止宿有りし頃、微疾を患へ、同四年正月廿一日、自ら臨

終の期を知れり。時に諸の菩薩來現あつて示して曰はく、只今は汝が臨終の期にあらず、早

く往生せんと思はゞ、猶大願を企て、普く衆生を化益すべしと云々。仍て同五年江城湯島の地

に至り、彼佛の教に隨ひ、諸人の求に應じて、無量の願を成就し、大に靈驗をあらはす。同七

行す。神前に懸臺をしつらひ、江府の町中より機敷をかけて見物す。北條五代記に曰く、大永四年甲申北條氏綱上杉朝興を攻落し、武州を治むるといへども、合戦の御にて、其年は神事能なく、翌年九月十六日に興行あり、これを吉例として、上方より武松太夫、クレーマツタイフ」といふを呼下し、年々興行ありと云々。しかありしヒリ連綿として相續し興行ありしが、享保の頃より故ありて中絶す。

祇園三社 本社の西に竝ぶ、當社地主の社なり、毎歲六月祇園會あり。

祭神 五男三女 八王子と稱す、六月五日大傳馬町旅所へ神幸、同八日に歸與あり。
素盞鳴尊 大政所(オホマンドコロ)と稱す、六月七日南傳馬町旅所へ神幸、同十四日に歸與あり。
奇稻田姬 本御前(モトゴゼン)と稱す、六月十日小船町旅所へ神幸あり、同十三日歸與。

社家の説に、大政所と稱して南傳馬町の旅所へ神幸あるものは、則ち風土記に所謂江戸神社なりとぞ。故に祭祀の禊、舊例によつて、御城内大手の橋上にて奉幣の式あるも、其舊地なるに依れりとぞ。

風土記曰

豊島郡江戸神社。大寶二年壬寅所祭素盞鳴尊也。神貢百束三字田云々。

當社の境内常に賑しく、詣人たゆるることなし。茶店各崖に臨んで、遠眼鏡などを出して、風景を翫ぶのなかだちとす。殊更近來は瑞籬に櫻樹をあまた植ゑければ、彌生の頃最美

觀たり。

海老原の

こゝろ

久保

夜半

あり

久保

老田

持資



神田明神社

春景集
深夜の瑞雪と
いつともなけり
社あり
盛よみ
ふふ
とれ

鳴はれて
都より
ふふ
とれ



年中行事歌合 釋奠

から人のかしこきかけをうつしとめ聖のときとけふ祭るなり 二位中將

新葉集 同

から人のむかしのかけをうつしきてあふけは高き秋の夜の月 妙光寺内大臣

神田大明神社 聖堂の北にあり、唯一にして江戸總鎮守と稱す。

祭神 大己貴命 平親王將門靈 二坐

社傳に曰く、人皇四十五代聖武天皇の御宇、天平二年の鎮座にして、其はじめ柴崎村に

ありし頃、中古荒廢し、既に神燈絶えなんとせしを、遊行上人第二世眞教坊東國遊化の

砌こよに至り、將門の靈を合せて二坐とし、社の傍に一字の草庵をむすび、芝崎道場と號

す。其後慶長八年、當社を駿河臺にうつされ、元和二年、又今の湯島

にうつさせらる。其儘舊號を用ひて、神田大明神と稱す。

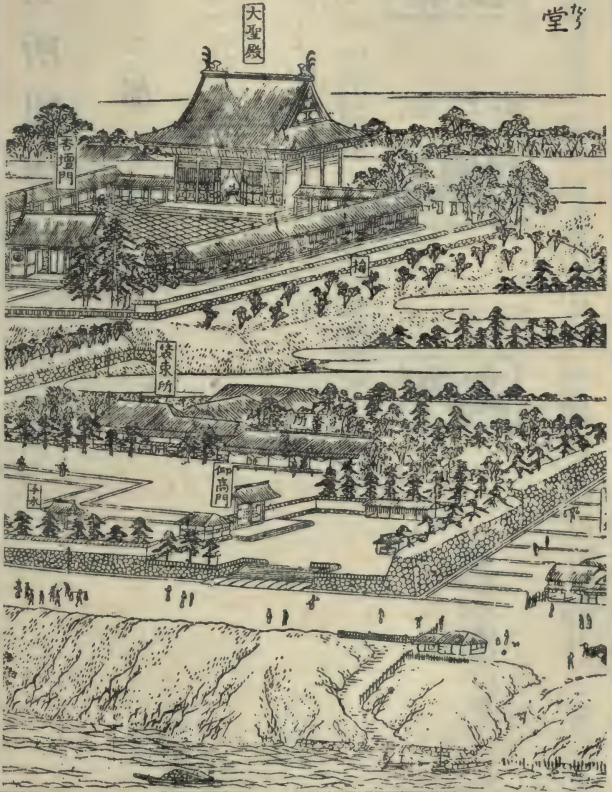
江府神社の祭禮は、永田馬場山王を第一とし、當社これに次ぐ。いづれも公よりの沙汰として、練物、車

て、聖像せいざうならびに顔がん、會そう、思し、孟まうの像ざうを置おきて、先聖殿せんせいぜんと號なづけ給たまひしに、其後そのちくわいろく回祿わいらくの災わざはひに罹かれり。遂つひに元祿げんろく四年、台命たいめいあつて今の地ちに遷うつさせられ、御造營ござうえいあ有りしより已降このかた、春秋しゆんじう二度ごの釋奠しやくてん怠おこることなし。公おほやけはさらなり、國々くにぐの列侯れつこうより獻備けんびの品しなありて、いと嚴重けんじゆうに執行しりぞはる。儒宗じゆそう林祭酒りんさいしゆ、世々よきこれ是これを司つかさどる。本邦ほんかう第一だいいちの學校がくかうにして、實まことに東都とうとの一盛典いつせいてんなり。寛政かんせいの今御造營いまござうえいあありて、結構けいこう昔むかしに倍より。釋奠しやくてん二月、八月上かみの丁ひのぞの日ひに行おこなはる。此日このひ宋六君子そうのりくくんしの畫像げわざうを掛かけらる。從祀じゆうし 程明道ちやうめいどう 邵康節しやうかうせつ 程伊川ちやういせん 張橫渠ちやうかうき 朱文公しゆぶんこう

周茂叔
朱文公

公事こうじ根元こんげんに曰いはく、此釋奠しやくてんは文武もんぶ天皇てんわう大寶元年たいほうげん二月に始はじまる。禮記らいきの王制わうせいに、菜さいを釋おき幣へいを奠おきて先師せんしを禮れいすとあり。此故このゆゑに釋奠しやくてんとはいふなり。後漢ごかんの明帝めいいてい、孔氏こうしの宅たくに幸ゆきして、仲尼ちゆうにならびに七十二弟子ていしを祠まつるとみえたり。又先聖せんせいとは孔子こうしをいひ、先師せんしとは顔回がんくわいをいふ。いにしへは周公こうを先聖せんせいと云いひ、孔子こうしを先師せんしとは申まうしけるを、唐たうの太宗たいそう貞觀二年ていけんねんに、あらためて先聖せんせい、先師せんしとは孔子こうし顔回がんくわいを申まうすとかや。又神護景雲二年じんごけいうんねん、孔宣父こうせんふを改あらためて文宣王ぶんせんわうと申まうすよし、弘仁格こうにんかくに見みえたり。續日本紀つづきほんき學令集解がくれいしゆくげ等らにも又このことを載のせたり。

聖堂



江戸名所圖會

玉衡之部

卷之五

聖堂 せいだう 昌平橋の外、湯島にあり。

本殿 ほんでん 文宣王 ぶんせんわう 左 左 額子 がくし、曾子 そうし 額 がく 大成殿

元祿大樹御筆 げんろくたいじゆおんふで

廊門額 らうもんがく



唐門額 からもんがく



惣門額 そうもんがく



各 おの／＼

持明院基輔卿の筆 ぢみやうゐんもすけきやうふで

寛永十年、尾州亞相公 くわんえいじゅうねん、びしうあしやうこう 義直卿

林家別荘の地に、

今東叡山にある所の山王の社は、昔聖堂ありし地にして、林家別荘の舊地なり。

一度を経営あつ

川口渡 かはぐちのわたし

西福寺 さいふくじ 六阿彌陀一番

紀州明神社 きしゅうみやうじん 觀音堂

川口善光寺 かはぐちぜんくわうじ

梶原塚 かぢはらづか

地藏堂 ぢざうだう 專稱院

鍋匠の圖 なべづくりづ 鍋屋の井

清光寺 せいくわうじ 釋迦堂

若宮八幡宮 わかみやはちまんぐう

豊島の驛 としままやぢ

豊島康家清光之墓 としまやすけいへきよみつのはか

豊島川 としまがは

青雲寺 せいうんじ 船繫松 觀音堂
布袋堂

道灌山 だうくわんやま 蕪虫の圖

根津權現社 ねづ こんげん 清水觀音堂 吹上辨天宮

曙の里

三崎法住寺 さんざきほふちうじ

妙林寺 めうりんじ 田中辨天社 靈驗不動尊 願地藏尊 燈澤

目赤不動堂 めあかふ ぶどうだう

根津權現舊地 ねづ こんげんきうち

駒込大觀音 こまごみおほくわんおん

丸山淨心寺 まるやまじやうしんじ

六月朔日富士詣の圖 むじまうじ

駒込吉祥寺 こまごみきちやうじ

神明宮 しんめいぐう

富士淺間宮 ふじ せんげんぐう

田畑與樂寺 たはたよ らくじ

六阿彌陀四番日 ろくあまたに しぶに

八幡宮 東覺寺 はちまんぐう とうかくじ

圓勝寺 勢至堂 五石松 ゑんしょうじ せうじだう ごいししょう

染井西福寺 染井稻荷祠 そめのゐ さいふくじ ぜんいいなぎみ

西ヶ原無量寺 六阿彌陀二番 にし げはらむりやうじ ろくあまたに 二ばん

昌林寺 末木觀音 しやうりんじ すえぎくわん

平塚明神社 鏡塚 城官寺 ひらつかみやうじん かがみづか じやうけん

同來山の圖 どうらいやまの づ

自鬚明神社 しじひげみやうじん

平塚城跡 ひらつかのしろあと

同合戰の圖 かつせん

犬追物上覽の地 いぬおふものじやうらんち

飛鳥山 あすか やま

音無川 飛鳥橋 ねむしがは ほとりばし

同所酒亭の圖 しゆてい

短冊翁舊跡 たんざくおきなをうのきうせき

王子權現社 若一王子社 飛鳥社 大神宮 わうじ こんげん 若一わうじ ほとりばし ほとり

本地堂 康家清光社 御宮 ほんぢだう かつみや ぎみや

花鎮祭の圖 はなしづめまつり

七月祭禮の圖 さつげい

王子稻荷社 わうじ いなり

裝束島衣裳榎 しやうぶくしまたいしやうえのみ

除夜狐火の圖 おほよそかきつねび

金輪寺 五香湯 きんりんじ ごかうとう

十八講の圖 じふはちかう

石神井川 しやくじがは

松橋辨財天 まつはしべんさいてん

金剛寺 こんがうじ

瀧不動尊 たきふ ぶどうそん

泉流瀧 せんりうのたき

稻付靜勝寺 觀音堂 龜の池 いなつきじやうしやうじ くわんおんだう かめいけ

道灌入道影堂 五葉松 太田道灌富士峯を望むの圖 だうくわんにゅうだう いろはしょう たいだうくわんふじのねをのぞむの づ

赤羽山八幡宮 あかはねやまはちまんぐう

江戸名所圖會 卷之五

玉衡之部 目錄

〔原本十四より
十五まで二冊〕

湯島聖堂 昌平坂

神田明神社

同祭禮の圖

祇園三社

圓満寺

靈雲寺 灌頂堂 大元堂
鐘樓 地藏堂

妻戀明神社

湯島天満宮

湯島神社 地主戸隠
明神なり

麟祥院 二位局御影堂

根生院

三橋 忍川

池の端錦袋圓店

不忍池 看蓮園

中島辨財天 聖天宮

東叡山寛永寺 中堂 竹臺
廊門 雲水塔

番神社 輪藏 法華堂 常行堂 鐘樓 御宮
秋色櫻 山王權現社 學寮 講堂 常念佛堂 宗廟 坊會 忍の岡 二王門跡 開山堂 十月二日開山忌の區 櫻ヶ峯 清水觀音堂

大佛殿 時の鐘 天王社 寶光堂 文殊樓 御本坊 忍岡稻荷社 櫻ヶ峯 清水觀音堂

十月二日開山忌の區 毎月晦日兩大師渡座の圖

清水堂花見 正月三日護國院大黒詣 慈兼大
師影像 同除魔影 慈眼大師眞影 大慈靈

谷中瑞林寺

感應寺 五層塔 笠森稻荷社
長弘寺壽老人堂

本行寺 道灌斥候塚
三十番神堂

螢澤 宗林寺

日暮里 經王寺 長相寺 修性院 番神社

妙隆寺

七面大明神社

養福寺 百觀音 西山宗因塚

諏訪明神社

淨光寺 人麻呂祠 地藏堂

いへる意によりて、寺を東光寺と號けらる。足立ヶ原に古塚あり。黒塚と號く。塚に虜鬼あり、窟を宅とす。殺氣天を凌ぎ、猛威人を挑む。慶師道力を勵しこれを伏すと。

黒塚 くろづか おほみやのえきひかはのやしら
大宮驛氷川社より四丁あまり東の方、森の中にあり。此塚より南の方百歩計を隔てて、東光坊の

往古東光坊阿闍梨祐慶、惡鬼退治の地なり。昔は足立ヶ原と唱ふ、世俗奥州の安達ヶ原とす

るは誤なるべし。奥州の黒塚は、二本松と八丁目の間、舟引山(フナヒキヤマ)の此方にあり。此所も奥州への海道なれば、混じ交へてしかい

へるならん。足立原の黒塚を武藏國とするは、紀州那智山の記にも見えたり。

潮田出羽守源資忠之墓 うしほだ 足立原の黒塚を武藏國とするは、紀州那智山の記にも見えたり。
同良の方十丁計を隔つ。資忠の城跡にして、資忠は足立郡大宮壽能城

主なり。其先清和天皇九代後胤、從三位右京大夫兼兵庫頭頼政十九世の嫡流、太田美濃守三

樂齋資正第四の男なり。天正十八年庚寅四月十八日、相州小田原において討死す。因て其

家臣北澤宮内なる者、恩寵餘澤の深きを思ひ、私にこのところに塚を營む。元文三年戊午、

資忠六世の嫡孫潮田氏資方、再び北澤某に命じて墓碑を造らしむるの旨、其碑銘に詳な

り。

そののちしゆじやくてんわうぎょう
其後朱雀天皇の御宇に至りて、貞盛、繁盛、兼任等の兄弟、將門退治の爲東國に發向す。其

時日本武尊の先蹤に准ひ、當社に詣して一通の願書を籠め奉る。果して靈應を得たり。又治

承四年、頼朝寄願の旨あるにより、社頭を修營ありて、大宮領永三千貫文の地を寄附せられ、

社中亂妨狼籍なかるべきが爲、制札、および御教書を賜ふ。然るに天文、永祿の頃、東國大

に亂れ、爭戰屢にして、社頭荒蕪したりければ、天正十九年、當社の荒廢を歎き思し召れ、

御當家より社壇を重修なし給ひ、又慶長九年、足立郡にて、高鼻、および上落合等の地を合

せて社領に寄附なし給ひ、朱章の明擧を下され、官造の宮社に列せしむ。

大宮山東光禪寺

同所大宮宿宮町の右側にあり。往古は天台宗なりしが、今宗風を轉じて曹

洞派の禪林とす。

染谷の常景 本尊は金銅の藥師如來、一寸八分ありて、木佛の藥師の胎中に收

む。開山は紀州熊野那智山の東光坊阿闍梨祐慶なり。

長寛元年癸未正月廿八日遷化、傳聞、天台宗東光坊阿闍梨宥慶法印、熊野那智山下瀧宮住侶、西家三男也。蓋足

立郡者光明房依爲代々之旦那、所令下向、此時大宮黑塚之惡鬼、以法力令退散云々。寺説に云く、祐慶は西家の三男にして那智山下瀧宮といへるに住侶たり。長徳年中西三條の家より繼るゝ故に、瀧宮の西殿と申傳ふ。今猶しかり。就中、西の家は熊野上綱の正福なり

と云。鳥羽院の御宇、關東に下向し、法力を以て一字をひらきて、熊野の威光を關東に耀すと



黒塚くろつか
潮田出羽守うしほのりょうでん
城趾しろあし
同墓どうぼ
碑い





大宮驛 おみやのしき
東光寺



給。仍祈願如件

天慶三年正月廿五日

平貞盛敬白

足利將軍尊氏公御教書

一通

小田原北條家神領寄附之狀

一通

社記に曰く、當社は本朝武運の守護神、治國利民の神域として、鎮坐年舊りぬ。二千餘年の星霜、和光これ新なり。利生德普し。東方八洲の蒼生、ことごとく神威を仰ぐ。こよを以て世々の武將も崇敬を嚴にして、却敵勝利、國民安泰の祈誓を掛けたまはざるは稀なり。誠に神徳の日々に新に、年々に盛にましますこと、誰人かこれを仰がざらんや。何の輩か利物の和光を蒙らざらんや。されば、景行天皇の御宇、日本武尊東夷征罰に赴き給ふ頃、當社に御祈誓ありて、程なく凶徒を鎮め給ふ。其後聖武天皇の御宇、諸國に一宮を選定なし給ふとき、武藏國にては當社を以て一宮となさしめ、且奉幣使を向けらる。又醍醐天皇の御宇には、神社に大小の社格を定められ、當國四十四座の中、當社を選んで大社二座の中の冠たらしむ。

をよめる。

老いらくの身をつみてこそむさし野の草にいつまで残る白雪 持 資

平貞盛願書一通

前太平記に、上平太貞盛および金弟繁盛兼任と共に、將門退治として東國に發向ありし時、當社に詣ててものく上差の鎧一筋づつを願書にそへて寶殿に籠めらるることあり、又其時の神職兵部少輔正範と

あり。社記に兵部權大輔富則といひけるあり。願書の文に曰く。

敬白 祈願事 夫以氷川大明神者。本地冥慮之月。明晶于東方瑠璃

之光。垂跡化現之德。新利于南瞻卒土之濱。爰頃年之間。有平賊將門。

恣取掠八州。惱亂萬民。自稱親王。私置諸司。藏如王道。忽諸人望。暴惡

莫甚焉。然愚父國香。不忍見彼積惡。起兵而欲鎮凶徒。自把斧鉞。致一

戰之日。剩中矢。聿於彼戰場殞命。自此逆賊威漸飲四海。禍亂起于茲

國。民不安居。然今貞盛繁盛兼任等。苟雖以不肖之身。起一舉之義兵。

欲誅朝敵。報父仇。非神靈加護之力者。爭得勝於瞬目之中。所仰神威

代干戈。怨退四維。願滿一時。丹心有誠。立鑿無誤者。先令見一之瑞驗

年戊辰所祭。素盞鳴尊。大已貴。奇稻田比咩。合三座也。云々。

東鑑曰

治承四年庚子十一月十四日壬戌。土肥次郎實平。向武藏國內寺社。是諸人亂入清淨地。致狼籍之由。依有訴。可令停止之旨。加下知之故也。云々。

同書曰

安貞三年己丑十一月十日。依去四日雷電。爲世上御祈。近國一宮被立奉幣御使。相摸國駿河守。武藏國武州御使。中略各被進神馬御劍等。又於社壇。可轉讀大般若經之由。被仰別當等。助教師員源正忠季氏等奉行之。

慕景集

ひかは氷川の社奉納やしろほうなふの和歌わかすよめられはべりて、のこんのゆき殘雪といふこと

ほんぢだう 神池ミクタンシの比にあり。觀音を本尊とす。社僧五宇あり。
本地堂 江戸護持院末新義眞言宗にして、本地供を主務すといへり。

延喜式神名帳曰

武藏國足立郡氷川神社。名神大月次新嘗云々。

一宮記曰

武藏國足立郡氷川神社素盞鳴命云々。

神名帳頭注曰

武藏國足立郡氷川社。日本武尊東征之時。勸請素盞鳴尊也云々。

三代實錄曰

貞觀十一年十一月十九日壬申。授武藏國從四位下氷川神社正四位下云々。

武藏國風土記曰

足立郡氷川神社。神田百束十字四圍田。觀松彦香殖稻天皇御宇三

簸川原 ひかはのほら 其地今知るべからず。宮本社より大宮の邊を指して云ふべきか。

武藏國風土記曰

足立郡簸川原。出鮎鰻諸鮮芹菜胡香需。旱水共爲民用。云々。

右の如くあれば、御沼の邊、水澤の地を惣て呼びたるごとく見ゆ。又大宮の南の方、道の左右三十丁ばかりの原を、大宮原とも唱ふれば、若くは其邊までをいへるなるべし。

大宮氷川神社 おほみやひ かはのじんしや 大宮驛の中 おほみやのえき うち 此所を氷川戸庄 かひだう 街道の右の方に、鳥居立石あり。これより十八丁入り

りて御本社なり。神領三百石、神主角井氏、岩井氏これを奉祀す。祭神三座、本社ほんしやの右は素

蓋鳴尊 さのやのみこと 男體の宮と稱す、おなじ ひだり 奇稻田媛命 かぬしつのみこと 女體の宮と稱す、是本宮は大巳貴尊 おほあなびちのみこと を齋ひ奉る。子宮

と稱す。これ即ち武藏國第一宮にして、延喜式名神大社、大月嘗、新嘗にいひなみに列する第一の官社たる

所なり。

荒波々幾社 あらは はきのやしら 本社ほんしやの傍に在り。手摩乳、足摩乳二神を記る。武藏國風土記に、觀松彦香殖稻天皇

宗像社 むなかたのやしら 同し橋の左の方にあり。祭神田心姫たごとりひめ 湍津姫たづづみひめ オキ

五山祇社 いつやまつみのやしら 本社ほんしやの後の方にあり。大山祇、中山祇、隨山祇、正勝山祇、關山祇、以上五祠を記る。

笠氏、世々これを奉祀し、社領五十石を賜ふ。國初の頃、嘗て神祖も神主の家に入れたまひ、

神領及び神寶等御寄附あらせ給ふ。古器、古文書等神主の家に傳へて、これを藏すといふ。

御沼 舊事記に水沼に作り、又は本社鳥居の前にあり。當社の御手洗にして、昔は長さ四五里ばかり

廣さ二十餘町ありしとかや。享保十二年に官命ありて、此沼を新田に開發せしめらる。今は

僅に沼の形を存す。然も猶沼の水の中より、九月八日大神事のまへ、又は十二月大晦日の夜

など、時として龍燈現する事ありといへり。

例祭九月八日と、六月十四日なり。就中九月八日は、船祭とて、御沼の中へ神輿を船にて渡

し奉り、沼の中にて神酒を供するの儀式あり。上代の瓶子、今猶神主の家
に藏す。最も稀古の物なり。此日神幸の時、午前には

北風にて船おのづから沼の中に至り、選輿の時は必ず南風に變りて、神輿の船また本の岸に

到り著く。此事振古違ふことなしとかや。

大智山文殊寺 大般若堂と號す。社地より一丁程 西南の方に在り。社寶大般若經一部 持統天皇勅して納め給ふ所といふ。昔時

當社において、河越、仙波、中院の住侶等をして、大般若經を轉讀せしめられしことあり。經卷の末に、其頃の
行者の名を注す。今に至りて、毎年正月八日、天下泰平の御祈禱として、文殊寺に於て般若會修行することあり。

るが、靈應れいおうむなしからず。依よつて社やしろを造營ぞうえいあつて、延元二年二月五日、社領しゃりやうの地ち五箇村ごかむらを附ふせらる。又貞和ぢやうわ、觀應くわんおうの間あひだ、宮方みやがた蜂起ほうきす。此爲このために寺社じしゃ悉ことごとくく廢亡はいぼうす。依よつて康曆二年、佐々木近ささきみぢ江守源持清えのりみなもとのちよきよ、當社たうしやを經營けいやうし、至德二年正月、二箇村にかむらの地ちを附ふしたりといへども、天正十八年、小川原北條家滅亡めつぼうの時の戰たたかひに、神寶しんぼうも共に散失さんしつし、神領しんりやうも又また自おのづから廢はいせり。然しかるに御入國ごにこくの頃ころ、忝かたじけなくも神祖しんそ當社たうしやの來由らいゆを聞きこしめされ、改あらためて美田山林等びでんさんりんとうを封ほうぜられ、竟つひに慶安二年、朱章しゆしやうを下くだし賜たまふ。

子安清水こやすし 同所長ちやうくわうぜんめうてんじ 光山妙典寺くわんめうてんじにある所の池いけをいふ。旱魃かんぱつにも涸かれずといふ。相傳あひつたふ、日蓮にちれん

大士だいし、此池水このちすゐをもつて安産あんざんの符ふを書かき給たまひ、時光ときみつが妻つまに與あたへられし加持水かぢすゐなりといふ。

宮本みやもと簸川大明神ひかわだいめいじん 宮本郷みやもとごう大宮驛おほみやえきより三室山みむろやまの南麓みなみふもとにあり。土人どじん宮本みやもとの簸川ひかわ社しゃと稱なづへ、又

女躰にょたい宮みやと號ごうす。祭神さいじん大宮同躰おほみやどうたいにして、本宮ほんみや大巳貴命おほみづかひのみこと、右素盞鳴尊みぎすさなみのりのみこと、左奇稻田媛命ひだりくしいなだひめのみことを齋いはひ

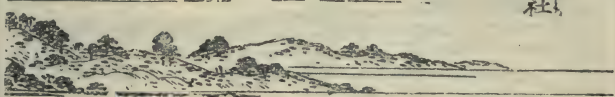
祀まつる。當社たうしや山中杉檜やまなかすぎのき多おほく、社頭しゃとう巍然げんぜんとして瑞籬みづがき苔滑こけなめらなり。甕かめが鼓つづみの音おと、朝あしたの祈いのり、夕ゆふべの

報賽かへりまつ、すゞしめのころゑ、山林さんりんにひゞきて、さながら神感しんかんの興きよすを催もよほすらんといと貴たふし。神主武かみぬしむ





大宮驛
氷川明神社



氷川宮大門先
ひがしのみやまのいんさき



鎌倉大草紙に曰く、長祿元年六月廿三日、澁川左衛門佐義鏡を大將として、武藏國へさし下さる。是は公方の近親にて、代々九州探題の家なれば、諸家も重き事にもひけるうへ、祖父左衛門佐義行は、久しく武藏の國司にてあり、足立郡に賦といふ所を取り立て居城にして、今に至るまで此所を知行しければ、かたゞ此仁可然とて、義鏡を探題にしたまひ、御下知を通じ、武州上州の兵どもに申聞かせ、成氏を退治して上杉を管領とし、關東を可治趣を觸れわたす云々。

調神社 つきのじんじや 浦和の驛 えき より三丁計 はかりこなに 此方 きしむら、岸村と云ふにあり。社 やしろ は街道 かいだう より右 みぎ に立 た せたまふ。今世 いまよ に

月讀宮 つきよみのみや 二十三夜と稱せり。別當 べつたう は月山寺 げつざんじ と號して、浦和町 うらわまち の玉藏院 ぎよくさういん より兼帶 けんたい す。新義 しんぎ の眞言宗 しんごんそう 三寶院 さんぼういん の宮 みや に座す。

例祭 れいさい は九月廿日なり。社 やしろ の向拜 かうはい に掲 か ぐる調神社 つきのじんじや の額 がく は、松平信定 まつだひらのふさだあせん 朝臣 あそ の筆跡 ひつせき なり。

祭神 さいしん 月讀命 つきよみののみこと 一座 いざ、本地勢 ほんぢせい 至菩薩 さいぼつさつ 此本地佛によりて廿三夜の稱あり。

延喜式 えんぎしき 神名帳 かみなぢう 曰

武藏國 むさし 足立郡 あしたち 調神社 つきのじんじや 云々。

武藏國 むさし 風土記 ふうどき 曰

足立郡 あしたち 大調郷 おほつちうぢやう 調神社 つきのじんじや。神田 かみだ 六十束 むそく 二字田 ふたじ。稚 わか 日本 にっぽん 根子彦 ねこひこ 大日天 おほひ

皇 みかど 丙酉 ひのち 三月 みづか 所祭 ところまつり 瀬織津比咩 せおりつひめ 也。有 あ 神 かみ 戸部 とべ 巫戸 みこ 云々。

社記 しゃき に曰 いは 當社 あたうぢや は崇神 すうじんてんわう 天皇 ちやくぐわん の勅願 ちやくぐわん なり。後建武 のちけんじ 三年 さんねん、足利尊氏 あしかがたかうぢ、凶徒 きようざつ 追罰 おひばつ の宿願 しゆくぐわん ありけ



三室村
元鏡河神社





調神社
延喜式内の
神社あり今
誤て月讀
宮三夜と稱
し



まひ、是を授けて曰く、信心深からんには、必ず安産ならん、又生るゝ所の兒も男子なるべし、長なるの後は、報恩のため出家せしめよと示して、此地を立退き給ふ。其日時をも隔てずして、安産あり、生るゝ所の兒も又男子なりしかば、時光悦ぶ事限りなし。殊に大士の曰ふ處符節を合せたるが如きを奇とし、其兒を徳丸と號く。其時の曼陀羅、今猶傳へて當寺の什寶たり。又安産の加持子安の妙符は、日蓮上人より傳受し、今に相承す。時光是より宗教を尊み、其頃上人の憩ひ給ひし地を封じて、一字の精舎を開創せんとするの大願を發起す。同十一年甲戌、上人鎌倉の赦免を得給ふ後、身延山に隱栖ありしかば、弘安二年己卯、時光其子徳丸を具して延嶺に至り、上人に謁して徳丸を出家せしむ。當寺第四世日賢上人是也。時光も又祝髮して日徳と號す。此時上人手書の本尊を與へたまふ。今猶傳へてあり。世俗これをも子安の本尊と稱せり。その後弘安三年庚辰に至り、竟に志願の如く當寺を創建す。上人日向師をして開山たらしめ、時光自ら相繼ぎて當寺に住す。日徳上人これなり。

澁川左衛門佐義行居城舊趾

蕨の驛舎の邊にてあるべしとおほしけれども、今其地さだ

かならず。

らしめ給ひし鬘像なり。

寶藏ほうざう 釋迦堂の後、池の中島にあり。當寺第一の寶、子安曼荼羅、其餘寺寶を收む。

開山塔かいさんたつ 本堂の左にあり。日向上人、及び開基隔田五郎時光、四世日賢導師の石塔も共に並びてあり。何れも當寺三十三世の住侶日統師送立する所にして、碑陰に其事を彫り付けてあり。又同じ石塔の間に、觀應元年十一月とありて、法華の首題を彫りたる古

碑二枚あり、下に日蓮大聖人とあり。其餘永觀至徳天正等の古碑あり。

寺寶子安大曼陀羅じほうこやすおほまんだら 宗祖上人の眞筆なり。此曼陀羅の加護によりて、時じ慈眼大師消息じけんたいしせうそく へ贈りたまひし手簡。墨田すだ

五郎時光鞍鐙ごろうときみつくらあぶみ 法華經開結ほけきやうかいけつ 時光宗祖上人に祈念を乞ひ、自らの室の難産をのがれし利益に。鬼子母神影きしもじんのかげ 日賢上人にっけんじゆん 常に鬼子

母神を尊信し、十三歳の年法華首題の文字を。宗祖上人眞骨舍利しゆそ しんこつのかしやり 上人入滅の時、時光の頰に應じ、當寺開山まんじやう 曼陀羅まんじやう 當寺

日向上人にちかうじゆん 日蓮上人畫像にちれん ぐわざう 土佐光信の筆と云ふ。法華經一卷ほけきやう ぐわん 紺紙金泥なり。時光の室、後に妙徳尼と號し、法恩のた

寺記に曰く、文永八年辛未、日蓮上人官府の命により、法の爲に佐渡島に謫せられ給ふ。其

年十月十日、上人相州を出でて、武州桑川に宿し、翌十一日新倉に至りたまふ。時に新倉の

城主墨田五郎時光、其室の難産なるを上人に告げて、救苦の祈念を需む。上人是をあはれみ、

路の傍の叢祠に坐を設け、邊りの清泉を汲んで硯の水とし、曼陀羅、及び安産の符を書きた

新羅寺

子安の釋迦如来
 子安の觀音
 當寺
 安産の御
 符とどろり





田武藏守義宗公、數度の合戦を企つるといへども、家運衰へ、軍毎に敗走して、家子郎等數

多戦死す。依て義宗公此地に至り、一字の薬師堂に入りて、假時に僧となり、忍びて年月を

送り給ひしかども、時運再びひらくる期なきを歎じ、終に發心し給ひ、此所に草庵を結び、

兼て護持する所の佛躰を以て、薬師堂の本尊の胎中に籠め、法華經千部書寫し、終に應永二十

年癸巳三月朔日、壽齡九十一歳にして逝去ありしと云ふ。則ち當寺の開基にして、自性院義

英源宗庵主と號す。昔は薬師堂のみ存して、いづれの世より在りしと云ふを知らずとなり。寛永の頃、あらたに一字の蘭若とし、薬王の二字を寺號とすといへり。

長誓山妙顯寺 戸田の渡口より二十丁あまりを隔てて西の方、新會村にあり。戸田の羽黒權現より此所へ近道あり。

日蓮宗の一本寺にして、弘安二年庚辰、當國新倉の領主隅田五郎時光といふ人開基す。寺記に

時光は惟康親王に屬し、新倉に住す。弘安二年甲州身延山に至り、日蓮上人に謁して、開山は六老僧第四位民部阿闍梨日

向上人なり。宗祖上人の旨に任せ、當寺の開山となる。正和三年甲寅九月三日、總州法華谷の草堂に於て示寂、世壽六十一。

本堂日蓮上人の像を安置す。中老僧日法上人の作なり。世に子安日蓮上人と稱せり。等身にして、物を腰をかけられたる御影なり。

釋迦牟尼佛堂 本堂より左の方にあり、本堂より廊を設く。世に子安釋迦如來と稱す。比靈像は、當寺の開基時光が家に累世傳はる所の念持佛なりと云ふ。文永八年、其妻難産を愁ふる頃、時光の夢に告げて日蓮上人の妙符を乞はしめ、安産な

燒米坂

此地燒米
之聲く家
あふゆよ
今此
浦和坂
あり





戸田川渡口
羽黒権現宮

水源八間川中にして
校より谷生し下
流ハ荒川といひ
戸田川とも云く
考ま毎りあり
此川水磧志村を
川ひよを渡りて
依其頭ハ堤傍ハ
江ノ上入廻りて
久へる昔堤村
を馬せつくあり
今も土水の時此
村にてはる



戸田
羽黒靈泉

採の木のヤ
 間控より
 靈泉涌
 出と詣人
 病と漢得
 若よ服飲
 験ありと
 て近頃を
 本草個司
 判元河と
 わりて樽名
 と上他小
 っくわい



遊石山新光寺 觀音院と號す。同所西の方、驛舎の入口、河原宿といへる地にあり。新義の

眞言宗にして、成木の安樂寺に屬す。本尊正觀音は、立像一尺餘ありて、行基大士の作と

いふ。相傳ふ、建久年間、賴朝卿下野那須野、及び三原に狩し給ひし時、設られし假家の跡

の地を、當寺の本尊に附せらる。六石の地、其後星霜を経て、兵亂の砌、其地を他に掠とられた

りに、元弘年間、新田義貞公、北條高時征罰の頃、當寺に至り、本尊に祈願を籠られし後、

鎌倉に攻入り給ひ、高時を亡し給ひしかば、靈像の加護なる事をあふぎ貴み、凱歌の後、前

に掠られたりし六石の地を再び寄附ありしより、連綿として今猶當寺に附屬せりと云ふ。

道興准後の回國雜記に、所澤なる觀音寺にてささえとり出したるとあるは、當寺の事なる。什寶に新田家寄附の鞍あり。黒漆を以て塗りたる上に、中

黒の紋を描畫にす。

東光山藥王寺 自昌院と號す。同所北の横小路を入りて裏通り、道より向ふ側にあり。曹洞

派の禪宗にして、桑村の永源寺に屬す。中興開山は孝山、大舜和尚と號す。藥師堂の本尊藥師如來は、坐像三尺計り、

行基大士彫造する所なりといへり。蓋座は金の針金を以て造り、極めて妙巧なりといへり。されど祀佛にして容易に寶龜を開く事なし。相傳ふ、元弘の頃、新

田國雜記

とこのほととぎす
 甚てよくあがり
 小福泉と云ぬ伏
 観音寺と云ぬ
 名と云ぬ御
 小葛嶺と云ぬ
 とのさうなり
 ちんちんを
 仇傳

手控ひの

ののの

とん

蛭の

中老海

うね

道真准后



所澤
藥王寺



所澤卯花



輿大盤石よだいばんじやくの如くにして更に動く事なし。右幕下其事うはくか そのことを聞しめされ、鎌倉かまくらは本尊有縁ほんそんゆうえんの地ちにあ
らざるべしと、奥州あうしうに還されん由命よめいあり。是よりして其他そのちを車返くるまがへしげら村むらと稱すとなり。車返村車返村、今、今
府中府中の近里の近里
にあり。後靈示のちれいじによりて、此堀の内村このほり うちむらに安あん奉りたりと云ふ。當寺門當寺門の入口に、の入口建長八年の古碑あり。昔は形ばかり
の草庵の草庵なりしが、天正十年天正十年勅賜天德禪師榮芝願富大和勅賜天德禪師榮芝願富大和
尚の時一寺となる。よつて天德禪師を開山と稱す。

所澤

或は野老或は野老、此地は秩父街道このところ ちちがかいだうの驛舎えきしやにして、入間郡いるまごほりに屬せり。三八の日市いちありて賑にぎはへり。江

戸四谷大木戸しよよつや おほきしよより此所迄このところまでは、西にしの方七里かたあまりあり。河越河越へ四里、青梅へ五里ありといふ。

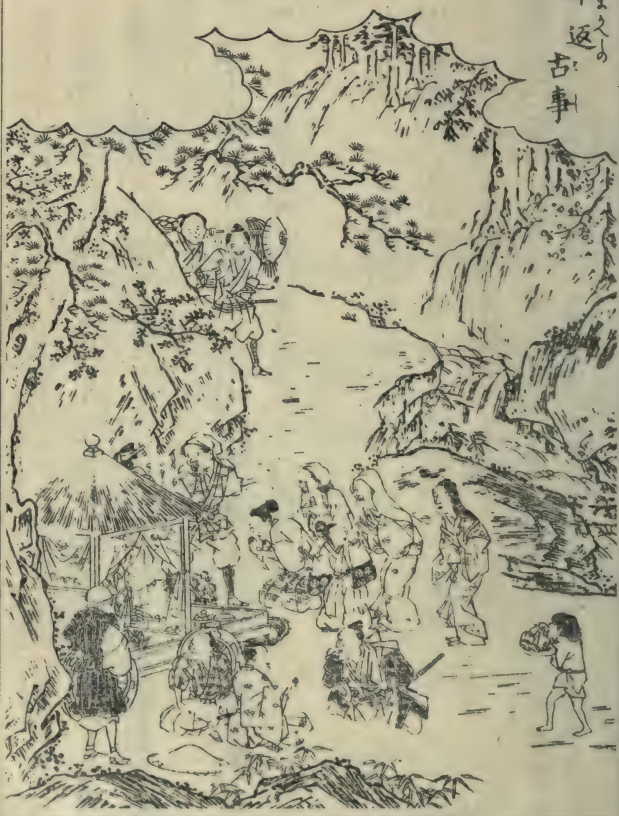
回國雜記

ところ澤ざはといへる所へ遊覽いうらんにまかりけるに、福泉ふくせんといふ山やま
伏ふし、觀音寺くわんおんじにて酒筒さきえをとり出しけるに、薯蕷やまのいもといへるもの
さかなに有りけるをみて、俳諧はいかい、

野遊よびのさかなに山のいもそへて堀りもとめたる野老澤このざはかな 道興准后

按ずるに、前に福泉といふ山伏ありと記されたるは、今廢して、わづかに此地の畑の字(アザナ)に残りて、福泉坊塚と號するのみ也。
ゆるに土人といへども、今は其名をしる人まれになりゆきたり。

車返の古事



べし。けふは仙波の御堂に云々。かくいへるも此淺間堀兼の事なり。其餘にも堀兼の井と稱するものあり。此地より六丁斗南の方に、二十歩ばかりの間窪める地あり、是をも堀兼の井と呼べり。又北入間村にも、堀兼の井と唱ふるありて、字を七曲りの井と號す。渡り六七歩にあまれるもの、農家の傍にあり。土人相傳ふ、文永七年に堀り穿つ所のものにして、古へは一村の人ことごとく此井の水を汲みたるとなり。されども、後世井路崩れ損じたる故、今は所々に井をまうけて、此水を汲む事なし。よつて井の繞りには、雜樹繁茂して鬱蒼たり。又其傍に、文永文保寛正等の年號を刻せし古碑を存す。すべて堀兼の井と稱するもの、乙女新田及び高井戸等の地にもありといひて、堀兼の井一所ならず。再び按ずるに、武藏野の廣莫なる、古へ水に乏しき故に、所々に井を堀り穿つといへども、容易に水を得る事かたかりければ、かくはなづけけるならん。されば此井一所に限るべからずと云ひて可ならん歟。

還車阿彌陀如來

堀内村東光山來迎寺

二股海禪寺の未なり

といへる曹洞派の禪寺に安置す。

本尊阿彌

陀如來は立像三尺、

脇士觀音、

勢至の兩像は、

長二尺ありて、各佛工運慶の作なり。

本尊臺座共に唐草

に龍膽(リンドウ)の紋を細密に描畫にしたるものにて、裝飾の美麗いふばかりなし。龍膽は世俗儼りんだうと云ふもの是なり。

相傳ふ、

往古奥州伊達の秀衡、

佛工運慶をして、

一刀三禮にして、

彌陀、觀音、

勢至、

一光、

三尊の佛軀を造らしむ。

點眼供養の日、生身の

如來現然として來臨まし

く、

光明を放ち、新佛を照し給へば、

新佛も又光明を放ち給へり

となり。其奇特世に著く、

遠近の道俗歸依渴仰せしかば、

右大將賴朝卿是を傳へ聞き給ひ、

懇請頻なり。

秀衡祕安の靈像なれども、

將軍の嚴命默止がたく、

速に承諾し、

蓮輿を裝飾、

武士數十人をして靈像を鎌倉に贈りまゐらせんとする途中、武州府中の邊に至りけるに、蓮

來迎寺



佛おもかひぞかたるに残る武藏野や堀兼の井に水はなけれど 道興准后

昔たれ心づくしの名をとめて水なき野邊のべを堀兼の井ぞ 同

やせの里は、やがてこのつどきにてはべり。

里人きよひらのやせといふ名や堀兼の井に水なきをわびて住むらん 同

北國紀行

ほりかねの井みちか近き所ごころにて、

そことなく野はあせにけり紫も堀兼の井の草葉ならねど 堯 惠

枕の草紙

井みは堀兼ほりかねの井み、走り井はしは相坂あふさかなるがをかしき云々。

土人傳どじんつたへ云ふ、往古日本武尊東征そのかみやまだのみのこのとき、武藏野水乏むさしのすづまらしく、諸軍渴しよぐんかつに及びおよびければ、尊民みことたみをし

て此所こゝ彼所かしこに井みを掘ほらしむるに、終つひに水みづを得えざれば、龍神りうじんに命めいじて流ながれを引ひかしむるとなり。

今の不年越川トシコサズガハ（トシコサズガハ）
或は入間川の事なりともいへり。

按ずるに、太平記に、元弘三年五月十五日、義貞武藏野の戦ひに打負けて、堀兼をさして引退くとあるは、此地の事をいへり。又元和十三年の春、光廣卿の紀行にも、廿三日は山の端しちぬむさし野にわけ入る。（中畠、堀兼の井は右に見て通る。決定知近水心にかぶ

いかでもと思ふ心は堀兼の井よりも猶ぞ深さまされる
伊・勢
夫 木

武藏なる堀兼の井の底淺み思ふ心を何にたとへん
爲 相
家 集

くみてしる人もありけんおのづから堀兼の井のそこの心を
西 行
拾 玉 集

今はわれ淺き心をわすれ水いつほり兼のいつくなるらん
慈 鎮
連歌良材

みち 中空なかそらぞむさし野の原
人による堀兼の井や法の水
肖 柏

回國雜記

堀兼ほりかねの井見みにまかりてよめるは、今は高井戸いたかひらといふ。

井ゐと稱なづせり。かたはら傍かたはらに、そのかみかほえぬきもごころ往古川越秋元侯の家士岩田某建る所の碑ひあり。たか高さ五尺餘、そのぶんき其文左の如し。

此凹形之地。所謂堀兼井之蹟也。恐久而遂失其處。因石井欄置塲中。削碑而建其傍。併以備後監。

里語堀而難得水。故云爾。兼通難未知。只從俗耳。

寶永戊子年三月朔

千載集

ほふし ぼんぜんけんしつご ねいけつちやうちごんする
法師品漸見濕土泥決定知近水のころを

むさし野の堀兼の井もあるものを嬉しく水の近づきにけり

俊成

宇治百首

むさし野や堀兼の井の深くのみ茂りぞまさるよもの夏草

冷泉太政大臣

淺からず思へばこそはほのめかせ堀兼の井のつとましき身を

俊頼

井の兼郷



千載集

むさし
せの

源

の
井も

あるとの
と

うれしく

水の

辺

つらよ

ら

復成



按ずるに、相州鎌倉松ヶ岡過去帳に、天文七年十月七日、生賢(オヒミ)御所左兵衛督義明八正院空善道哲と注したり。空哲の二字を分け、空善道哲とせし歟。然らばこの古文書は義明より、二見將監へ賜ひしものなるべし。花押をもて考ふるに、義の字の如し。されど義明の花押は、花押藪、纏花押藪、古押藪等の書にもこれを漏せる故に、考ふる所なし。猶他日訂正すべきのみ。

箱の池

箱根ヶ崎の驛舎の西北數百歩にあり。

此地は八王子より野州日光山への通路にして、六七月の間は、奥羽等の國々より、相州大山へ登らんとする輩、過半こくに出征る故に、其頃は

往來頗る多し。箱根権現を以て鎮守とする故、箱根ヶ崎と稱したるか。或は箱根ヶ崎と號する故に、此御神を勧請せしや、今知るべからず。

古へは池の周圍三十丁あまりありしとなり。今

は新墾して悉く耕田となり、又は林叢と變じて、纜に凹形茂草の地となり、松風の響は波瀾

にかはり、纜に其、佛を存するのみ。

今方四五十歩ばかりの池の中に小嶼ありて、辨天の小祠を營このち、尤も佳味なり。此地東北の岸

頭に起る所の一峰は、則ち狭山の首にして、東に連る事凡そ三里餘り、山の東の終りとせず。故に此

池を、土人狭山の池とも稱せり。

冬深み箱の池邊を朝行けば氷の鏡見ぬ人ぞなき

知 經

堀兼井 河越の南二里餘りを隔てよ、堀兼村にあり。淺間の宮の傍にある故に、是を淺間堀

兼と號せり。此社は、古への鎌倉街道にして、上州信州への往還の行路なり。今の宮は、慶安中松平豆州侯建立なし給へり。別當を慈雲庵と號す。河越高林院の持なり。淺間の祠の左に凹かなる

地有りて、中に方六尺ばかりに、石を以て井桁とし、半土中に埋れたるものあるを、堀兼の

兼と號せり。此社は、古への鎌倉街道にして、上州信州への往還の行路なり。今の宮は、慶安中松平豆州侯建立なし給へり。別當を慈雲庵と號す。河越高林院の持なり。淺間の祠の左に凹かなる

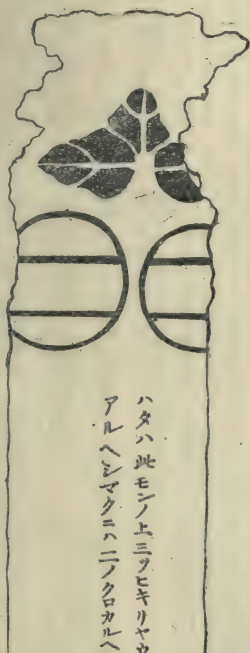
文書、及び旗幕の注文書等を藏するものあり。鍛冶職を業とする儀右衛門といへるは、二見將監といふ人の後裔なりとて、其家に藏す。又此岡の根に
 諏訪の神祠ありて、石劍を神體とす。其實青く、銅鐵の如し。其古文書に曰く、

先日小室筋御働之時走迎之由有證人中旨神妙候仍大刀一腰遣
 之候。於向後彌可相稼者也。狀如件。

十一月二日

空 哲 判

二見將監殿



ハタハ此モノ上三ツヒキリヤウ
 アルヘシマクニハ二ノクロカルヘシ

開山塔 かいさんたふ 七社権現の後を開山塔と稱すれども、只其唱のみにして、塔の形を存するにあらず。開山塔の號も、舊記亡びてしがたし。もししくは中興尊海上人の廟塔ありし地ならん歟。

當寺往古は大伽藍にして、鎌倉將軍家累世の祈願所たりしとなり。其頃は十二員の坊舎あり

て巍々たりしが、物換り星移りて、今はその名のみ存して、悉く田園の字に残れり。勝樂寺を

するも、支院に對しての稱と覺し。又大坊の西南、堂地入(ダウチイリ)といへる所に、古き瓦を穿ち出す事あり。古へ伽藍の證尤も著し。又文永嘉元文正等の古碑數枚を存せり。

按ずるに、日本紀に、敏達天皇元年壬辰夏四月、高麗の使人來りて表疏を上る。其表疏扇羽(カラスバ)に書けり。諸の史(フヒト)を召しつどへて讀ましめんとす。三日におよぶども、皆讀む事あたはず。爰に船史(フネノフヒト)の祖王辰爾と云ふものありて、羽を飯氣(イヒケ)に蒸して、鼠(ネリギヌ)をもて羽に印して、其文字を寫しとりて、詳かに讀むと。當寺山號辰爾山と稱す。尤もいはれあるべし。今舊記亡びて其古へをしる事あたはず。遺歎少からず

新堀玄蕃居住地 にいほりけんは きよたくのち 山口新堀の地に住せしと云ふ。太田道灌の家臣にして、江戸谷中の新堀に

ありしが、故ありて少時此地に移住し、太田家に傳ふる所の稻荷の神像を以て一社に勸請し、

今當寺の護法神とす。天女稻荷と稱す。玄蕃後に豊島の新堀に歸住せしと云ふ。よつて此地にも新

堀の號ありと云ふ。

山住彦三郎舊趾 やまざみひこさぶらうのきうし 七社権現より良の方三丁ばかりを隔たる小き岡を云ふ。土人は山住彦三郎

某の城壘の跡なりといへり。方三四丁の間を云ふ。山住彦三郎追て可考。此地に舊家十四五軒ありて、其中二見家の古

奉修山王七社大權現御寶前攸

辰爾山別當佛藏院勝樂寺大坊

住寺中興開闢法印權大僧都

尊海上人

尊榮上人

延久三年辛亥九月十九日開闢

本願尊宥順說

初響二見相覺妙性

明曆三年丁酉九月吉辰日敬白

御大工 椎名兵庫頭吉繩

此寺境の地は入間郡に屬したり。再び按ずるに、高麗郡にも勝樂寺と號する寺ありて、のち高麗山聖天院と改む。もし此寺の鐘なる歟。猶考ふべし。

七社權現宮しちしゃごんげんのみや勝樂寺より百歩ばかり東の方、山の上にある。山王二十一社の中、七社の神をまつるといへり。社領あり、此寺の東に居場とあざなする地あるものは、古へ當社の一の鳥居ありし舊跡なりといひ傳ふ。毎歲九月十九日に祭禮修行あり。

勝樂寺
シヤクノクニノテ





遙はるかの後、天正年間、忝かたじけなくも御當家に於おて崇敬そつぎやうなし給ふのあまり、寺封じまうの朱璽しゆじを下くだし賜たまはりしより、繁昌はんじやう古いにしへに百倍はひし、人天護持にんてんごぢの靈場れいぢやうとなれり。

辰爾山佛藏院勝樂寺 山口觀音堂より十二丁ばかり西にしの方かた、勝樂寺村しやうらくじむらにあり。新義しんぎの眞言しんごん

宗しうにして、中戸ちゆうこの眞福寺しんぷくじに屬ませり。中興開山ちゆうこうかいざんは眞惠上人しんゑと號なづす。元和九年正月げんわくねんしやうげつ十四日じゆじゆつ化寂くわじやくす。本尊ほんそんは近頃ちかごろ火災くわさい

に亡ほろびて、新あらたに坐像ざざう二尺じふいばかりの十一面觀音じふいちめんくわんおんを安置あんちす。此この火災くわさいに仍よつて、悉ことごとく舊記きうきを亡ほろしたり

とて、草創さうさうの時世等じせいとう詳まならず。尊海上人そんかいしやうを以もつて中興開山ちゆうこうかいざんとす。

洪鐘かうしゆ 當寺大坊たうじだうぼうの前まへ、左ひだりの方にあり、銘文めいぶん高麗郡かうらいぐんとあり。元祿年間げんろくねんかん、災わざいに罹ありて損こじたり、銘文めいぶんのうしろに再興さいかうの旨趣しゆすいを注つし添そへて、改あらため鑄つたりといへり。其銘そのめいに云いく、

武州高麗郡山口郷勝樂寺村。奉新造立鐘銘曰。

諸方空相 寂滅異名 常樂我淨 箇々圓成

奉日待講供養 奉庚申講供養

奉念佛講供養 奉誘奉加供養

願主 藤原重信

と稱して、今猶山中にあり。依て大師山中に入りて求め給ふに、はたして翁が告けたる所の千手大悲の像、及

び脇士多聞不動等の二尊をも感得なし給ひ、一字の草堂を建立す。當寺の權與（ハ、そのうちこうあんねんかん、ジメ）是なり。其後弘安年間、

國中大に疫癘流行し、死に至る者少からず。時に一人の老僧ありて、家毎に至り告げて曰く、

吾菴に尊き大悲の尊像たよせ給へり、來り祈る輩は病患悉く免るべし、又吾庵をしらん

とならば、深夜山中光ある地に至るべしと云々。里民其教にしたがひ、夜光を標に此地に至

り、此靈像を拜し奉りて、病を祈り、大に靈驗を得て、歡喜踊躍し、諸人日夜に絶えず。老僧の言

語に就て、山を吾菴となづけ、大師修禪の地を金剛乘廟と稱せしを。又元弘三年癸酉の五月は、新田左中將義貞朝

臣上州より義兵を起し、武藏野に旗擧し給ふ。鎌倉勢と府中分陪河原に戦ひ、軍敗れて叅川

に引退き、當山の東の峯に陣營を構ふ。此時義貞公觀世音へ願書を捧げ、朝敵退治の軍功を

祈らせ給ふ。其夜義貞公の夢に、千手大悲馬上に現じ、親ら御手の弓箭を與へ給ふと見る。

夢覺めて後、感悅淺からず、庭前の櫻の枝を策となし、盟て關戸の陣に發向し給ふ。然るに

越後、信濃の方より數萬の軍勢差加り、不日に相州一家を亡す。旗を立てし地を、今將軍塚と號す。義貞の櫻と云ふもの、今猶榮ゆといふ。

なしといへり。あるとき有信の人、此水中を臨み觀て、大悲の尊影を拜しける事ありしより、影向の号ありといふ。此井水を服して病を痊すもの少からずとなり。

琵琶島辨財天祠 千手谷の東口の池の中洲にあり。琵琶の形なる故に號とす。寶曆己卯夏、當寺亮感師、人をして池を浚はしめ、泥中より二基の石碑を採り得たりとなり。碑面辨財天の字、及び年號を銘す。一は文安五年己巳、一は貞治二年

癸卯とあり。

二王門額吾菴山 筑波山前護持院八十八翁權僧正 光星筆。

緣起に曰く、往古聖武天皇の勅願によりて、行基大士諸國遊化の砌、此地に至り給ふに、日既

に暮ぬ。仍て樹林の下に錫を掛け、通夜誦經禪觀す。深更に逮んで、林間に千手陀羅尼を誦

する聲あり。大士奇異の思ひをなし、其邊を求め給ふに、異香薰じ、靈光赫奕として樹上に

輝き、千手大悲の聖容忽然として影向なし給ふ。則ち曉を待ちて、彼靈樹を伐りて、その

拜する所の尊影を摸刻し、永く度生のためこよに安置せらる。此地を千手谷となす。其後弘仁年間、弘

法大師羽州湯殿山に行かんとせしとき、途にして此地によぎり給ふ。然るに一人の老翁來り

告げて曰く、此山中行基大士作る所の大悲の靈像ありといへども、人其靈ある事をしらず、

我大徳の此地に至るを待てり、適に堂宇を營めよと云ひて後、其翁が行方をしらず。

此老翁を地主權現

かしと申しければ、武藏守暫く思案して、けにも此義然るべしとて、笛吹峠うすひのたうひ〔原本左旁にふは

いづこそと問うて、夜中に落ち給ふ云々。以上其要を摘む。

太平記に、新田義宗朝臣、尊氏將軍を追ひて、小手差原より石濱迄、坂東道四十六里を片時が間に追ひ付きたりとあるは、隅田川の石濱にあらずして、多摩川の濱日野の津より川上半濱と唱ふる地、其舊地なる由、土人云傳ふ。依て按ずるに、半濱の地より、多摩川を隔てて向ふの方西南の地を、二の宮となづく。絶壁にして、太平記に、河の向ふの岸高く、屏風を立てたるが如しといふに、地勢相かなへり。又同書に、笛吹峠、竿吹峠とも書きて、宇須伊(ウスイ)と訓じ、上野と信濃との國境とするは、記者の誤ならん。當國比企郡將軍澤村といふ地は、古へ田村將軍東征の時、陣營を布き給ひし舊跡にして、土人其地を封じて叢祠を營み、將軍大権現と崇めたり。かしこは、入間川の邊より、上州への通路にして、今市宿といへるより、西北にあたり。其將軍澤村に當てて、笛吹峠と號する山坡(タウゲ)あり。義貞朝臣分陪(フンバイ)の軍破れて、糸川へ勢を移し、ふたたび入間川へ陣を引かれ、其夜笛吹峠へ落ち行き給ふよししるせしは、上州信州の國境にはあらずるべし。上信の國境は、行程二十里にあたり、其夜中容易に至るべきにあらず。入間川より此峠まで四里あまりありて、其夜中にも至りつべしと思はる。

山口觀音堂 やまぐちくわんおんだう 北野村より西南の方半道ばかりを隔てよ、新堀村にあり。狹山の北の方、入間郡に接する地の惣名を、山口と號す。

土俗云ふ。此地は山口平内左衛門と云ひし人の城跡なりと。吾菴山金乘院眞光寺と號す。眞言宗江戸大塚護國寺に屬せり。弘法大

師を以て開祖と稱す。

本堂 ほんだう 本尊千手觀音 ほんぞんせんじゆくわんおん 立像二尺三寸あり。けふじん 脇士多聞天、不動明王 ふどうみやう 兩像共に三尺ばかりありて、行基大士の作なりとも、或は同大士感得の隱像ともいふ。

額圖通殿 がく 根嶺大傳法院僧正八十八翁筆。こんれいだいでんぼふんそうじやう

影向加持水 えうがうかぢすゐ 西谷にあり。にしに そのかみ弘法大師、一夏(イチゲ)の間一千座の護摩供(ゴマク)修行なし給ふとき、神龍の瑞に上りて、其地に清泉を求め得給ふ。しかありしより、千歳の今に至りて、其靈泉早乾にも潤るる事



山岡
山口やまぐちの



山崎
觀音





追付きたる。將軍石濱を打渡り給ひける時、略近習の侍共二十餘騎返し合せて、追蒐くる敵の河中迄渡り懸けたると、引組みく討死しける其間に、將軍急を遁れ、向の岸へかけ上り給ふ。落ち行く敵は三萬餘騎、追蒐くる敵は五百餘騎、河の向の岸高く、屏風を立てたるが如くなるに、數萬騎の敵返し合せて、此を先途と支へたり。日已に酉の下りに成りて、河の淵瀬も見え分かず。新田武藏守義宗、續いて渡すにおよばず、跡より續く御方はなし、安からぬ者哉と、牙を嚼て本陣へと引返さる。新田武藏守、將軍をば討漏しぬ、今日は日已に暮れぬれば、勢を集めて明日石濱へ寄せんとて、小手差ヶ原へ打歸る。兵衛佐殿何所にか控へ給ひぬると、行合ふ兵共に問ひ給へば、兵衛佐殿と、脇屋殿とは、一所に控へて御渡り候ひつるが、仁木殿に打負けて、東の方へ落ちさせ給ひ候へるなりとぞ答へける。さて爰に見えたる箒は、敵歟、御方歟と問ひ給へば、此邊に御方は一騎も候まじ、是は仁木殿兄弟の勢歟、白旗一揆の者共が焼きたる箒にてぞ候らん、小勢にて此邊に御座候はん事は如何と覺え候へば、夜に紛れて笛吹峠の方へ打越えさせ給ひ候て、越後信濃の勢を待調へられ、重て御合戦候へ

一方の大將には、新田武藏守義宗、五萬餘騎を五手に分ち、一方には新田左兵衛佐義興を大將にて、其勢都合二萬餘騎、四方六里に控へたり。一方には、脇屋左衛門佐義治を大將にて二萬餘騎、是も五箇所に陣を張り、敵小手差ヶ原にありと聞えければ、將軍十萬餘騎を五手に分ちて、中道よりぞ寄られける。去程に、新田足利兩家の軍勢二十萬騎、小手差ヶ原に打臨み、敵三聲時を作れば、御方も三度時の聲を合す。上は三十三天迄も響き、下は金輪際迄も聞ゆるらんと震し。略響庭の命鶴、生年十八歳、容貌無雙の兒なるが、今日花一揆の大將なれば、殊更花を以て出立ち、花一揆眞先に懸出でたり。兒玉黨七千餘騎と戦ひ揉立られ、一返も近さず、ぱつと引く程こそ有りけれ、將軍の十萬餘騎、混引に引立てて、曾て後を顧ず、新田武藏守義宗、旗より先に進んで、天下の爲には朝敵なり、我が爲には親の敵なり。只今尊氏が頸を取て軍門に曝さずんば、何の時をか期すべきとて、自餘の敵共の、南北へ分れて引くをば少も目にかけず、只二引兩の大旗の引くに付て、何く迄も追蒐けたまふ。引くも策を擧げ、追ふも逸足を出せば、小手差ヶ原より石濱まで、坂東道已に四十六里を、片時が間にぞ

北野宮神主職之事如前々可被勤之條得其意候恐々謹言

天文十一年二月十五日

道俊 在判

北野宮神主殿

按ずるに、道俊は大石源左衛門が事なり。釜村の永源寺、及び安松の長源寺の條下に、大石源左衛門の事を詳にす。この二通の外に、小田原北條家の朱章あり。其文はこゝに畧せり。

小手差ヶ原こてさしはら 北野神社より西北の方十三四町を隔てよ、河越、入間川等の邊、すべて小手指ヶ原こてさしはら

と號せり。豊島郡下練馬村に、小手差原の舊地殘れる由、其土人云ひ傳ふといへども、證となしがたし。新井白石先生云く、小手差原は、北野物部天神社より西北の方、六七里四方の地をいふと。今は聖田となりて、纔に七百餘石の地となれるといふ云々。

新葉集

むさしの國へ打越えて、小手差原といふ所におりて、手て

分などし侍りし時、勇あるべき由つはものどもにめしおほ

せはべりしついでに思ひつゞけはべりし。

君の爲世のため何かをしからん捨ててかひある命なりせば 中務卿宗良親王

太平記に曰く、正平七年北朝の文 閏二月二十日の辰の剋に、武藏野の小手差ヶ原へ打臨み給ふ。

のたいしゆざいへきやう大守利家卿、再興さいこうあり。殊ことにかたじけな忝かたじけなくも御當家ごたうけに於て、御崇敬ごそうきやうの餘り、社領しやうりやうを添そへさせられ、

慶長けいちやう十三年戊申御造營ござうえいあり。大久保石見守おおくわいしけん是こを司とらどるとなり。しかありしより武門擁護ぶもんおうえの御祈禱ごきたうばこた忌こる事なし。慶安二

又四十二石の社領を増ましめさしめたる。

源氏滿證みなもとのおぢみつしょう狀一通じやう。社司栗原氏社司栗原氏の家に藏す。其文左のごとし。

寄進 武藏國北野天 虫食

同國山口郷内北野宮殿 虫食

并 田島在家 虫食
在別紙 虫食

右任先例致沙汰可神事之狀如件

應永四年八月廿五日

左兵衛督源 虫食 在判

按ずるに、此古文書源氏滿なり。虫食みて其名しるべからずといへども、其花押を以て考ふるに、花押數に出づる所の氏滿の判疑ふべからず。

大石源左衛門古文書 同し家に藏す。其文左の如し。

救ひ給ふ。翁の歸る方を向か 尊其時、天神、地祇、劍の義神を祭り給へば、戦はずして自ら伏し奉

るとなり。物部天神、國渭地祇社、田雲祝神社等にして、是を武尊一時三箇の御勸請と稱す。延喜式内入間部三座の神社即是なり。尊の佩せる草薙の御劍は、元出雲國八枝の大蛇の尾より出でたるを以て、出雲祝神社とは稱し奉るといへり。 同

四十一年辛亥正月十七日、土人集り、方八丁の地に、三神の社壇を經營す。毎歲正月十七日奉射の式あるも、此遺風なり

同年二月二十一日に遷宮あり。毎年二月廿一日を以て大祭の辰とするも、此所以なり。 其後欽明天皇の十二年辛未十一月十

五日、武藏野小手差原の靈神、及び日本武尊を合祭し、小手指明神と崇め奉る。又一條院の

御宇、菅丞相五世の孫菅原修成、武藏國の國主たりし時、菅公の靈示ある後、長徳元年乙

未二月二十五日、勅許によりて、花洛北野天滿宮を、始めて關東に移し奉らる。依て坂東第

一北野天神と稱し奉る。みなもとのよいへちそん 源義家朝臣、奥州の朝敵追伐の時も、宿願によつて、惣社建立あ

り。そののちけんき 其後建久六年乙卯九月十九日、源頼朝卿、正八幡宮一字を勸請ありて、すべて本宮、

九社共に修造せられ、社領二百貫文の地を寄附し給ふ。此時式内の諸神勸請の神宮と稱す。先大宮司上毛野元重の時までは、領地二千貫文ありしかば、すべて

二千二百貫賜さき、時に建武延元の争戦に、社頭兵燹に罹り、夫より後大に荒廢せり。然るに延文元年

丙申、尊氏將軍、諸社を建立し給ひしが、又應仁の火に破られたり。天正十八年庚寅、加州

定文を定久とす。澁山の城にありしなり。然るに、此定文後北條氏康の男氏照を聲とし、苗跡を繼がせ、同國由井に居城せしむ。氏照後本姓にかへり、八王子の城に移る。此等の人の祖先なるべし。依て考ふるに、大石氏北條家に縁あり、故に氏照の舍弟を當寺に居らしめ、又長源寺にも氏照の靈牌を置きたるなるべし。

北野天神社

永源寺より二十三丁西の方、北野郷にあり。

花洛北野天神を祭りし故に此號あり。又大宮北野とは武藏野の北野といふ意なり。

司栗原氏奉祀す。

相傳ふ、天兒屋根命二十六代大中臣朝臣今麻呂の長男多美丸の苗裔と云ふ。

每歲正月十七日奉射、二月廿一日は物部天神祭、

同廿五日は天滿宮の祭にて、遠近より群參せり。

本社祭神、物部神、出雲伊波比神、國渭地祇神、天滿天神、籠手差原明神等の四神を相殿とす。

續日本紀、神護景雲二年戊申秋七月壬午、武藏國入間郡の人、物部直廣成等六人、姓を賜はりて入間の宿禰と稱すとあれば、入間郡に世々物部氏の人住まれしとみゆ。

尊櫻傳ふ、社前にあり、枝葉繁茂す。花は單瓣なり。相傳ふ、往古日本武尊東征の頃栽え給ふといふ。

大納言梅、天正十八年庚寅、加州亞相利家御當社を再興ありし頃、是を栽えられたりといふ。花は白色にして、單瓣なり。

社記に曰く、地主物部天神、國渭地祇社、出雲祝神社は、人皇十二代景行天皇の四十年、皇子

日本武尊、東夷征伐の時、武藏野に入り給ふに、諸軍大に渴す。井泉を穿つに、水を得る事なし。相兼井

の方、相兼村にあり。時に老翁忽然として來り、尊を導きて此地に至らしむるに、清泉ありて諸軍の勞を



北野の
天神



ば、

里人のくめぐ川とゆふぐれになりなば水は氷もぞする こそせめい

道興准后

大龍山永源禪寺 たいりゅうざん せいげんぜんじ 衆村にあり。八國山より北の方、小川の流を隔てよ五丁計にあり。曹洞派 そうどうは

の禪林にして、龍谷竜隱寺に屬す。 ぜんりん たつがやうおんじ 昔は鎌倉建 せんがうけん 天文年間、大石氏開創する所の精舎にして、開 かひ

基大石氏、法名を英嶺簡俊大居士と號す。 おほいしうぢ ほうみやう えいざんかんじゆんだいこじ 安松の長源寺に、簡俊を道 やすののながげん せんじゆんをだう 開山は一種長純禪師と號す。 かひさん いっしゆちゆんぜんし 北條 きたじょう

の舍弟なりと云ふ。永祿 のせていなりと云ふ。 へいりく 八年二月廿七日示寂す。本尊釋尊は二尺ばかりの坐像にして、行基大士の作なりといふ。 はつねんしやくそん ほんそんしやくそん ざざう ぎやうぎだいし さく

當時開基大石氏靈牌 たうじ かいき おほいしうぢれいはい 牌面右に透岳宗嗣大居士、中に英嶺簡俊大居士、左に直山道守菴司とありて、三人の法名を注 はいめん とうけつ そうしゆ だいこじゆし へいざんかんじゆんだいこじゆし ちやうざん だうしゆ そうし したり。道守は當寺鐘の銘に擧げたる大石遠江入道が事なり。長源寺の條下と合せみるべし。 だうしゆ だうしゆ とうじゆん かねの ぎに へりげたる だいしゆ ちゆげん じやうだう がかの ことなり。 ながげん じゆん じゆん の じょう げと ぐはせみるべし。

洪鐘 かうしゆん 當寺の住持雪巖和尚土中 たうじの ぢゆぢ せつがん じやうしやう ちちゆ ちゆちゆ より穿ち出せりといふ。

武州入東郡久米郷 大龍山永源禪寺

住持雪心叟融立 本願檀那大石遠江入道直山道守

應永廿九年 丑 九月初吉日

按ずるに、文明の頃、大石駿河入道二宮の城に住し、天文の頃、上杉家の老臣大石源左衛門尉定重戸倉の城に住し、又其父定文(一書

して、實に駿河(富士)、伊豆(天城)、相模(箱根)、甲斐(多波山)、信濃(淺間)、上野(吾嬭)、下野(日光)、常陸(筑波)、等の八國の遠嶂を一望に覽る、故に此名あり。

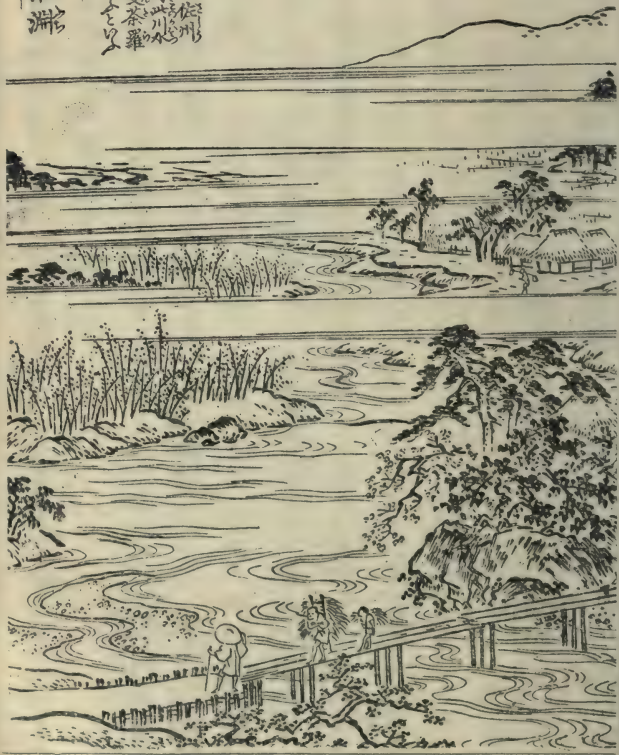
久米川 久米川村の西、回田村、清水村等の地より發して、二條の小流、野口村徳藏寺の裏の方にて落會ひ、衆川村を流る。故に久米川と號く。又二瀬川と號くるものも、入間郡衆村、秋津村等の地より發して、多摩入間の郡境を流れ、衆川村にて落合ひ、夫より一里ばかり末に至りて川中漸く廣く、石川となる。久米川より上は谷川にて、川共こもに、引又新座の邊を経て、末は荒川に會流す。正慶享徳の昔、武藏野合戰の時、多摩川、及び入間川、衆川等に陣營を設けたりしが、曠野にして水に乏しきが故に、かく水邊にたよりし事しるべし。又云ふ、堀兼の井などよべるも、古へ水に乏しかりしありさま、思ひやるべし。

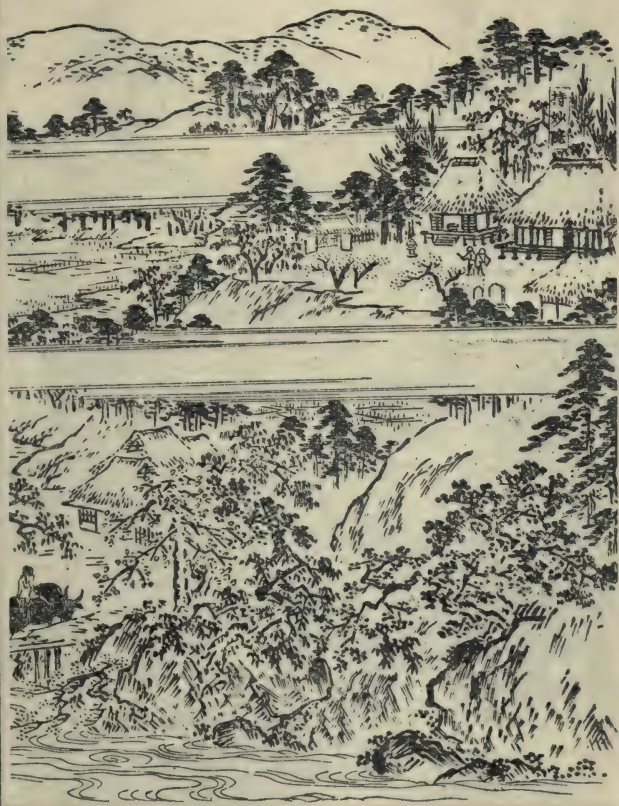
回國雜記

くめく川といふ所はべり。里の家々には井などもはべらで、たゞ此川を汲みて朝夕もちひはべるとなんまうしけれ

伊達上人依州
 配流の時此川
 と以て曼荼羅
 と書しむと云ふ

曼荼羅淵





田園雜記

とあり川と去南
 三ヶ所里の勢く
 ゐハ舟 かりくと
 走をん たは川
 と湯で 於たりあ
 ひまさと 宛んまう
 一とれハ

里人のとあり

あふくれよ

ありなハ

とあり

とそ

とろ

道與津石



久米川



千載

五月きつき圍つぎ狹山が峰にともす火は雲の絶間の星かとぞみる
顯季

續古今

秋風になびく狹山の蔦つたかづらくるしや心うらみかねつと
後鳥羽院

新後拾遺

ともすれば靡く狹山の蔦つたかづらうらみよとのみ秋風ぞふく
前中納言匡房

新續古今

ともしする狹山の峯の狩衣かりころも秋にもまさるそでの露けさ
家隆

夫木

淋しさに野べに立ちいで詠むれば狹山が裾にすゞむしの鳴く
匡房

八國山

はちこくやま 衆村くのみむらに屬す。將軍塚しやうぐんづかの西十八丁ばかり、同じ狹山きやまの續つづきにありて、少しく秀出すこしたる所ところを號なづく。さながら雲くもを凌しのぎ碧空へまきうに連つらなるにもあらざれども、こよに登のぼるときは、眼界がんかいさうほう蒼茫と

新撰六帖

狭山なる池のみくりのねもみねどうちはへ人のくるぞ待たるる

北國紀行

武藏野を分けはべるに、野經のほとり、名に聞えし狭山あり。朝の霜をふみわけて行くに、わづかなる山の裾に、か

たちばかりなる池あり。

氷るし汀の枯野ふみわけて行けばさやまの池の秋風

堯 惠

狭山 桑村より發りて、西の方箱根ヶ崎まで凡そ三里に餘れる連岡を云ふ。將軍塚は同じ。東の嶺にあり。土人、一

名を尾引山と稱せり。嶺の徑路は多摩、入間の郡境にして、南よりも、北よりも、麓より登る

所二百歩あまりあり。或人云ふ、武藏國風土記殘篇に、多摩郡、北は向の岡を限るとあるによ

る時は、此長き岡を以て、向の岡として可ならんといへり。土人、尾引山の北にあたりて綿々たる群山あるを

はいづれも狭くして、豎に長きもの數條あり。此故に、山と山とははさまれる故に狭山とはなづけしなるべし。しかる時は、土人の云へる如く、此地なべての山々を合せなづけて狭山と稱して、一所に限る名にはあらず。



將軍塚
德藏寺



すにあらす。今いまみる所も三所ばかりありて、土人どじん何れをも狭山さやまヶ池いけと稱せり。次につぎ擧あぐる所の北國ほつこく紀行きかうに、山やまの裾すそといふにて知るべし。清少納言せいせうなごんい曰ふ、池いけは狭山さやまの池いけ、みくりといふ歌うたをかしくおほゆるにやあらん、などありて、みくり、三後あやめ、ぬなはを名物めいぶつとす。

歌 枕

あやめ草さやま狭山さやまが池の長き根をこれもみくりのならひにぞ引く 兼 昌

同

みくりくる狭山さやまが池のたよりにしかけはひかれぬ青柳の絲 隆 祐

同

春深み狭山さやまが池のねぬなはのくるしけもなく鳴く蛙かな 仲 實

松 葉 集

武藏なる狭山さやまが池のみくりこそひけやたえすれ我やたえする

ふみわけし狭山さやまは雪うつもに埋れて池のみくりはくる人もなし 秀 能

鮑間氏の墓碑は、實に五百年の蘚苔を帯ぶるといへども、三士の雄名は今に埋れずして、千載に不朽なり。執筆扁阿彌陀佛が書は、暗に元人の骨法あるを以て、普く風流好古の徒、此地に至り、稱揚するもの少からず。

按ずるに、元弘三年は、光嚴帝の正慶二年癸酉なり。此年後醍醐天皇隱岐國を出でて歸洛したまひ、重祚の後は、正慶の年號を用ひられずして、元弘三年とす。此年新田義貞朝臣、相模入道を亡さんとし、同年五月十五日、武州府中の分陪河原へ押寄せ、入道の舍弟四郎左近大夫入道憲性と合戦す。義貞打負けて、終に堀兼をさして引退く由、太平記にみえたり。太平記には此人の名を注せざれども、此日に當りて討死せし事、此碑によつて明かなり。

將軍塚 德藏寺より四五丁を隔てよ北の方、狭山の嶺、東の嶺の終る所にあり。塚上に老松

一株、雜樹に交りて繁茂せり。すべて此地はを村及び糸川村等に接し、將軍塚の地は野口村に屬せり。元弘三年癸酉五月、新田左中將義

貞朝臣、上州の笠掛野を出でて此地に屯し、百歩を隔て東西に塚を築き、旗を建てて其備を

なし、越後信濃の勢を集め、竟に朝敵を平けたまひし舊跡なり。土人其武功を慕ひ、將軍塚

と唱ふ。西の塚上に義貞朝臣の靈を祀りたる山王の遺祠ありしが、今は亡びてなしと云ふ。

狭山の池 箱根ヶ崎驛舎の西北の背に存する所の池水を、狭山ヶ池の舊跡とす。然れども箱

根ヶ崎にあるものは、箱の池といふ。狭山の池と稱するものは、狭山の麓にありて、一所をさ

可推而仰焉。凡讀斯文。能無一慨原以歆慕之誠。方欲仰乞在朝鉅公。名山碩德。雄文雅篤。用光吾師遺事。以勤之。或勸之曰。奚不自勉而他爲。岱固謂不安矣。然求之弗克。寧將自力。乃據生平所親炙。徵其心事。照然者。不忍避文之繁。恭志陳跡。因作銘曰。

身非漢使誓不生還 出處惟義備嘗險艱 朱家多士弄矢河山
清宵撫髀踐跡重關 豈道佛性顛頂其顏 睥爾遺範後人追攀
天開武藏沃塹遙環 金鳳攸止碧水潺湲

享保三年戊戌四月穀旦

弟子高松季江直芙等拜建

當寺の境内を周流する所の水は、承應元年、野火留新田墾闢の時、伊豆守松平信綱朝臣、二里餘南の方、小川村の地より、多摩川の水を分けて、こよに引しむるとなり。

野火留用水を宗岡に引かると事

は、秋元侯川越を領せらるゝ頃の事にて、明暦より四十年斗後の事なり。

中夏而成乎中夏之有人。盡返中夏之有土。極乎成天下之盛德。明高皇帝其至尊焉。人倫明於上。軒冕御乎體。衣冠復乎制。禮樂成乎用。教化被乎有土。顧斯民也。出深沈之永夜。見四際之高天。若是重關鴻濛。豈不曰大明日月哉。於斯世也。突忽有妖邪云。姚廣孝者。以獸變僧。現形當世。敢與高皇四子燕王合謀。力推元命之統。若曰僧也。身與世法事不相親。若曰理也。至當明德光天照地。中起作妖彗亂斯祖。作孫承一統。元命行奉燕藩。大創妄舉。背義無端。逆天無厭。殺命無窮。挾長挾勢。子斬父。孫弟亡。兄愛而奉天承運。以詔天下哉。只此四字。大槩萬世橫逆愆光矣。確乎哉侃々之言。非一己之私憤。乃天下之公論也。嗚呼師也。遭時亂亡。不苟安於其地。而恥復屈身。其後竟以踏海。終以方外。其耿介卓絕之風。歷千古而不磨。如師所謂功名事業不少槩見。而其高情逸想播於聲詩者。後世能言之士。皆自以爲莫能及也者。否耶。信

之以爲可圖也。距都西吾十里外武州地有鉅刹焉。山曰金鳳。寺曰平林。前伊豆守源君信綱之重建也。墾闢曠楚。樹之松杉。導水玉川。控之紆迴。分支折派。委給庖瀆。元旱不竭。人各便之。其子院聯芳軒。西北之隅有隙地。卽可就而起焉。住持雲峰禪師。其老師默雲和尚。合議可之。乃庀工。夔木梱載。以至卜吉架梁。翼然傑東。僅三楹間方也。菲以覆蓋。聖以瑾璧。匪日而告竣。時正德丙申三月初七日也。扁曰戴溪堂。中位供範金大士導師歸崇也。左奉師像以奠之。扁題梅花關主。乃普照國師書賜者。旌其三年坐關也。噫。時不俱霑上恩之未光。安得延至於此。而自明於世乎。回意舊勤共事之輩。悉聯翩而去。秭今吾止一子遺耳。年又老矣。稍有志氣之存。少效其觀已。伏念吾師一生忠憤之言。慷慨不容。刊者亡慮數十扁。今略表而出之。其曰。我明高皇帝之有天下。赤手開天創成一統。昭々大業足誇今古。一力返正。功德至辟異數之亂。

回遣侍徒祖命代焉。平時健啖，猶壯年。至此稍減。衆勸服藥，不聽。曰：報身非病，何事藥爲？倒臥匡牀，吟哦自娛。忽朝起坐，索筆書曰：

鑿々塵々傍海邨，不忘殘夢繞空軒。

咄任他凍折梅花影，接却江南白玉魂。

書罷溘焉而逝。容貌如生。玉柱一雙尺餘。衆皆驚異。悲悼不已。春秋七十七。夏臘一十九年。實寬文十二年壬子冬十一月初六日也。示寂前一日，請千呆和尚於廣善庵，托末後事。曰：卽今甚麼時候？答曰：日午打三更。師呵々而笑。和尚便起。終爲下火闍維於聖壽山。侍從慧明護送靈骨，空於黃檗山。有天外老人集若干卷。嗟哉！吾師棄世，業已四十七年於茲。空抱素懷，負恩極矣。積愧忸怩，莫可與計。詎謂己丑臘月，遙奉聘書。夙夜戒途，越庚寅二月，直抵武城。三月朔日，賜殿見命入翰林。願謂身已充選。其奈師無妥像之區。願言數椽之構，獨有源爲政。聞而善。

月八日也。諱曰性易。字獨立。號天下一間人。師謂棄儒歸釋。酬同一性。風光落夕。山袍躡躡。雙襖殊可晒。而無可計者。青天白夢之同塵也。竝擔儒釋。博挾典籍。識者云。慧地之流亞。明曆乙未八月。從侍普門。掌書記。萬治元年戊戌九月。侍國師東朝武城。宰官長者。莫不嘆師之才德之美。出於時輩之右。執政源君信綱。暨有司源正重。欲師住錫。事阻不果。萬治二年己亥。病假還崎。庚子入關。幻寄山。三載出關。亡幾罹災發。時寬文三年癸卯三月八日也。嗣後居不擇地。無礙其緣。術同道廣。治不視方。活潑施藥。闔國稱神。嘗謂濟人及物菩薩本行。應機施用。祖老活路。至如書法。正鋒逼古神氣。含光獲其片紙。隻字珍襲。猶如鍾王墨蹟。蓋亦絕品也。乙巳春。雪峰卽非和尚。開山豐之廣壽。東師邀駕。虛半座以待。師輒翩然而往。不憚餘喘。出力備至。豐主感師老而精勤。特就山中起靜室。爲憩息之所。自扁曰白雲室。厥後省覲國師。途次疾作。而

家山陰會稽。及祖父。始出徒焉。父銓部敬橋有善行。母陳氏姚江陳龍江女。身六產而乳七子。末產雙男。師卽其一。實生於萬曆年二月十九日。幼名觀胤。因其大士同辰也。天資穎悟。讀書過目輒誦。幼學舉子業。蚤登鬻序。然不喜時文八股。年二旬有五。罹會城災。又當魏豎亂朝。竟棄咕嚕。放遊西湖。欣領山水之趣。年比三十。未能爲詩。一日友社逼師賦詩。卽應聲曰。我來溪頭坐。溪月留我宿。祇此二句。衆皆嘆異。嗣後凡有題到下筆。沛然藻思傑出。清新自然。洗盡糟粕。不襲人語。年齊五十。明亡清代。一天虜塵不勝慘憤。乃往長水語溪卷晦焉。時有粵人某招同桴海。快滌煩襟。癸巳早春發行。三月抵崎。時承應二年也。長崎奉行橘正述。請留馳書上乞。師便住。有濮澹軒懷戴子曼公負笈向日東。不歸之歌。次年甲午七月。普照國師應聘東渡。大振法威。師嘆年華六甲。命有幾何。矢心脫白。用畢殘喘。狀求出家。乃歸國師座下。薤染。卽年臘。

獨立禪師木牌 （きくりぜんじ もくはい）
像前にあり、一面には明獨立易禪師覺位とあり。昔には寛文十二年壬子十一月初六日寂、享保元年丙申七月穀旦奉祀。于載瀛堂中弟子高玄岱謹誌とあり。

額 （がく）
同じ堂の軒に
掲ぐる。點雲
老衲書とあり。

戴溪堂

聯 （れん）
同じ外の柱
に掲ぐる。

衣冠古國存君父
甲子還天耀古今

額 （がく）

觀音の
上に掲
ぐる。

玄岱書
なり。

三古先生

裏に
載瀛堂中觀音
大士扁額、
享保元年丙申
七月穀旦
高玄岱置

梅心昇

同じ右
に掲ぐ
る普照
國師の
書也。

特新莊用照舊云、時享保二年歲次丁酉十月穀旦、弟子高玄岱重拜誌とあり。

五夜禪燈三昧火
萬年藤几乙枝香

觀音の前の左右に掲げた
り。天間野衲自題とあり
て、獨立及び天外一閒人
等の印章をそへたり。裏
に先師關中之對聯也。今

木牌一枚 （もくはい）
同じ堂中にあり。獨立禪師行狀の記なり。高五尺あまり、幅四尺ばかり。黒漆を以て塗り、上に文字を鏤めたり。銘文は高玄岱の撰なり。

明獨立易禪師碑銘并序。因州刺史越智直郷君章父篆。門人高

玄岱謹撰并書。

師明之戴笠荷鋏人曼公先生也。杭州仁和縣人。其先出晉戴安道。世

戴溪堂
櫻車道



維時寬延三年龍次午年秋吉旦

住山比丘東嚴禪海誌焉

冶工武江之住

西村和泉守藤原政時

當寺開山石室和尚住山の頃鑄治せし洪鐘、今下總國大寶村發光大寶寺といへる寺の鐘守八幡宮の社前にあり。其銘に曰く、大日本國武藏國崎西縣澁江郷金重村金鳳山とあり。年號は嘉慶元年丁卯、開山石室叟善玖謹書、大檀那藤原中務丞政行、慶雲禪寺比丘至光、小谷野三郎左衛門尉季郷、奉行青木左近將監朝貫、染屋山城守、修理之介逆井尾張守、沙彌常宗とあり。古へ關東兵亂熾なりし頃、陣鐘などに奪ひとられてかしこにあるにや。河崎勝福寺の鐘、上總坂戸市場にあるが如し。

養心庵 やうしんあん 方丈の後の山に傍ひてあり。當寺の住持退隱の地にして、岡の上に禪堂あり。内に正觀音の像を安ず。堂前に弘安四年辛巳と彫りし青き板石の古碑あり。 **九十九塚** つくもづか 方丈より五十歩ばかりを隔て、

りに土を築き、上に雜樹繁茂す。前に擧ぐる如く、古へ野火を禦かん爲にまう **業平塚** なりひらづか 九十九塚より北三十歩あまりを隔て、あり。是

に築きたりしものなるべきを、後世好事の人、伊勢物語によりて名付けしなるべし。塚上石碑を建てて、和歌一首を、さくらがるまのみち **櫻車道** やまぐるまみち 平林

内西北の方の通路をしか名づく。昔當寺岩附にありしを、此地に遷せし頃、堂材運送の目的とし **辨財天宮** べんざいてんのみや 同じ道の北にあり。方二

に安置す。天女の靈像は弘法大師の **戴溪堂** たいけいたう 支院聯芳軒の地にあり。内に獨立禪師の紫銅一尺二三寸あまりの白衣觀音、及び禪師の

古雅なる物なり。禪師の俗縁たりし深見氏は、共に明より來聘せし人なりしが、當寺に縁あるを以て、禪師の肖像及び遺物等を、こゝに收むるとなり。

虧于旦暮病諸天和壬戌之冬遂命冶工再鑄範圍尺寸全該舊制及其銘辭不易亮主重斯鑄焉庶幾者切乘檀越初度之願輪永保寺門中興之基業祝云劫石有□消日洪音無盡時遠也大也

維時天和二年壬戌年冬十一月十六日

武州新座郡野火留莊金鳳山平林禪寺

現住比丘默雲禪宜書

吾鳳山嘗有梵鐘一口其型小而且有罅隙樓未復舊觀茲有知庫全德徹志深檀興慨□不已客歲之夏振錫提疏普募有緣體天加護貴賤戮力華鯨與樓同時圓成銘詞者廼存雲峰默雲兩祖之舊章而不再贅山野唯賦偈祝遠大云

梵音大器頓圓成

新柱樓臺備法城

響徹兩明功用遍

辰昏永報度群生

鐘銘

大日本國武州崎西之郡。岩築莊金鳳山平林禪寺。干戈後無催粥華鯨。茲吾山檀越。參州旛頭郡吉良之健產源家之氏族。大河内法林宗無爲祥菴壽參同雄嶽宗英居士。有孝心所感。命冶鐘壳鐘。寄與鳳山。其功德也堆山。其孝心也積岳。餘慶猶以敷家門之榮者。幾萬年矣。

祝銘曰。

耳根清淨鮮 百八提諸眠 嗚吼則轟地 擊撞則動天

曙光樓閣外 明月寺門前 檀越不孤德 兒孫億兆年

于時元和九年癸亥九月十三日

住山比丘雲峰宗怡誌

寺者同州在岩築城西。寬文初。移地於此。攸事具載寺記。予延寶甲寅之夏。來司院事。四年丙辰。堂外微火。鐘樓尋燼。雖聲隨控。聞其響著有。

按ずるに、昔は火田といひて、原野に火を放ち、草を焼きて肥とし、種を下すを、焼畑ともいひしなり。今秩父郡および信州等に、焼刈蕎麥といふものあるは、則ち是なり。されど、其火の盛なるに至りては、人家におよばさん事の恐れば、堤又は塚などを築きて、其野火を遮り止むる料とする故に、野火止の名あるならん。今平林寺境内に、九十九塚ツクモツカ(葉平塚など稱するものあるも、同じたぐひなるべし。かゝる號を唱ふるは、伊勢物語に因りて、後人のまうけたりしにやあらん。

金鳳山平林禪寺

養心院と號す。

野火留街道より八丁程東にあり。

花洛妙心寺派の禪林なり。

元和九年九月二日寂。

古は大徳寺派かいざん 開山は石室善致大和尚、應元年己巳九月二十五日示寂す云々。中興は雪堂大和尚と號す。月二日寂。

其先同國足立郡岩附にありしを、寛文三年 石院和尚 住山の時。此地に移すと云ふ。舊地は岩附にあり、今金重村及び

寮舎四字あり。

佛殿 本尊釋迦如來 此佛殿は岩附より遷し建つるといふ。

山門 佛殿の前にあり。樓上に十六阿羅漢の木像を置きたり。此山門は岩槻にありしを、其儘に遷し建つると云ふ。

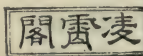
同額

石川丈山 筆なり。



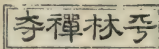
惣門額

同筆 筆なり。



客殿額

同筆 筆なり。



鐘樓 佛殿の前にあり。

近水臺 額

松平豆州侯の筆







平林寺

平林寺
大門



いく程に、盜人ぬすびとなりければ、國くにの守かみにからめられけり。女をば草くさむらの中にかくしおきてにけにけり。道みちゆく人、此野は盜人あなりとて、火つけんとすれば、女わびて

武藏野はけふはなやきそ若草の妻もこもれり吾もこもれりとよめるを聞きて、女をばとりて、ともにゐていにけり。

回國雜記

此あたりに、野火どめの塚つかと云ふ塚あり。けふはなやきそと詠よみぜしによりて、烽火たちまちにやけとまりけるとなん。それより此塚をのびどめと名づけはべるよし、國の人まうし侍りければ、

若草のつまもこもらぬ冬されにやがてもかゝる野火どめの塚
これを過ぎてひざをりといへる里に市はべり。下略
道興准后

ひやくはつごうくやうのこひ
百八燈供養古碑 高さ三尺七寸ばかり、巾一尺一寸餘の青石にして、碑面に三尊の種字、および眞言を刻し、左右に孫子彦子一結衆等

あそみやうじん
阿蘇明神祠 西藏院より西南の方、三丁計にあり。同所本山派修驗、萬藏院奉祀の宮なり。

萬藏院も中筑後守の後裔、權 大信郡源海法印の中興たり。 當社は中筑後守の産土神なりと云傳ふ。當社梁牌の文に曰く、

永正元甲子年

奉造立阿蘇大明神本殿成就所

七月大吉祥日 別當本山修驗萬藏院

同牌後面

天下太平國土安全氏子繁 此下三字讀み得べからず。

のびごめ
野火留 河越街道の立場にして、膝折驛より一里あまり西の方にあり。大和田の驛へも一里

はかり
斗ありて、間の宿なり。

伊勢物語

むかしをこ
昔男ありけり。ひとのむすめを盗みて、むさし野へるて

いふにあり。墓碑に日蓮大居士とありて、天正五年丁丑四月十六日と銘し、歿卒の年歴大に違へり。もしくは其氏族の墳墓ならん。

西藏院 さいざうゐん 同所十五院より四丁計西にあり。本山派の修験にして、東廓山觀音寺と號す。本

尊正觀音は坐像御長五寸八分、弘法大師の彫造にして、古大師此地に至り給ひし頃、靈夢

に依てこれを造り給ふと云傳ふ。此堂宇は新造(テチノツクリ)にして、今の製に異なり。應永年間、古へ谷七郷の領主中筑後守

資信といへる人、資信何人なる事知るべからず。按ずるに、東鑑、建久六年乙卯三月十日乙未、將軍家東大寺供養に逢しめん爲

人の中に、那珂左衛門入道などと云ふ名五人を擧げたり。中は那珂の誤ならん歟。没落の後、當寺住僧は縁あるにより、其嫡男資親當寺に入りて

世を忍び、入道して行阿と號す。資親中氏の祭祀絶えん事を悲み、其子某を修験の僧に託し、

號けて如道と云ひ、則ち當寺に住せしむ。此時より當寺は修験の法流となれりと云ふ。其先は眞言の

古刹なりと云ふ。しかりしより遙の後、天正以來四海承平の時に至り、御當家より觀音面田の地を賜は

り、御祈禱を命ぜられしとなり。寺僧云ふ、資信法號を無寂大禪門と號す。應永六年癸卯卒

す。此地より二里ばかりを稱て、古谷上郷村と云ふ地に、尊仲寺と號する禪林あり。其寺境は中筑後守が居城の地なりしといひて、古

の碑と稱するものありて、花庭大師康正三年と彫り付けてあり。尤も不審とすべし。

古文書六通を藏せり

其一は、文明十二年七月二十七日、清戸年中行事職の事、申請くるに任せ仰付けらるゝ上は、門徒中同熊野參詣且那以下知行相違あるべからずと云々。又其一は、文明十九年正月十八日の證文にして、上に等し

き文義なり。又其一は、七月二十六日とばかりありて、先年御門跡武州へ下向なし給ひし時、忠節に依て修學者に准據免ある由の證狀なり。又其一は、文祿三年八月十五日知行の證文也。又其一は、天正七年八月七日、入東郡、新倉郡、年行事職免許の旨を記せし證文にして、次に擧ぐる所のものと共に大通あり。

武州之内前々水子に相立候十玉坊院及斷絶。今般改而芝山に十玉坊

可有再興之由尤候。并入東新倉之郡氏照領分年行事之事、聖護院

殿任御證文可被申付候。仍後日狀如件。

天正七年庚辰二月三日

氏照判

十玉坊

難波田彈正舊館地

十玉院の地を云ふ。

難波田、今南波田、或は商畑に作る。此地は荒川と新川との兩川に挟まれて古へより水損の患しはくなりしかば、終に官府の免を得て、文字をあら

ためたりしといへり。

難波田彈正忠は、扇谷上杉修理大夫朝興の家人にして、

同國松山の城を守れりしが、

天文十五年四月廿日、河越の夜軍に、燈明寺口にて古井へ墮入りて横死せり。

作れり。今河越の市中に、遊行二世上人眞教坊開創せし古刹ありて、東明寺と號するもの其舊跡なり。燈を束とす。考べし。

彈正忠の墳墓と稱するもの、今水子村日蓮寺と

小田原記等に燈明寺に

ろさ十五間けんあまりあり。引又ひきまたの方は、船路運送ふなぢうんそうの地にして、江戸迄えごまで月そ九里計くりはかりあり。

十玉院じふぎよくゐん 南城山八幡寺なんじやうざんはちまんじと號す。宗岡むねおかより十八丁程ほごを隔て、西北にしきたの方、下南畑村なんはたじらにあり。本山ほんざん

派はの修驗しゆけんにして、本尊ほんぞん不動明王立像一尺七寸、脇士けふじ二童子にごうじは一尺計はかりにして、共に智證大師ちしやうだいしの

作さくなりといへり。此地は難波田彈正が住みたりし舊跡なり。當院も同郡水子村にあり。後清戸芝山の地に移り、又難波田綱正

山さんにして、今其舊地に一字を創立して、観音寺と號するあり。此南畑ナンパタにあるものはとりての跡と覺し。また當寺より百步あまり

西の方に、櫓下ヤグラシタとあざなする地あり、方十五間計、高さ一丈三尺あまりに土を築きたる所あり。土人相傳ふ、古への櫓の舊跡

回國雜記

さよいを立ちて、武州大塚ぶしゅうおほつかの十玉が所へまかりけるに、江

山さんいくたびかうつりかはり侍りけん、其夜そのよのとまりにて

山攀峻險海波瀾 到處多其行路難

疎屋終宵風雪底 凍雞嘆夢月西寒

道興准后

按ずるに、此紀行に佐西ササイとあるは、高麗郡篠井の事を云ふなるべし。又或人云ふ、大塚の十玉とつづけてかゝれたるは、十玉院、古へ水子村にあり、水子村の小地名に大塚と云ふ所あるをもて、かくはかくれしならん歟と云々。



十五院
西藏院
万藏院



陸とく

夕煙あけ

きふ

とほそり

我

家とて

ひのきの

宿

道奥津石



宗岡里内川

伊予の地味は... 又も... 隔て... 同の地へ... 稲の... 甲八... 料... ありけ... と...

田園雜記

ひの岡と... 通うと... ころふタの



は食を盛るの器なりといへるに協へり。今は茶碗を入れる具とす。道興准后の詠は、膝折といふをもてなさんとて、家質を脚氣にとりなされたりし秀句なり。

宗岡宿 むねをかしゆく 引又ひきまたの宿しゆくより北きたの方、内川うちかはといふを隔へだてよ向むかふにあり。宗岡は入間郡に屬し、引又は新座郡に入る。此地は古の奥

州街道しうかいだうにして、其頃相州鎌倉そのころさうしうかまくらへの通路つうろなり。今の中仙道上尾、浦和等の地より入りて、宗岡、

引又ひきまた、及び野火留のびごめの南みなみを折をれて、清戸きよとの邊あたりより、多摩郡たまごほりの府中ふちうへかより、今の大山通道いまおほやまつうだうとい

ふを経て、鎌倉かまくらへは行きしとなり。此地に用水あり。引又の宿の中を流れて、内川の橋際にいたる。かじこに枿をまう

耕の助として、野火留の用水をこゝに引かしむるとなり。其頃白井なる人、此種の懸方を工夫なして、四十八段にかけたりといふ。此故に土人字してゐるは極と稱せり。

回國雜記

むね岡むねがといへる所ところを通とおほりはべりけるに、夕の煙ゆふべを見て

夕煙ゆふけあらそふ暮くれをみせてけり我が家わがやくのむね岡むねがの宿 道興准后

内川うちかは 水源みなもとは多摩郡たまごほり、秩父郡ちちぶごほり等の山谷さんごくより發はつする所ところにして、入間郡いるまごほりに入りて、川越かはごの北きたを東

流りうし、引又ひきまたと、宗岡むねがの西にしにて、梁瀬川やなせがはの水流すゐりうと合がっして、内間木うちまきの南みなみを流ながれ、荒川あらかはに會くわいするも

のを、すべて内川うちかはと稱しやうせり。荒川は入間郡の北のかぎりを流れ、この川は其南を流るゝゆゑに、内川の號あり。此川宗岡、引又の間に至りては、ひ

さをしかの立野のまくすかれねただ恨みし程ぞねもなかれける
有 重
伊平家歌合

春霞立野のすすきつのぐめば冬だになづむ駒ぞいばゆる
通 平

古今六帖

あふ坂に引くらん駒を秋霧の立野かところとはまほしけれ
貫 之

膝折里ひざをりのきせ 新座郡にひくらごほりに屬す。江戸えごより河越かはごんへ至るの街道かいたうにして、白子しろこより行程かうてい一里、驛站えきてんあり。

所澤ところざはよりは良うしじらに當りて、其間そのあひだ三里あまりあり。
北條家の分限帳に、六郷殿所領とある中に、川越内膝折廿貫文とあり。

回國雜記

ひざをりといへる里さとに市いちはべり。しばらくかりやに休やすみて

例れいの俳諧はいかいを詠えいじて同行どうぎょうにかたり侍る。

商人あきびとはいかで立つらん膝折の市に脚氣をうるにぞありける
道興准后

此和歌に脚氣と詠ぜられしは、家質、或は家器に作るを正字とす。此地の農家古來より飯器を收むるの具なりと云ふ。禮記の註に、笥

秋霧の立野たちの駒を引く時は心にのりて君ぞ戀しき

藤原忠房

新勅撰

日をへては秋風寒しさを鹿のたち野のまゆみ紅葉しにけり

信實

續千載

花すすきほのかに聞けば秋霧の立野のすえに男鹿をじかなくなる

入道太政大臣

續後拾遺

今は身のよそに隔へたつる秋霧の立野の駒はけふか引くらし

新院

夫木

旅人の立野の原のから錦織りはへさらす秋萩の花

冷泉太政大臣

同

さを鹿の立野の原の榎はじもみぢ聲かはくまで吹く嵐かな

公朝

同

八月二十日。牽_二武藏小野御馬。中略二十五日。牽_二武藏立野馬。
同書曰

牧名

石川 由比 立野 小野 秩父 己上武藏云々。

公事根源曰

八月廿日には武藏國小野の御馬四十疋をひかる。其外秩父の御馬廿疋、立野の御馬十五疋、
毎年_{ごとしごど}にたてまつる云々。

後撰集

兼輔朝臣左近少將にはべりける時、むさしの御馬むかへに

まかりたつ日、にはかにさはる事ありて、かはりに同じ司

の少將にて迎にまかりて、逢坂より隨身をかへして、いひ

送りける。

馬の兩城より出で、攻來りければ、太田道灌、上杉刑部少輔、千葉自胤以下、江古田原沼袋と云ふ所に馳向ひ合戦して、敵は豊島平左衛門尉を初として、板橋、赤塚以下百五十人討死す。同十四日、石神井の城へ押寄せ責めければ、降參して、同月十八日に罷出で對面して、要害破却すべき由申しながら、又敵對の様子に見えければ攻落す云々。

立野舊跡

今指す所一ならずといへども、新座郡に屬して、引又村の南に隣り、館村と稱ふる地あり、これ其舊跡ならん。

人云ふ、黒馬川といふを中に狭み、梁瀬川、白子の邊迄の地、すべて古への牧野の舊跡なりと云ふ。依て考ふるに、其地水濱にして、地勢尤も馬を牧するに便よろしく、土人の説頗る據あるに似たり。同名の地、足立、賀美、又大江戸より西の方の地に、練馬、竹馬澤、内牧、黒馬、川引、馬多、又今馬多を、馬引澤、駒林、野牧木とす等の地名多きも、牧野に因る證なり。

拾芥抄曰

年中行事部

石神井神明祠



按ずるに、石神井の地に、豊崎山道成寺といへる寺あり。土人傳へて、是も古城趾なりといふ。これによれば、もしくは豊島氏の城な
らんかと思はる。山號又因あるに似たり。猶考ふべし。

石神井明神祠 石神井村にあり。三寶院奉祀す。神體は一顆の靈石にして、往昔井を穿つと

て、其土中には是を得たりとなり。石質堅強にして鏤の如く、徹しく青みを帯びたり。長さ二尺あまり、周圍太き所よつ
て一尺ばかり世に云ふ所の右劍にして、上代の古器雷槌などいへる類ひなり依て

石神井の地名ことに起るといへり。

練馬城趾 上練馬村愛染院の側にあり。豊島氏某が居城の地なりしといひ傳ふ。先の石神井の
練馬を領する由、北條家の分限帳にみえたり。同書に、鳴津孫四郎といへる人の所領のうち、豊島藩光寺分練馬にも有之と注せり。

鎌倉大草紙に曰く、文明九年正月十九日の夜、顯定、憲房、定正三人、小勢にては叶ふまじと

て、上杉方申合せ、上野へ打越え大勢を催し、景春を退治すべしとて、太田道眞を殿にて、

利根川を渡り、那波の莊へ引退く、景春一味の族には、武州豊島郡の住人豊島勘解由左衛門

尉、同く弟平左衛門尉、石神井の城、練馬の城を取立て、江戸、河越の通路を取切り云々。

又同書に曰く、文明九年四月十三日、道灌江戸より打て出で、豊島平右衛門尉が平塚の城を取

巻き、城外を放火して歸りける所に、豊島が兄の勘解由左衛門を頼ける間、石神井の城、練

馬

氷川明神祠 ひかはみやうじん 上下石神井二村、及び田中、關谷、原等、以上五ヶ村の鎮守とす。例祭九月十

九日なり。江戸芝の神明宮より、社人巫女等來りて、神樂を奏す。是舊例なり。又同じ廿日

にも神事修行せり。

三寶寺池 さんぼうじのいけ 同所にあり。回帶凡そ五百三十餘歩、中に一小嶋あり。則ち池靈辨財天の祠を建

つ。此池水冬温に、夏冷なり。洪水に溢れず、旱魃に涸ず、湯々汗々として數十村の耕

田を浸漑し、下流は板橋王子の邊を廻り、荒川に落會へり。古老云く、此池數魚の中、鳥井の印文あるもの

照日塚 てるひづか 同所にあり。耆老相傳ふ、當寺開山曾て在京の頃、八月十五夜雲上座外に侍して發句を奉る。月はなし照日のまゝのこよひかなと

公卿零客賞歎して觀覽に備ふ、御感ありて照日上人の號を賜ふと云々。此塚うたがふちくは照日上人の墓ならんといへども、詳

石神井城址 しやくじのしんあざ 三寶寺の池の傍にあり。其地北に池水を帯びたり。大手と稱する邊は、水田に

して、左右に空塹の形今猶存せり。文明中、豊島氏此城に住むといへり。或人云ふ、豊島家譜に、豊

兵衛入道泰景此城にあり、泰景卒するの後、其子幼ければ、舍弟左近大夫景村兄の跡を繼ぎて、武藏國足立、多摩、新倉、豊島、五郡を領

し、石神井の城に住する由ありと、依て考ふるに、景村より勤解由左衛門まで相續いて此地に居城たりしかども、次の練馬の城の條下に

載せたりし如く、文明九年四月十八日、太田道灌の爲に攻落されしより、廢城となりしなるべし。永

祿の頃は、小田原北條家の臣太田新六郎、石神井の地を領したる事は、北條家の分限帳に載せたり。



三寶寺池
辨財天
水川明神
石神井城址



寺院修復の功を全うす。當寺は則ち尾崎氏第宅の奮趾なりといへり。

本堂 本尊勝軍地藏菩薩 僧形にして馬に乗じたまふ御影なり。傳へ云ふ、往古此本尊盜賊の爲に盗みとらる。其夜、本尊住

こに止むと云々。住持曉に至り、堂中に入りて拜するに、はたして本尊いままさなり。堂前左の岡にあり。里老相傳ふ、上代當寺の

故に其後新に今の本尊を彫造し奉り、舊古の馬上に安じまらすと云へり。稻荷祠 住持某灌頂修行の日、老狐鳴きて寺院を廻る

事二三回、其禍福をしらするに似たり。然るに其夜火起る事再三、そ 千體地藏堂 表門の左 八幡宮 同右

火遂に物ならずして即ち消えたり。故に火消稻荷と稱するといへり。寺寶 後奈良院勅書一通。正親町院勅宣一通。小田原北條家氏秀證文。當寺第七世尊海法印

大僧正官勅許之證狀。同八世賢珍法印權僧正官勅許之證狀。同當寺住職 勅許之繪

旨。北條氏秀制札。同乙松制札。同岡人道江雪老制札。

佛舍利 寺僧いふ、往古の記録には十一粒とあり、又中古目錄に 愛宕權現宮 同所西南の林岡にあり。三寶寺本尊の垂跡とす。其地東西百五十步、南北百餘

歩。相傳ふ、太田道灌の城跡なりと。土人は字して城山と唱ふ。前に關川を懷き、後に遲井

を負ふ。北に小阜ありて、富士峰を望む。南の方數百歩を過ぎて直塘あり、道灌塘と號く。

土人云ふ、江城に至るの直路とすと云々。

遠し、急ぎ行きて彼像を得、汝が舊里に安置し、此山を摸して、こよに參詣なりがたき婦女
 子等の爲に結縁すべし、然る時は吾山に登るに等しかるべしと云々。遂に阿闍梨其地に至り
 て、靈像を感得し、舊里に一字を營て、是を安置し奉る。當寺阿闍梨化寂の後も、志を繼ぎ
 其子重俊新に荷土を催し、工商をうながし、諸堂を營み、紀州高野山大師入定の地勢を摸擬
 して、永く衆生化縁の佛場となせり。しかありしより、世に東高野山、又新高野とも唱へは
 べり。重俊の嗣、平大夫重辰にいたり、重ねて諸堂舎を修復す。其季子幼より三寶を尊信し、九歳の時みづから剃髮得
 度して、法を定昌に嗣ぎ、名を信有といふ。後初瀬の小池坊に住職して、正僧正に任ず。學業ことに勝れたり。
 當寺昔は東光觀照等の子院ありて、すべて諸堂舎輪煥として墓を竝べ、實に野山の佛をな
 せしも、いつの年にや、火災に罹りて、經營悉く烏有となれり。依て元祿中再建ありしか
 ども、舊觀に復する事あたはず、今は其十が一を存するのみ。
 龜頂山三寶寺 密乘院と號す。上石神井村にあり。眞言宗の道場にして、頗る大刹なり。法
 印權大僧都幸尊、應永元年甲戌の創建たり。往古は勅願の地なりし故、勅書數通を藏すとい
 ふ。慶長十一年丙午、當寺第十世賴融上人、檀主尾崎出羽守資忠といへる人と共に力を勸せ





眞言宗にして、本尊に藥師如來の像を安置す。慈覺大師の作なり。慶安四年辛卯、慶算阿闍梨といへる木食の沙門、當寺を開基す。阿闍梨は伊豆國の産、北條早雲長氏の曾孫にして、増島氏なり。俗稱は勘解

滅亡の後、此地に退去して農民となる。後其弟左内重國の子新七郎重俊に家を譲り、入道染衣の身となりて、慶算と改め、室を儲けて連中庵と號す。元和二年三月十二日に遷化す。時に年八十餘歳なり。

觀音堂 本堂の西にあり。本尊十一面觀音の像は行基菩薩の作なり。和州初瀬寺にならびたりとて、天照、春日、八幡の三神をあがめて、觀音供養の料として、若

干の田園を附し給ひしとなり。

鐘 同所にあり。銘文は當寺定昌師撰す。

大師堂 本堂の西北數百歩にあり、是を奥の院と稱す。今本堂より大師堂までの間に廻廊をまうく。其廊中五百羅漢の小像を安置せり。此奥の院は、すべて紀州高野山大師入定の地勢を模擬する故に、堂前に萬燈堂あり、又御廟の橋、蛇柳は、同じ前庭にあり

て、左右に七觀音、六地藏等の石像、其餘、石燈籠、五輪の石塔邊并に増島氏累世の墳墓等並び建てり。又御堂の四隅には、五重の寶塔を立て、十三佛、十王の石像等の類、累々として野山の規制にならふ。三鉢の松と稱するものありしが、今は枯れ失せたり。櫻炊鬘角と

して、閑寂玄 弘法大師の御影は、當寺開山慶算阿闍梨感得の靈像なり。

寺記に云く、開山慶算阿闍梨紀州高野山に入りてより、五穀を斷ち、木實を食ひ、阿觀禪念

をこらす事こゝに年あり。一夜大師夢に告げて曰く、我昔諸國化度の時、讚岐國にありて、

自ら像を作りたり、其像は今同國多渡郡劍の山といへる地の人家に存せり、汝が本國我山に

の靈像れいざうをば、新あらたしき佛躰ぶつたいの胎中たいちゆうに籠こめたてまつりけるとなり。然しかるに、往いにし安永五年丙申十

二月十日夜二更よにかうの頃ころ、觀音堂くわんおんだうの内陣ないぢんより出火しゆつくわし、火焰くわえん盛さかなれば、衆人しゆうじん近寄ちかよる事あた能なはず。本尊ほんそん

は既すでに火中くわちゆうに埋うづもれ給たまふ。然しかるに只左ただひだりの御手おんてと、右みぎの御足おんあしとを焦こがすのみにて、全體ぜんたい恙いづなし。同おなじ

邑むらに伊三郎いさぶらうといへる農民のうみんあり、夜明よあけて後のち、灰中はいのなかを探さがして、本尊ほんそんを得えたてまつりしといふ。

あくる酉の年、龍燈りゆうとうを現あらわす事、同正月七日の夜より、同十六日に至いたりしといふ。

古鰐ふるわにぐち口一口 渡り六寸五分ばかり、厚サ二寸餘あり、正保三年丙戌十月、觀音堂再建入佛供養の爲開帳ひらなしたてまつりし時、寺境赤池しやくいけといふより出たりといへり。其銘そのなに曰いはく、

面 吹上聖觀世音堂用之 大工飯田彌七

背 武州新座郡下村。福田山東明禪寺。存貞代置之。

于時元龜二年辛未六月朔日。河村彌二郎殿寄進

按あずるに、河村彌次郎は小田原北條家の屬下なるべし。永祿二年、小田原北條家の所領役帳に、河村跡百七十八貫五百六十文の内五十五貫文江戸新倉とあれば、永祿より元龜天正の頃迄は、河村氏此地の領主たりしとほし。存貞は當寺第三世の住僧にして、松岳存普右貞如南禪師と號す。元龜二年辛未六月朔日示寂すと、此人なまらん。

谷原山長命密寺 妙樂院と號す。上練馬谷原邑にあり。永祿二年、小田原北條家の所領役帳に、石神井の内谷原在家岸分の地を、太田新六郎知行の中に加へたり。



次上
觀音



る。されども幼少なれば木内上野に預けらる。上野討死の後には、宮内少輔支配あり。彼與力には、板橋の城主肥後守、赤塚の城主松戸越前守なりと云々。然る時は、石濱の千葉家の城主幼少なりしにより、松戸越前守此城をあづかりしならん歟。猶第五卷平塚 ならびに第六卷石濱、及び第七卷市川の條下等をあはせ見るべし。

吹上觀音堂

しもにひくらむら

臨濟派の禪刹にして、

福田山東明寺と號す。

同邑金泉寺に屬

せり。開山は普明國師、中興を淨西和尚と稱す。

當寺寛文十二年の鐘の銘に、勸進者舊淨西とあり。緣起に、元祿中信州より此地に來る沙門淨西とあり。尤も不審少からず。

本堂本尊聖觀世音菩薩

立像にして、御長八寸、行基大士の作なり。

相傳ふ、聖武天皇の天平年間、行基菩薩此地に於て、

天竺の棕樹を以て、

聖觀世音御丈八寸

の尊像を彫刻し、

赤池といふ池の傍に安置ありしを、

開山智覺普明國師、

鎌倉志に曰く、國師は妙葩春屋と號す、夢想國師の師

法、甲州の人、相州鎌倉建長寺五十五世、嘉慶二年戊辰八月三日化寂と云ふ、世壽七十八。

當寺を開創し、

こよに安置せられたりしかども、

其後第三世

玄嶺禪師住職の頃、

此禪師は大永四年甲申三月九日寂す。

寺院大に荒廢せり。

仍て本尊は同邑金泉寺といへる禪林に

移しまるらせしが、

元祿年間、

信州より沙門淨西なるもの此地に來りし頃、

脚痛によりて行

歩かなひがたく、

金泉寺に止りてありしが、

夢中靈感ありて、

其痛全快しければ、

此本尊

の加護なる事を尊み、

報恩の爲、

當寺を再興し、

又新に御丈二尺三寸の尊像を彫刻して、

前

此祭事は、初め餅を搗く事凡そ二斗餘也。夫より搗く所の餅を以て數品の農具を造り、柄ある物は陸英(ニハトコ)といへる木を以て製し牛馬の鞍に至る迄も、皆残らず造り終るの後、其具をたづさへ、苗代より始めて、苗を挿し、秋に至り實熟し刈取るに至る迄の間耕しくさ、ざる等、すべて農業にかかりたる事は、一つとして洩らす事なく、其學びをなす。尤も鄙俗のならばしといへども、古を失はざるを愛すべし。是を勤むる者は悉く名あり、ヨナンソウ、イナンソウと稱するは老人の形をなせり。安女(ヤスメ)といふは婦人の假面をかけ、太郎次といふは猿田彦の假面をかけたり。尺太郎尺次郎となづくるは、何れも鎌を携へ出づるなり。ヨネホウと云ふは藁をもて製したる婦人の形にて、辨當をもたせるを其席へ引出し飲食せり。末に至り、「九萬町の稻、一萬町は鑛守へまもらせ、去年の稻は藏に積み、今年の稻は庭に積み」といふを終りとす。

按ずるに、九萬町の稻、一萬町は鑛守へまもらすといふは、古への井田の法によるならん。今當國近在の農民の里諺に、おなかるると云ふ事あり。其故を問ふに、耕田の中、尤も中間上々の稻を公に奉るをしか唱ふるといへるも、前にいへる井田の遺風なるべき歟。おなかる、文字御中井に作るも、よく井田の意にかなへり。

千葉家古城趾

同所西にあたる岳をいふ。土人城山とよべり。今官林となり、頂に畑あり。

されども空塹の形など其儘に残れり。迂城、内城と覺しき所は、殊に今も城壕の形ありて水を湛へたり。鎌倉大草紙に、康正二年正月、成氏市川の城を圍む、同く十九日、落城して、實胤は武州石濱へ落行き、自胤は同じく赤塚へ移るとあれば、此所は自胤の居城なる事必せり。按ずるに、松月院の開基とする所の自秀も、此自胤の氏族なるべし。

按ずるに、松月院鑛鐘施財の人名の中に、當邑春日氏の人多し。土人云く、春日氏は千葉家の末裔なりとて、殊に此地に其氏族多く、今春日平右衛門といへる人の家に、古文書ありといふ。又小田原記に、天正元年十月下旬、下總關宿戰ひの時、武州石濱の城主千葉次郎討死す。此時石濱の千葉家女子ばかりなりしかば、北條氏政の下知として、北條常陸介氏繁の三男を養子として、彼息女とめあはせら

の中、大松樹の下にありて、古き五輪の石塔三基並び建てり。中間にあるもの尤も古く、蘇苔滑なり。右にあるものは、自秀の名ありて、後世造り設けたりしとおほしく、左にあるものは則ち其室の墳墓なり。

赤塚明神祠

松月院の門前にある所の一堆の塚上に、榎二三株あり。其下に小祠を營み、白

山権現を勧請す。土人云ふ、此塚の樹木等に手を觸れる事ある時は、必ず祟ありとて、尤も恐怖せり。按ずるに上世高貴の人を葬したる荒陵ならん。

武藏國風土記殘編曰

武藏國。豊島郡荒墓郷。荒墓神社。

大化二年丙午。所祭猿田彦也。神貢五十束三字田云々。

按ずるに、赤塚は荒墓の訛ならん歟。東鑑に、赤塚左近、同藏人資茂といふ人の名を擧げたり。此所の人ならん歟。猶尋ぬべきのみ。

十羅刹女宮

同所北の方にあり。眞言宗常福寺別當たり。

田遊祭

毎歳正月十三日、此地の農民、當社に詣して後、常福寺に集會し、夜に至りて興行す、其式に曰く、

鳧氏范臚 以落以鬻 大扣大鳴 鯨吼霆震

啓昏迪迷 遐邇感進 劫石有消 洪音無盡

曆應三年庚辰四月初八日

筆 執 三 位 親 慶

大 工 平 次 五 郎 行 次

勸進沙門 治部阿闍梨快賢

萬吉山松月院 同所北の方きた通かたより右みぎにあり。曹洞派さうどうはの禪林ぜんりんにして、常會地じやうゑのちなり。當寺たうじは千

葉介自秀はのすけよりひでかきう開創ひらきの佛刹ぶつせきといふ。開創ひらきの年とし曆詳れきじやうならず。按おしずるに、當寺たうじ明塔めいたつの中に文明ぶんめいの古碑こひあり、然しかれば文明ぶんめいより前に草創そうせうありし寺院じやういんなるべし。開山かいさんを臺榮たいえい和尚おしょうと號なづす。

永正えいせいの碑ひあり。佛殿ぶつでんの本尊ほんそんは釋尊しゃくそんにして、作者さくしやをしらず。脇士けふじは文殊もんじゆ、普賢ふけんなり。堂前たうぜん左右さうじゆうに木犀もくせいの

大樹たいじゆあり。禪堂ぜんだう、衆寮しゆれう、方丈ほうぢやう、庫裡くりは左右さうじゆうに並びならびて魏然ゑぜんたり。當寺たうじに自秀よりひでの靈牌れいはいと稱しやうするも

のあり。松月院しょうげつゐん殿でん南州なんしゆう玄參げんさん大禪だいぜん定門ぢやうもん千葉ちのば介自秀けいじゆう、永正えいせい三年さんねん丙寅へいゐん六月りくごつ二十三日にじゅうさんにちとあり。又また其室そのしつ

の靈牌れいはいといへるには、龍興りゆうこう院いん殿でん了室りやうしつ覺公かくこう大姊たいし、延德えんてく元年ごうねん己酉きゆう九月くわがつ十五日じふごにちとあり。墳墓ふんぼは卯塔らんたふ



松月院
大 堂



大堂

赤塚松月院の南にあり。形ばかりの草堂の内に、釋迦如來の像を安じて本尊とす。土

人傳へ云ふ、大同年間の開創にして、上古は大刹なりしとなり。されど後世數度の兵燹に罹

り。焦土となりて、僅に此釋尊の御堂と舊鐘のみ残りとなり。今釋迦堂の前後に、上寺家下寺家と字す

福兩寺の舊跡をさし
ていふなるべし。

古鐘一口

堂前にあり。長さ凡そ五尺ばかり、口のわたりは二尺二寸あまりあり。此舊鐘の執筆中岩は、鎌倉建長寺四十二世佛種懺
濟禪師たり。鐘は圓月、號は中岩と稱す。東陽に嗣法す。永和元年正月八日示寂、世壽七十五々。以上鎌倉志に出づると

なり。

武藏州豊島郡赤塚泉福寺眞福寺二寺鐘銘

驚沈潛之幽蟄。破衆生之大夢。莫先於鐘也。武州豊島彼兩寺者。前朝
全盛之時所建。具體古招提也。獨缺簔簔之器。可謂缺典矣。今快賢阿
闍梨。幹衆緣鑄巨鐘。厥志勤矣。若夫豊嶺霜降。祇園月明。揚音於大千
沙界。傳蓋於未來無窮。命中右銘。銘曰。

武之豊郡

州之重鎮

崇崇福山

衷我彦俊

りし頃ころは、龍隱寺りゅういんじの末寺まつじにてありしとなり。今寺領いまじりやう二十石こくふを附せらる。當寺たうじに永正年間えいしやうねんかんの古文書もんじよあり。其文左そのぶんさの如し。

志村西代之内小原三郎今屋敷再面之畠共爲宗安公圓福寺え
 永代寄進申候又以前從勘解由時寺之面之畠一枚寄進申候都
 合直貢一縉之處候爲後日寄進申狀如斯

永正十年癸酉十二月十三日

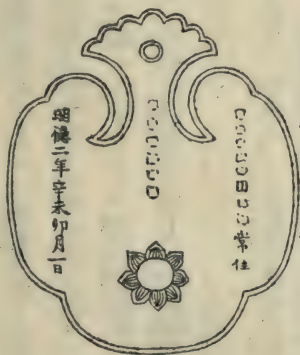
多田彦六老母

圓福寺え

住僧いふ、志村城山の邊農民の地に、小太郎面と字する田畠あるは、此多田オホタ氏の遺跡なりと。

古雲版こうんぱん 庫裡くりに掛けてあり。其形左そのかたちさの如ごとし。

長 一尺三寸五分
 巾 一尺二寸五分



たりしといふ。今は志村より西の臺まで
の間七ヶ村の産土祠とす。土人此地を隱岐殿やしきと字す。今奥の院と稱する地に、

石の小祠あり。十四五年前、此地を穿ちて、古鏡二面と刀一振とを得たりしとなり。されど

其故を知らざれば、崇あらん事を恐れ、元の如く埋藏したりとなり。寛政六年、志村の里正ナヌシ大
野吉住當社を修補し、華表トリ

其を石にし、又上の宮の地に六百三十五株の杉を栽るたり。別當は新義の眞言宗にして、三次山廷命寺と號し、中野法仙寺に屬せ

り。延命寺の鎮守を三次權現と稱す。往昔此地の城主
千葉隆岐守の家臣三次某の靈をまつるといひ傳ふ。

一夜塚 同所西南の畑の中にあり。此地を前野と號す。相傳ふ、小田原北條家の時、千葉家

の城を攻落さんとして、寄手の軍兵此地に於て、一夜の間に炮坐を築き、城へ向けて此塚

上より大發炮を放ち、竟に城兵を燒討にせしといふ。

西臺山圓福寺 熊野權現宮より二丁ばかり西南の方、西臺村にあり。曹洞派の禪刹にして、

芝愛宕下の青松寺に屬す。本尊は拈華の釋迦如來、坐像一尺四五寸あり、行基菩薩の作なり。

或はいふ、御首ばかり行基の作る所にして、全躰は後人の作なりともいへり。太田道灌入道

の開創にして、越生龍隱寺第五世雲岡俊徳和尚開山たり。雲岡開基する所の
十八ヶ寺の一なり。當寺は舊へ河越にあ

清水薬師如來 しみづやくしにょらい 清水坂の下にあり。 しみづざかした 醫王山大善寺と號す。 いおうざんたいぜんじ 曹洞派の禪林にして、芝の青松寺 さうどうはぜんりん

に屬せり。 えいしやうねんかん 永正年間、此地の農民新見善左衛門といへる人開基す。 かいき 善左衛門、法名を清雲大善庵主と號す。 す 永正十年癸酉二月寂す。其靈牌

當寺にそのちげんき ねんかん あり。其後元龜年間に至り、青松寺の雲崗和尚の法孫、在天禪師住職して、法燈を掲ぐ。 ほんぞん 本尊

薬師如來は、聖徳太子の眞作にして、左右脇壇に、十二神將の像を置く。 けいだいせいせんゆふつ 境内清泉湧沸す。

一年、大樹此地御遊獵の頃、當寺へ立寄せ給ひ、此清泉によりて、此本尊を清水薬師と稱

すべき旨命あり。爾りしよりかく唱ふるといへり。 此清泉は、寺前山の涯下に添ひて泝流せり。近隣の村落、皆此水を汲み用ふ。此邊蘆薈「グアイコン」を名産とす。世に清水

大根と稱して、種を賣買する事尤も夥し。

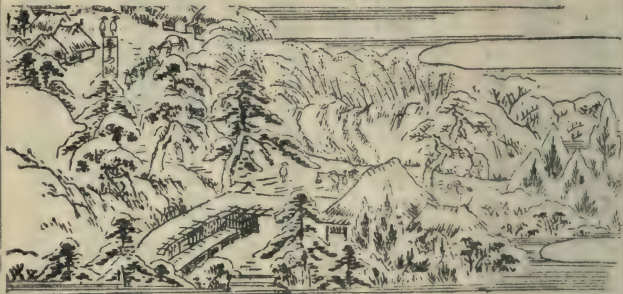
千葉家城跡 ちのばけのしろあと 同所より西へかけて耕田に臨みし臺の地を指していへり。今も空塹の如き形所

所に残れり。 此地近き頃まで畑の内村と唱へしとなり。是城跡の證也。 此地より南の方を中臺といひ、又西の方一里斗に西臺と云

ふ地ありて、何れも城營の舊跡たりといふ。

熊野權現宮 くまの ごんけんのみや 同所清水坂の上より三町ばかり西の方、涯續にあり。社の後は涯に臨みて、松

杉等の老樹鬱蒼たり。就中樟の大樹は、周圍三圍に餘れり。當社は往昔千葉氏城内の鎮守



清水薬師

清水坂

境内山の腰
あり 清泉
水の号あり
此は夏灌
を名産と
清水種と
世に賞し
まへり

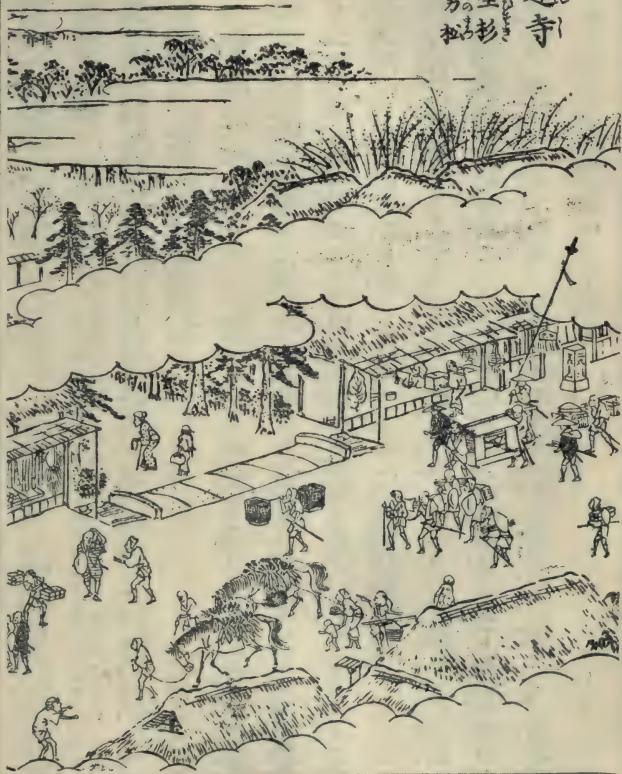




板橋の驛



乗蓮寺
相生杉
女男松



ふ、豊島氏系譜に、濰野川長門守が弟を板橋次郎豊清と名づくる由記せりとぞ。豊清始めて此地に住して、板橋の號を以て氏となせし歟、然れば忠康も豊清が子孫ならん。又北條家の所領役帳に見えたる板橋又太郎、同大炊介といふも、其一族なるべし。其餘、小田原記に、大永四年正月十三日、「北條氏綱と上杉朝興と合戦の時、朝興打負けて、板橋をさして引退く、此時板橋の某兄弟以下討死すとあるも、同じ氏族の人なるべし。又同書に、天正元年十月下旬、下總關宿の城主築田中務大輔、佐竹に一味して逆心を企つるといふ條下に、小田原より氏政出張して關宿へ取詰め合戦ありし頃、小田原方武州の石濱の城主千葉次郎、城方の物頭菊間圖書といふ者と組んで落ち、千葉次郎討死す、此時石濱の千葉家女子ばかりなりしかば、氏政の下知として、北條常陸介氏繁の三男を養子として彼息女にあはせ、千葉の一跡継繼ありしかば、木内宮内少輔支配あり、彼與力衆は板橋肥後守板橋の城主なり。松戸越前守は赤塚の城主なりとあり。此肥後守また同じ氏族の人なるべし。

木下稻荷祠

同じ驛の端れ、街道より左の小路を入りて、智清寺と云へる淨家の寺に安置す。

元和三年丁巳、當寺中興心蓮社法譽上人輪宗和尚感得せられたりし神像なりと云ふ。相傳ふ、

豊臣秀吉公、いまだ木下藤吉郎と稱せられし頃、此尊神を崇信し給ひ、既にして天下の武將

となり給ふを以て、世に木下出世稻荷と稱しまゐらすと云ふ。伽羅稻荷、或は又藤吉

清水坂 志村にあり。世に地藏坂とも號く。舊名は隱岐殿坂と呼べり。昔隱岐守何某聞かる

る故なりといふ。次の熊野宮の條下に詳なり。此地嶮岨にして、往還の行人大に惱めり。依て寛保年間、大善

寺の住守直正和尚、僧西岸と力を戮せ、勸進の功を募り、木を伐り荆を刈りて、石を疊み

て階とす。しかありしより行人苦難の患を遁る。

五百餘騎を引牽し、越後國を進發ありて、同六日武州板橋原に打出づる、此由鎌倉へ聞えければ、執事上杉憲顯、其身は鎌倉を守護し、子息兵庫頭憲將、同兵部少輔能憲等を大將として、千葉介直胤、小山朝明以下其勢二千餘騎、是も其日武州洲賀茂といふ所に陣どりし千葉小山が手勢五百餘騎を引分けて、王子の森に置くもあり。

孤雲山乘蓮寺

慶學院と號す。同所橋より三町あまり此方、道より左側にあり。淨土宗にして、縁山に屬す。本尊阿彌陀如來の像は、佛工春日の作、開山は英蓮社信譽上人、了賢無的

和尙と號す。當寺は應永年間の草創にして、此地の郷主板橋信濃守忠康といふ人の菩提寺なり。

當寺五世明譽上人龍宅和尙現住の頃、天正十九年辛卯、御當家より守護不入の朱章を賜ふ。

又寛保三年癸亥の夏、大樹此邊御遊獵の時、當寺に憩はせ給ひしより、永規となれり。

相生杉 寺の後園にあり。むかし此邊御遊獵の頃、此杉のなを問はせ給ふ、住僧答奉るに相生のなを以てす。依つて今猶相生縁結びの杉と稱へたり。

女男松 堂前にあり。天下泰平を祝し奉る意にて植ゑたりしとなり。

板橋忠康墓 家系に、板橋信濃守忠康はもと豊島氏なり、北條氏直へ仕へ、此地に住して板橋と名づくるよし記せりと云々。又或人云

いたはしたじやすのはか同境内にあり。碑面に、本園院殿前信州空山有寶禪定門、文祿二癸巳年十一月二十一日卒とあり。或人云ふ、板橋氏の

枝橋



早發改櫛
曉發故櫛驛
迢々遠北門
山掃若日早
草短履霜繁
行李臨東道
長亭徑大原
離家還未幾
遊子易銷魂

南郭



十羅刹女堂
あつちのまにまに





十羅刹女堂 じふらせつにょだう 巢鴨本村藤橋の川より南の方にあり。別當は眞言宗にして、福藏院と號す。里

老云ふ、昔此地に鬼子母神の像も安置してありしが、賊の爲に奪はれて、今は雜司ヶ谷にあ

りと。其説是非知るべからずといへども、云傳ふるに任せて、是を載するのみ。神事は九月

十八日に修行せり。

板橋驛 いたはしのえき 中仙道の首にして、日本橋より二里あり。往來の行客、常に絡釋たり。東海道は川

川の差支多しとて、近世は諸侯を初め、往來繁ければ、傳舍、酒鋪、軒端を連ね、繁昌の地

たり。驛舎の中程を流るゝ石神川に架する小橋あり。板橋の名こゝに發るとぞ。板橋は上下に分

板橋と稱す。上板橋は練馬通道にして、此地よりは西南の方の通路をいふ。

按ずるに、此地を板橋と唱ふる事、義經記にみえたり。小田原北條家の所領役帳に、板橋又太郎板橋にて毛呂分の地を領し、太田新六郎も板橋大炊助屋敷分の地を領し、恒岡彈正忠も板橋高本方の地を領する事を擧げたり。

板橋原 いたはしのはら 都て上下板橋と稱する地を指して云ふなるべし。此地もとより廣々たる平原なり。

中古治亂記に、貞治六年丁未四月二十六日、鎌倉管領足利左馬頭基氏逝去す、其弊に乗し、

芳賀入道禪可、子息伊賀守高貞、同嫡子八郎高政等鎌倉に押寄せんとし、應安元年戊申正月、

させられしより、當社は此地に遷る。極樂水宗慶寺の持にして、祭祀は九月十日なり。

武藏國風土記曰

足立郡巢鴨郷氷川神社。觀松彦香殖稻天皇御宇三年戊辰。所祭素蓋鳴尊。大已貴命。奇稻田比咩合三座也。云々。

按ずるに、此巢鴨の地昔は足立郡に屬せしに似たり。今は豊島郡の内に入りたり。

當社は千有餘年を経る所の宮社にして、八幡太郎義家公、奥州下向の時、當社に參籠ありしと云傳ふ。中古荒廢して、形ばかり残りしを、傳通院の開山了譽上人、此地の幽邃を愛し、庵を結んで聖岡庵と號け、此地に閑居ありし頃、宮居を重修ありしとなり。
聖岡庵は本社より右にありて、今は氷川明神の御供所となれり。

猫狸橋 同所西の方、小石川の流に架せり。南向亭茶話に云く、昔大木の根木の根の根を以て、

橋にかへて架したる故に、此名ありとぞ。

按ずるに、東國の里俗木の根を根ツ木(ネツコ)と唱ふ、此説可ならん。又神田松下町の小路を、俗にねこや新道と唱ふるも、材木屋多く住んで根木を賣る家多きが故にしかいへり。



巢鴨
庚申塚



築鴨真性寺 江大樹の真



傳ふ、當社は元和三年の勸請なりといへり。當社舊へ白山御殿の地にありて、氷川明神女體

宮と共に竝びてありしかども、彼地に御殿營作せられし頃、今の地へ遷座なし奉るとなり。

神社略記に云ふ、此神いにしへ白山御殿の地に鎮座ありて、其原始尤も久し。神木に船繫松(フナツナギマツ)とて無比の大樹ありしと云々。氷川社は今御藥園の西にあり、其條下に詳なり。女體宮も今傳通院の内にある所の辨才天是也。祭禮は九月

二十一日なり。釣樟の齒木と、紙にて製する所の弓箭を以て、此地の土産とせり。

御藥園 同所の西南にあり。所謂白山御殿の舊地是なり。古は此地に白山、氷川、女體等の

三神の宮居ありしとなり。白山權現の神木船つなぎのこのあたりはつねのさき、あまな、りけん、えぞ、松も此地に存せりと云ふ。此邊を初音里と字す。里諺に、江戸の時鳥は、

此地より發聲す、故にしか名づくると云ふ。

療病院 同所の西に竝ぶ。養生所と號けらる。則ち古への療病院に比せられ、鰥寡孤獨貧窮

無頼の病人を救はせ給はんがため、享保年間、官府より是を建てさせられ、寄宿を許し、藥

餌を賜ふ。御仁惠實に百世に冠たりといふべし。

氷川明神社 同所西北の方、五町ばかりにあり。相傳ふ、孝明天皇の御宇の鎮座なりと云々。

祭神武州大宮の氷川明神に同じ。昔は白山御殿跡の地にありしが、白山權現と共に地を替へ

猫
狸
橋



極樂水 境内本堂の前にある井を云ふ。上に家根を覆ふ。吉水となづくるものこれなり。此邊をすべて極樂水と唱ふるは、此井に依て名とすといへり。或人云ふ、極樂水は松平播磨侯の藩中にあり、舊は石川山善仁寺の境内なりと云ふ。

瑞鳳山祥雲寺 同所戸崎町にあり。曹洞派の禪窟にして、駒込吉祥寺に屬せり。本尊は釋迦

如來、脇士は文殊、普賢なり。寺記に云く、當寺は天文元年癸辰、遠山隼人正創建の精藍にし

て、小田原北條家の分限帳に、遠山隼人佐江戸平川を領するとあるは、同じ人なり。永祿六年甲子正月八日、北總國府臺の合戰に討死せし人にして、當寺に靈牌あり。法名は月溪正圓居士としるしぬ。當に永祿七年甲子、

寺成りて淨光院と號す。當寺過去帳に、開基淨光院殿は永祿三年庚申二月九日に没す、花陰宗順大禪定尼と稱す。此尼は

如く祥雲寺と改むといふ。吉祥寺第二世大州安充和尚を請じて開祖とす云々。當寺創立の地は、今の御城内和田倉の邊なり。改むといふ。吉祥寺其頃は同じ邊にありしが、今は吉祥寺も

駒込に移す。當寺も國初以來駿河臺に引かれ、小石川金杉にうつされ、終に又今の茨木春朔墓り、不面に立像の不動尊を彫り

地を賜はりて寺院を引けり。その由大明心越禪師撰する所の當寺花鉢の銘に詳なり。酒井家の儒醫、又は安藤家とも云ふ。三浦氏

右に酒徳院醉翁樽枕居士とあり。又左に辭世の和歌二首を鐫す。春朔は慶安の頃の人にして、酒井家の儒醫、又は安藤家とも云ふ。三浦氏

の親なり。延寶八年庚申正月八日没す。戲號を地黃坊樽次、チウウパウタルツグと云ふ。始め江戸の大塚に住し、後龜聲ヶ窪に移る。生

平飲酒に長じ、同じ筵にあそぶの友多く、其頃大酒の名世にかくれなし。此人水鳥記、ミットリノキといへる草紙を著す。大師河原に

住めら池上太郎左衛門底深といへる醉客と酒戰せし戲編なり。當寺にある所の石標は、酒門の高弟菅任口といへる人造立せしといふ。遺骨を葬せし墓は、谷中妙林寺にあり。猶第二卷大師河原の條下に詳かに載す。

白山神社 同所指谷町にあり。小石川の鎮守にして、神主中井氏奉祀す。祭神加州石川郡に在

す白山比咩神社に同じ。伊弉册尊、菊理姫、泉道守者等三座なり。一宮記に曰く、下社は伊弉册尊、相



水川明神社
聖岡庵
祇園橋



白石権現社
小石川







祥雲寺
無量院



木を伐り、誓て云く、若此事佛意に協ひなば、此木我に先だつて有縁の地に至るべしと云ひて、

彼所の谷川に流され、夫より東國に赴き、此地に至り給ふに、彼靈木ことの入江に漂著す。

往古此邊より高田のあたり神田橋の内、仍て佛意を尊み、慈母の爲、則ち東方に向ひ、香華を捧げ、禮拜

なし、信心の誠を盡し給ふ。然るに面親藥師女金色の光を放ちて顯れ給ふ。依て行基菩薩件

の杉の本木を以て此本尊を摸刻し、此境に一字を營んで安置せり。又六道流轉の衆生を救は

ん爲、末木を以て六躰の彌陀像を彫造し、六所に分ち給へり。江戸六阿彌陀と稱するもの是なり。

吉水山宗慶寺 同所三町ばかり西北にあり。朝覺院と號す。淨土宗にして、傳通院に屬せ

り。本尊阿彌陀如來は、惠心僧都の作なり。相傳ふ、傳通院の了譽上人、應永二十二年乙未

此地に至り、隱栖の地を卜し、草庵を葺きてこよに居せらる。側に清泉あり、洛陽の祖跡を

追慕し、是を吉水と號く。則ち當寺是なり。傳通院の條下に詳なり。又江戸名所記に云く、昔龍女形をあらはし、了譽上人にまみえて、菩薩戒の脉譜を受け、其報恩として此處泉を捧げ

けるとあれども、附會の説なるべし。恐らくは下谷境内に越後少將の御母公阿茶の御方の廟所あり。宗慶寺

の號は阿茶御方の法號による所なり。了譽上人の石塔も、當寺境内に存せり。

宗慶寺
極樂水



十卷を製す。法器豪英にして、道德は終古に隆盛にして、聲は宇宙に高しと謂つべし。緇門の柱礎、淨家の棟幹なるものなりと。以上了譽上人傳の要を摘む。

當寺は淨土宗流の一派にして、所化學道の談林なり。學業を勤むる輩、聚螢映雪の功を積んで、眼を經論の面にさらし、五重相傳の窓の前には、五念修行の悉地を求め、三心具足の床のうへには、住不退轉の法義を期す。

中臺山光圓寺

醫王院と號す。傳通院の西二町あまり、久保町と云ふにあり。淨業の精舎にして、傳通院の開山了譽上人當寺を興復あり。上古の開山は行基大土とす。了譽上人の時淨宗に更めたるなり。本尊阿彌陀如來の像

は、惠心僧都の作なり。當寺を中臺山と號するは、此地舊へ中臺村と云ひしによる由、縁起にみえたり。

本木薬師如來

同寺に安ず。本尊は行基菩薩の作にして、一尺の立像なり。慈母薬師女の御影を摸し給ふ故に、女體なりといふ。毎年四月八日十二日、開扉結縁せしむ。

縁起に云ふ、天平十三年辛巳、行基菩薩、歳四東國の群類を化度せんとし、先づ南紀の熊野權現へ參籠ありし歸るさ、路の傍に杉の大樹あり。此を像材とし、佛像を造立せんとし、其

光圓寺
光圓寺
阿彌陀佛
元來安
如來安置
あり



國傳來譜脈の幽妙を口授心傳す。又相州桑原の定慧上人の居を訪ひ、坐外に寓して修學す。

竟に白旗一派の宗義、咸く傳法授戒し、宗を弘むる事四五箇年、白旗は寂惠上人所住の地の名なり、以て宗名とす。道俗化

を蒙る者甚だ多し。師十四年十六常陽に還る。時に實師齡已に八旬、則ち岡師をして常福に主た

らしむ。年十五又應永二十二年乙未のとし、武州小石川の畔に閑地を卜して、一字を營修す。

今の傳通院かたはらの權輿なり。傍に清泉あり。今の極樂水 宗慶寺也則ち元祖の舊跡に準擬して、その水を吉水と號す。師無

量山に住す事纔に六年、一夕微疾を憂ふ。安然として沐浴淨衣し、辭世の偈を書して云く、

放行把住 滿八十年 卽今端的

知不識 日輝東山 月西天矣

書き畢て端坐合掌し、口に寶號を唱へ、西へ向ひて奄然として寂す。峩に應永二十七年庚子

九月二十七日、世壽八十三 臘七十三師常に坐する時は、則ち面頂に光彩あり、恰も半月の如く、書に對す

る時は、其影的爾として相映す。此故に、世に稱して 三日月上人といふ。生平撰述の書は牛に汗し、文藻は煥然とし

て微を窮め妙を極む。世舉て師に十徳の目ありと。又和歌は頓阿法師に傳受し、古今の序注

いへたくざうすいのりのやしろ
多たく久ざうすい藏い主のり稻のり荷のり社のり 境内裏門の方にあり。往古狐僧に化し、自ら多たく久ざうすい藏い主のりと稱して、夜なく、
常じやう念ねん佛ぶつ堂だうの持もちなり。

新しん念ねん佛ぶつ堂だう 同どうじくく瑞ずい眞しん 寺中福聚院にあり。菊岡沾涼云く、初め井を掘るとて其土中より此尊像を得たる故に、其井を御
按あずるに極樂水に混ぜしならん。彼の井も又同じ屋敷の中にあり、わづかの所に井泉ふたつあるも、恐らくは其の一つならん。

縁起に云く、當寺に安置の大黒天は、三國傳來の靈像にして、大黒、多門、辨天等の三神一體の尊影なり。孝徳天皇の御宇、高麗國の大
臣錄來の土古といへる人、本邦に携へ來りて、近江國蒲生郡にありしを、明和年間、豐譽靈應上人感得して、こゝに安置せらる。甲子日
參詣群集せり。堂の額は福聚殿とあり。經きやう堂だう 正面に聖教窟の額をかけ、内に明本の一代藏經全部じやう無む緣えん塚づか 享保六年辛丑回録の時、當
り、當山第二十三世如空師の筆なり。經きやう堂だう を收む。故ありて當山の法寶とあふぎ貴ぶとあり。無む緣えん塚づか 寺に入りて焼死する所の男
女三百八十餘人の墓所なり。一堆の塚となし上に堂を建て、稱名の音を絶えざらしむ。無む聲せい蛙わ 里諺にいふ、開山上人勤學の妨なりとて封じこ
けいあざないうれんしやれうよ

開かい山さん傳でんにいはしやくのしやう釋しやく聖せい 開山上人勤學の妨なりとて封じこ
けいあざないうれんしやれうよ

同どう字じはい酉う蓮れん社しゃ了りやう譽よとい號ごうす。姓せいはい源げん氏し、常じやう州しゅう久きう慈じ郡ぐん岩い瀨せのい城じやう主しゆ佐さ竹ちやく氏しのい花け族ぞく、白しろ吉き志し摩ま守しゆ義ぎ滿まん
けいあざないうれんしやれうよ

のこ子こなり。満まん或わはい光くわうにい作さくる。父ちち母はは岩い瀨せ明めい神しんにい祈いのちをして、曆りやく應おう四し年ねん辛しん巳し正せい月げつ二に十じゆ五ご日にち出い生せいす。後ご瓜か 五ご歲さいのい時とき、父ちち義ぎ滿まん戰せん
速すみかつつうしふのい常じやう福ふく寺じ十じゆ八ぱち世せい眞しん譽よ上じやう人にん、其その誕たんと生せいのい地ちにい草くさう堂だうをい闢ひらくき、誕たんと生せい寺じとななづく。無む緣えん塚づか 寺に入りて焼死する所の男
女三百八十餘人の墓所なり。一堆の塚となし上に堂を建て、稱名の音を絶えざらしむ。無む聲せい蛙わ 里諺にいふ、開山上人勤學の妨なりとて封じこ
けいあざないうれんしやれうよ

死しす。采さい邑いふはい敵てきのい爲ためにい奪うばはられ、資し財ざいはい賊そくのい爲ためにい掠かすめらる。故ゆゑにい母はは子こ山さんにい隠かくれ、落らく魄はくしてい寒かん暑しよ
速すみかつつうしふのい常じやう福ふく寺じ十じゆ八ぱち世せい眞しん譽よ上じやう人にん、其その誕たんと生せいのい地ちにい草くさう堂だうをい闢ひらくき、誕たんと生せい寺じとななづく。無む緣えん塚づか 寺に入りて焼死する所の男
女三百八十餘人の墓所なり。一堆の塚となし上に堂を建て、稱名の音を絶えざらしむ。無む聲せい蛙わ 里諺にいふ、開山上人勤學の妨なりとて封じこ
けいあざないうれんしやれうよ

をい歷りるい事こと既すでにい三さん年ねん、其その後ご其その母はは此この兒こをいして、父ちちのい菩ぼ提だいのい爲ため、瓜か連れんのい草くさう地ち山さん常じやう福ふく寺じのい了りやう實じつ上じやう人にんに
速すみかつつうしふのい常じやう福ふく寺じ十じゆ八ぱち世せい眞しん譽よ上じやう人にん、其その誕たんと生せいのい地ちにい草くさう堂だうをい闢ひらくき、誕たんと生せい寺じとななづく。無む緣えん塚づか 寺に入りて焼死する所の男
女三百八十餘人の墓所なり。一堆の塚となし上に堂を建て、稱名の音を絶えざらしむ。無む聲せい蛙わ 里諺にいふ、開山上人勤學の妨なりとて封じこ
けいあざないうれんしやれうよ

投なげててい薙ち染ぜんせしむ。時ときにい年ねん八はち歲さい、聖せい 天てん性じやう聰そう睿えいにいして、一いち聞もん十じゆ悟ごす。十じゆ歲さいにいしてい始はじめてい學がくをい試こころむるに、
速すみかつつうしふのい常じやう福ふく寺じ十じゆ八ぱち世せい眞しん譽よ上じやう人にん、其その誕たんと生せいのい地ちにい草くさう堂だうをい闢ひらくき、誕たんと生せい寺じとななづく。無む緣えん塚づか 寺に入りて焼死する所の男
女三百八十餘人の墓所なり。一堆の塚となし上に堂を建て、稱名の音を絶えざらしむ。無む聲せい蛙わ 里諺にいふ、開山上人勤學の妨なりとて封じこ
けいあざないうれんしやれうよ

速すみかつつうしふのい常じやう福ふく寺じ十じゆ八ぱち世せい眞しん譽よ上じやう人にん、其その誕たんと生せいのい地ちにい草くさう堂だうをい闢ひらくき、誕たんと生せい寺じとななづく。無む緣えん塚づか 寺に入りて焼死する所の男
女三百八十餘人の墓所なり。一堆の塚となし上に堂を建て、稱名の音を絶えざらしむ。無む聲せい蛙わ 里諺にいふ、開山上人勤學の妨なりとて封じこ
けいあざないうれんしやれうよ

速すみかつつうしふのい常じやう福ふく寺じ十じゆ八ぱち世せい眞しん譽よ上じやう人にん、其その誕たんと生せいのい地ちにい草くさう堂だうをい闢ひらくき、誕たんと生せい寺じとななづく。無む緣えん塚づか 寺に入りて焼死する所の男
女三百八十餘人の墓所なり。一堆の塚となし上に堂を建て、稱名の音を絶えざらしむ。無む聲せい蛙わ 里諺にいふ、開山上人勤學の妨なりとて封じこ
けいあざないうれんしやれうよ

速すみかつつうしふのい常じやう福ふく寺じ十じゆ八ぱち世せい眞しん譽よ上じやう人にん、其その誕たんと生せいのい地ちにい草くさう堂だうをい闢ひらくき、誕たんと生せい寺じとななづく。無む緣えん塚づか 寺に入りて焼死する所の男
女三百八十餘人の墓所なり。一堆の塚となし上に堂を建て、稱名の音を絶えざらしむ。無む聲せい蛙わ 里諺にいふ、開山上人勤學の妨なりとて封じこ
けいあざないうれんしやれうよ

速すみかつつうしふのい常じやう福ふく寺じ十じゆ八ぱち世せい眞しん譽よ上じやう人にん、其その誕たんと生せいのい地ちにい草くさう堂だうをい闢ひらくき、誕たんと生せい寺じとななづく。無む緣えん塚づか 寺に入りて焼死する所の男
女三百八十餘人の墓所なり。一堆の塚となし上に堂を建て、稱名の音を絶えざらしむ。無む聲せい蛙わ 里諺にいふ、開山上人勤學の妨なりとて封じこ
けいあざないうれんしやれうよ

其三

傳通院總門
念大黑天
念佛堂





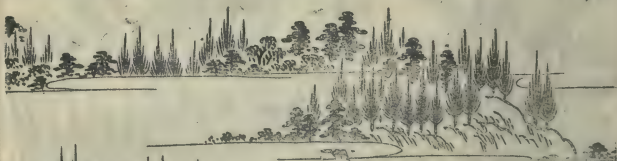


澤藏主翁荷社

其二



傳通院裏門



小石川といふところにて

我かたを思ひ深めて小石川いつを瀬にとかこひわたるらん

道興准后

黄葉集

江戸にはべりける頃小石川と云ふ所にて

久方の月見る宿の涼しさも隣ありけり石川の水

烏丸光廣

一時雨磔やふりてこいしかは

芭蕉

涼風や猶ながらへば小石川

宗因

無量山傳通院 壽經寺と號す。小石川牛天神乾の方二町ばかりにあり。淨家十八檀林の一員

なり。本尊阿彌陀如來は、惠心僧都の作にして、當寺は明德年間、了譽上人開創せられし梵刹たり。

賽舎百餘宇あり。

御靈屋 傳通院殿の御靈屋なり。御遺言に依て、御廟を建てられ、御法號をとりて寺の號に呼ばせらる。開山堂 本堂の右にあり。八幡宮

同所にあり。天正年間、一老翁夢想に依て八幡宮の文字ある石の額を得たり。別當は長久院と號す。辨財天祠 當社はもと白山御殿の地にありて、白山、氷川(ヒカハ)と共にならび

江戸名所圖會

天權之部

〔前卷〕
〔の續〕

卷之四

小石川

水道橋より外白山のあたり迄

の惣名なり。

昔は小石の多き細流數條ながれし故にか

く號なづくるとも、

江戸名勝志といへるものに、あづま川と

又此地に加州石川郡の白山の神祠鎮坐しんしちんざの故なら

んと云傳ふれども詳つまびらかならず。

小石川の白山權現は、漸えいらく二年、小田原北條家の所領役帳に、櫻井

某所領の内に、小石川本所といへる地名を加へ、島津孫四郎と云ふ人も、此地にて法林

院松月分の地を領するよし記せり。

菊岡沾涼云く、巢鴨の西北根木股麿の下を流るゝ所の水脈、小石川御殿の南より傳

通院の後柳町を流れて、水府公御藩邸の内を歴、水道橋の上の方にて神田川に會す

るもの、小石川の

舊跡なりといへり。

回國雜記

羽黒権現宮 はぐろごんげん 豊景

焼米坂 やきこめさか

新會妙顯寺 しんわめうけんじ 釋迦堂 寶藏 開山塔
寺寶 鐘樓 二王門

澁川義行居城舊址 しぶかはよしゆききよじやうのきやうし

調神社 つきのじんじや

子安清水 こやすのしみづ 妙典寺

宮本簗川明神社 みやもとひかはみやうじん 御沼
文殊寺

簗河原 ひかはのはら

大宮氷川神社 おほみやひかはじんじや 荒波々幾社 宗像社 五山
祇社 本地堂 古文書

東光寺 とうくわうじ

黒塚 くろづか

潮田出羽守資忠城跡 うしほだではのかみすけたのしろあと 同墓 はか

練馬長命寺

世俗新高野と云ふ
觀音堂 鐘 大師堂

三寶寺

千體地藏堂
八幡宮 寺寶

愛宕權現宮

城山 關川
遲井 道灌堤

氷川明神祠

三寶寺池
辨才天祠

照日塚

石神井城址

石神井明神祠

練馬城址

立野舊跡

膝折里

宗岡宿

内川

十玉院

難波田彈正舊館地

西藏院

阿蘇明神祠

野火留

平林禪寺
佛殿 山門 鐘樓
九十九塚 業平塚

櫻車道
靈溪堂 獨立禪師木牌

安松長源寺

匏間齋藤氏墓碑

將軍塚

狭山の池

狭山

八國山

久米川

曼荼羅淵

永源寺
大石氏靈牌

北野天神社
末社 みたらし尊櫻
大納言の梅

小手差原

山口觀音堂
影向加持水
辨天祠 二王門
琵琶島

山口岡

勝樂寺
七社權現
藥師堂 洪鐘 開山塔

聖天宮

新堀立蕃居住地

山住彦三郎舊址

箱の池

堀兼井
同碑

來迎寺

還車阿彌陀如來

所澤
同卯花

新光寺

藥王寺

戸田川渡口

江戸名所圖會

天權之部目錄 (其二) [原本第十三] [冊の一巻]

小石川 こいしかは

傳通院 でんづうゐん

御鹽屋 開山堂 八幡宮 辨才天祠 澤藏主稻荷社
常念佛室 新念佛堂 大黒天社 經堂 無縁塚 無聲蛙

光圓寺 くわうゑんじ

本木薬師如來 もとき やくし によらい

宗慶寺 そうけいじ

阿茶局御廟所 了睿上人石塔 極樂水

祥雲寺 しやううんじ

茨木春湖墓

無量院 むりやうゐん

小野小町墓

白山神社 はくせんじんじや

御薬園 おんやくゑん

初音の里

療病院 れうびやうゐん

氷川明神社 ひかはるやうじんじや

聖因庵舊跡 祇園橋

巢鴨眞性寺 すがらしんじやうじ

庚申塚 かうしんづか

狐狸橋 ねこまたはし

十羅刹女堂 じふら せつによだう

板橋驛 いたはしのえき

板橋原 いたはしのはら

乘蓮寺 じやうれんじ

相生杉 女男松 板橋忠康墓

木下稻荷祠 きのしたいなり

清水坂 しみづざか

清水薬師如來 しみづやくし によらい

千葉家城址 ちば けのしろあじ

熊野權現宮 くまの ごんけんぐう

一夜塚 ひじよづか

西臺圓福寺 にしだいゑんぶくじ

大堂 古鐘 だいだう こだね

松月院 しやうげつゐん

千葉家墳墓

赤塚明神祠 あかづかみやうじん

十羅刹女宮 じふら せつによみや

千葉家古城址 ちば けいじやうのあじ

吹上觀音堂 ふきあひくわんくわんだう

卷之五 玉衡之部……………一七九—三七四

神田神社に筆を起し、本郷一帯の高地を説きて、上野公園及び根津、駒込附近の詳述に及び、更に谷中、日暮里、平塚、西ヶ原を経て飛鳥山公園に至り、左折して王子権現より赤羽村に出て川口村、豊島村の話説に終る。

開陽之部 目録……………三七五

卷之六 開陽之部……………三七九—五七六

淺草公園を詳記し、一は(四三—四四)其南方淺草橋に至り。二(四五—五〇)は西方東本願寺、廣徳寺、及び所在の名所を述べて、上野山下に至り、右折して坂本、入谷、根岸、箕輪、小塚原を叙し、千住大橋を渡りて六月村より西新井村に終る。他は(五二—五七)橋場を中心として總泉寺、今戸、眞土山、日本堤を経て新吉原遊廓に終る。

江戸名所圖會 目錄

天權之部 目錄……………一

卷之四 天權之部……………五二七

筆を小石川傳通院の詳説に起し、白山御殿町附近及び、巢鴨、板橋、志村を経て二岐に分れ、一は(四一四)赤塚、練馬、石神井の諸村より三寶寺池に至り、それより河越街道に沿ひて、白子、引又、宗岡、南畑の諸村を過ぎ、野火留、狭山、小手差原、山口岡、堀兼井等を歴記して所澤に終る。他(四一七)は志村の坂を下り、戸田村より荒川(此邊戸田川と稱す)を越え、蕨、浦和を経て大宮町に至る。

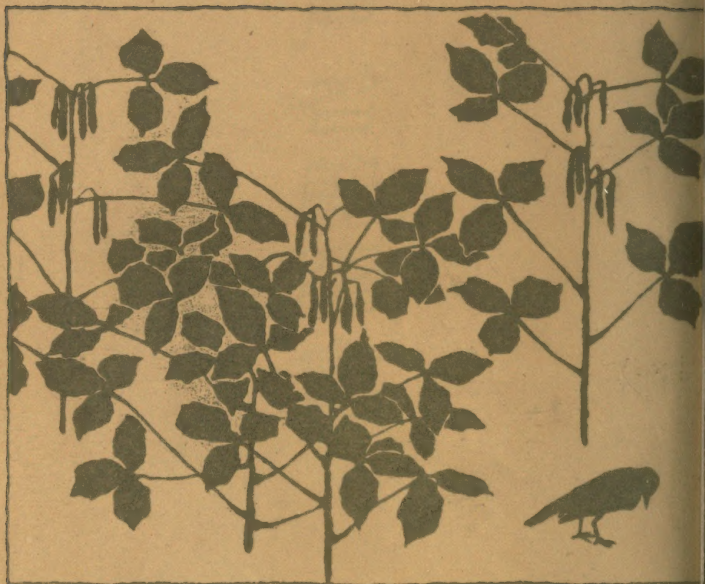
玉衡之部 目錄……………一七五

DS
896
-35
S3
1913
v.3



江戸名所圖會

何正知聖圖



DS
896
.35
S3
1913
v.3

Saito, Yukio
Edo meisho zue

G

DS
896
.35
S3
1913
v.3

East

THE 'R' CARD

.....

.....

.....

